
Z E R Oの無責任男

ナナツボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ZEROの無責任男

【Nコード】

N8485T

【作者名】

ナナツボシ

【あらすじ】

最強オリ主がなんやかやと苦労しながら活躍します。

ヒロインはサブなヒロインを次々拾い上げます。

テンプレからはずれ好き勝手やります。

ハーレムです。でも主人公は残念な人です。

下品ですエロスです。

石投げないで下さい。

アンチとかは無いです

原作読むとアンチ要素が感じられない作者が、ゆるくて幸せな結末を目指して頑張る話を書きます。

原作の流れ壊すなってかたはお帰りください。

現在、ノクターンの方で18禁サイドストーリーを併せて執筆中です。興味あるかたはどうぞ <http://nkx.syo.setu.com/n3116u/> ジェシカ、カトレア、オルレアン夫人、エレオノール、マチルダ、カリン様まで公開しました

人物まとめ。45話現在ネタバレ注意（前書き）

ネタバレ超注意

初見な方はスルーすべき

人物まとめ。45話現在ネタバレ注意

ハイン一味

ハインリヒ

この物語の主人公。トリステイン王国のオルニエル領とアルビオン王国のサウズゴータ領を持つ侯爵の位を持つ貴族。作者は見た目をマクロスFの早乙女アルトをイメージしたらしいよ。声も。

魔戒騎士としての顔を持ち、ハルケギニアの夜に潜む闇を切り裂く。

元は地球の住人であったが、神やブリミルが住まう天界の思惑でハルケギニアに転生させられた。転生の器は、ゲルマニアの没落貴族らしい。自称神に貰った能力は？黄金騎士牙狼の能力？月に一度地球に行け、手荷物ならハルケギニアに持ち込める。生き物不可？何でも治る万能薬、但し月に10錠までの制約有り。

複数の妻を持ち、各国の王族等に個人的なコネクションを持つ。女難の相あり。特に熟女に好かれるという特徴がある。例・マリアンヌ、烈風カリン、オルレアン夫人等。

彼自身の戦闘能力は高いが、メイジとしてもスクウェアクラス。だが、最近独自の魔法解釈に開眼したらしい。基本的に面倒くさがりなので、無駄な戦闘は一切しない。

二つ名は「黄金」

ジェシカ

ハインリヒの妻。平民の出だが、料理のセンスと経営者としての手腕は確か。なかなかの巨乳。シエスタと同じく黒髪が美しい。ゴスロリ趣味がある。

ゴールデン商会の会頭を勤める。実家はトリスタニアの魅惑の妖精亭。スカロンが父親で、シエスタは従姉妹にあたる。

カトレア

ハインリヒの妻でヴァリエール公爵家の次女。かなりの巨乳。スタイルはグラマラスな美人。ルイズと同じく桃髪。

乙女同盟の盟主。やわらかな物腰だが、怒らすと洒落にならない。

ジェシカと共にゴールデン商会の経営者をしてる。

動物に懐かれる不思議スキルを持っている。ラグドリアンにいた水の精霊が変化した姿マリも今やカトレアのペット化してる。自身の使い魔はスライムで、何故かマチルダの使い魔のカピバラすら手懐けている。

エレオノール

ヴァリエール家長女で、元王立アカデミーの연구원という才媛。美乳さん。スレンダー美人で角眼鏡をかけている。髪はブロンドだが

カリン似の美人。

ハイン一味に入ってから、領内のインフラ整備を担当している。
ツンデレっぽいけど、ハインリヒの前ではデレ比率が高い。

ただ、仕事キツチリ人間で、研究マニアなので、基本はクールな人。
イメージはエヴァの赤木博士的なかんじ？

マチルダ

元フーケ。今は有能なハインリヒの秘書。美巨乳。エメラルドグリーン
のロングヘア。下フレームの眼鏡を愛用してるが実は伊達（
設定ね。本家は知らん）

普段は秘書としての活動が多いが、土メイジとしての能力も高い為、
エレオノールに扱き使われる場合も多い。

極度の照れ屋で甘えん坊。サウスゴータ太守の娘で、アルビオンの
政変に巻き込まれ、以降人間不審だった。が、ハイン一味入りして
からは本来の性格に戻った。

シェフィールド

ハインリヒ付きのメイド。常にメイド服を着用している。黒髪が美

しい美人。美乳さん。

始祖の使い魔ミヨズニトニルンとしてガリア王ジョゼフ一世に召喚された。

ジョゼフが画策した、レコンキスタによるアルビオン王国貴族派クーデターの際、暗躍していたハインリヒにキャン言わされた。

そしてハインリヒに丸め込まれ、溺愛の対象がジョゼフからハインリヒに。

過去にトラウマがあるらしく、それをハインリヒにほだされ、幼児逆行したような話し方になった。

真なるMらしいよ。

ティファニア

アルビオンのウエストウッドに隠れすんでいたハーフエルフ。魔乳さん。峰不二子を越えるボンキュッボンな凶悪スタイル。虚無の担い手だが、本人は全く興味無し。虚無？なにそれおいしいの？

因みに、一緒に住んでたお子様達は、オルニエールで養子縁組されて今は幸せ。

アルビオン政変時、マチルダと森に逃げた。ハインリヒに連れ出される迄は、他人との接触は避けてた為、かなりの浮世離れした純粹

培養娘。

性格はド天然だが、極度のハインリヒ依存体質。黒いオーラはテフアの印。

ハインリヒに魔法学院行けと言われてるが、頑なに拒否。屋敷で二ト化している。

モンモランシー

そばかす。ブロンドの縦巻き髪。しっかり者。美乳さん。スレンダ―でスタイルがいい。

まだ学院の二年生。

香水作りで小遣い稼ぐ苦勞人。とても乙女な娘で、ハインリヒは可愛くて仕方ないらしい。

作者も可愛くて仕方ないらしい。

シャルロット（旧タバサ）

ガリア王家の血筋。オルレアン公爵の一粒種。ブルーサファイアの色をした髪をポプヘアーにしている。超ちっぱいさん。貧乳は希少価値だ！ステータスだ！身長もちみっこい。

ガリア王国北花壇騎士の人形七号。シュバリエの称号を持つ。

仇だったジョゼフとは、ハインリヒ介入で和解。母親も正常に戻る。ジョゼフ和解後も花壇騎士の活動は続けている。団長イザベラと昔のような関係に戻った為、彼女を支えたいらしいよ。

ハインリヒに依存気味で、ある意味犬のように懐いているが正しいかもしれない。最近ハインリヒに会えないストレスからか、彼女の地雷を踏むと杖でシバかれるというヤンデレ気質。

メイジとしては風と水の使い手で、ウインディアイシクルが得意技。二つ名は雪風だが、最近暴君らしいよ。

使い魔は風韻竜のシルフィード。きゅいきゅい五月蠅いよ。喋るとフルボッコだよ。

コルベール

通称ジャン。過去に新教徒虐殺に関わった過去から、影のある人生を送っていた。

トリステイン魔法学院の教諭として勤めていたが、ハインリヒがメロンヌヴィルを殺した後、ハインリヒに諭され、研究者としてハイン一味入りを果たした。

ハイン曰く贖罪は民に奉仕して返せ。死人は所詮死人でしか無いのだから。だそうです。

最近はマッド博士として自重しない。飛空艇にもハインリヒに内緒の機能が多数あるらしい。来るべき時に「こんなこともあるつかと！」とやりたいらしい。

戦闘特化の火メイジだが、土もいける口らしい。二つ名は炎蛇

最近ジョゼフ氏と交流があるらしく、ガリアの美人ボインを紹介してもらおうらしい。

超ハゲだが、顔パーツはイケメン

竜っ娘

火韻竜の亜種である。韻竜としては頂点の能力。つまりハルケギニア幻獣の頂点という事。

先住魔法を操り、ブレスは災害クラス。三姉妹の利点を生かし、連係攻撃を得意とする凶悪さ。

長女のユイは、一人称が妾であり、ヒト形態時はちびっこ白髪ロングのロリっ娘。数百年生きてるから、要はロリババア。ハインリヒに恋する可愛いやつ。

次女ユン。ゝですのお馴染みのお嬢様キャラ。姉の幸せが自身の幸せという健気な娘。

三女ユラ。カタコトで毒を吐く黒いやつ。やはり姉の幸せが自身の

幸せという健気な娘。シカが大好物。

トリスティン王国

アンリエッタ

トリスティン王国の王女。ワインレッドのシャギーの入ったショートヘア。清楚な純粹培養プリンセス。スタイルが良い。

奔放で天然だが、最近は成長してるみたいだよ。

ハインリヒ介入で、トリスティン王国とアルビオン王国の合併が決定し、ウェールズを迎えて国王とし、念願だった夫婦になれるらしいよ。良かったネ

マリアンヌ

故トリスティン王の妃で、アンリエッタのオカン。

意外と策士でハインリヒを狙ってるらしいよ。カリンと何やら企んでるらしいよ。ただ、彼女のエピソードはノクターンだけどネ。

ウェールズを国王に据えたら、何やらやかすらしいよ。

マザリーニ

トリスティン王国の宰相ポジションだが、別に正式に宰相な訳じゃ

ない。他に人材いないから、仕方なくやってる。

彼自身はロマリアからきた枢機卿で、あわや教皇だったという実力者。

トリステイン王国内では外様なせいか、貴族からの風当たりはキツイ。

ただ、政治家としての能力は高く、彼がいなけりゃとつくにトリステイン王国は破綻していた。

ハインリヒの顧客だったが、今はある意味いい友人といえる。

ハイン一味のゴールデン商会に一枚噛んでいる。

ハインリヒはマザリーニに好感を持っている。

ヴァリエール公爵

モノクルが似合う紳士。だが、娘達を溺愛し過ぎて気色悪い。よくオチに使われるユーティリティな人。

ただ、公爵としての政治手腕はマジパネエ。いや、書かないけどね。

カリーヌ・デシレ

ヴァリエール公爵夫人。エレオノール達のオカンで実は烈風カリンの災害レベルの化物。得意技は肉体言語によるOHANASHIで

ある。

見た目はルイズを年増にした感じで、ちっばいだけど超美人だよ。

ハインリヒは食べられたよ。多分近いうちにノクターンに登場するよ。

モンモランシ伯爵

モンモランシーのパパ。

意外と打算的な思考を持つ。その最たる例が娘のモンモランシーをハインリヒの妻にする…だが、念願叶って万々歳だ。

事業失敗で貧困するモンモランシ領だったが、ハインリヒのてこ入れで復活。

ラグドリアンの干拓が失敗した土地でコシヒカリを栽培し、現在はモンモランシ領「米どころのイメージとなっている。

ハインリヒを筆頭にハルケギニアの有力者で作られる「ハルケギニア悪巧み団」の一員。

実は政治手腕は確か。

ルイズ

虚無の担い手。身体は貧相だが、顔はカリン似の美人。プライドが高く、最強ツンデレ娘だが、最近は使い魔でステイな関係な平賀才人にデレまくり。

頑張り屋の苦勞人。

以前は性格が歪んでいたが、ハインリヒ主宰「ハルケギニア悪巧み団」に虚無であると明かされ、数々のやり取りの後、憑きモノが落ちたようにバランスが取れた。

歌唱力に才能あり。

自身の意志で虚無には未覚醒。

平賀才人

地球にいた平均的な高校生だったが、ルイズの使い魔としてハルケギニアに召喚された。

虚無の使い魔であるガンダールヴである。

ハインリヒに虐た 指導を受け、剣術の腕は中々のもの。

現在ルイズとは恋仲で、原作のようなハーレム主人公ではない。

ただ純粹にルイズをささえる。

地球に帰りたい気持ちはあるが、今はルイズとの生活もあり揺れている。やはり鍵はハインリヒか？

ルイズ

虚無の担い手。身体は貧相だが、顔はカリン似の美人。プライドが高く、最強ツンデレ娘だが、最近はい魔でステイな関係な平賀才人にデレまくり。

頑張り屋の苦勞人。

以前は性格が歪んでいたが、ハインリヒ主宰「ハルケギニア悪巧み団」に虚無であると明かされ、数々のやり取りの後、憑きモノが落ちたようにバランスが取れた。

歌唱力に才能あり。

自身の意志で虚無には未覚醒。

平賀才人

地球にいた平均的な高校生だったが、ルイズの使い魔としてハルケギニアに召喚された。

始祖の使い魔であるガンダールヴである。

ハインリヒに虐た 指導を受け、剣術の腕は中々のもの。

現在ルイズとは恋仲で、原作のようなハーレム主人公ではない。

ただ純粹にルイズをささえる。

地球に帰りたい気持ちはあるが、今はルイズとの生活もあり揺れている。やはり鍵はハインリヒか？

キユルケ

シャルロットのクラスメイトで親友でもある。ゲルマニアからの留学生であり、火のトライアングルメイジである。

長身に巨乳、妖艶な物腰　学院のセックスシンボルのなポジションだが、最近は浮いた噂はない。

ただ、ハインリヒの妻の座を狙っている節がある。今後に期待。

ガリア王国

ジョゼフ一世

ガリア王国の王様。無能王と呼ばれる無気力な王様　　というのは表向きで、実は有能過ぎるほど知性派である。

趣味のチェス腕前はハルケギニアでも屈指。趣味は園芸で、薔薇を愛でる優雅さを持つ。

かつて父王が健在の時、弟シャルルと王権を争った。結果、父王はジョゼフを指名した。それに納得が出来なかったシャルルとシャルル派貴族は、ジョゼフ暗殺を画策した。だが、逆に先手を打ち、これを粛正した。これにより、シャルル夫人、シャルロットとの因縁が生まれた。

ジョゼフは虚無の担い手である。だがジョゼフは、以前から魔法等は

下らないと感じていた。その本人が虚無であったという皮肉に、心が歪む。

その頭脳明晰過ぎる事から、他人の考えの数手先を容易に読めるため、他人の浅ましさに、心が冷えきってしまう。シャルルの事もこれに含まれるが、それらが人間不信を増長させ、さらに歪む。

その後、ひよんな事から虚無に覚醒し、使い魔ミヨズニトニルンを召喚。これ以降、彼の狂気は暴走し、こんなつまらない世界は壊そうと考えた。

そしてレコンキスタを操り、戦乱を引き起こす事を実行したが、ハインリヒの介入で失敗に終わる。

その後、ハインリヒが宮殿に乗り込みOHANASHIとSEKKYOをされ、新しい価値観に目覚めた。

以降ハインリヒとは友人関係となる。

ハインリヒのもつ知識に興味津々。ハインリヒのもつ嗜好品に興味津々。

改心したとはいえ、フィクサー気質は未だ健在。むしろノリノリである。結果、ハインリヒの知らないところでハインリヒにお節介を焼きたがる。

既にコルベルやゴールドデン商会の二人は懐柔された節がある。

モリエール夫人という愛人がいるが、ハインリヒ介入以降、まじらブラブ。王宮にいる人間がどん引きするくらいラブラブ。公的行事にも正式なパートナーとして普通に連れ回す位ラブラブ。閨では余

はモリーが大好きでちゅ　なんていうプレイが行われているとかいないとか

シャルロットとは和解。シエフィールドはハインリヒに進呈。

作者が愛するキャラの上位である。

イザベラ

ジョゼフの娘で次期ガリア王に指名されている。ガリア北花壇騎士団という濡れ仕事専門の集団の団長。

かつては歩く情緒不安定というくらいヒステリックな人間だった。

美人で清楚な見た目に反して凶悪だ。いわゆる残念な美人だった。

それは、魔法に才能が無い事や、従姉妹のシャルロットに嫉妬したりなどを初め、ジョゼフに構ってもらえなかったり、色々な事が重なって、被害妄想の塊となったことが全ての原因。本当は寂しがりやの普通のお嬢様。

ハインリヒ介入以降、シャルロットやジョゼフと和解。それ以来物腰がやらかくなったよ。可愛いよ。

作者はハイン一味入りを画策してるが、今のところ王位継承第一位な関係で、いくらなんでもダメだろう……と困っている。後はロマリア篇で登場する、シャルロットの双子が鍵か！？全てはジョットの流れのままに……？

オルレアン夫人

故シャルルの妻でシャルロットのオカン。ビジュアルはシャルロットを少し大人にして、やらかい感じにしたイメージ。髪は 泉こたけの長さのイメージ。分らなきゃググレ

かつて王位を争う政治闘争時、旦那と二人、ジョゼフを暗殺したるとか企み、逆に毒を盛られ、精神崩壊。人形を娘と認識しちゃったよ。なんだか惣流アカのオカンみたい……とか言わないの

ハインリヒに解毒され、正常になったが、その際のエピソードはノクターン参照してや。未亡人パネエ…

アルビオン王国

ウェールズ

アルビオン王国皇太子で中々のイケメン。そして童貞。

レコンキスタの争乱時、死を覚悟した玉碎野郎。ハインリヒ介入で事なきを得た。それがきっかけでハインリヒと親友になる。

遠距離恋愛（笑）中のプリンセス・アンアンと正式に婚約。

トリステイン王国にアルビオン王国は吸収されるため、アンアンと結婚後には新生トリステイン王国の王様だよ。

ハインリヒに船巻き上げられたよ。

ハインリヒを兄貴と慕ってるよ。主に性的な分野で。

ジェームス

現アルビオン王結構高齢だが、しゅっとしてる。

マリアンヌやマザリーニと結託して、ハインリヒを絡め取った策士な側面を持つ。

かつて弟がエルフとねんごろになり、仕方なく肅清。だって王様やもんじゃあないやん……

ハインリヒのアルビオン介入後、非公式だがティファニアに謝罪。姪っ子萌えに目覚めたようだ。

帝政ゲルマニア

まだはつきり描写はない。今後のストーリーに思いっきり関わるとだけ明言します。

NPCな方々

ヨイトマケ団

オルニエール所属のガテン系土メイジ集団。

アルマン・ド・グラモンが団長。ニツカポツカをこよなく愛する残念なイケメン。かのグラモン家次男

団員の皆様

ノリの良さはハルケギニア1である。
一応それぞれ貴族の息子なのに、やたらと荒くれ者。とにかく建てる事に関しては全く自重しない。

ギーシュ

ガヤ担当 にぎやかし担当
薔薇ナルシスト

ケイトとラブラブらしいよ。知らんけど。

シエスタ

なんでだろう？未だ空気。多分作者がこついう主体性の無い娘にイラッ ミするかららしい。

天の方々

魔界の王サタン

ユニセツクスな見た目。クールなイメージ。作者がイメージするキヤラクターは、パタリロに出てきたバンコラン。

彼の話によく天使をナンパ等のワードが出るが、普段の落ち着きに反し、プライベートは軽薄なようだ。

何かの目的があつてなのか、ハインリヒを転生させた張本人。

サマエル

ハインリヒを転生させる際の実行犯。サタンの忠実な部下らしいが、サタンには恐れられている。

バール

肉体派の役職者らしく、ブリミルに説教したりと、武闘派らしい。

ブリミル

ハルケギニアの聖人だが、今はハルケギニア担当の管理者。が、なんらかのトラブルを犯したらしい。

？ 選択肢があるようで、実は道は一本道だった。つまり罠ですか、そうですか
うん。僕、転生しました。

昨日、夜9時に仕事から帰ってから、コンビニで買ったビールとちくわの磯辺揚げで晩酌してたんだ。

DVDなんか見ながら、へらへらとほろ酔いを楽しんでいたんだな。三十路突入の男やもめの独身貴族ですから、とくに誰に憚る事無く、それはもう豪快に、お気に入りのマジックミラー号シリーズですな。愚息はむくむくしてきますが、内容はお馬鹿なので、発電することもなく。

いやあ、さすがソフトオンデマンド…娯楽AVの極みです。ありがとうございます。

と、気が付けば愚息半立ちのまま酔い潰れて寝てしまったみたいですね。

『起きなはれ。起きなはれや、お兄さん』

「むむむ…うるじゃいな…まだ眠いでいける…」

『ええい、起きてよ〜』

「はいはい…起きますよ〜っと…ZZZ…」

『起きろ〜！起きろ〜！起きろ〜！……むう…こつなったら…えい！』

バリバリガツシャーン！

僕の身体に稲妻が落ちてきて、一瞬で目が覚めました。

「……わかった起きるし…殺す気かよコンニャロ………」

むくりと身体を起こし、眠い目をこする。

やっと焦点のあってきた目の前にはただ、暗闇の中に、僕の心の嫁である「みひろ」似のお姉さんがいた。

デニムのミニスカートに白いキャミだけの…む…胸には魅惑のポチつとした突起が…神様、ありがとう僕に日頃のご褒美ですね…

『あの…あの…？』

「ああ、お待たせしてすみません。美女を待たせるなんて失礼でした…では…いざー!」

『えー!?えー!?きゃーっ………』

僕はその場で飛び上がると同時に、衣服を一瞬で脱ぎ去りパンツ一丁になり、みひろ似の彼女に飛び込んだ！

所謂、ルパンダイブという高等技術だ！ただルパンと違うのは、彼は縦縞の柄パンであり、僕はピッタリしたフィット感のビキニパンツという事が。

そしてそのままみひろ似の彼女に飛び掛かり、がっちりと押さえ込む。

「ねえ、これ食っていい？ねえ、これ食っていい？はあはあ…ペロペロペロペロ…」
キャミの上からポチっとしたイチゴちゃんを堪能しまくりの僕ちゃん。

『はわわ…あう…やめなさい！』

ガラガラガツシャーン！

はい、また雷を頂きました。ありがとうございます。

「……………いてえよ、みひろちゃん…」

『もう…落ち着きました？でも気持ち良かった…ゲフンゲフン…ちやんと話を聞いてくださいね？』

みひろ似の彼女はどつやらどつ立腹のようです。

頬を若干赤らめています。ジエントルMENなので突っ込みません、はい。

『まず、わたしはみひろ？ではありません。あなたの潜在意識にある、「好感をもてる容姿」を採用しただけです。そして、わたしは神様です。まず、ココ迄で質問は？』

「うわあ〜神様とか自称っすか……なんていうか……頑張れ？」

『ちよっ…何その生ゴミを見るような眼は！じゃ、見て下さい！証明しますから！ふわわわわ！』

自称神様が唸りだすと、むくむくと身体が大きくなり、体長5メートルくらいになった。

『はい！これを見てどう思いますか？』

「すごく…大きいです…そして…白いです…食い込みがたまりません…」

『ちよっ…どこ見てるのですか！？ 変態にもほどがあります…もう話が進まないよう…』

巨大化したみひろ似自称神様はorzな体勢でしくしく泣いてしまいました。

そら巨大したら丸見えですよ。まあ流石に可哀相になって来たので、話くらい聞いてやりますか…

「ああもう、めんどくさいから話聞くから……とつとと話しやがれ？」

『グスツ……うう……あなたのせいじゃないですかあ……じゃあ本題です。あなたは死にました。だから別の世界に転生してもらいます。特典もあるよ？』

「はあ？意味わからんちん。分かりやすく説明しやがれ？」

完全にこの自称神様は頭沸いてるな……やれやれ。

『沸いてません！』

「心読むなよビッチ」

『なっ……いや……ペースに巻き込まれちゃダメ……深呼吸よわたし……スーハースーハー……実はですね、あなたの隣の家のお婆さんいるじゃないですか？ 彼女はこの度寿命をむかえまして、天に召されるはずでした……が！部下の死神さんが間違ってしまいました……』

自称神様は伏し目がちにチラチラとこちらを見ている。バツが悪いのだろう。

「あ……つまり、その婆さんじゃなく、間違っつて僕を殺したとか？」

はっと自称神様は顔をあげ、満面の笑顔で見ている

『その通りです！いやあ流石ですね！』

「はっはっはっ……僕を舐めてもらっちゃあ困ります。………って言うと思うか？てめえ氏ね！いや死ね！今すぐ死にやがれ！」

『あうあう……申し訳ございません……ただ、あなたの身体……本当に言いつらいのですが……既に火葬されちゃいまして……ですので特典つきで別の世界に転生という運びになりました……』

自称神様はペコペコと頭を下げながら申し訳なさそうに言う。

「ってかもう、今さらどうにもならんのだろうが……じゃもうとっとと転生とやらをさしてくれよ……」

『わかりました……本当にすいません。で、転生先ですが、地球でいう中世ヨーロッパ程度の文化レベルの異世界になっています。ただ、魔法という概念がある世界なので、地球とは違った社会があります。あなたはそこでいう没落貴族の青年として生きてもらいます。ココ迄で何か質問はありますか？』

こいつ……なにいつちゃってんの？魔法とか……ハリポタの見過ぎ！？なにそれこわい……

「いやあ……突っ込み所満載だが、まあいい。てか考えるのダルい。とっとと送れよ。なあに、楽しんでやるさ」

そう、質問したところで何か変わるわけでもあるまいし。なら、楽しむしかないだろう。

『なんだか無駄にポジティブですね……まあいいでしょう。では特典の話に移ります。何か希望はありますか？この状況はこちらの不手際で引き起こした事なので、ある程度は融通を利かせます』

「はあ、なるほど。じゃまあ、遠慮なく。まず、どんな病気も怪

我も治せる薬が欲しい。 そんな文化レベル低い世界なら、病気や怪我になればコロツと死ぬだろうし…だから薬が欲しい」

『はい、理にかなってますね。わかりました。ではこの小瓶に10錠の錠剤を入れておきます。飲みきると無くなりませんが、月初めにまた10錠に補充されます。用法・用量を守ってお使い下さい』

「サンキュー神様。次はそうだな。地球との行き来を自由したい。できるかしら??」

『うーん…困りました。それはちょっと難しいです…けど、月に一度になれば許可します。ただ、地球からの物品の持ち込みは自由ですが、手でもてる分だけしかダメです。後は生き物もダメです』

「了解だわ。それで充分だし。後はなあ…うーん…魔法があるような世界だからなあ、多少の魔法の才能を下さいや。それで充分ですわ」

『意外と謙虚なんですね。過去にこういうイレギュラーな転生をさせた事がありますが、大概は「最強になりたい」とかお子様思考が大半ですからね。まあ魔法の才能は没落とは言え貴族ですし、元々才能は若干ありますから…ただまあ少しサービスときますね。向こうについたら分かりますが、知識は元々備わっているようにします。実際の習得は頑張って修業して下さいね』

「わかった。ありがとう。もう満足だ。せいぜい新しい人生を楽しむさ。ではな！」

『はい、こちらもち気持ちいい交渉ありがとうございました。では新しい人生へ送ります。あなたに幸がありますよう…』

そういつと自称神様は僕に手をかざした。

僕の身体は間もなく小さな光の粒子となって消えた。

『最初はただの変態かと思ったけど、なかなかいい青年でした。ふふっ…好むともこのまざるとも嫌が応でも平穏な人生は送れないでしょうね。それだけの特典は付けましたし。せいぜい愉しませて下さいね？ふふふふ……』

そうして、自称神様は消えた。その背中には黒い羽があり、その尻には黒い尻尾がみえる。

そこにあるのはただ暗闇だけだった。

？ 選択肢があるようで、実は道は一本道だった。つまり罫ですか、そうですか

あ、名前とかはまだ秘密

？ 過剰サービス ダメ 絶対

気が付いたら僕は粗末な宿屋の小部屋の粗末なベッドに寝てました。

うむう、頭が痛い。まるで二日酔いのような不快さだなあ。

吐き気がしないのが救いだけでも。

取り敢えずあたりを見渡したら汚い壁紙と汚いベッド、あとは申し訳程度な小窓があるのみ。

はあ、なんかだるいな。

小窓を開けて景色をしてみる。 どうみてもド田舎だねえ。

ただし、街並みがやはり中世ヨーロッパ感あるな。

やはり異世界に来たようだ。 やれやれだな。

はあ……しんど……

『おいおい、いきなりボヤくんじゃねえよ』

え？誰？つか何処？誰も居ないんですけど……

『お前の指をしてみる。俺はここにいるぜ?』

ん?左手の人差し指に……指輪??

きいあああああ……

『けっ……ビビってるんじゃないよ。俺はザルバ。お前の相棒だ。よろしくな』

ザルバ?…ザルバ!?!もしかして…あの牙狼の相棒のザルバあ!?!

『当たり前だぜ。くだらねえこと聞くなよ』

あれ…たしかザルバって鋼牙に力を貸して壊れたんじゃないやなかったっけ?

『ああ、力を使い果たして壊れたんだ。鋼牙には魔戒法師に新しく作られたザルバがついている。俺はどういう陰我が怪しい神に言われ、お前を助けろという啓示を受けたんだ。理解したか?』

理解…するしかねえじゃん……

『神が言ってたぜ。俺とそこにある剣は、欲の無いお前へのギフトだっつena』

ギフトねえ……あ?だと……まさか……

『ああ、牙狼剣だ』

ザルバがカタカタと愉快そうにいいやがった。

恐る恐る横を見ると……ありましたよ……ソウルメタル製の無反り、
両刃の鐔の無い剣が……

つてことはもしかして……

『おう！勿論なれるぜ？魔戒騎士の最高位、牙狼という名の黄金騎士にな！』

うわっわっわっわ……やり過ぎだろ自称神様……

あ、でもまあどうせ99.9秒しか鎧の召喚できねえしな……人前で
変身しなきゃっ……つかそもそも変身しなきゃいいじゃん。ふう、
安心安心でござる。

『ああ、心配すんな。神の特典つてやつでな。時間制限無いんだわ。
良かったな？鎧に喰われたりしないぜ！あとな、意識を保ったまま
『心滅獣身』にもなれる。全く、至れり尽くせりだな。鋼牙か泣く
ぜ？アッハッハ』

アッハッハじゃねえし……あ、でもでも、番犬所とか無いから魔導火
も無いな。むふっ……技出せないな！なら変身はしないどころ！そう
しよう！

『甘いな。魔導火は俺が出せるんだな。これまた制限無しでな。ま

あ頑張つてハルケギニアの魔戒騎士として頑張りな』

マジかよ……えっ？つか今聞き捨てならないキーワードが聞こえたよな…

『ん？何がだ？』

いや、ハルケギニアって……

『ああ、当たり前だろ？ココはライトノベル「ゼロの使い魔」の世界だからな』

はああああ！？なにそれこわい…死亡フラグ満載のファンタジー小説じゃない……やだ、おうち帰りたい…そもそもゼロ魔なんかレコンキスタまでしか読んだ記憶無いんですが…

つてか魔戒騎士もなにも、ハルケギニアにホラーなんかいなくね？

『いるぜ？ あちこちにエレメントがあるようだしな。そもそもホラーとは人間の過剰な欲望が好物だからな。この世界は貴族社会だ。欲望だらけだぜ？ ホラーが沸いても不思議は無いんだ』

はあ、そうですか……まあ、仕方ないですな。まったりホラー狩りしながらの平民ライフを楽しむか…

烈風だの無能王だのに関わりたくないしな…原作キャラには正直近寄りたくないわ。

『まあとにかく、早いことハルケギニアに馴れることだな、ハイン
ん？ハイン？誰？僕の事？』

『ああ、そうかそうか。すまない。お前のパーソナリティの説明が
無かったな。お前の名前はハインリヒ、だから愛称はハインって訳
だ。分かりやすいだろ？ 因みに今年16才だな。元々ゲルマニア
の侯爵家だったが、遊び人の父親が財産食い潰して爵位を無くした
元貴族だ。魔法はまあ、頑張れ。俺にはわからんが才能はあるら
しいぞ。まあ没落貴族だから、つまりは家名も無いただのハイン
リヒ君って事だな。理解したか？』

うん、まあ…理解した。ようは頑張って生きましようって事だね。

取り敢えずはハルケギニアに馴れるところから始めますか。

ザルバよろしくな？お前だけが頼りだよ。

『おう、まかせな！楽しくやろうぜ！』

そうして僕は…いや、これからは俺と言おう。

俺はハルケギニアで生きていく覚悟が出来た。

魔戒騎士は余計だが仕方ないな……

ああ、（自称）神様…

過剰サービス

ダメ…絶対…

と、言うやり取りからはや一年。俺はトリステイン王国の外れ、
港町ラ・ロシエールにいる。

何でこんなところにいるかって言うとだ、そもそも目覚めたのが王都
トリスタニアの宿屋、『魅惑の妖精亭』だったんだ。

最初は金もないし、アテも無いからさ、魔法の修練や魔戒騎士の修
業がてらと近隣のオーク鬼や亜人を狩ってたわけ。

オーク鬼ってのはブタの化け物みたいなもんだが、大きさはグリズ
リーくらいあってさ、デカイ棍棒振り回すやばいやツなわけ。

こいつを狩ると、その領主から懸賞金貰えるんだわ。

20エキューと、平民にしたら高額なもんで、トリスタニアから歩
いていける範囲を狩りまくってたら一財産築いたわけさ。

そしたら近場にゃオーク鬼いなくなっちまってどうしたもんかな

なんて思っていたんだわ。

こっちに来てほしい2ヶ月くらいだったかな？

魔法も色々覚えたんだ。火と風と土の3系統がトライアングルになったんだわ。

所謂器用貧乏ってやつだね。スクエアまでは行けるのかなあ？わかんねえや。

まあ便利な魔法を一通り覚えたり、無理やりスクエアまで追い込んで修業する気は無いのよね。

ザルバが言うには、魔法のクラスを上げるには、とにかく精神力が枯渇するほど追い込んで行けば、適性さえあればいずれ上がるようだ。

ただ、トライアングルまであがったし、後は魔戒騎士としてホラーを倒してりゃそのうち上がるんじゃないかね？って言うし、魔法の鍛練は止めたさ。

魔戒騎士としての修業は、夜な夜なトリスタニアに現れるホラーを狩りながら、ザルバのアドバイスを聞いたりしつつ、色々な技や知識を手に入れていったな。

まあ、それはいずれ話すよ。血なまぐさい話だしね？

そうして魅惑の妖精亭を宿にしながら、毎日なんかしら生きてたわけ。

『けっけっけっ…』

まあザルバとはいい感じだわな。

そして逃げ出したあとに神様から貰った特典の「偽世界扉・月始めのお楽しみ」を使って、地球から食材と屋台を取り寄せたんだわ。

いまは魔戒騎士兼、屋台の親父って訳さ。

まあ、楽しくやってるぜ。

んじゃそろそろ昼時だから混みそつだ。仕事に戻るわ。

「君、ヤキソバとやらを2つ貰えるかな？」

「はい、ありがとうございます。30スウになりやす！」

「じゃ1エキューで。釣りは君へのチップさ。美味いって評判聞いてね。また来るよ。ではな」

「あい！ありがとうございます〜！またのお越しを！」

さすがイケメン、気前がiiいやな。

さぁ商売商売

ん？さっきのイケメンってウェールズじゃね？

まあいつか

じゃあな！

？ 過剰サービス ダメ 絶対（後書き）

だからノリだけだっば。

週1か2くらいで更新予定ですな。

？ 二度見って言う行為をリアルでした時はロクな事は無い。ホント、まじで。

とある空間

「それで？ 依頼の件は滞りなく済んだのかい？」

「はい、サタン様。ただし、ブリミル君にはちょっとお仕置きが必要と感じましたので、パール様にお説教を頼みましたが宜しかったです？」

「クツクツクツ…それは災難だねえブリミル君は…まあ六千年放置したら、そりゃあ停滞するわな。………そういえばサマエルちゃん？」

「はい、サタン様」

「例の世界に送り込んだ青年さ、実際どうなのさ？ いい感じに仕上がりそうかい？」

「はい、それはもう。素材としましては最高ですね。何といたしますか、こう自分の快樂には正直で、それでいて他人との距離感を測るのが上手いですね。下らない正義感もありませんし、彼ならば立派に役目を果たすでしょう」

「来たるべき刻、果たして彼は彼の地で英雄となるか、はたまた厄災となるか…何れにせよ清水に落とした一滴の猛毒たる彼の顔を早くみたいモノだ。クツクツクツ…サマエルちゃん、しっかりと映像は記録しておいてね？」

「はい、サタン様。それはぬかりなく。わたくしの使い魔 ステル

ス型使い魔・録画くん　を既に配置済みですわ」

「相変わらず手際がいいね。優秀な部下を持つとトップは楽でいい。優秀ついでにこの書類の決済をまかせちゃおうかな。…ではな」

「…行かせませんよ？」

「……はい。くそっ…天使をナンパに行きたかったのに……サマエルちゃん！後でプリミル君呼んどいて！僕が直接虐め…じゃなくて説教するから！」

「はい、サタン様。ではとっとと仕事しやがれクソ上司様？おほほほ……」

「あっ…悪魔や……」

ヤキソバ如何っすか？

ヤキソバ如何っすか？

と、相変わらずヤキソバ焼いてるハインですわ。

もはやラ・ロシエール名物となったヤキソバ屋台だが、前にアルビオンの皇太子がお忍びで来てね。

クソ貴族様の社交界であちこち「ラ・ロシエールのヤキソバとやらは絶品」とか吹聴しやがりました

お陰様で貴族様のパーティーにお呼びが掛かってねえ。
屋台持ち込んで焼いてますよ？

ラ・ロシエールでは人を雇って毎日営業してるし、まあ順風満帆ってやつか？

さすが俺！

さすが魔戒騎士！

『屋台引いてる魔戒騎士とか…庶民的過ぎるだろ。牙狼の称号が泣いてるぜ？』

うるさいよザルバ。これからの魔戒騎士は皆に愛される魔戒騎士になるんだよ！

『だがハイン。堂々と鎧召喚なんかしたら異端尋問間違いないだぜ。』

お前、忘れてるだろ』

はっ…そうでした…いいもん屋台を黄金色に塗って我慢するもん……

『やれやれだぜ』

しかしまあ、この広いハルケギニア。まだまだいくところは沢山あるんだぜ！楽しみだな。待ってる女の子達……！！

「へえ、あたしを放置してねえ……いい度胸してるじゃない、ハイン？」

ジエジエ…ジエジエジエ…ジエジエジエジエ…

「はいはい、ジエシカですよ？やっと見付けたわよ、ハイン」

なななっ何でココに！！まままさかホラーの仕業！？悪霊退散！悪霊退散！ヒィィィ……

『あゝジエシカ？どうやらハインは取り乱しているようだ。しばらく放置してくれ。まあ発作みたいなもんだな』

「はあいザルバ。あんたも苦労するわね」

『ははは、慣れたもんさ。昔から俺の相棒になるやつは皆、まともな人間いないからな』

ジェシカ

あたしはジェシカ。

知ってるって？いいから黙って聞いてなさいよ。

あたしはトリスタニアの宿屋、魅惑の妖精亭の看板娘だったわ。

お父さんがやってる宿屋なんだけどね？あたしは手伝ってるうちに看板娘になったという訳。

だってほら、この珍しい黒髪でしょ？ お客様はみんな綺麗だって褒めてくれるのよ。あたしの小さな自慢なの。

ただうちの店って綺麗な娘がサービスするのが売りじゃない？

だからどうせ軽い娘なんだし、簡単にやれるとか勘違いされるのだけど、そこは手練手管よ。

気分良くさせてはひょいっと躲すわけ。

まあちよろいもんね。

おばかな貴族のボンボンや、ましてやオッサンには興味なんかないの。

あたしは、あたしをドキドキするような冒険に攫ってくれるワイル

ドな殿方がいいの。

それまではあたしの身体は清いままでもいいのよ。

だけどね？

そんなあたしを夢中にさせる殿方が現れたのよ。

ハインリヒっていう長期滞在のお客様だったのだけどね？

背はやたらとおっきいし、身体は細身だけどガツチリしてる。髪は綺麗な赤毛で顔は…キヤーキヤー！カッコいいの。

歳はあたしとそう変わらないらしいけど、なんていうか不思議な雰囲気なのよねえ。

トリスタニアじゃあまり見ないタイプの人間ね。

こう見えてあたしは人を見る目は肥えてるのよ。だって毎日毎日、平民から貴族まで様々な接客してるもの。

そのあたしが気に入るんだから、そりゃあ凄い事なのよ？

うちに滞在するようになって最初から気になってはいたんだけど、とにかく誰とも交わらないし、夜な夜などどこかに出掛けて行くし。不思議なお客様なんて思っただけでも視界に入れていたわ。

で、ある時あたしが好色そうな貴族にしつこく言い寄られていたの

よ。たしかチェレンヌ？とかいったかしら？

いけすかないヤツなんだけど、一応この地区の税金の執政官だから、無下に袖には出来なくて困ってたの。

ベタベタした手で尻や胸を触ってくるし、泣きそうになったわ。

そしたら丁度外出から帰ってきたハインがこちらを見てて、軽く目で笑いながらアイコンタクトしてきたの。あたしは意味が分からなかったのだけど。

ハインはこっちに来ると、チェレンヌに向かって小さな声で、「すみません貴族さま、少し妻のジェシカに様があるので失礼しますね？」と、チェレンヌが固まる程の殺気を出しながら、あたしの腰に手を回してバックヤードに連れてってくれたのよ！

なんかあつという間に、流れるような手際でね。

そしたらハイン、苦笑しながらポリポリと頬を指で搔いて、「ごめんジェシカ、君のいい人だったかな？　なんか困ってるように見えてね。じゃ俺はこれで」って何も無かったように部屋に帰って行ったわ。

ああんもう…一瞬で惚れちゃったわ。

その晩あたしは、ちょっとはしたないとは思ってたけど、ハインの部屋に忍んでいって抱かれたわ。

ハイン、凄かった。キヤーキヤー！

従姉妹のシエスタに会ったとき、ハインの話をしたら地団駄踏んで

悔しがってたわ。ふふっ子供ねえ。

それからはハインが夜居るときは必ず彼の部屋で過ごしたわ。本当に夢現つのようなだったわね。

だけどある時、店の仕入れで市場に行った帰り道、彼が綺麗な貴族の娘に言い寄られているのを見たの。

彼ったら、デレデレしちゃってさ、あたしは頭に来ちゃって彼に沢山八つ当たりしちゃった。

だって、悔しいじゃない。いつも照れくさそうに「好きだよジェシカ」って言うてくれる彼の笑顔が、知らない女の子に向けられるなんて……

だからあたしは思わずその辺のモノを投げつけてやったわ。

そのくらい可愛いもんでしょ？まあ、包丁投げたのは少しだけ反省するけど

だからって逃げ出すなんて酷くない？あたしをこんなにメロメロにしといて

ちよつとやりすぎちゃった気はしないでもないけど、ハインはどこかへ消えちゃった。

だけど甘いわねハイン。タルブ村に休暇で里帰りしていたシエスタが、ラ・ロシエールで有名な屋台を見に行ったら、まさかあたしの言ってた特徴のまんまの男を見かけるなんて。

シエスタは機転を利かせて、「お兄さんカッコいいですね。お名前なんて言うのですか？」って聞いたら、爽やかな笑顔で「ハインですよ、お嬢さん」って答えたんだって。

本当にちよろいわハイン。油断しすぎね。おおかたシエスタの巨大な胸でも見てデレデレしたんでしょ。

シエスタの巨乳にかかれば……シエスタ？あんだハインと何もしなかつたでしょうね!？

コホン……とにかく、あっさりハインは見つかったって訳。

逃がさないわよ、ハイン？

オホホ…あら、ハインが正気に戻ってきたわ。

……

……

……

……

……

……

……

……

…

はあ、まさかジェシカが追いかけて来るとはな。
無駄にアクティブな行動派でいらっしやる。

「あんたよくも置いてきぼりにしたわね！……何も言わずに消える
なんて…普通に捨てられるより酷い……酷いよう…グスツ…」

ごめんジェシカ…悪い事したよ……許してくれるかい？

「抱き締めて……」

ぎゅっ…

「もう…一人にしないで…ね？」

(うつ…上目遣い…何という破壊力…) ああ、もう一人になんかし
ないよ、ジェシカ

「良かった。これからあたしもあんたと一緒に行く…」

だけど俺の旅は危険だらけなんだぜ？何か合ったら困るよ…

「だけどハインは守ってくれるでしょう？」

ああ、ああ！俺が必ず守って見せるさ！ついてこいよジェシカ！こ
れからはずっと一緒だぜ！

ああ…ジェシカったら俯いて肩を震わせて…なんて健気で可愛いんだ…ジェシカ、君は俺が必ず守る!!!

「……………くっ…ふふっ」

…ジェシカ？

「……………言質とったわよ？逃がさないからね、ハイン…いや、旦那様？」

泣いた…俺は久しぶりに泣いた…

拝啓、故郷の母上さま…俺は異世界で頑張ってます。ただ、ハルケギニアは怖いです……

助けて下さい母上さま…

母上さま…

『まっ、いつの時代も男は女にかなわないもんだ。ハイン、まあ諦めてお嬢ちゃんを大事にしてやるんだな？』

こうして、ラ・ロシエール名物のヤキノバ屋台は、この日を境に『

夫婦屋台』として人々に愛されていくようになったとき。

めでたしめでたし

勘弁してください……

？ 二度見って言う行為をリアルでした時はロクな事は無い。ホント、まじで短くてすいません。

？ 悪党は気紛れに正義を行くと鬼平が言った。所謂、自己満足。

だからさ、魔戒騎士っていうんだってば。

ん？ホラーだって。

そう、ようはお金が何より好きだ！とか、人より偉くなりたいからライバルを貶めるのに罪悪感 *no t h i n g* です！とかそういう心の弱い人間が闇に堕ちたらホラーっていう、怖い化物になっちゃうのよ。

俺たち魔戒騎士はそれを狩るってわけ。

わかった？

「ん〜つまりオバケに取り付かれて大変だから、ハインがそれをやっつけてるってこと……カナ？」

う〜〜なんか違うような気がしなくてもないが、まあ……いい……それでいい……

『ハイン。諦めな。お嬢ちゃんの頭が破裂しそうだ。オバケみたいなモノでいいじゃないか』

横を見たら、ジェシカの頭の上にクエスチオンマーク、つまりは？マークが山ほど浮かんでいる。

「オバケ？ オバケ？」

もう何も言つまい……

今俺が何してるかというのだ。

昼間の仕事を終え、宿に戻る。

ジェシカと夕食

ジェシカが風呂に

ザルバがホラーの気配を感じる。

俺は夜の街へ飛び出す

ジェシカ、勝負下着で帰還

ハイン居ない…ジェシカマジギレ

無事ホラーを倒し、疲れて朝帰り

正座させられ、問い詰められる。主にどこの女と浮気したか等、根も葉も無い話に発展。

ザルバも面倒になったのか、もう話してしまえとの見解になった。

仕方なく俺は説明して、魔戒騎士の仕事の説明をしたんだわな。

だが、ジエシカに難しい話は無理らしく、頭から煙が出たって訳だ。

おい、ジエシカ！

「へう…なつなに？」

今からちよつと黙ってみてくれ！

俺は牙狼剣を掲げ、頭上に円を描く。

甲高い高周波のような音とともに、魔界より黄金の鎧が召喚され、身に纏う。

GRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR…

《どうだジエシカ、これが魔戒騎士の最高位、牙狼だ。この姿で狩るのがホラーなんだ》

「ガ口…：よくわかんないけど…綺麗」

納得したようで良かった。

俺は鎧を解除して生身に戻った。

まあ、言葉だけで理解は難しいわな…。まあいい、ジエシカ？この事は内緒だからな？ とぼっちりで怖い目に遇いたくなかったらな？

「わ…わかったでしゅ」

噛むほどびびるなって…なんか見てて恥ずかしいわ…

まあそんな微笑ましいやり取りをしつつ、俺たちは何となく毎日を楽しんでいたんだ。

ある日スカロンから手紙が来て、久しぶりに魅惑の妖精亭に顔を出してほしいとあった。

ラ・ロシエールのヤキソバ屋は人に任せてあるから、取り敢えずジエシカとトリスタニアに向かった。

便利な魔法のフライでひとつ飛びさ。

魅惑の妖精亭

「ああん〜ハインちゃん…久しぶり。逢いたかったわあ〜」

相変わらずだなスカロンさん。くねくねして擦り寄るな！なんか中途半端に固いミニスカロンを擦り付けるな！取り敢えず久しぶりだね、ミ・マドモアゼル？

「あらご挨拶ねん。ジエシカとは仲良くやってる？」

ああ、やってるよ。ジエシカは最高さ。こつ、テクニク的に？

「ちよっ…ハイン何いつてるの！ そりゃあたしも日々の鍛練のたまもの…って何言わせるのよ！」

勝手に自爆したし…

「自爆ね…」

俺とスカロンの憐れみの視線にジェシカは涙目だ。

それはそうとスカロンさん？ 手紙よこしてまでの用事って何さ？

「あのねハインちゃん、二つお願いがあって、ひとつはヤキソバだっけ？ あれをウチでも出したいのよ」

まあ、結果的にジェシカを奪っちまったからなあ…いいよ？ レシピと食材を提供するわ。で、もう一つは？

「あゝらアリガト 後でお願いね？ で…二つ目が問題なんだけど……」

なんだよ？ 今さら遠慮するなよお義父さん？

「やくだゝお義母さんって呼んでよ…とまあ冗談はさておき。二つ目のお願いつていうのは、ジェシカの従姉妹のシエスタという娘がいるの」

ふむふむ…

「そのシエスタの父親が倒れてね？ ご領収さまお抱えの水メイジにお願いしたのだけど、一向によくならないの…そこで、顔の広いハインちゃんに、誰か腕のいい水メイジの知り合いいたら紹介し

てほしいの！お金ならいくらかかってもいいわ！」

スカロンさん、まあ落ち着いて…ほら、ワイン飲んで…

「ハイン、私からもお願いします。シエスタを助けてあげて…シエスタの家族には昔からよくして貰ってるから…」

実際俺は貴族のパーティに呼ばれてヤキソバ焼きに行く関係で、割り顔が広いんだわな。

しかしまあ、水メイジより効果的なのがあるぜ？

「「えっ！？」「」

いやあ、俺が行けば多分治る。

「「じゃあ！」「」

ただし！一つ条件がある！

「なんでも聞くわ！」

「任せてハイン！」

ちよっ…親子！ぐるじい…首絞まってるから…ええい！HAN

A S E

条件は「俺が治したことは絶対に秘密にしろ」だ！

「それはいいけれど、どうしてなの？」

ああ、ちょっと特殊な治療をするから、ロマリアに目をつけられたら困るからな。

お前は口を閉ざす。そしたら身内は助かる。俺は秘密が守れて万々歳って訳だ。

それが守られるなら俺は手を貸すよ。OK？

「わかったわ！だからハインちゃんお願い！治してあげて！！」

ああ、わかった。今すぐ向かおう。

「ハイン…アリガト。あたし…あたし…無理させたかな……」

なんだよジェシカ？可愛いお前の頼みだ。当たり前だろう？

「ハイン……」

ジェシカ…

「ハイン……」

ジェシカ……

「ちゅっ…ちゅぶ……はぁん……」

「ちよっハインちゃん！そっいつのは自慢でやって！！全く…目の毒だわん……」

そんなこんなでここはタルブ村、シエスタの故郷だ。
ここはちよつと不思議な村でな。ワインが特産なんだが、シエスタの子孫が日本の軍人でな。

竜の羽衣とかいう……つてかただのボロい零戦なんだわな。

ゼロ魔原作ではさ、サイトが操つて大活躍！つて話だが、実際見てみたら弾薬の残量なんかほぼ空だしさあ
コルベール先生がガソリンを錬金したとかなつてたけど、弾薬や火薬なんか無理じゃねえかな？常識的に考えて…

まあありやあくまで小説だしなあ。だが、事實は小説より奇なり言うし、実際どうなるかは謎だな。

まあ関わる気なんざさらさら無いけどなあ。

まあ頑張れ若人よ！　おらあジエシカとしつぽりで満足だわ。

ああ、話は戻るが、そのシエスタのじいさんだかひい祖父さんしらが、その人のおかげで味噌や醤油があるらしく、それを使ったヨシエナヴェとかいう鍋料理があるんだわ。

まあ、寄せ鍋なんだろうけどさ…

しかし何も無い田舎だなあ……はよ帰りたいわ。

「あのっ…ハインさん？　いつもジエシカがお世話になってます」

ああ、いやいや。逆にお世話になってますよ？テクニツク的な…ぶ

べらっ!?

「ハ〜イ〜ン!余計な事言わないでね?」

わん……ってワシヤサイトかえ!!!ってかワインの瓶で殴るなよ…
それ突っ込みやない…鈍器や…

ジヨークやんジヨーク…ハルケギニアンジヨーク…

「あはは…はは…仲いいですね?羨ましいですう…」

ははは…何ならシエスタも仲良く…ぶべらっ!?!ひい…だから鈍器
やめて…

「ハイン…とつとと治療なさい。あとは帰ったらOHANASH
Iね?」

わん……

ええい…ところでシエスタ。お父さんの状況をおせーて?

なになに…突然倒れてアウアウと意味不明の言葉を唸り、今は床に
臥せてる?

……どう考えても脳梗塞か脳溢血みたいな感じが…

よし、治すよ。

「ほつ本当に！？お願いしますハインさん！……うつつ……ぐすっ」

じゃまつとれや。誰も部屋に入るなよ？ ああ水くれ、水。ではな。

まあ薬飲ますだけだし。

こんなオッサンはやだけど仕方ない……口移して錠剤を……おえっ……

「あっ……俺はいつたい……」

ああ、まだ動かんでください。俺は医者みたいなもんですから。

おーいシエスタ！ジエシカ！ オッサン治ったぜ！

「お父さん！！」「あなた！！」「叔父さん！！」

ふう……感動のシーンだねえ。俺も苦労したかいがあるよ？主に精神的な意味で……

だが、俺は大変なミスを犯していたんだ。

ヒントはシエスタは学院に努めています。そして某桃髪少女が……もうわかりますね？

次回 暗黒騎士 キバを越えた厄災襲来！お楽しみに！

ルイズエ……………

？ 悪党は気紛れに正義を行うと鬼平が言ってた。所謂、自己満足。(後書き)

何さ 何なのそれ ｷｯｷｯｷｯ

？　まず走りだせ！問題は走りながら解決しろ！と島耕作が言っていた。……

おうええ…気持ち悪い…

完全なる二日酔い…ちょっとジェシカ…吐くならトイレ行けって…おうええ……

ん？いやあ、事務所開きのパーティやってたもんで、関係者が全員二日酔いなんさ。

実は今回、トリスタニアはブルドンネ街の外れに事務所を構えました。

理由はいくつかあって、まず、いつまでも宿屋暮らしは不経済だから。

後はヤキソバ屋が思いの外好評で、ラ・ロシエールだけでやるには勿体ないので、いつそフランチヤイズ展開だ！という企み。

そして最後に、俺のホラー狩りも止められないし、最近結構強いのもいるし、少し訓練の必要性を感じた為、貴族のコネを利用したスパー業を始めたいからだ。

まずヤキソバ屋だが、経営者をジェシカにした。そして、レシピなど一切合財を彼女に伝授し、新人研修を出来るようにしたのだ。

そこで、ヤキソバ屋をやりたい平民の希望者を募った。希望者はトリストインだけにとどまらず、ガリア、アルビオン、ゲルマニアからも現れた。

希望者はまず、20エキユーの保証金をジェシカの事務所に納める。それで屋台一式を渡され、レシピが教えられる。

次に、ジェシカの事務所の厨房にて実技指導に入り、一定の味を保てるようになったら、実際に商売を許される。

商売が始まったら各オーナー達は、毎月ジェシカの事務所に3エキユーの屋台のレンタル代と、売り上げの二割を納めるという事になる。

各オーナー達は秘伝のソース（一樽五升入り5エキユー）を定期的に本部に買いに來なければならず、その際ジェシカには、さりげなく世間話をしながら各地の噂話を聞くようにした。

噂話も馬鹿には出來ず、商売しながら情報を入手出来るって訳さ。

一石二鳥ってやつだな。

ブルドンネ街の事務所兼、本部兼、自宅だが、さる貴族の別邸なのだが、格安で賃貸して貰っている。

一階はヤキソバ屋本部だ。応接スペースに広い業務用厨房、資材スペースがある。

二階は俺の個人事務所。外から直接階段で入れるから、顧客の貴族が平民に顔を合わせなくて済むようになってる。

目立たない入り口には、「万屋・一見さんお断り」とシンプルな看板があるだけだ。

まあ業務内容が、領地持ち貴族が手に余したオーク鬼、亜人、幻獣の駆除だから、あまり派手に宣伝は出来ないからな。

3・4・5階は完全な居住スペースとなっている。元々貴族の別宅だから、内装は豪華で落ち着かない。

まあ、そんなこんなで事務所開きの運びとなり、関係者を集めて内々のパーティをやったって訳さ。

……もうシエスタに酒飲ますのは止めとこう。ありゃあ酒乱だ……

何故か説教されて……うざくなってザルバを人身御供として差し出したから、ことなきを得たが……

『ハイン……もう二度とあの姉ちゃんには近寄らすな……』

すまん、ザルバ……

ある日の朝、ハインはベッドで微睡んでいた。

窓から射し込む陽光に、ハインは眩しそうに顔を顰めた。

ふと隣をみると、シーツに包まれたジェシカがいる。白磁のような白い肌と、ハルケギニアでは珍しい黒髪のコントラストが美しい。彼女の幸せそうな寝顔をしばらく眺めていたら、やがて目蓋がぴくぴくと動き出した。

あ、起きるかな？

「……おはよ、ハイン。恥ずかしいから……あんま見ないで？」

そういつてジェシカはハインの胸に顔を埋める。

生まれたままの姿のジェシカの裸体がハインに押し付けられ、その形のいい胸が弾力よく、跳ねた。

ハインは毎朝こうして幸せを噛み締める。

ありがとう、ジェシカ。

「なあに？いきなり。ふふっ…変なハイン。ねえ、抱いて？」

二人の寝起きは毎回艶めかしい結末となる。

そして今まさにジェシカと繋がるうとした瞬間……

ちりーん　ちりーん

不粋な来訪者を告げる鈴の音がした。

「まったく…誰だよ朝っぱらから…」

ハインのぼやきにジェシカが笑う。

「お仕事頑張つてね？ 旦那さま」

ハインは真新しい白いシャツと、テールメイドの上等なスリーピースを身に付け、階下のオフィスへ降りていった。

ちりーん ちりーん

「はいはい……どちらさんですか？」

ドアの覗き窓からこっそり見ると、そこには貴婦人が一人、供も連れずに立っていた。

細身の肢体に、シルクのドレスに蝶を模した罎が大きな帽子を身につけていた。表情は見えない。

「グラモン伯からの紹介で来ましたの。こちらはその紹介状ですわ。ミスタ・ハインリヒ、中に入れて貰えまして？」

言葉は丁寧なものだが、どこか有無を言わせないような気迫を感じ

る。

「えっ…ええ…失礼しました。どうぞ中へ」

漠然ときな臭さを感じるものの、ハインは貴婦人をオフィスへとエスコートした。

黒いレザーの応接で向かい合うハインと貴婦人。

そして貴婦人が帽子を取った。

清流が流れるような光沢の桃色の髪。

少し吊り上がった切れ長の目、そして、小柄ながらも整ったボディライン。

「はじめまして、ミスタ・ハインリヒ。 カリーヌ・デジレと申します」

（烈風カリンぢやねえかよ……何しに来たんだよ……関わりたくねえよ…助けてくれよ…もはや生ける災害じゃんよ……でも、うん、女としてはアリやな……ちげーよ…そういう話じゃねえよ……）

「ミスタ？ミスタ？ 大丈夫ですか？」

内心でパニックをおこしたハインを、怪訝そうな目でみるカリーヌ

「…失礼、マダム。あまりにお綺麗で固まってしまいました」

「あら、お上手。本気にしてしまいますよ？」

ほほほと、口元を隠した上品な笑いをあげたカーリーヌに、ハインは緊張から解放された。

「天下のラ・ヴァリエール公爵夫人に畏れ多いですよ」

「あら、わたくし家名を名乗りましたかしら？」

カーリーヌの目が細くなり、ハインを値踏みするかのような視線を飛ばす。

「いえいえ、失礼ですが、貴女の名声はトリスティンに収まるものじゃありません。こんなしがたい万屋とて知っているのですからね？」

「ふふっ…まあいいでしょう。そういう事にしておきますわ？ミス
タ」

どうやらジャブの応酬は終わったらしい。

「マダム、それで依頼とは？ 亜人の駆除なんてラ・ヴァリエール領に必要無いですよね？」

「たく…烈風相手とか…亜人に同情するわ。」

「ええ、その必要は無いですわ。まず依頼の前に確認したいことがあります。ミスタ・ハインリヒ、貴方が魔法学院の使用人の家族の命を救ったのですって？ 水メイジが杖（匙）を投げた患者だと

聞きましたが。如何ですか？」

まあ…予想した通りか…

「……………どこからそういう話におなりに？」

カリー又はにやりと微笑みを浮かべ、ハインを見ている。獲物を追いつめていくつもりのような様子だ。

（まあ、カトレアのことだろうな……………くそっ、逃げられはしないだろうが、素直に聞くのは癪だなあ…）

「いえ、わたくしの娘が魔法学院におりまして、小耳にはさんだそうです。ただ、それだけの事ですよ」

そういつてカリー又はハインが出した紅茶を一口飲んだ。

「……………正直にカトレアさんを治したいと言えばいいじゃないですか？」

「なっ…何故それを…」

（なんかめんどくさいなあ…いちいち芝居がかったやり取りはダルい。アンリエッタがルイズをアルビオンに送る時のやり取りもあれだし…トリステインの伝統なのかな？）

「まあ、蛇の道は蛇と言いますし、商売柄、こちらにも情報源はあります。ですがお互い…いわぬが花…でしょう？」

ハインは逆にカリー又はの目を射ぬく。駆け引きはいらぬよと。

「……治せますか？」

「治せるでしょうね」

「では、お願いします」

「……お断りします」

ぴしりと空気が音をたてて重くなる。

「……何故ですか？ 返答によっては考えがありますよ？」

「ふう……では、言わせてもらいます。単純に、気に入らないんですよ。うちは万屋だ。ただ依頼して報酬を約束したらそれでいいんだ」

と、ハインも一口紅茶をすすり、そして続ける。

「だが…あなたはまず、こちらを試すようなマネをし、こちらの情報だけを引き出そうとした。そして治せるのが分かると、今までの無作法が無かったかのように治せと言う。私は貴方の使用人じやあないんだ。気に入らないなあ。実に不愉快です。だから、お断りします」

「そうですか。覚悟がおりなのね？」

(呆れた……)

「暴れたかったらどうぞ、烈風殿？ 脅しも実力行使も俺には効か

ない。さて、お帰りはあちらですよ」

もう話は終わったとハインは席を立つ。　カリーヌは顔を伏せたまま、何も言わない。

「……待つてください。気に入りました。貴方の胆力、まことに敬服致しました。ならば、敢えて問いましよう。　どうしたら治療をしてくれますか？」

ハインはじつとカリーヌを見る。　やがてソファアに腰を下ろす。　たつぷりと時間をかけて座りなおして、そして話しはじめた。

「難しい事は何もないです。　ただ子を思う母親として依頼いただけたらそれでいいのです」

「っ！？　…そうでした。　ではミスタ・ハインリヒ、娘の病を治して下さい。　もう母親として見ていられ無いです…楽しいはずの青春時代をすべて闘病についやし、女としての幸せも知りません…　娘を救って下さい…」

（おでれーた…まさか涙を見れるとは…ちとやり過ぎたかな…）

「分かりました。その依頼、お受けします。が、条件が少しだけあります」

「…聞きましょう」

「なに、簡単な事です。カトレアさんに実際に治療する際、俺以外は退出してもらいます。そして、サイレントを私がかかけます。

後は礼金が500エキューですね。　治療に関わる事は他言無用でお願いします」

「…分かりました。それで大丈夫です。情報の秘匿…何か理由が
おありのようですね？」

「まあ、個人的な理由ですよ。俺は医者じゃないし、水メイジで
もない。ただ、重病を治す方法があるだけなんです。ですが、それ
が大っぴらになれば、ハルケギニア中の患者が殺到するでしょう。
だが、そんな大量の患者は相手出来ない。だから俺は始めから
治療出来るという事柄を秘匿します。お分かりいただけますか？」

「まあ思うところはありますが、貴方のルールは尊重します。礼金
の額を見ても、正直、水の秘薬の方が高いですし、あなたはフェア
な方だと思えます。娘をよろしく願います。ミスタ・ハインリ
ヒ」

「ハインで結構ですよ、カーリー様。貴女の美しい涙も見れたし、
俺は幸せものです」

ハインは茶目つ気たつぷりに片目をつぶって見せた。

「なっ!?! おばさんをからかったらいけませんよ!……ううう」

そうして、二人は握手をかわした。契約はこれでおしまい、文
書は残さない事で合意したのである。

ハインは秘密にしたい。カーリー又は公爵家としての対面を保つため
である。

「では実際の治療への流れですが、出来れば公爵様がいない時に伺います。使用人の方々には、ロバ・アル・カリイエへ旅した旅人に、闘病のストレスを減らすために冒険の物語を語ってもらう……とでもしましょう。カトレアさんにもそのようにご説明下さい」

「なるほど、それなら問題無いですね。来週のオセルの曜日は幸い主人が朝から王城に参ります。ですのでその日をお願いします」

「はい、お任せください。礼金は終わりしだい要求しますので、ご用意お願いします。では来週、ラ・ヴァリエールのお屋敷にて。

「カーリヌ様、いい取引をありがとうございました」

しばらくしてカーリヌは帰っていった。

はあ……しんどかった……やっぱり烈風はヤバいわ……だけど、まだまだイケるな、カーリヌ様。一回お願いしたいわ

「きれいだったもんね？」

「だなあ、さすがはルイズの母上だわ。あっはっは……はっ!？」

『ハイン……お前、迂闊すぎるぜ』

「ハ〜イン！ちょっとこっち来なさい！」

「いてえ！いてえ！ ジェシカあ耳引つ張らないで！」

「うるさいエロエロ犬！」

「わん……だからサイトじゃねえし……いてえええ……」

こうして、烈風は去っていった。

次回予告

『あの母親からこんな娘！？ ふたつの山脈そびえるカトレアの謎
！次も見てくださいよな！』

？
まず走りだせ！問題は走りながら解決しろ！と島耕作が言っていた。……

なんというか人称がぐちゃぐちゃです。だが気にしたら負けです。

やっぱり三人称が書きやすいなあ…次回からそうしよう

? ルパンは大変なモノを盗んでいきました。……あなたの財布です。

男は赤面しつつ、万世橋から見える汚い水面を眺め、そして黄昏ていた。

男の名前はハインリヒ。今はハルケギニアの住人であり、人々を闇から守る魔戒騎士であった。

ハインは月に一度の偽世界扉解禁日な今日、昔住んでいた街である東京に来ていたのである。

こちらでのお金は無かったのだが、錬金で作った宝石や貴金属を、上野の間屋に持ち込み換金して手に入れていた。

土、火、風の3系統がトライアングルの器用貧乏メイジであるハインだが、夜な夜なのホラー狩りの効果なのだろうか、先ごろめでたくスクウェアに昇格したのである。

ただし、土であるが…

「くそっ…偏在使いたかったのに土で……」

と、ハイン本人も嘆いているのだ。

『おい、メタなやり取りはやめろ』

と、最近影が薄いザルバも嘆いているのだ。

「『黙れ!』」

はいはい…閑話休題

ハインは河童橋でジェシカに頼まれた調理器具を買い、神田でたくさんのお土産を買って、そしてお気に入りのカレー屋、ボンデイで愛するミックスカレーを堪能したのだ。

お土産にしっかりとふかしジャガイモを持ち帰るのも忘れてはいなかった。

LOVE カレー

LOVE ボンデイ

ご機嫌なハインは、タクシーを借り切り、代官山まで向かった。

行き先はBABY、THE STARS SHINE BRIGHT
Tである。

そこでジェシカへのお土産の為に、山ほどのゴシックローリータ服を買い込んだ。

ハインがニヤニヤとしているのが気持ち悪い。どうやら炉の人も行けるらしい。

満足したハインは、最後に秋葉原に戻った。

どうしてもハルケギニアに持ち帰りたいものがあるのである。簡易式の風力発電を作ってみたかったのだ。

ハルケギニアには魔法が文化として根付いてから、六千年過ぎていた。

ハインには詳しくは分からないが、普通に考えてもおかしな部分がある。

いくら魔法が便利とはいえ、まともな産業革命らしいものもなかったようだ。

銃の有用性の低さを考えても、単発式の銃しかないのだろう。

こういう違和感は、きっとブリミル教の弊害なのだろう。

ブリミルがもたらした魔法こそ正義：それ以外は異端という原理的な思想。

それはきっと、文化の流れの循環を止めてしまったのだろう。

ハインは思う。

別に貴族が悪いとまでは思わない。

平民が虐げられ…何ていうのも一部ではないかと感じる。

というのは、どこの世界も保守層は腐敗するのだ。

ハルケギニアにおいても、腐った貴族はいるだろう。だが、領地を真剣に経営している貴族だって同様にいる。

ならば、とハインは考える。さりげなく便利なものや、美味しいものでも平民レベルに浸透させてやればいいと。

圧倒的多数は平民なのだから。

そこに需要と旨みがあれば、商人は必ず食い付く。

商人から多額の税が入るなら、領主や国王は嫌でも受け入れる。

ただ、それだけの話でしかない。

ハルケギニアには風石なるエネルギー資源がある。

その風石は、いずれハルケギニアの地下から浮かび上がるといふ災害を起こすなんて眉唾物の話もあったはずだ。

ハインはそれを上手いこと利用したいと考えているのだ。

とはいえ、ハインにそんな工業知識なんかありはしない。

だから取り敢えず、小さな風力発電機等を持ち込んでみたいと考えたのだ。

「とか、柄にもなく考えていたら……財布無くしちゃいました……」

そして今、万世橋で黄昏ていたという訳なのだ。

『ハイン』

「なんだいザルバ」

『ハルケギニアに帰ろうぜ。…な?』

「お前は優しいな、ザルバよ」

『よせやい』

阿呆丸出しの主従であった。仲良き事は美しき哉。

ちなみに、ハインの後方から、それ系の方々からバシバシと写メの撮影大会となっている。

今のハインは、ハルケギニア転生時に着せられていた服を着ていた。黒のレザーの上下に、ごてごてとオブジェが装飾された白いレザーのロングコート

ましてやハインの今の見た目たるや、ゲルマン系外国人だ。

そして今の場所は秋葉原

それ系の方々には『イケメン外国人が、牙狼の冴島鋼牙のコスプレをして立っている』としか見えないのだから。

財布を無くし、あまつさえ香ばしい方々からの視線と、容赦の無いシャッター音だ。

憂鬱レベルはMAXである。

彼はこう叫びたかった。

「不幸だ〜！〜！」と

ところかわってハルケギニア。トリスタニアはブルドンネ街のハインの自宅である。

ガチャ…

「うーい、ただいま〜ジエシカ〜」

ぐったりした様子のハインが、何もない壁を開けて帰ってきた。

「あらハインお帰り〜相変わらずでたらめな力ねえ。わあ〜荷物いっぱいだあ」

「ほら、頼まれていた調理器具と、各種食材だ。あ、こっちの荷物は俺のだから倉庫行きな」

「わああありがとう！大好きだよ、ハイン」

ハインに飛び付き頬にキスをするジエシカ。

「むふふふ……………」

「なっ…：なななによ？」

妖しげな笑いを浮かべるハインに若干引き気味のジエシカ。

（だめだこのハイン…：完全によからぬ企みをしている顔だあ…：）

「ふふふ…：我が姫よ？ 私は素晴らしいお土産を持ち帰ったぞお！」

「あつ！いつけな〜い！洗い物の途中だったわ！さあ仕事仕事……」
目を最盛期のイアン・ソープの如く泳がせたジェシカは、逃げるように階段に向かって歩きだした。

グイッ ハイソがジェシカの肩をガツチリとホールドした。

「まだだ！まだ終わらんよ！」

「ヒィィ…なっなんでしよう？」

「……脱げ」

「ほっほらまだ明るい…し？なっ？夜にしよう？」

「脱げ〜〜！」

ぽぽい ぽいぽい！

ジェシカの服が舞い、悩ましいレースのランジェリーが飛びかった。

「いや〜ん…あ〜〜れ〜〜お殿様、おやめになつて？」

「ういやツめ…よいではないか！ヒヤツハ〜！」

ハイソさまご乱心である。

「うっ……うっ……汚されちゃった……」

「何を言っか！姿見を見てるがいい。こいつを見てやんと思っ……」

「す……凄く可愛いです……」

「ふふん…そうだろうそうだろう！」

そこに写っていたのは、白い苺柄のフリフリのワンピース、ペチコートでふんわりしている。

白いハイソックスに黒いシューズ、頭には巨大なりボンが乗っており、肩からは可愛らしいポシエットが下げている。

そこにいたのは、甘い甘〜いロリータファッションに身を包み、頬をほんのり染め、羞恥に目を白黒させてるジェシカだった。

「なにこの可愛い生き物は……」

「はう……」

はあはあ言いながらジェシカににじり寄るハイン。気色悪い事この上ない。

「ジェシカ！君に決めたああああ！！！！！」

「えっ？えっ？きいああああああ……」

興奮したハインに小脇に抱えられ、そのままベッドルームに拉致されたジェシカだった。

夕方

「うづう……酷いよハイン……壊れちゃうよ……」

「カツとなってやってしまった。今は反省している。だがな、ジエシカ？実はこういうのもあるんだ」

「ごそごそと紙袋から何やら取り出すハイン。」

「く〜ろ〜ロ〜リ〜！」

真っ黒な辛めなゴシックアンドロリータがそこにあった。

「着てくれ」

「えっえっと……」

「キロ」

ぽい ぽいぽい！

「いやーんまた〜！」

あつという間にひんむかれ、今度は黒ロリにクラスチェンジさせられたジエシカだった。

「なにこの可愛い生き物は……はあはあ……ジエシカ！君に決めたああああー！！！！！！」

「えっ？まさか……いやああああ！本当に壊れちゃうづう……」

……」

結局この日はハインにベッドで次の日まで監禁されたジェシカであった。

哀れジェシカ

頑張れジェシカ

みんなはジェシカを応援しているぞ！

『なんもいえねえ……』

その日から、ハインと外出時にはロリータファッションを義務付けられたジェシカが、トリスタニアのあちこちで目撃された。

その後、トリステイン王国では空前のゴシックアンドロリータブームが訪れたという。

そして、ある闇夜の事である。ハインの事務所に某鳥の骨の人が現れ、頭がお花畑な王族の為にゴスロリを用意してほしいと懇願したらしい。

信じるか信じないかはアナタ次第です。

次回予告

『ブルドンネ街で夜な夜な繰り広げられる怪しい儀式！ そこには異界からの不可思議な香りが溢れていた！次回 - ZERO - の無責任男、絶対に見てくれよな！』

？ ルパンは大変なモノを盗んでいきました。……あなたの財布です。（後書き

次回予告は特に次回の内容を指さない場合が多々あります。

小説だとザルバの影山ヒロノブ声が伝わらない悲しさよ。

まあノリですからノリ

だげどそろそろちゃんどプロット練らなきゃなあ

? そのうちなんて、当てにならないな。今がその時さ。…とスナフキンは仰

「くっくっくっ…余の可愛いミューズよ。それをここへ……」

ひとの悪い笑みを浮かべた男が、ミューズと呼ばれる女を促した。

「だからミューズってなにさ？ってかその口調やめなって…気持ち悪いというか怖いから…」

「えー！俺の最近のマイブーム、なりきり無能王じつこだよ？」

「だから無能王って誰さ…！」

「え〜〜ガリアの王様じゃん？」

『ハイン、わざわざ死亡フラグ立てるな…』

「ひゃっひゃっひゃっ…そだね、ヤンデレさんが何処かで聞いてるかもだしな。うおっ背中ぞんぞんしたわ…」

『本当に有り得そうで怖いな』

「うん…」

「ヤン…デレ？なになに？貴族の名前!？」

「『……………』」

今日もハイン一味は元気であった。

ところでハイン一味が何をしていたかと言うと、ハインが発案したヤキソバに続くハルケギニアNewグルメのカレー&ナンを試作していたのだ。

因みにナンを選択した理由は、ハルケギニアに美味しい米が無いからだ。

なので仕方なくナンという運びとなった。

ハインはジェシカに山ほどの玉ねぎを切らせ、そして飴色になるまでローストさせた。

同時に巨大な寸胴に、大量の赤ワインと牛肉の塊をぶちこみ、ことごと既に数時間煮込ませている。

その間、ハインはさぼっていた訳ではない。

約30種類に及ぶ、ハーブ・スパイスを調合していたのだ。

乳鉢でひたすらゴリゴリとである。その姿はまるで黒魔術を行うブードウ教のシャーマンのようだ。

ハインはそれが終わると、大量の小麦粉をフライパンで炒り始め、水分が飛び、さらさらになるまで炒り続けた。

「さあ、君たち…至高の時間がやってきた！よく見ているがいい！」

ハインの目に炎が燃えた。

ジエシカ は ひいている

ザルバ は ひいている

ジエシカ は にげだした

しかし まわりこまれた！

ザルバはパルプンテをとなえた！

「パルプンテ…パルプンテ…パルプンテ…」と あたりにこだました

「いいから見てれ…」

ハインは今までの材料を絶妙なタイミングで合わせた。

「ハイン、いい匂い…なんかすぐに食べないと我慢出来ない気がする

てきた… ああん、よだれがー！」

『くっ… ハイソよ… 今日ほど自分が無機物なのを口惜しく思った日はないぞ！』

「くくくっ… ザルバよ許せ。 さあジェシカよ！これがナンだ。ちぎって浸して食べてごらん！」

「ごめんザルバ… あたし、行くわ…」

ジェシカは恐る恐るナンをちぎり、ルーに浸した。

それをゆっくり口に運び、そして咀嚼する。

ひと噛み…

ふた噛み…

！！？

もぐもぐもぐもぐ…

もつきゅもつきゅ…

「ああああ… ……なんて官能的な食べ物なのかしら！ 一口食べたら訪れた舌への軽い刺激… …… だけど噛んでいく過程で鼻に息を抜いた瞬間、やってきたのは複雑で、それでいて情熱的な刺激の爆発！ 芸術は爆発だ！ ああ、何ということでしょう！ 複雑に絡まったスパイスが弾けるわ！ それはまさにビッグバンね！ あああ… カレーとは… …… カレーとは… …… 最早、宇宙！うちゅ〜〜〜！！

「……………」

「……………」

「こほん…取り乱しました……」

「ジェシカ……」

「なっ…なあに……」

「ようこそ！素晴らしい世界へ！」

ハインとジェシカは号泣しながら抱擁し、このハルケギニアに訪れた新しい世界を祝った。

『馬鹿ばっかだ……』

腐るザルバは置いとくが、ここに新しいムーブメントの種が蒔かれたのだ。

それはもう、ヤキソバの比ではない。

人々のあまりのカレー熱に、ロマリアの教皇は真剣に異端認定するか悩んだ程だ。

だが、目が出るのはもう少し後のお話。

さて、時間はしばしさかのぼる。

先日の烈風カリンの襲来から一週間たった朝である。

本日ハインは、カトレアの治療に、ラ・ヴァリエール領の公爵邸に向かっていた。

渋るジェシカをなだめすかし、なんとか一人での出発となった。

フライでふわふわ飛びながら、のんびりとラ・ヴァリエール領に向かっていたハインだったが、気を抜きすぎて実際に到着したのは夕方の方の事だった。

ハインは、公爵邸の無駄なでかさにどん引きしつつ、入口にいたフクロウにカーリー又ハインが来たと伝えて欲しいと告げた。

「しつつかし、アホほどデカイ家だなあ。こんな家で育つとルイズみたいな電波様が出来上がるのか？」

全く緊張感の無い男である。

しばらくすると重厚なドアが開き、そこには腕組みをした烈風が立っていた。

心なしか、こめかみに青筋が浮いているように見える。例えるなら、「待っていたぞケンシロウ」という拳王様のような。

「ずいぶん遅かったわね？ハイン。待ちくたびれたわ？」

(なにこれ…超こわひ…)

「すみません、持病の癩が……」

「はい？」

「何でも無いですカリン様……遅れてすみません」

「はあ、まあいいでしょう。では早速カトレアに会わせますが、くれぐれも、くれぐれも不埒な真似はしないように！何か粗相があれば、いつでも現役復帰しますからね？」

(ひい……)

「何を言いますかカリー又様、カリー又様の美貌を前にしてはカトレア様に不埒な真似など…起こる訳がありません！」

「ななな何を言うの！おばさんをからかってはいけません！美貌などと…美貌…びぼー……べっ別に嬉しくなんか無いのですからね！わわわたくしは公爵夫人ですから当たり前です！……でも、ありがとうハイン？」

やはり烈風カリンとは言え、あのルイズの母である。扱い方が一緒のようだ。

(デレるカリン様…やだ…たまんない…)

New ハインの熟女テイミングスキルがLevel7に上がった！

そんなこんなでハインはカトレアの居室に案内された。

カトレアの部屋には、小説と同様に様々な動物達がいた。

ベッドに上半身を起こして座るカトレアがいる。

「カトレア？ この前話した旅人の方がいらしてくれましたよ。彼がハインと言います。カトレア、ご挨拶なさい」

「はい、お母様。ハイン様、今日は来てくれてありがとうございます。わたくしがカトレアと申します。今日は楽しい話をたくさん聞かせて下さいね？」

カトレアは凄く綺麗だった。慈愛に満ちているという表現が一番しっくりくるだろう。

ハインは思わず見惚れてしまった。

そしてそんな彼女が、訳のわからない病気等と、そんな事はハインには許容できはしなかった。

「……………せんだろ……………」

「えっ？ハイン様？」

「ハイン？」

ハインは立ち上げり、声を荒げて叫んだ。

「……………あなたが病気なんて、そんなの許せないって言ったのです。あなたが、優しいあなたが幸せを享受出来ないなんて、俺は気に入らないんです！」

ハインは思った。このハルケギニアというある意味狂った世界で、例えばルイズやタバサ、ジョセフやウエールズ、ワルド…アニエスやコルベール…数えきれない程の心に闇を抱えた者たちがいる。

だが、ハインに言わせれば何が不幸なものか。

人はいずれ大切な人を亡くし、大切な物は壊れ、やがて死んでいく。

それは自然の摂理であり、当たり前前の事なのだ。

魔法が使えない。

泣くことができない。

くだらない。全くくだらない。

この世界の住人は、価値観を帰る努力が足りない。

日々生きる事に必死な平民のほうがよくばど一生懸命生きている。

そんな糞みたいになちつぽけな悩みで、個人的な我が儘で周りを巻き込んだ物語を美談にすり替えたのが「ゼロの使い魔」なのだ。

一種の暴論だが、ハインはそう思えてならない。

だが、カトレアやティファニア、ジヨゼットのような女性は違つと感ずる。

病気、種族、しきたり…本人の意志ではなく課せられた不幸・不自由さ。

そんなのはハインには許容できはしない。

心に秘めたある理由によつてである。

今はまだ、語られる時では無いのだが。

とにかく、そうして、ハインはいま、憤っている。

「カトレア様、実は俺、旅人では無いんです。俺はトリスタニアでしかない万屋を営んでいましたね？ 今日はある理由であなたに会いに来ました」

「はあ…そうですか」

カトレアはハインの真剣な眼差しに吸い込まれるような錯覚を起し、視線を外せずにいた。

カリンはハインの打ち合わせと違うやり取りに違和感を持ったが、ハインのカトレアの病に対しての怒りに、どこか嬉しさを覚えた。だからしばらくハインの好きにさせようと思った。

「カトレア様、俺はあなたの病を消しに来た。あなたを鳥かごから解放し放ちに来た。俺は必ず救える。カトレア様、俺を信じて貰えますか？」

ハインはカトレアの目を真正面から覗き込んだ。

「はい、わたくしは貴方を信じます。ハイン様、どうかわたくしを救って下さいませ」

カトレアは笑った。花のような笑顔で。

「カーリー又様、そのままここで見ていてください。俺は心のソコから彼女を救いたい。だけど、俺はある事情で、たくさん秘密を抱えています。彼女を治す方法はその一端です。やり方は地味ですが、効果は”この世界”では異端です。その様を、貴方にそばで見えてほしい。俺の嘘をつきたくない誠意の証として。そして出来ればあまり詮索しないでくれると嬉しいです……」

「娘が信じたのです。私も信じましょう。ハイン、私の大切な娘を救って下さい!!」

「お母様……グスッ」

ハインは革製のカバンから、一粒の丸薬を取り出した。そして、カトレアの背中に優しく手を添え、グラスの水を口に含ませた。

「さあ、カトレア様、この薬をおのみください」

こくりと喉を鳴らし、カトレアは薬を嚥下した。

「はっ……あああ……ぐうう……」

カトレアは余りの身体の発する熱に身悶えした。

カーリー又は慌て近寄ろうとするが、ハインに手を引かれて留まった。

「しばらく我慢を……カーリー又様……俺を信じて……」

「おかあ…さま…わ…たくしは…大丈夫…です……そこで見て…
下さ…い」

「ですが！……分かりました。 負けたらダメですよ、カトレア…」

カリーヌには齒がゆい時がすぎ、やがてカトレアの呼吸が落ち着いてた。

カリーヌは縋るような目でハインを見た。

「カトレア様、カリーヌ様、もう大丈夫です。完治しました。心配ならば、後程水メイジに診察させてください」

そういつてハインはゆっくりカトレアの耳元に唇を寄せ、一言こついった。

「カトレア様、あなたはこれから先は物語の主人公ですよ？」

カトレアは一瞬、目を見開き、そして安堵の笑顔を浮かべると、快い疲労に身を委ね、眠りに落ちた。

「ハイン……ありがとうございます！ ありがとうございます……本当にありがとうございます……」

烈風カリンは一人の女であり、そしてただの母親だった。

カリーヌはハインに抱き付き、そして子供のように泣いた。ただひたすら泣いたのだ。

バアン！！

「カトレア、今帰った……ぞ？おおお！！貴様、我妻と娘に何を
したあああ！！！下郎！そこになおれえええ！！！！！」

「え？」 カリーヌ

「え？」 カトレア

「え？」 ハイソ

「え？」 熊

「え？」 ねこ

「え？」 いぬ

「え？」 e t c …

ラ・ヴァリエール公爵、その人だった。

なんか色々台無しだった。

次回予告

「風が舞う。竜巻が嵐を呼ぶ。壮絶な暴風に泣き叫ぶ男。今まさに地獄の釜の蓋が開く。次回 - ZERO - の無責任男、月にかわってお仕置きよ？ 次回も必ず見てくれよな！！」

？ そのうちなんて、当てにならないな。今がその時ぞ。…とスナフキンは仰る。
ふと思う 前書きなんかいららないなと。

？ オレは「正しい」と思ったからやったんだ…後悔はない。こんな世界とは

あとがきで簡単なアンケートを実施します。

お手数ですが参加してほしいのです。

どうかよろしくお願いします。

では本編をご覧ください。

? オレは「正しい」と思ったからやったんだ…後悔はない。こんな世界とは

辺りは濃密な殺気に支配されている。

杖を構えた女が男を追い詰めんと、じりじりと摺り足で移動していた。

一步…また一步と、女が動くたびに男の顔から血の気が失せていく。

(俺が何をしたっていうんだ！善意しか無いっていうのに！)

そんな事はお構いなしに、女は男にプレッシャーをかけていく。

女の名前はカリーヌ・デジレ。かつて王宮のマントイコア隊を率いていた烈風カリンその人である。

男の名前は、トリステイン王国にその人ありと言われるラ・ヴァリエール公爵である。チャームポイントはモノクルである。スカウターではない。

「カリーヌ！！何故ワシがこんな目に！」

「何をおっしゃいますかアナタ。ハインはカトレアの命の恩人ですよ？ その恩人に対し攻撃をしかけるとは……許しません！」

「だってワシ、知らなかったもんよ。カトレアの部屋に入ったら、
カリー又は若い男に抱きついてるし、カトレアはぐったりしてるし
……」

現在ヴァリエール公爵邸の修練場で、烈風カリンVSヴァリエール
公爵というまさかの夫婦対決が行われていた。何故だかハインが端
っこで正座させられているのも不可解である。

何故この状況に陥ったかと言うと、一言で表すには中々厳しいもの
がある。

それでは時計の針をしばし戻してみよう。

……

……

……

……

……

……

「むちゅ……れるんっ……」

「はあ…ん…ハイン…もつとお…」

!!!?

ストロップ！ストロップ！戻し過ぎだから！毎朝のハインとジエシカの営みは流石に18禁だから！

もつと進めてって…

……

……

……

……

……

「きつさま〜！早くカリーヌから離れるお〜！ぬうううう！！！！
！！食らえ下郎！正義のウィンディ・アイシクルウウ！！！！」

現在の状況がわからず取り乱したヴァリエール公爵は、カリーヌを抱き締めるハインにいきなり魔法をブツ放した。

驚いた一同だが、カリーヌは流石に烈風だからだろうか？咄嗟の危機に反応した。

だが不幸にもハインに抱き締められていたため、杖を抜くことが出来ない。

公爵より放たれたトライアングルスペルであるウィンディ・アイシクルは、ハインに一直線に向かっている。

まあ、何という事でしょう？魔法の射線上にカリーン、カトレアがいます。

ハインもまた、危機に反応していたが、大変混乱もしていた。

（やべえ！二人が危ない！あれっ？魔法どれにする…ファイア・ウォール…却下、部屋燃える…ゴレム創るか？…却下、触媒がねえ…あうあう…カリン様いい匂い…黙れ小僧！誰？…どうする？どうする？…ええいままよ！）

刹那の高速思考で色々計算したが、ハインは結局めんどくさくなつた。

ハインはカリーンを優しくカトレアのベッドに突き飛ばし、ウィンディ・アイシクルに身体を盾にした。

そして牙狼剣を鞘から抜き放ち、頭上に円を描いた！

激しい発光とともにハインの身体は黄金の鎧に包まれた！

ガキーン！！

凄まじい破裂音が部屋中に響いた。

G R R R R R R R R R R R R R R R R U ……

魔戒騎士ここに降臨である……

魔界の超金属ソウルメタルで出来ている黄金の鎧の前には、魔法ごとき傷一つ付けることは出来なかった。

カトレアとカリーヌは、黄金騎士の大きな背中をただただ見とれていた。

ヴァリエール公爵はあまりにも現実離れた光景に、元軍人の誇りもぶっ飛び、ただ茫然自失となった。

ハインは、

（ああああ！！やっちゃったあ……ヤバい……背後からすげえ見られている……どう誤魔化す？……いや、無理や……ああ、色々詰んだ……ジエシカ……俺、帰れないかも……）

取り敢えずハインは鎧を解除した。

我に返ったカリーヌは、ジョセフの虚無魔法「加速」も真つ青の速さで、まだ放心している公爵の首根っ子をひっ掴んだ。

「ア・ナ・タ！思い違いだとして、客人に向かつて……あまつさえ私やカトレアもいる場所で魔法を撃つなんてどついう事かしら？」

カリーヌのこめかみには、十字の青筋が浮いていた。

よく見ると、公爵の足は浮いていた。レビテーション？否！！怒りに身を委ねたカリーヌの力は通常の何倍にもなるのである！

「かつ……カリーヌ……ワシはただ……お前達がこの若造が善からぬ事をしたのかと……」

「ハインが盾にならなければ私達も怪我……いえ、死んでたかかもしれ

ませんのよ？あなた？少しO・H A・N A・S H Iが必要なようね？
ちよつと修練場に行きましょう。いえ、行くのよ」

「カリーヌ！！ワシが悪かった！！まずは話をしよう！話せばわかる！話せば必ずわかる！」

「だから（肉体に）O・H A・N A・S H Iしましょうと言ってるじゃないですか？ さあ！さあ！」

公爵は悟った。ワシは地雷と言うには生易しいものを踏んでしまった、と。

カトレアに視線で援軍を頼んだが、あからさまに目を逸らされた。

あれっ、産まれてからの思い出がコマ送りに…ああ、これが俗に言う走馬灯ってやつであるか。ワシ…死ぬんかなあ……。

修羅場の雰囲気にも包まれたカトレアの部屋。ハインは「好機！」とばかりにカリーヌを刺激しない程の音量で呟き、そして脱出を図った。

「さあて…そろそろ帰らないと…報道スーシヨンに間に合わないや…では皆さんサヨウナラ…」

ガシッ！ガシッ！

「お待ちになって？ハイン？」

「貴様だけ逃がさないぞ？お前も当然道連れだ」

ハインの両肩はそれぞれ掴まれていた。公爵側は心なしか指が食い込んでいるようだ。

ギギギ…と機械音をたてながらカリー又達に向き直るハイン

「見逃しては…貰え…ませんよね？」

こくりと二人はいい笑顔で頷いた。

そして冒頭へと物語が進むのである。

ハインは修錬場の片隅に正座させられ、公爵はカリー又に肉体言語でお話っている訳だ。

その公爵も今、烈風カリンの現役時代を彷彿とさせるようなスクウエアスぺル、「カッタートルネード」をその身に受け、ぼろ雑巾の如く地面に叩きつけられた。

髪はボサボサ、自慢のモノクルにはヒビが入り、仕立てのいい服はビリビリ、まるでコントである。

「ワシ もう だめ」

公爵のライフは既に0であった。

「ふう、有意義なお話でした。そうは思いませんか？ハイン？」

(悪魔がいる…あれは悪魔に決まっている…)

ハインの身体が震えていたのは正座のせいではない。恐怖だ。

「さて、ハイン。貴方の秘密については詮索無用という約束をしていました…が、ただ、あの鎧については流石に詮索しない訳には参りません」

そういつてカリー又は、ハインの前に相對した。ただ、その目には怒りや不審は何ら浮かんではいない。

「あの鎧は、あなた固有のものなのでしょうね。…貴方がカトレアの治療の前にした説明。その中であなたは「この世界」と言いました。つまり、貴方の秘密の元はそこら辺にあるのでしょうか？」

カリー又は老いても聡明だった。ハインはその事に素直に尊敬した。

「貴方がどんなに秘密を守ろうと、何れ先ほどのような状況になって、そこに貴方の愛する人がいたならば、周りに人の目があるうと貴方は躊躇なく鎧を着るでしょう。その異端で、驚異的な貴方の存在は、守られた人間以外には恐怖を抱き、疎外するでしょうね。ロマリアに至っては想像するまでもなく、です」

ハインは黙るしか法が無かった。

「主人や私には、ヴァリエール家とその領民を守る義務があります。その鎧の存在が公になり、そしてそれがヴァリエール家に関わりがあると露呈すれば、あらゆる政変に我が家が巻き込まれるかもしれ

ません。それは分かって頂けますね？ハイン？」

頷いたハインは、カリーヌの目を曇りの無い眼で見返した。

「はい、カリーヌ様。理解しております。あなた方と俺は何ら関わりはありません。会ったことも無いです。面識が無いなら、なんの問題も起こりません」

「そうではありません」

「え？」

「貴方はどんな秘薬や高名なメイジにも治せなかったカトレアの病を治してくださいました。私はそれを心から感謝しています。そんな恩人の貴方を放り出す真似など、このカリーヌは絶対に致しません。この杖と烈風の名にかけて！ 私やヴァリエール家は今後、貴方を庇護する事をお約束します。それは、貴方への恩だけではなく、貴方の誠実さ、優しさを認めただからこそなのです。ですから私が貴方に求めるのは、お互いの誠意を交わすことなのです。ハイン、私を信用してくれませんか？私に貴方の秘密を託してくれますか？」

カリーヌのハインを見る眼差しは、慈愛に充ちていた。ハインは呆然としながら、一步…また一步、無意識にカリーヌに近寄り、そして頭カブを垂れた。

「……………ありがとうございます…！ごいます…カリーヌさま…俺の秘密、貴方に託します」

ハインはこの世界にひよんな事から転生した。

自称神様に相対した際には、たいした考えも決意も無いまま承諾した。

だが、実際にハルケギニアに降り立ち、そしてその住人として生活してみると、「ゼロの使い魔」という小説を俯瞰ふかんして見た時と違いが生まれてしまったのだ。

ジェシカを愛し、様々な生活の中でハルケギニアの人と関わった。

いつの間にかハインの周りの景色は、小説の登場人物から、一生懸命日々を生きる人間となった。

するとハインは強烈な孤独感に苛まれた。

自分が神様から与えられた異質な能力。それを人々の為に役に立てたとして、それを誰かと共有するためには、相手を散々と信用出来るまで観察しなければならぬのだ。

愛しいジェシカとて、カミングアウトするまで時間がかかったのだ。

好きになった人間、親しくなりたい人間、それらの人間に胸襟を開いて付き合うために、まずは疑ってかかるという矛盾した状態。

それが無くならない限り、ハインはハルケギニアに溶け込んだ気にはなれない気がしていたのである。

気が付くと意識を戻した公爵もカリーヌの横に立っていた。

彼もハインがカトレアの命の恩人であることを今は理解していた。

「公爵様、カリーヌ様、俺の話聞いてください……………」

ハインは話した。長い時間をかけて、ゆっくりと自分の生い立ち、転生、魔戒騎士の話全てを。

ただ、偽世界扉と魔法の能力は言わなかった。

偽世界扉は悪用すると、何でもかんでも持ち込もうとする輩が現れるかも知れないからだ。ジェシカなど近しい人を人質にされたら、ハインとて拒否は出来ないだろう。

魔法の能力の事は、魔法至上主義なハルケギニアにおいて、今後ヴァリエール家と関わるならば、ルイズの事も避けては通れはしないだろう。だからこそその判断である。

ハインの長い話が終わった。それぞれがハインの話を頭の中で咀嚼しているのか、誰しも無言である。

「ハイン、まずはカトレアの父親としてお前に礼を言う。本当にありがとう。…そしてお前の話を聞いた上で、ヴァリエール公爵家の当主として言う。カリーヌと同様に、ワシはお前を受け入れる。お前を友人としてワシは受け入れる。友人が困っていたら、助けるのはおかしな事では無いだろう?」

「あなた…」

「公爵様…」

「お父様………」

「のうわあ！！カトレア！いつの間にも！」

「ハイン様のお話の辺りからいましたのよ？」

それではほぼ全てである。

「こほん……ハイン、私としても、夫が貴方を受け入れた以上、私もそれに従うのみです。あなたはヴァリエール家の友人です。ですからこれからは、気持ちの我慢は何もいららないですよ」

「そうですよ？ハインさま」

カトレアはニコニコしながらハインの腕に自分の腕を絡めた。豊満な胸の感触にハインは思わずにやけたくなるのを必死に抑えた。

「あらあらまあまあ…カトレアったら」

「き…貴様…友人となったとは言え、カトレアはやらんぞ！絶対にやらないぞおおお！！！！！」

公爵の背中に阿修羅のような怒りのオーラが浮かび上がった！

「ハイン、貴様は許さん!!! 食らえ! 正義のウィンディ・アイシ
「カッタートルネード!」

「……うわらば」

哀れ公爵様…… 貴方の雄姿は忘れない。ハインは心で合掌した。

ハインはヴァリエール家の人達に心から感謝の念を抱いた。

そして今後はこの優しい人達を自分なりに護っていこうと決意した。

そんなこんなでカトレアを治療し、ヴァリエール家とも円満になっ
たハインだった。

「ああそうそう、ハイン? 久しぶりに烈風として暴れたせいか、高
ぶってしまったのよ。ハイン、黄金騎士になってくださいな。少し
遊びましょ?」

カリーヌいや、烈風カリンは満面の笑みでハインを見た。

「いやっ…いやあああああ………」

「あらあらまあまあ…お母様ったら」

「ふんっ…モゲロ」

ハインの災難は尽きない。

次回予告

『突如ハイン一味の元に訪れた桃色ボインの天然怪獣！そして巻き起こるロリータボインとの大怪獣バトル！ハインは果たして生き残れるのか！！次回-ZERO-の無責任男、ダイヤモンドは砕けない！がハインのハートはガラスだったの巻！次回も絶対に見逃すなよ！』

? オレは「正しい」と思ったからやったんだ…後悔はない。こんな世界とは

カリン大好きなんだよね、ボク。

あと、あんまフューチャーされない娘に惹かれる性癖なのよね。

ジエシカ然り、マチルダとかさ？アニエスも好きだけどね。

だからリアルな嫁も当然…やめた。殺気がする。

さあ娘のミルク作らなきゃ。

あ、ちょっとアンケートです。

このグダグダ物語ですが、今後アルビオン政変などのルイズ達の織り成す正史に関わるべきでしょうか？

128

? 積極的に関わるべき

? 間接的に関わるべき

? 関わる ダメ 絶対

感想にて宜しくお願いします。

では。

？ そろそろ自分を信じていい頃だ……。今の君はもう十分あの頃を越えているよ。

宮田 陽一、これがかつての俺の名前だった。

俺は昭和の日本に生まれ、貧乏な家庭に育ち、それなりに右容曲折ありながら生きてきたんだ。

『ふむふむ、それで？』

うむ、それで義務教育を終えた俺は高校に進学した。割といいレベルの学校だった。

そういえば、昨年度まで女子高だったのだが、少子化の影響か、俺が受験する年に共学になった。

おかげで男女比率2：8という素敵比率だったんだ。制服がデザイナーズのブレザーとプリーツスカートで可愛いなんてもんじゃなかった。

『ほうほう、そんなに可愛いのか？』

うむ、膝上何センチかな？とにかく生足がたまんねえんだな。

『そんなに女が多いなら、さぞやモテたんだろな？』

まあな？だが、俺は教育実習の大学生と上手いこといつてな？めでたく男になったわけよ？

「それはさぞや嬉しかったでしょうねえ？」

もちろんさ！それもうポイントでな……………

「ボインで？なあに？」

「げえ！？ジエシカ！？」

「ムカムカムカムカ…」

「違っ…っーか死ぬ前の話じゃん…」

『カッカッカッさまあ無いな？ハイン』

「と…うかなんの話してんの？」

「いやあ、死んで転生したから、なんか特別な理由があるのか？ってザルバが言うからさ？まあしゃあない、いっちょ語りますか！とハインのモノローグってやつさ。」

「ふーん？ で？結局なんかあったわけ？こっう、ドラマチックなお涙頂戴話とかさ？」

「ないっ！」

「『ええええええ！？』」

「いやあ…そら人生が楽しくないなあ〜とか、こんな単調な人生じゃ生きてる意味なくね？みたいな適度な葛藤はあったがねえ？」

「じゃあなんで死んだの〜？」

「いやあ…仕事終わってビール飲んで寝たら死んでた？」

「『……………うわあつまんね〜』」

「おい！俺の人生だぞ？もつとなんか…ないの？」

「けっ…ザルバ、あたし仕事するわ……………」

『頑張んな、お嬢ちゃん。俺は寝るわ』

俺の…………俺の人生って…………

こうしてハイン一味の午前中は無駄に過ぎていくのだった。

相変わらずジェシカの焼きそば屋は好調である。今や参加の屋台は50を越えた。

ハインの発案で、各屋台の経営者に各地の噂話をそれとなく集めさせていた。

多少の原作知識のあるハインではあるが、今は小説の中の話では無いのだ。

ジェシカの店の客層の多くは平民である。だが、その平民は貴族に仕えている人間も多い。各王都ならば、王城に勤める者もいる。

つまり、平民の噂話を馬鹿には出来ないのだ。仕える貴族達に対する不平不満、ストレス。守秘義務や倫理はあっても、実は皆、愚痴を言いたいものなのだ。

人が愚痴を言うときに、感情の吐露をしつつ、貴重な情報の断片が混じっている事もあるのである。

そして今、ハインの警戒するもの…そう、レコンキスタ・ガリア王・ロマリアだ。

ハインはハルケギニア生きていて、何かあれば傷付けのは自分であり、自分の関わる人間なのだ。

それはハインには絶対に許容なんか出来ない事だ。

知らない誰かが死のうがハインにはどうでもいいのだ。驚異的な力があっても、関係の無い人間を救うなんて出来ないものだ。

命をかける動機、それが世界平和や皆の幸せであるなんて成立しないのだ。

例えばマラソンという競技スポーツがある。

42・195?という果てしない距離を走りぬかなければならない。

だが、闇雲に走っていれば、必ず破綻し、完走はままならない。

だからランナーは短い目標を立てるのだ。この区間をこのタイムで走ろう。

よし、走れた。

次の区画はこのタイムだ。

よし、走れた。

これらの積み重ねを繰り返し、結果、ゴールテープを切ることが出来るのだ。

正義の定義にも色々あるであろう。

ハインに英雄願望は皆無だ。だが、見える場所にいる人間の幸せは、絶対に犯させない。それだけである。

それがハインの正義の定義なのだ。

「ハイン、報告書をまとめたわ。目を通しておいてね？」

「ああ、ありがとうジエシカ。報告書にピックアップした情報を上げた経営者には礼金を渡してくれよ」

「ええ、各自に5エキユーを渡してあるわ」

「それでいい。んじゃちょっと部屋に籠もって読んでるから、重要な客以外は取り次がないでな。ヴァリエールは繋いでくれ」

「はあい」

ハインは自分のオフィスの重厚な机に足を乗せて、大振りな革の椅子に深々と身を預けた。

「まったく、憂鬱になってくるな。しつかりときな臭い情報が上がってきてやがる。かゝつ…めんどくせえ…いつそジョセフの執務室に乗り込んで、シエフィールドもろともブチ殺すかあ？…ダメだダメだ…殺伐としたらダメだ。そうだ！ジョセフに花でも贈るか！？カトレアの花で、花言葉は「品格と美」ですよ？ジョセフさんも品格を……死亡フラグ確定だな。はあゝカトレアゝカトレアゝつてか？」

「はあい」

「ん？だからカトレア「はあい」「…え」？」

そこには何故かヴァリエールさん家のカトレアさんが立っていた。

「あれ？なんでカトレアさんがいるの？」

「えっと、会いに来ちゃった…みたいな…迷惑でしたか？」

カトレアはシンプルだが、清楚な白いワンピースに身を包み、その豊満なバストの上で両手を組み、小首を傾げてハインを見ている。

「……………ブツブツ…だろ…に考えて…ブツブツ…ハアハア…首を傾げるな…ブツブツ…惚れ…まうやる…ハアハア…これは…もう…襲って…襲うしか…襲うための…ハアハア…いつたらんかゝゝい！…！」

何やら激しく興奮したハインが、久しぶりのルパンダイブでカトレアに襲い掛かった！

ハインが放物線を描き、その頂点から下降に移ったその時！

ゴイ~~~~ン！！

ハインの顔に、巨大なハンマーが突き刺さった！ハンマーには100tと書いてある！！

「ナニヲ シテイルノ？ ハインクン？」

毘沙門天のオーラを背に纏ったジェシカがそこにいた

「あのおジェシカさん？大丈夫でしょうか？ハイン様は……」

「大丈夫ですよ、カトレア様。こいつはゴキブリ並の生命力ですから！ほら、こうやって蹴ってもピンピンしてますよ？」

ゲシツゲシツ！と横たわるハインを踏みつけるジェシカ。

「……うん……ジェシカ……今日は黒か……やるな……」

「ていー！！」

グボオ……

ジェシカの止めのカカト落としがハインの意識を完全に刈り取った。

「ところでカトレア様、今日はいったいどんなご用件ですか？」

「はい、家出して来ましたのよ？」

「「何ですと〜!?!」」

ハインは既に復活を終えたが、カトレアの爆弾発言に度肝を抜かれた。

「わたくし、ハイン様に一目惚れしましたの。それを父に話したら大変お怒りになられました…母にもお説教されましたのよ？ わたくしはせっかく健康になったものですから、是非ともハイン様に貰って頂きたいと両親に言いましたわ？ そうしましたら烈火の如く母が暴れまして…わたくしもだんだん腹がたつて来まして。ですから思い切つて家出してきましたのよ ハイン様？白眼剥いてどうしました？ ふふふ 面白いお顔ですこと」

ハインは思った。とんだ爆弾抱えてしまったと。

事実、死亡フラグなんて生易しいものでは無いだろう。娘溺愛。パパと、人間核兵器が三途の川で舌なめずりしてハインを見ているのだ。

なんか色々終わった…

ハインのハルケギニアでの短い人生が終わりを迎えるのか？いや、必ず迎えるだろう。

ジェシカなどはあまりの衝撃に金魚みたいに口をパクパクしている。

「ははは…嫌だなあカトレアさん？ 冗談いつちゃ困りますよ？ はは、ははは、ははは…はあ………」

「冗談じゃないですよ 荷物だって…」

チリンチリン

「あ、呼び鈴がなってる。は〜い！どちら様ですか〜？」

『御免くださいませ。こちらハインリヒ様のお宅ですか？荷物を運んでできました。では失礼して運び込みますね？』

「えっ？えっ？え〜〜〜！？」

「あらあ早かったですね 皆さんよろしくお願ひします」

右から左へ

下から上へ

荷物が運び込まれていく

ハインはそれをただただ見ていた。

一つ荷物が運ばれて行きたびに、ハインのライフが消えていくよう
だ。

気が付いたらすっかり荷物は片付いていた。

ホクホク顔のカトレアが応接に座っている。

げんなり顔のハイン一味がその向かい側に座っている。

「あの…カトレアさん？気持ちは大変嬉しいのですが…俺はジェシ
カともう夫婦みたいなもので…なっなあ？ジェシカ」

「うっ…うん…そうね？」

気まずい二人が口を開く

「ええ 大変お似合いだと思いますわ？」

「あるえ〜？でしたらお分かり頂けるかな〜と…（ジェシカ、助け
てくれ）」

「そうですよカトレア様？貴女ほどの女性がハインとじゃ釣り合い
ませんわ？たっ多分…（うわーん無理〜）」

「それは気にしないでくださいな 別に妻は一人じゃないといけない訳でも無いですし。後はハインさんが周りを納得させればすむ話ですね。頑張ってくださいね？旦那様 ジェシカさん、仲良く旦那様を支えて行きましょうね」

一同絶句である。

「は…はあ…頑張れましょう…カトレア様…（ハインごめん、あたし無理…）」

「はあい」

ジェシカ陥落である。

「ちよつ…カトレアさん！（てめえジェシカ！裏切つたな！諦めんなよ！もっと熱くなれよ！）」

ジェシカはカトレアの背後に立っていた。 もはや従者の態度である。

だが、彼女は悪くはない。相手が悪いのだ。 水は高さから低きへ流れる。

天然娘でしかも権力持ちが相手なのだ。誰がジェシカを責められよう！

ジェシカはカトレアの背後より、ハインに向かって海軍式手旗信号を送る。

「キュウエンムリ オマエモアキラメロ」

ハインは覚悟した。天然に理屈は通じない。ならば、死亡フラグが発動するまではあのボインを食らってやる。

ジェシカのボインとあわせて両成敗だ。

笑うなら笑いやがれ。

ばっちこいヴァリエール

ハイン陥落である。

どこかで烈風と公爵の高笑いが聞こえた気がしたハインであった。微かに「首を洗って待ってる」とも。

「あゝ　ハイン様、星が綺麗ですよ？こちらへいらっしやって？
ジェシカさんもはやく」

「あゝほんとだ！綺麗ですね、カトレアさま　ハインもはやくう
（空気読めやハイン）」

言うだけ言って暇になったのか、カトレアはテラスに行き、空を見上げていた。さらに負け犬ジェシカも追隨している。

死体のような我が身を引き摺り、ハインはテラスに向かった。

「あら？あの星座はなにかしら？ハイン様わかりますか？」

「ああ…北斗七星ですよ…あっ……………死兆星が見える……………」

NEW ハイン一味に仲間が増えました。

NEW ハインに死亡フラグが二本立ちました。

次回予告

『ハルケギニアの闇に潜む不穏な気配、その名はレコンキスタ！暗躍する不埒な人間が入り混じり、人々の平和に影を落とす！だが、正義の味方、ハインリヒに恐怖の刺客が忍び寄る！そしてハインリヒにはモノクルの紳士が刃を突き付けるッ！次回・ZEROの無責任男は「やいハイン！俺の名前を言ってみろ！by娘溺愛パパ」と「月に隠れてO H A N A S H Iよ byれっぷう」の豪華二本立てだ！！次も絶対に見てくれよな！』

？ そろそろ自分を信じていい頃だ…。今の君はもう十分あの頃を越えているよ。
アンケートの結果を踏まえ、今後はさりげなく介入路線で参ります。

参加者の皆様、大変ありがとうございました。

? 0 人生はワン・ツー・デカルチャー ってランカさんが言っていた。……と

アンケートありがとうございます。

ルイズ達とはほぼ関わらず、サブヒロイン途中下車の旅をしつつ、
風皇太子をどうにかする。

大まかにはそういうスタンスで行きます。

? 0 人生はワン・ツー・デカルチャー ってランカさんが言っていた。……と

「ふわあああ〜」

ハインはベッドで大あくびしながら、けだるそうに伸びを打った。

ふと、彼は両脇を見た。

そこには生まれたままの姿で眠るカトレアとジェシカがいる。

昨夜の情事のなごりが、女盛りの二人の白い肌に残されている。

桜の花びらのような彼の口付けの跡、所謂キスマークである。

シートが乱れている。それは行為の激しさを物語っていた。

カトレアは昨日までは男を知らずにいた。

しかしハインリヒにより、女の最初の痛みを刻み付けられた。そして、彼の上で人魚のように踊り、最初の絶頂を知った。

後は朝方までジェシカと入り乱れ、知らなかった自分の身体のコトをたくさん知ったのだ。

初めてでこんなに乱れて恥ずかしいと何度も口にするカトレアだが、交わる程に貪欲に、そして積極的になっていく自分が恐ろしく、だが甘美であった。

ハインは少し勝ち気なジェシカと、ふわりとしているが色気のあるカトレアを見比べて、対称的であるなと思い、少し笑った。

「何を考えておりますの？」

いつの間にか目醒めていたカトレアが、ハインを見上げていた。

「ん？いやあ、俺はきつと幸せなんだろうな？なんて考えていたんだ」

「ふふつ…おかしなハイン様。間違いなく幸せですわよ？ だって、こんな素敵な女の子が二人も貴方に惚れているのですから」

そういつて悪戯を仕掛けた少女のような表情でカトレアは言う。

「うん、間違いはないな！」

ハインは嬉しそうにカトレアを見た。

「……………」

「なっ何ですか？」

「いやあ…カトレアの裸体に、結っていないピンクブロンドが散らばっててさ？…胸が絶妙に隠れてて…ムラムラしました。だから、襲っちゃいます！」

「キヤーーー」

そうして爽やかな朝が、大人のキャツキヤウフフTimeの始まりを告げるのだった……

しかしこんなに騒がしい中、微動だにせず情眼を貪り続けるジェシカっていったい……

甘ったるい時間は過ぎ行き、やっと目覚めたジェシカを伴い、ハインは階下のオフィスへと降りた。

エクスタシーの余韻に浸るカトレアの身体を気遣い、ハインは午前中は寝てろと彼女をベッドに置いてきた。

少なくとも彼女は先頃までは重病人であったし、何より行為自体初めてだったのだから当然の処置と言えよう。

さて、ハイン一味の朝は、だいたい9時頃から始まる。

まず、朝食代わりに紅茶とクッキーを食べながら、二人の予定の確認を行う。

その後ジェシカは一階の厨房に向かい、新しいメニューの開発を行う。因みに現在は、カレーの商品化に専念している。

ハインが先日、神田で買い集めたレシピ本を翻訳したのも、厨房の書棚にたくさんならんでおり、いずれ日の目を見ることだろう。後は予告無しでやってくる、ジェシカ傘下の人間の対応にも忙しい。

彼女の一日は、かなり濃密な物になる。

因みに休日はダエグの曜日と虚無の曜日に設定されている。

これはハインが地球の週休二日制を持ち込んだものだが、ジェシカはいたくお気に入りだ。

何故なら、一日中ハインとベッドに居てもいいし、また、彼と手をつないでマルシェ（青空市場）を散歩しながらデートもできるからである。

閑話休題

変わってハインは、自分の机にすわり、お気に入りのフレーバーの葉巻を楽しみながら、その日訪れるクライアントの予備知識をチェックする。

貴族にも色々いる。言葉一つ間違うと、一気に機嫌を損ねたりする。そこでハインは、裏の情報筋に大枚はたいて領地持ち貴族の情報を集めた。

この日の彼の予定は、トリステイン王国の宰相である、マザリーニ枢機卿が来訪予定だ。

マザリーニはロマリアの次期教皇とまで噂された実力者であったが、選挙の為の帰国要請を拒否し王国に残った人物だ。

王の席が空位であるトリステインにおいて、事実上、政治のトップに君臨している関係で、王国を乗っ取るつもりだと噂され、貴族達からは忌み嫌われている。

だが実際は、資源も工業も他国から水を空けられ、脆弱な国力であるトリステイン王国を、なんとかやり繰りしてきたのは彼の功績であり、逆に言えば彼を排斥したとたん、国が傾くのは間違い無いだろう。

それでもマザリーニはトリステインを支え続け、苦勞と心勞を重ねた結果、体は痩せこけ、髪は白くなり、あちこち骨ばった体型になってしまった。

それを揶揄して「鳥の骨」などと言われている。

だが、ハインはそんなマザリーニに好感を抱いていた。

何故なら、ハインは元々ワーカーホリックな日本人だからだ。

給料以上の働きをしてこそそのサラリーマン。

どこかマザリーニにシンパシーを感じずにはいられないハインリヒであった。

そんなマザリーニの資料に目を通しながら、彼の用件はいったい何なんだろう?と思索している。

この時期、アルビオン貴族派はまだ、それらしい活動はしていない。レコンキスタ自体まだ動き出していないだろう。

ならいつたい何なのか？ハインにはまったく予想出来なかった。

「…そろそろマチルダに接触するか？ 上手く丸め込めば優秀な秘書が手に入るし一石二鳥だわな」

小さく呟き、そして目を閉じた。

チリンチリン

来客を告げる呼び鈴があった。思索を邪魔する来客に、舌打ちしながらハインはドアに向かう。

「まったく…マザリーニが来るには早いし、誰だよ…ガチャ…oh…マンマミーア……」

ドアを開けると、そこにはいい笑顔をしたヴァリエールさん家の公爵様とカリン様が立っていた。

「ハイン、突然の来訪をお許しください。ちょっとお話がありますのよ」

「ハイン、中にいれる。ハイかYESで答え給え」

ハインのオフィスの応接、上座には二匹のコブラ（公爵夫妻）がい

る。

下座には一匹の憐れなカエル（ハイン）がいる。

二匹のコブラは鎌首をもたげ、カエルを一飲みにと目を光らせている。

憐れなカエルは脂汗を滝のように流して、死刑執行を静かに待っている。

（ヤバイ…何か逃げ出す算段をしなきゃ…マジで命に関わる…ようし…これならどうだ）

…

…

…

…

…

「そ…そうだ！オーク鬼を倒す依頼があつたんだ！さあ行こう！いやあすいませんねえ公爵さま。では失礼します」

「ちょっと待て！まず座れ！」

「で、なぜだ？」

「さて?」

「何人のためか?」

「強いて申さば…意地とでも申しましょう」

「転生者の意地と申すか」

「人としての意地でござる!」

「その意地、あくまで立て通すつもりか」

「止むを得ませんな」

「立て通せると思うか!」

「手前にもわかりませぬ」ここに

「大儀であつた!」キリッ

……

……

……

……

…

(ムリムリムリ…前田慶次じゃあるまいし…)

と、モヤモヤと逃げ道を探っていたハインだが、状況がそれを許さなかった。

「ハイン、カトレアの治療、本当にありがとうございました」

「いえ、カリイ又様、俺は俺の出来る事をした迄です。礼など勿体ない次第であります」

「謙遜なさらなくても構いません。さて、そのカトレアですが、先日の事なのですが、家出をしましてね？いったいどうしたら良いのか思案してまして。ねえあなた？」

「うむ、まさかとは思うが、クソ蟲のような男に引っ掛ってやしないかと、親としてはヒヤヒヤしておつてなあ」

「ええ、ええ、全くですわ。まさか私の娘に手を出すクソ蟲などいる訳が無いのですが、万が一…いや億が一そんな不埒な輩がいたとしたら…殺すわ…」

「こらこらカリイ又？我らが友人の前で下品であろう？」

「あらいやだ、失礼しましたわ、ハイン。オホホホ……」

この茶番を前にハインは白眼を向いて意識を飛ばしていた。そう…

死刑執行は決まっているのだ。

これはそう…ライオンが、仕留めた獲物を食べる前になぶる行為なのである。

その証拠に、夫妻は獰猛な笑みを浮かべて、ハインを見ている。

ズリッ…ズリッ…

その時階段の上から、何やら布が擦れる音が聞こえてきた。

「おはようハイン　なんだか…まだ何か挟まっている感じがするわ？ふふっ…あら？お父様、お母様、入らしていたのですか？カトレアは帰りませんよ〜だ」

裸にシーツを巻いただけの悩ましい格好のカトレアが、ニコニコしながら降りてきたのだ。

ハインリヒ、有罪確定の瞬間である。

「ちょっ…ちがっ…これにはラクドリアン湖よりも深い訳が…いやっ…杖を抜かないで！？ヒイヒイ…ギャボグギツガハツ！？」

隣れハインリヒ、カッタートルネードとウィンディアイシクルをモ

口にくらい、ジャッキー映画も真つ青な位のキリモミ状態でぶっ飛び、床に頭から突き刺さった。

リアル犬神家の完成だ。

嵐が過ぎ、現在ハインリヒのオフィスは静寂に包まれていた。

床に土下座の体勢で微動だにしないハイン。

その前には不動明王のような形相のヴァリエール公爵と、サデイスティックな冷笑を浮かべた夫妻が仁王立ちしている。

カトレアはジェシカと遊んでくると、言い残し消えた。

「さて、ハイン。覚悟は出来てますね？」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す……」

ハインは平伏したまま動かない。いや動けない。

「貴方には責任を取ってもらいます」

「殺す殺す殺す殺す殺す」あなた五月蠅い。スリープクラウド！

公爵退場である。

「ハイン、貴方にはカトレアを嫁に取れる位の貴族になってもらいます。まずはシュバリエの位を授かってください。なに、方法はマザリーニ枢機卿に任せると良いでしょう。その後、領地を拝領出来る位の手柄を貴方には立てていただきます。よろしいですね？」

その瞬間ハインは悟った。マザリーニが訊ねてくる理由はこの件かと。

既に決定事項としてラ・ヴァリエールからマザリーニに依頼が行っており、マザリーニはマザリーニで、突然の大貴族の”お願い”を無下には出来ない。

そこで彼は、今かかえている面倒な陳情、その中でも特に難易度の高いものをハインリヒに押し付けてしまえばいいと判断した。

失敗したところで平民が一人傷付くか死ぬかするだ。万が一成功したとしても、アンリエッタを説得をすれば、シュバリエくらいどうにでもなるのだ。

そして、成功したらヴァリエール公爵に恩が売れるし、両サイドの事情を知るハインリヒを、マザリーニの信用できる部下が一人手に入るかもしれない。

そう考えたマザリーニ。つまりはどう転んでも彼に損は無いのだ。

こうしてマザリーニは、ヴァリエール公の”お願い”を二つ返事で受けた。

「ハインリヒ、別に私は主人ほど怒ってはいないのです。今までカトレアは人生の大半をベッドで過ごしてきました。ですから、いつの間にかカトレアを”か弱い娘”と決め付けていたのかも知れません…」

カリー又は自嘲の笑みを浮かべて、力ないため息をついた。

「カリン様……」

ハインは彼女に、大貴族としての嫌でも張らなければならぬ面子と、なりふり構わず娘を構っていた母親の情に板挟みになっている苦しみを見た。

「私はね、ハイン。嬉しいのですよ。籠の鳥だったカトレアは、自分の意志で外へ飛び出したのです。一度も反抗したことが無い女の子がです。過保護な私達からしたら少々複雑ではありましたが…ですが、親としては娘の成長はやはり嬉しいものです」

ハインを見るカリー又の眼差しは暖かだった。

「娘に女の悦びも教えてくれたのでしょね？」

「うぐっ…」

「ふふっ…何だか少々妬けますね。まあ親としては、カトレアの幸せを応援したいと思います。ですが、ハイン。聡明な貴方ですから、王国におけるラ・ヴァリエール家の立ち位置は理解していますね？」

「はい、王家の血の流れを引く公爵家であり、トリステイン王国貴

族の筆頭であります。そして、現在の王国貴族の多くは腐敗しており、司法を司る部門も然り。ヴァリエール家だからこそその権力の大きさから、王家に何かあれば上申し、諫める立場にあります。以上の理由により、ヴァリエール家は腐敗は勿論、スキャンダルには染まる事は許されません。王国がみだれます故」

「完璧です。ならばハイン。貴方に依頼します。貴方の手腕で、ヴァリエール家に負担を掛けず、見事我が娘カトレアを名実ともに奪って見せなさい。それを貴方の我が公爵家への誠意と致します。出来ますか？ハインリヒ」

「Yes, Your Majesty 見事カトレアを奪って見せましょう。黄金騎士の名に賭けて」

カリー又は満足そうにならずいた。

「貴方は私達の息子のようなものです。ふふっ…それはそれで楽しみな事です。息子なれば、それにふさわしい力量が必要です。貴方は黄金騎士としては、私をも凌駕するでしょう。ですが、メイジとしてはまだまだと言わざるを得ませんね……」

「えっ！？まさか…いやっ…それは嫌あ！！！」

「うふふ…遠慮は無用ですハイン。貴方は週に一度、トリスタニアの我が別宅に来なさい。私みずから貴方を王国一のメイジにしてみせましょう！ああ、なんて素晴らしい考えでしょう！ええ、必ずしてみせますわ！烈風の名に賭けて！」

ハインはソファアの上で灰になっていた。それはそれは真っ白に燃

え尽きていた…。

ハインは改めて学習した。ヴァリエール家の女性は、人の話は一切聞きはしないと。何とも今更ではあるのだが…。

その時むくりと公爵が息を吹き返した。

「やいハイン！ワシの可愛いカトレアとチヨメチヨメしやがって！
お前なんかカリンにケチヨンケチヨンにされてしまえばいいんだ
！ふはははは！バーカバーカ！ざまあみる『カッタートルネード！
』！」

ぽてっ…

何か色々と残念なヴァリエール公爵だった。

そしてカリーヌは公爵を肩に担ぎ上げ、満足そうに帰っていった。

次回予告

『最近、何故か血の小便がでるんだ…とは主人公ハインの弁。所詮三枚目ヒーローの役回りは不幸フラグなのだ！ ボイン二人もはべらしてふざけんな！リア充は氏ね、いや死ねと公爵様が月に吠えた！ 次回-ZERO-の無責任男は”こんな人生はもう嫌だ！助けてマザエモン”だ！ 次回も必ず読めよ！』

? 0 人生はワン・ツー・デカルチャー っ てランカさんが言っていた。……と

いやあ、どんどんヴァリエール公爵のダメ親父化が進むなあ…

もはやマダオクラスです。

今回もカリン無双でしたが、そろそろハインを暗躍させますかな。

まあ、不幸体質は変わりませんが。

ポインを愛する作者でした。

?? 魔法の能力の違いが、戦力の決定的差でないことをう教えてやるッ！（前

なんだろ…会話ばかりですいません

?? 魔法の能力の違いが、戦力の決定的差でないことをう教えてやるッ！

ほのぼのとした昼下がり、ハインはカトレアに膝枕してもらいながら、彼女の手ずからイチゴを食べていた。

今日の午前中は、彼にとっては最悪だったのだ。

カトレアの両親であるヴァリエール公爵夫妻が突如押し寄せ、とんでもない依頼…いや、命令を与えてさつていったのだ。

二人とも強烈な個性を持っており、特に妻のカーリーヌ・デジレは、若かりし頃は男装して、王国の部隊を率いてた程の実力者である。その実力たるや、もはや災害レベルである。

そんな二人に囲まれ、ネチネチと責められた結果、精神が擦り切れて、ぐったりとソファに沈んでいたのだ。

ジエシカは打ち合わせで外出してしまった。カトレアは昼時ではあるが、料理が出来ない。そこで、籠いっぱいのイチゴを持ってハインのオフィスにやってきた。

「ハイン様、わたくしの両親の相手、本当にお疲れ様でした。あと……ありがとうございます。ハイン様はわたくしに自由をくれました。でも、わたくしはここに居てもいいのでしょうか？ハイン様の負担になつてませんか？…押し掛けといて何ですが…」

消え入るような声で語るカトレア。

「カトレア？俺はスケベで適当で女にだらしない男だよ？俺はジエシカもカトレアも愛してるしな？でもさあ、惚れた女の為にはなんでもしてみたいんだ。まあ普段はボケボケしてるけどな」

「ハインさま…」

「俺は公爵様とカリン様に約束したんだ。公爵家に迷惑かけずにカトレアを奪うってね。というか、公爵様もカリン様も応援してくれてるんだぜ？素直な表現じゃないけどさ。なら、俺はそれに応えなきゃ男じゃないだろ？俺はあの二人が好きなんだ」

「ハインさま、わたくし、何て言っていていいか……嬉しくて…うつつ…ぐすつ…」

「そもそもさ、こんないい女、手放すかよ。ああ、この胸最高なんだよな」

カトレアはこの男に惚れて良かったと、心底思った。こうやって茶化して、いつも笑わせてくれる。この優しい男と生涯を共に歩みたい、強くそう決意を新たにしたい。

「はあ…癒されるわあこのおっぱい…モミモミ…」

「もう……………ばか」

「じゃあ、君の両親相手して疲れたから、膝枕してくれよな？」

「はい」

ハインはそうやってカトレアに膝枕されながら、したから胸をつついたり、イチゴを頬張るふりをしてカトレアの指をしゃぶったり、昼間とは思えないキャツキャウフフな空間を醸し出してた。

「いや〜んハインさま、くすぐったいですわ」

「あの……」

「キャキャキャ…良いではないか良いではないか」

「いやっ…あん…ダメ」

「ゴホン…」

だから気付かなかった。呼び鈴がなっていることに…

「ゴホン！よろしいかな？」

「ん？……うへえ！？マザリーニ枢機卿！いつのまにいらっしやったのですか!？」

ハインは飛び起き、カトレアは慌てて着衣を整える。

「まっ…マザリーニ様、失礼しました…あう…痛い…噛んだ」

慌てるカトレア…貴重である。

「ホッホッホ…気にしないで良い、カトレア様。しかし、ヴァリエール公から聞いてはいたが、本当に完治したようで驚きました。本

当におめでとうございます」

そんなやり取りを繰り返していたが、カトレアは羞恥に耐えられないのか、赤面しながら階段を登っていった。

「とんだ失礼お許し下さい、マザリーニ枢機卿。私が万屋のハインリヒです。以後、お見知りおきを」

「丁寧な挨拶痛み入る。私がマザリーニだ。今日はお互い実りある談合になることを願うよ」

「はっ。では此方へ」

二人は応接に移動し、そしてハインは部屋にサイレントをかけてみせた。

まずはハインが口火切る。

「マザリーニ猊下、今日はどんな無理難題を？」

ハインはニヤリと笑い、マザリーニを正面から見た。

「ふっ…噂通り喰えぬ奴だな。だが、私はそのストレートな物言い、嫌いではない。腹の探り合いは王宮で満足してるしな」

マザリーニは敢えて王宮貴族を揶揄して見せた。

「ははは、猊下の孤軍奮闘ぶり、失礼ながら感服しておりました。思うまま振る舞えぬ辛さ、私には耐えられません。心中お察し申し上げる次第です」

「そこまで見抜くか。ふむ、堅苦しいのはもうやめよ。芝居もいらん。普段通り話してくれ」

どうやらジャブの打ち合いは終了のようだ。

「ははっ…では遠慮無く。マザリーニ猊下、俺、貴族になってカトレアを貰わないと、烈風に殺されちまうんです。だから貴族になる最短ルートを教えちゃ貰えませんか？」

「ククツ：ハツハハハハハハ！ハインリヒ殿は面白いな。ここまであからさまな言葉、逆に胸がすく思いだよ」

「素直だけが取り柄ゆえ、ご容赦を」

「ふむ、私はここに来るまでは、そなたをあわよくば駒に出来れば重畳くらいに思っていた。だが、考えが変わった。私は城の外で自由に動け、且つ、信頼できる部下が欲しいのだ。無論、このトリスティンをムジナ共から護るためにな」

マザリーニに自由になる部下や、信頼出来る友はトリスティンにはいない。

だが、己の信念に従い、身を削ってトリステインに尽くしてきた。己ひとりで何もかも乗り越えてきた。

だが昨今、ガリア、ゲルマニアに国力は上回られ、そしてトリステインには資源も産業も目ぼしいものは現在何もない。

このまま行けば、トリステインに待っているのはただ、滅びの道のみ。

マザリーニはこの状態を憂慮し、打開するには何か一手欲しいが、自分ひとりでは動けない。

そこで必要なのが、自分と思考を共有できる有能な部下、またはブレインなのである。

「まず本来ならば、そのような道は、無いと言える。何故なら、ハインリヒ殿も知っての通り、トリステイン貴族は保守的であり、成り上がる者を排斥する。伝統というお題目によってな」

「そうでありましょうなあ……。発展とは、少なからず痛みを伴うもの。その痛みが己に降り掛かるくらいなら、変化を拒むでしょうな」

「然り。それ故、トリステイン王国の宰相の立場としては、無いと言っしかありませんな」

「だが、猊下は変化を望んでいると推察します。そして、俺が思うに、変化を拒む者こそ、この国の膿と言えるでしょうな。変化を推進し、健全化を図る。その過程で膿も出せる……。俺は出来ると思っ

ます」

「ふむ、言い切るか？ さればハインリヒ殿にひとつ問いたい。貴族について否定的な考えをお持ちか？」

マザリーニは鋭い眼光で、ハインリヒを貫く。

「わかりませんね」

「む？」

「俺は完璧な政治なんて無いと思ってます。俺の祖国は民主主義と
言いまして、貴族も平民もなく、ただ、一人の人間を尊重します。
そして、政治は議会内閣制を敷いています。選挙により選ばれた代
議士が、国の行く末を決めるのです」

「それはそれで理にかなっているな」

「そうですね。各自が責任を持ち、努力すれば、富と名声は手に入
ります。だが、その反面弊害もあります。富は偏り、貧富の差は激
しい。何故なら、世の中に流通している通貨の絶対量は変わらず、
皆で取り合う訳ですから、誰かが多く取れば、必然的に食いつばぐ
れる人間も多数生まれます」

「そうであらうな」

「世の中の事は多数決で決まります。例えばそれが、80対20で
あれば、ある程度世の中の総意と言えますが、51対49ならば、

制度上は過半数ですが、結果は約半数が不満を持つでしょう」

「ふむ、なるほどな」

「では、質問の答えですが、貴族制度も使い様だと思います。諸侯が健全な領地経営をし、税制が国土全てで統一し、徴兵義務も一定のルールの上で統一する。産業は土地柄で特色が出ますから、それを生かし、王家も積極的に支援する。後は土地を持たない無駄な貴族は極力へらし、役職として、実務に有能な人材を登用する。……まあ今咄嗟に考えた事なので、不備は多々ありましようが、これに近いものが実現できれば、君主制も王制も問題ないでしょう。……ようはどんな制度も一長一短、中にいる人間が馬鹿なら必ず腐敗するものです」

「うむ、やはりそなたは聡明だな。感服しましたぞ。では、私から少し独り言を言いわせて貰う。現在、ある場所で、少しやつかない幻獣が暴れている。その駆除に諸侯は及び腰でな。王宮の部隊を動員したが、被害甚大で撤退した。もし、それらを誰かが退治したなら、きつとアンリエッタ姫はシュバリエを授けるだろうな。すると私はそんな切れ者をほってはおかないだろう。私はその者を王領であるド・オルニエールの摂政に推薦し、経営をまかせる。そして、その者が成果を上げれば、その功績を称え、貴族になれるだろう……まあ、独り言だがな」

ハインリヒは無言でマザリーニに手を差し出し、マザリーニは黙って握り返した。グリップは強かった。

そしてマザリーニは、幻獣討伐の資料を机に置いて、静かに帰っていった。

「しかしまあ、前途多難だなあ…まあ、頑張りますか！」

ハインリヒは充実していた。転生して、ハルケギニアに根を下ろしたものの、今までは成り行きでいきてきた。

だが今、明確な目的が生まれたのだ。

トリステインに忠誠を誓うつもりはない。だが、マザリーニの為に本気で働くのも悪くないとハインは思った。

この二人だけの会談が、やがてトリステインを巻き込み、トリステインがハルケギニアを揺さ振る一大国家となる礎になったとは、まだ本人達にもわからない事だ。

そして、始祖ブリミルを凌駕する、黄金の英雄が生まれる事もまだ誰も知らない。

次回予告

「……ペツ。俺はザルバ。いつもノリノリで予告をやってるハインの相方だ。だが、最近俺の扱いが酷い。今回なんか、発言自体ココだけだぜ？ ハインには断固改善を要求する！ 次回の-ZER O-の無責任男は「何い！ハルケギニアの幻獣は化け物かッ！」必ず読んでくれよな！」

「……あたしのセリフも無いんですけど」

?? 魔法の能力の違いが、戦力の決定的差でないことをう教えてやるッ！（後

次回から、テンポのいいハインの暗躍がかけそうです。

今回はなんかごめんなさい

?? てめえらに、今日を生きる資格はねえ!!.....なんてシリアス感はござい

オリキャラ見参ッ!!!!!!

?? てめえらに、今日を生きる資格はねえ!!……なんてシリアス感はござい

『なあハイン、お前、戦闘の時になんで俺を使わないんだ?』

ん? いや、使ってるじゃん? 牙狼剣に炎を纏わせたりするっしょ?

『違う! 魔法飛んできた時に俺をかざせば吸い取れるんだぞ?』

おお〜! …… おお… いやなんかデルフリンガーのパクリみたいで…
ナンかなあ…

『てめえ…あの剣程度と一緒にすんなや。俺の方がすげえや』

マジで!?!? どどどどんな機能なんだ? …… あっ… いや… べつべ別に知りたくはない。でもザルバがどーしてもっていうなら… 聞いてもいい…

『なんか面倒くさいなハイン。まあいい、その機能とは……』

機能とは!?!?

『…… やっぱ言わねえ。お前ピンチになったらやるわ。少しは勿体ぶらないとな。ケツケツケ』

ちっ、いい性格してやがるぜ。

しかし、昨日のあいつ、傑作だったなザルバ?

『まったくだな。目を白黒させてたもんな。おっとそろそろ目的地だぜ？かなりヤバい気配が三つだ。油断するなよ？』

おつよ。一面倒くさいからとっとと終わらせるぜ。

ハインは現在、マザリーニの依頼のひとつを終わらせるために、ラグドリアン湖側の深い森に向かう道中にいるのだ。

場所を移してここはトリステイン魔法学院。

ルイズ・フランソワーズは不機嫌だった。

というのは、先日、実家から呼び出しがあり、久しぶりに帰郷することになったのだが、帰ってみると、大好きな姉のカトレアがいないと言うのだ。

そのことについて両親から話があり、王立アカデミーの研究者である、長女のエレオノールと共に聞くことになったのだ。

曰く、カトレアの病は完全に完治した。

曰く、カトレアの病を治した男に彼女は惚れた。

曰く、カトレアは家出して、その男の家へ押し掛け、そのまま居座った。

こんな話を聞かされたら、この誇り高きヴァリエール家の人間ならば、怒り狂うのが当然なはずだ。

実際にルイズ・フランソワーズは喚き散らし、男を許せないと叫び、たし、エレオノールは怒りの余り、ルイズ・フランソワーズの可愛らしい頬を、限界まで引っ張ったものだ。

何より、あのおっとりして物腰の柔らかいカトレアが、そんな駆け落ち紛いの行動をするとは信じられず、きっと相手の男が騙したのだろうと邪推したのも無理は無いかも知れない。

ルイズ・フランソワーズにとって一番信じられないのは、あの恐ろしい母親が、どうやらそのハインという男を認め、あまつさえ気に入っているらしいという事だ。

ルイズ・フランソワーズにとっての母親、カリーヌ・デジレの印象は、鋼のような強い信念を持ち、その価値観から外れた者を嫌悪するという、ある意味においては偏見に満ちた性格の筈だ。

その価値観とは、貴族の伝統を重んじ、そして相手が男ならば、それなりに戦闘能力が高くないといけないという物だ。

その偏見に満ちた母親が信じられない事に、「ふふっ…ハインは強いよ。きつと、そう遠くない将来、私達の家族になるでしょう」等と、はつきりと喜びを滲ませ言い切ったのだ。

ただし、となりに座る父親は苦虫を噛み潰した顔をしていたが、それでもカリーヌに同意する発言をしていた。

ルイズ・フランソワズにとってカトレアという姉は、ある意味カリーヌより母親のような愛情をくれた人である。

五歳の時に初めて杖との契約をし、メイジとして出発したルイズ・フランソワズだが、はつきりいって成功したためしがない。

ただの一度もだ。

それで頂いた嬉しくもない二つ名が「ゼロのルイズ」である。つまり、魔法の発動率が、またはメイジとしてゼロという極めて不名誉な物だ。

ただ、これから先に待っている壮大な物語を俯瞰した視線で見たら、ゼロとは、それまでのゼロとは違った意味を持つことになるのだが、それは今のルイズ・フランソワズには分からない事だ。

そんな落ちこぼれメイジのルイズを、一度も否定せず、いつも優しく抱き締めてくれたのがカトレアなのである。

高い自尊心と、心が張り裂けそうになるほどのコンプレックスの狭間で苦しんでいるルイズの唯一の味方…その愛するカトレアを自分

から奪った男。

ルイズ・フランソワーズは、見たことも無いカトレアの恋人に憎悪した。

長女のエレオノールは、ルイズ・フランソワーズに怒りを顕にしたまま、「トリスタニアに戻ったら、あの男のオフィスに怒鳴り込んでぶん殴る」と、宣言した。

ルイズ・フランソワーズにとって、ある意味母親以上の天敵であるエレオノールが、今は頼もしく見える。

魔法学院に戻って数日、ルイズ・フランソワーズは、進級試験を兼ねた、「春の使い魔召喚の儀式」に参加した。

これは、サモンサーヴァントの魔法で使い魔を召喚し、コントラクトサーヴァントで使い魔の契約をして完了とする。

通常、召喚に応じ、ゲートを潜ってくる使い魔は、その全ては動物か幻獣に限られる。

そう、通常は。

「メイジの力量を見るには、その使い魔を見よ」という言葉があるが、ようはメイジの属性、クラスに対応した使い魔がやってくるのである。

カエルのような小型の物から、果てはドラゴンのような大型のものまで様々であるが、とにかく動物か幻獣の範疇に収まるのだ。

だが、ルイズ・フランソワーズはサモンサーヴァントを百を越えるほど失敗したあげく、やっとの思いで成功したのだが、現れた使い魔はなんと平民の少年だったのだ。

見知らぬデザインの服を纏い、場違いな工芸品をいくつか持つている少年は、魔法の無い別世界から来たと言い、貴族に対して失礼な言葉を使い、しまいにはルイズ・フランソワーズに欲情し、寝込みを襲うという破廉恥なその所業、彼女は一気に憂鬱になった。

まあ、それでめげるルイズ・フランソワーズではない。その平民の少年、平賀 才人を犬と称し、きっちり調教した。

そんな矢先、憎きカトレアの恋人の家に怒鳴り込むと息まっていたエレオノールから手紙がきた。

矢も盾もなく、破くような勢いで手紙を開封し、貪るように読んだのだが、ルイズ・フランソワーズの表情はみるみる曇っていった。

親愛なる妹ルイズへ。

先日、ハインリヒ様の屋敷に乗り込んだわ！

愛すべきカトレアを奪ったハインリヒ様に、わたくしは問い詰めてやりました。

「ふむふむ…どうなったのかしら？しかし、ハインリヒ様…様あ？」

そうしましたら、彼は言いました。カトレアを愛し、そして幸せにするために立派な貴族になると。

「ということとは、ハインリヒとやらは平民！？ありえないわ！」

それより、ハインリヒ様ったら、「カトレアのお姉さんはやはり綺麗なんですわ。いやぁ本当に美人だ」なんておべっか使って…わっ私が美人だなんて…そんな…まったくけしからん！ですわ。

「あれ…お姉さま？……」

ハインリヒ様は、わたくしがアカデミーの연구원と聞くと、「ふむう…才色兼備とは貴方のような方を表す為の言葉ですわ」ですって？ まったく失礼しちゃうわ！……お世辞よね？でも目は真剣でしたし…ルイズはどう思うかしら？

「……………はあ〜……………」

ハインリヒ様と色々話してみましたら、彼は凄まじい知識の持ち主で、つつい話し込んでしまいました。わたくしの貴重な時間を三時間も潰すなんて、まったく失礼な殿方ね！

「お姉さま…完全に楽しんでないかしら……………」

あんまり遅くまで話したから、泊まっていけなんて言うから、仕方なく、仕方なくよ？泊まってあげたわ！

「えっ？」

とにかく、ハインリヒ様はカトレアをちゃんと愛しているみたいだし、しばらく様子を見ることにするわ！これも姉としての勤めよね！

あ、そうそう、アカデミーにも近いし、便利だから、ハインリヒ様の屋敷に住むことにしたから。

『……………』

べっ別に深い意味は無いんだからね？　たくさん部屋が余ってるし、

ハインリヒ様やカトレアやジェシカさんが是非になんてしつこいからなんだからね？そこを間違わないでよね？

じゃあ、ルイズ？休みでトリスタニアに来たなら、ブルドンネ街のうちに遊びに来なさい？一番大きな建物だからすぐわかるわ？

じゃあね、おちび

『……………ダメだこの姉…何とかしないと……………』

こうしてルイズ・フランソワーズのフラストレーションは高まり、眉間に皺が刻まれるのだった。

ブルドンネ街ハイン宅

現在、ハイン一味の家では、住人である二人の女性が、昼下がりの休憩を楽しんでいた。

「ジェシカ、この”カキイゴリー”という氷菓子は美味ですねえ

」

「はい、カトレア これはハインが作り出したデザート of 極みです。さあ次は”レンニユアズーキ”を食べましょう！」

「ああん、太っちゃうわ 美味しいのも困ります」

「そういえばジェシカ？ 姉の事宜しかつたのですか？ 私だけでも迷惑でしょうに…？」

「気にしないでカトレア？ 初めは癪だったけど、今は受け入れてるわ？ だって、ハインはアレだから…私一人じゃ体が持たないもの。それに、エレオノールさん可愛いんだもの」

「そうね お姉さまはああ見えてつぶだから。今朝なんてハイン様の顔見れなくて、顔なんか真っ赤でしたね。あんな可愛いお姉さまを初めて見ましたわ」

「それは…あんまり痛がるからって三人がかりであんなことやこんなことしましたからねえ。初めての時があんな体験って…警沢です
まあ、あと二・三人はどんとこいです」

「「どんとこい」」

…色々ダメな一味だった。

『ついたぞハイン！気配が近い。油断するな！』

現在ハインはラグドリアン湖付近の森にいた。

モンモランシ領の外れの森だが、三匹の巨大な竜が住み着いているという。

本来ならば領主であるモンモランシ伯が討伐すべき案件なのだが、現在モンモランシ家は、ラグドリアン湖の干拓事業に失敗し、さらには水の精霊との契約にも失敗した為、経済状況は非常に深刻である。

辛うじて領内を維持している状態で、討伐隊の編成をする余裕は全く無い。

そこでモンモランシ伯はマザリーニに泣き付き、水の精霊との契約をなんとか成功させるのを条件に、王宮に丸投げしたのだ。

森に住み着いた竜であるが、モンモランシ領のある村が襲われ、目撃された。

全長が約20メートルの巨大な成竜で、やたら知能が高いという。常

に三匹で行動し、信じられないが連携をとった行動を取るといふ。

炎のブレスを吐いた事から火竜と推察できるが、その身は赤みがかった黒だといふ。アカデミーの資料にも黒き竜等は記載されていないといふ。

ハインは油断なく暗闇の森を進む。

前方100メートル以内に、こちらを警戒する気配がある。微量ながら殺気を感じる。そもそも殺気を意図的に抑える竜とは、相当な知能が高いのだろう。

その時突然、三方向から火の玉というには巨大な塊がハインを襲った。

しかも微妙にタイミングがずらしてある。

「ちっ……」

ハインはギリギリまで引き付けると、ジャンプして回避した。

三方向からの攻撃の恐いところは、交差した攻撃が、左後方、後方、右後方と拡がる。

つまり、上にしか安全地帯は無いのである。

だが、人間は飛び上がる事は出来ても、空中で移動は出来ない。つまり…

『危ない！ハイン』

さらに巨大な火塊が空中のハインを襲う！

シュバババババ！！！！

ハインに火塊があたり弾ける！！

だが……

グルルルルル……

黄金騎士が無傷でそこに立っていた。

《貧弱な人間よ。我等の攻撃を受け止めるか。面白い…全力を持って灰塵としてくれよう》

《人間風情が…やるか兄者…》

《やろう！兄者！我等が最大の攻撃を……》

ズシン！ズシン！と大地を震わせて、三匹の黒き巨竜が姿を現した。

『ハイン！あの竜達にホラーの気配を感じるぜ！どうやら火竜にホラーが憑依したようだな。少々厄介だぜ、ハイン』

（うむ…ザルバ、烈火炎装はいけるか？）

『おう！いつでもいけるぜ？』

烈火炎装…ホラーを浄化出来るという魔界の炎である魔導火、それを剣から全身に纏う技である。

キーーーーーン……

高周波の振動音を響かせ、ハインはザルバの口に牙狼剣を滑らせる。

それと共に緑色の炎が身体を包んでいく。

烈火炎装の完成である。

半身になったハインが、腰を低く落とし、牙狼剣を突き構えで止まる。

(ザルバ、俺に考えがあるッ！一発で決めるぞ!!！)

『じゃあお手並み拝見と洒落こむぜ。おっと、来るようだな』

《ユン！ユラ！超暴気流攻撃をしかけるぞ！》

《おう、兄者！》

《準備OKだぜ？》

約100メートルを挟んで対峙する間の空間に、濃密な闘気が充滿する。

真ん中の竜がブレスを吐き、ハインの前方の地面が爆発する。

ハインは微動だにしない。

やがて煙が晴れると、目の前約20メートルに一匹の竜が迫っていた。

(おおおおおおおおおおお!!!!！)

気迫の叫びとともに、ハインは凄まじい勢いで走りだし、今まさにブレスを吐かんとする竜の鼻先に、光速の膝蹴りをたたき込む！

グリーンと竜は白目を剥き、意識を無くす。同時にホラーのオーラを浄化した。竜は深紅に戻って横たわった。

だがッ！！

《バカめ！油断したな人間よ！！》

《飛び散りな！！》

最初の竜のすぐ後方から二匹目の竜があらわれ、さらにその後方から、三匹目が上空に飛び上がったッ！

なんと、三段構えッ！！

上下段の必殺攻撃だッ！

ハインに二匹同時に渾身のプレス攻撃が襲いかかるッ！！

ハインは飛び上がり、二匹目の竜の頭を踏みつけ、さらに上空へッ！！！！！！

《おっ…俺を踏み台にしたあゝ！？》

ハインは三匹目の竜のさらに上空から、牙狼剣を捨てると、前方回転しながらのカカト落としを三匹目の頭に炸裂させたッ！！

《グオオオオ……グフツ》

さらに返す刃でハインは、後方回転しながら体勢を整え、キリモミ運動を加えたまま、両足で二匹目の竜を踏みつけた。

この間たった三秒

『ハイン！一呼吸で三匹の竜を仕留めるとは驚いたぜッ！！だが、その何でもないみたいなクールな表情！！そこに痺れるウ！憧れるウ！！！！』

(うるさいよザルバ…ああ疲れた…)

ハインは鎧を解除し、竜達を見た。まだ死んではいないようだ。

《人間よ、なぜ我等を殺さぬ》

《情けは無用だ。人間に情けを貰うなど、我らには恥辱ッ！》

《……………ペッ》

三匹の竜、今はホラーが浄化されたせい、10マイルほどになっている…が、威圧感に変わりはない。

「なあ、お前らホラーに憑依されてたんだわ。まあ元々好戦的みたいだかな。だが、言葉を話す様子だし、お前ら韻竜だろうが？ お前ら、アカデミーならホイホイ死体をいじくり回して色々実験するぜ？ 本来、韻竜は人里には降りないんだろう？ ならお前らを殺す理由ないじゃん」

《むう……………》

《ふむ……………》

《……………ペッ》

「つか、死にたいなら止めさすか？ かまわんよ、別に…痛いぜ？」

《しばし待て…兄弟と相談させる》

「どぞどぞ…なんかめんどくせえ竜だな…」

《《…ぼそぼそ…いや、…である…うん…したら問題ない…転がりこめば…よし、そうしよう…イケメ…交尾……むぶっ……………》》

(何やら不穏なワードが聞こえるぜ……)

何やらごそごそ相談していた三匹の竜だったが、どうやら話がまとまったらしい。

《…我ら三兄弟、そなたに従う事にしたぞ！どうだ、嬉しいである
う？》

「えっ…ついてくんの？やだよ邪魔臭い…デカイし……」

《なっなんだとう！！仕方ない、ならばこれならどうだ》

三匹の竜の周りに光が集まり、発光した。

次の瞬間、そこには…三人の少女がいた……

《ふっふっふっ…わらわ達のあまりの美しさに絶句しておるわ！》

《そうですわね、お姉さま？人間なんかちよろいもんですわ？》

《あるじさま、おなかすいたでしゅ…》

「……………」

「……………」

「帰ろうザルバ…」

『帰ろうハイン…』

疲れ切ったハインとザルバは、とぼとぼと家路についた。

頑張れハイン！

負けるなハイン！

ハルケギニアの未来はお前にかかっている！！

《待て〜！待つんじゃ主様！！ 追つんじゃユン・ユラー！！》

《主様お待ちになつてえ〜!》

《あるじさまごはん!あるじさまごはん!》

ハイン達を追い掛ける裸の幼女がいた。

次回予告

『新しく増えたハイン一味ツ!!果たして作者はさばき切れるのか!
! 今さら後には引けないぞダメ作者!! 次回の-ZERO-の無責任男は「ああ、俺はストレートだ。炉の人ではない!中の人はいらんがなッ!!」だ。必ず見るよな!』

?? てめえらに、今日を生きる資格はねえ!!.....なんてシリアス感はござい

なんかすいません、本当に

?? 運命は我々の行為の半分を支配し、半分を我々に委ねる。 … M.J.J.O.??

今回は不品です。

おごんは人間のまっぴらごまごまぶってなまじい……

?? 運命は我々の行為の半分を支配し、半分を我々に委ねる。… M.J.J.D.!?

「ハイン、説明して？」

「ハイン様、私に飽きてしまったの?… たゆんたゆん」

「子供に手を出すとは… この外道があ…」

上からジェシカ、カトレア、エレオノールの順である。現在早朝五時、外はまだ暗い。

そしてハインは、共有リビングのフローリングに正座をしているのだ。

どうしてこうなったか？

それは昨夜、ハインがマザリーニの依頼の竜退治を見事攻略し、ヘトヘトになって帰還した。

ハインはそのまま力尽き、ソファに座ったまま眠ってしまった。

ここまではハインにも記憶がある。だが続きがある

ハインの後をついてきた韻竜三姉妹は、鍵が掛かったハイン一味の家のドアの前にたどり着いた。

だが鍵など精霊魔法には役に立たず、あっさり解錠され、三姉妹はハインの匂いを頼りに共有リビングにやってきた。

ユラ、ユン、ユラの三人は、ソファにハインを見つけた。

彼女達はハインに飛び付き、嬉しそうに擦りついた。

結構体が揺れたが、熟睡したハインは起きない。

韻竜はヒト形態になれるが、元来服など着ない。ユイは擦りついても服が邪魔で、どうも気持ち良くない。

うううどうしよう　じゃ脱がしちゃえという単純思考で行動した。

ズボンとパンツは簡単に脱がしたが、コートは裾をハインが踏んでいる為に断念した。

結果、上半身はビシッと、下半身は丸出しという、よく夜の公園に現れる変態オジサンと同様のスタイルに落ち着いた。

そして、ハインにとって不幸だったのは、好奇心の塊である末っ子ユラが、自分にはついていないハインのハインの袋に興味を持った事だ。

ユラがハインのハインの袋をムニムニと掴み、キャツキャツしてる。次女ユンもそれに追従し、静観していたユイが楽しそうな二人にジヤリアニズムを発動し、三人でハインのハインの袋を奪い合った。

だが、彼女達も眠くなり、ハインのハインの袋をつかんだまま意識を失った。

そして先程、トイレに起きたエレオノールが、リビングを通った際に犯行現場を発見し、そしてまだ男に免疫の足りない彼女は、ハインのハインの袋を握ったまま眠る幼女よりも、朝の生理現象により限界まで張り詰めたハインのハインを見て叫び声をあげたのだ。

「きいああああ!!」

断末魔に似たエレオノールの悲鳴に、何事か!と、カトレアもジェシカも慌てて降りてきた。

灯りをつけ、改めてハインを見た三人。彼女達にはこう見えただろう。

”ハインが下半身だけ露にし、幼女にご奉仕させたまま寝ている”、と。

「これは冤罪だ！…きちんと調べる事を要求する！！これは魔女裁判か！？くそう……陰謀だあ！」

「有罪」

「ギルティ」

「死刑ッ！」

上からジェシカ、カトレア、エレオノール…もういいか。

「あのな？あいつらは昨日戦った竜なんだよ！竜！わかる？ドラゴンだよ？いっぱいブレス吐かれたよ？ジェットストリ…ゲフンゲフン…超暴風攻撃仕掛けられたよ？」

ハインは顔真っ赤にして、ブンブンと腕を振りながら主張する。

妻、sは右を見る。

すやすや眠る幼女がいる

妻・sはハインを見る。

「鬼畜」

「変態」

「死ね」

「ZOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!--」

《むにゃむにゃ……うるさいのう……わらわはまだ眠いのじゃ……》

《まだ眠いのデス》

《ユラはまだ眠いのだ。でもごはんも欲しいのだ》

件の三姉妹が目覚めた。ハインはすかさず三姉妹に問いただし、誤解を説こうと説得した。

が、思考回路は幼女のそれと変わらない。ハインのハインの袋はた
まらなく好きだだの片言しか言わない。

結果、ドツポにはまり、袋叩きに遭った。

だが、ぼこぼこにされるハインを見たユンが、《あるじさまを苛め
ちゃダメなのー!》と精霊魔法をぶっぱなし、韻竜だと納得に至っ
た。

ぼろ雑巾のようなハインが、お前ら、昨日戦ったときに兄者だの兄
弟だの言っただけでなかった？

との質問に

《わらわ達はおなじじゃ!ただの?あの超暴風攻撃を仕掛ける時は
何故か男のような口調になるのじゃ。ピピピってでんぱが降りてく
るのじゃ》

だそうです。読者の方、納得しました？

「あからさまなメタ発言は良くないですわ」

これで一応ハインは無罪放免となった。だが、韻竜と判明したら別
の問題が勃発したのだ。

エレオノールである。

獲物を見つけた猫科の大型獣のような眼差しで三姉妹を見るのだ。

これには動物愛好家でアニマルテイマーの異名を持つカトレアが激しく反応。

あの子達には触れさせませんわ　いい度胸ねカトレア！と一触即発になった。

室内での魔法バトルはヤバイと、ハインは慌て、次の瞬間二人を小脇に抱えベッドルームに連れ込み、足腰立たなくなるまでウフンだのアハン　だのと頑張り、ピロートークでエレオノールを説得した。

しかし、放置されたジェシカが拗ね、仕方なく彼女にもハインのハインを彼女がぐったりするまでフェード・イン！させ続けた結果、ハインは精魂尽き果て二日寝込んだ。

この出来事を「幼女こわい幼女こわい…でも妻…sはもっと怖い」事件として、ハインは死ぬまで忘れなかった。

事件から二日後、マザリーニに結果報告したハインだったが、死体

が無かったのが問題になった。

仕方なくハインは、彼に竜が韻竜だった事を告げ、懲らしめて大人しくなった三匹を、懐柔してつれ帰ったと白状した。

マザリーニはモンモランシ伯に森を探索させ、竜が居なくなったと確認が取れた。

マザリーニはいたく感激し、近いうちにシュバリエを叙勲すると約束した。

……実際は二日後だったのだが。

それを持って、ド・オルニエールの経営を任せる計画が動き始める。

マザリーニは、竜退治の印象が薄れないうちに、なし崩し的にハインを摂政に推すことにした。

因みに、ド・オルニエールの税収は約、一万二千エキュールであり、それを越えた分はハインの取り分という密約を交わした。

ド・オルニエールの件の開始は二ヶ月後でマザリーニが調整するという方向で決まった。

二人は悪巧みの笑みを浮かべ、握手を交わし別れた。

ハインは今日、トリステイン魔法学院に来ている。
かねてから考えていたプランを実行するため、マチルダことミス・
ロングビルに接触に来たのだ。

ついでに平賀才人にも会ってみようという魂胆もあったのだが。

入り口の衛兵に「ミス・ロングビルに”西の森”の件で用事がある」と伝えてもらい、学院前の草むらに寝転んだ。そして熟睡。

「起きな。あんただろ？ハインリヒとかいう男は」

マチルダが眠りこけるハインの頭の上に立っていた。

目をパチリと開け、上を見たハイン。

「ああマチルダ。ピンクなんて可愛い色履くんだ？意外と似合ってるぜ。」

「ちょ…あんだどこ見てるんだい？」

「ん〜マチルダのパンツ？いや、パンティ？」

「いつ言い直すんじゃないよ！恥ずかしい」

「ハツハツハ…意外とウブだねえ。なあマチルダ、フーケなんか止めて俺に下れよ」

相変わらず寝たままのハインは、気だるそうに言う。

「あんた…何を知ってるんだい？次第によっちゃただじゃおかないよ…」

マチルダの温度が下がる。

「殺気を出すなマチルダ。オスマンに気付かれる。いいからこっちこい」

「ちよっ…やつ…」

ハインはマチルダに足払いをかけて体勢を崩し、そのまま彼女の腰を抱きしめ、強引に胡坐をかいた自分の上に座らせた。

そのまま杖を取り上げ、草むらに放り投げ、マチルダをさらに強く抱き締める。

ハインは小声で、彼女の耳元に唇を寄せて話す。見ようによっては恋人の睦事にも見える。

実際、男を知らないマチルダは顔を真っ赤にしていた。一応抵抗はしてみたが、どうやっても動けなくて、諦めた。疲れるし。

「あんな、フーケやめろ。ティファニアが泣くぞ捕まったら。因みに、破壊の杖はゴミだからな？一発ぶっぱなしたら終わりの武器だからな？」

「あんだ！！テファの事まで…何物なんだい…なんか怖いよ」

それはそうだろう、自分の事を知られているのに、相手の事は全く知らないのだから。気持ち悪いに決まっている。

「俺はトリスタニアで万屋をやっているハインリヒというものだ。つか、焼きそば屋のオーナーのほうが有名な？因みに、モンモランシ領で暴れていた竜を退治したのは俺だ」

「ええっ！？焼きえええっ！？竜もええええええ！！！！」

「なんだ五月蠅いなあ」

「いやだって…ええええ！！！！」

「まあいいじゃん。ちっと真面目な話するぞ、マチルダオブサウスゴータ？もうしばらくしたらアルビオンは戦乱に巻き込まれる。」

当然、ウエストウッドもとばかり受けるかもしれない。色々疑問はあるだろうが、まず間違いなく内乱が起きると思っ正しい」

マチルダは何も言えなくなってしまった。この男の言う事は、自分たちの情報には間違いはない。

だが、内乱とかは正直眉唾物だ。確証が無い。だからマチルダは対応がわからないのだ。

「なあマチルダ。俺の言う事が実際起きた場合、どうなるかは想像つくだろ？」

こくこく…マチルダは頷くだけしか出来ない。

「じゃあ起こらなかったとして、お前がフーケとしてドジ踏んだら結局ティファニア達が路頭に迷う…これもわかるな？」

こくこくこくこく…

「お前、いま給料いくらもらってる？」

「…30エキユー…です」

「まあ妥当か…んじゃ100出すからうちに雇われてくれ。今後、本格的に情報を扱った仕事があるから、お前は金が入る。俺はお前

が手に入る。おまけに、さっき俺がいった話を、自分で確認できる。どうだ？損は無いだろ？」

「…破格な給料は正直嬉しい。けどあんたは何がしたいんだ？それが見えないと怖くて信用出来ないよ」

ちゅっ…

「あっん…いやっ…」

ハインはいきなりマチルダの首筋にキスをした。

「俺は…俺にやれるからやるだけだ。アルビオンを救えるからやるだけ。だが、見て見ぬ振りをすれば、戦火は必ずトリスティンに飛び火する。俺の愛する”女たち”はトリスティンの人間だからな。だから、腐れ貴族の痴話喧嘩なんかで好き勝手させねえ」

マチルダは、内乱を納めるなんて虚言じみたストーリーを、大真面目に収められると言い放つこの男が眩しく見えた。

この男なら、自分とティファニアを日陰の世界から、太陽の下に引き摺りだしてくれるかもしれない。

マチルダは、モード大公が粛清された折りに、可愛がっていたティファニアを連れて逃げた。

ハーフエルフであるティファニアは、外を歩けない。だから、マチルダが今まで生活費を出してきた。

だが、平民メイジが稼ぐ金なんかたかが知れている。

だから、仕方なく盗賊に身を落とした。自分を破滅させた貴族から盗むことで恨みを晴らした気になっていた。

だが、道行く自分と同じくらいの人間が、恋人を連れて笑顔を浮かべているのを見ると、自分が惨めで仕方がなかった。

金を届けにティファニアの孤児院に行ったとき、彼女の笑顔をみてまた頑張ろうと思えた。

だが、最近は心が冷えきっていた。ティファニアにいつか理不尽な八つ当たりをしそうになる。

そうすれば優しいティファニアだ、マチルダの事を心配し、自分を責めて姿を消すか、命を断つだろう。

「なああんた：あたしは疲れたよ。もう、疲れたんだ。あたし達を救っておくれよお？」

マチルダは目を閉じ、ハインに身を預け、そして静かに泣いた。細かく身体が震えている。

「依頼、たしかに受けた。マチルダオブサウスゴータ：お前はもう大丈夫だ。心配ない。万屋ハインリヒは成功率十割だからな」

「あたし：あんたに払う金が無いよ……」

「お前がいる。前金もらっぜ？」

「……初めてなんだ…優しくしておくれよ？」

「うむ…マチルダ、いい匂いするな」

「えっ？えっ？」

「むふふ…おっぱいもウエストも俺好み……」

「えっ？えっ？えっ？」

「むはは、もう我慢できねえ…シリアス飽きた！ んじゃマチルダちゃん？いったきま〜す！！」

「えっ…ダメっいきなりソコなの？……あん…なっ舐めちゃらめ〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ツ！！！！」

「ごそごそ…衣擦れの音がする。」

「プツハ〜〜スツパ〜〜」

勝利の衣服をするハインがいる。その影でいそいそと下着をつけるマチルダがいる。

「あんだ…容赦ないね…」

「可愛い女を前に無理。それが俺の正義ルール。お前、いい女だもん。だからお前が悪い」

「あつっ…恥ずかしい事言っじゃないよ！ ハイン…泣かせちゃやだよ？」

「大丈夫、マチルダをつれ帰ってもお前は無事。多分俺はフルボッコ。だから大丈夫」

「え”！？」

「大丈夫…慣れたから…あと二・三人はOKって言われてるから…でも…マチルダ…俺、こわい」

ハインはマチルダの膝にすがりついた。

「まったく、子供みたいなところもあるんだねえ…ふふっ…よしよし…！？…ちよ…どこ手いれて…あんっ…マチルダのマチルダに指入れちゃらめ~~~~~！！！！」

プツハ〜〜スツパ〜〜

勝利の一服をするハイン

その影でいそいそと下着をつけるマチルダ…少し泣いているようだ。

「……………鬼っ……………悪魔っ」

「やれやれ…あんま褒めるなって！照れるやん…」

「褒めてないわッ！」

New！ハインは突っ込みのスキルを持ったツンデレをゲットした。

次回予告

『トリスティン魔法学院に紛れ込む怪しい男がいた！ヤツのヤツは節操がないッ！そう、ボインは逃げるんだ！！次回の-ZERO-

の無責任男は「えっ？なんでアタシに声かけないの？」二つの月に吠える桃髪」だ。必ず見てくれよな！」

?? 運命は我々の行為の半分を支配し、半分を我々に委ねる。… m.j.d.!?

魔法学院篇が一話で終わらなかった……

才人に会いたいよハアハア

?? 虎は何故強いと思う??元々強いからよ!...ハルケギニアだとドラゴン?い

今回は閑話的なのはなし

??

虎は何故強いと思う？元々強いからよ！…ハルケギニアだとドラゴン？い

「落ち着いたかい？」

色んな意味で激しい運動をさせられたマチルダを、膝枕しながらハインが聞く。

「うーん、話に聞いてたほど痛くは無かったね。でも、あんたが良
い奴か悪い奴かはわかんなくなつたよ。いや、きつと悪い奴だね！
こうやって、離れられなくさせられたからね」

マチルダはハインの太腿に乗せている頭をグリグリしながら彼に悪態をつく。

「んまあ、きつと俺は悪い奴さ。それは間違いないよ、マチルダさん。欲望の為にしか動かないもん。正直、みんなの幸せなんかどうでもいいんだ」

「どういことだい？」

「俺あジエシカが好き、カトレアが好き、エレオノールが好き、マチルダさんが好き……そいつらが幸せで笑ってたら、俺も幸せって感じる。魅惑の妖精亭の誰かが泣けばジエシカが泣く。ラ・ヴァリエールの誰かが泣けば、カトレアもエレオノールが泣く。……ウエストウッドのガキ共が泣けば、マチルダさんが泣く。だから、それがヤなだけなんだよ俺は」

「何て言うか…超我が儘な女好き？ってことかい？」

「ははっ…それいいな！さっすがマチルダさん」

「褒めてないよ…ってかハインの彼女達…さ？ …ラ・ヴァリエールという不穏なキーワードが聞こえたんだけど…まさかあの公爵家とかじゃ…ないよね？」

「ん？他にラ・ヴァリエール家ってあるの？」

「ちよっ…ええっ…なんかもう…まあいいや。あなたに常識は通じないのは分かった。ところで、なんであたしだけ「さん」付けなんだい？」

「俺の国ではな？マチルダって名前には「さん」をつけるんだ。そうする決まりなんだ！」

「なんだいそれは。ふふふ、他人行儀って訳じゃなさそうだからそれでいいや。ところであたしはこれからどう動けばいいんだい？」

「取り敢えず、学院はやめて、トリスタニアのうちに移動しよう。部屋は無駄に余ってるしな。テファ達はさ、フェイスチエンジできるマジックアイテムをマザリーニに探して貰ってるから、見つかりしだいトリスタニアに移す…ド・オルニエールになるかもだけど…まあそんな感じかな」

「なんか…突っ込み所が多すぎて…まあいいや…考えたらダメね…取り敢えず学院辞めるのは了解。ジジイのセクハラ疲れたしね。結婚するから辞めるでいいね、理由は。ふう、じゃあたしは学院戻るけどハインはどうするの？」

マチルダは立ち上がり、パンパンと服の埃を払い落とす。

「あゝちょっと学院によろがあるから、入る許可なんとかしてくれん？ルイズ・フランソワーズの使い魔と話がしたいんだよ」

ハインも立ち上がり、細巻の葉巻を啜えて火を付けながら、気だるそうに言う。

「物好きだねえ ……んじゃ一緒に行く。衛兵に話通してあげるよ」

二人は連れ立って学院の門を潜っていった。

「しっかし、無駄にでかい建物だな。塔がよきよきと…」

ハインはマチルダと別れ、ルイズ・フランソワーズの使い魔、平賀才人を探していた。

前世とは言え、同郷だ。特に強い思い入れがあるわけでもないが、強いて言うなら、この物語の主人公を見てみたいという強い好奇心だ。

どれだけハインに強い力があるうと、自分は物語の脇役に過ぎないと考えているのだ。

やはり、この物語の主人公はルイズ& amp ;才人なのだ。

ハインは才人を探して彷徨っていた。暗闇の広場、二つの月が冴えて見える。地球の月はこれほど大きくなかった。

「……………何を見てるの？」

佇むハインに、鈴の音のような声が聞こえてきた。

「……………月」

「……………そう」

大きな柱の影から青い髪の小さな少女が現れる。彼女の背丈ほどある杖を手に行している。

「あなたは強大な力を持つ三匹の竜を、一人で倒したと聞いた……………それに、ヴァリエールの姉の病を治したとも聞いた」

「さあね。俺はしがない万屋でしかない。それに、噂話に興味はない」

「……………はぐらかさないで」

「黙れクソガキ。北花壇騎士団の情報か？ ガキの復讐に俺を巻き込むな」

青い髪の少女、タバサの目が大きく開かれる。

「貴方は何を知っているの？」

「答える必要性が無いな。そして、メリットも無い…そうだろう」

「……無理にでも話して貰う」

タバサは杖を構える。

「虚勢は見苦しいもんだな。いいよ。かかってきな。お仕置きの間だ」

タバサの口がぼそぼそと動いている。

「ウインディ・アイシクル」

風風水のタバサ得意のトライアングルスペルである。

無数の氷の矢が、月の光を浴びて妖しく輝く。その美しさとは裏腹

に、何十にも及ぶ殺意がハインに迫る。

「ザルバツ!!」

『任せな!ハイン』

ハインは無造作に握った左拳をかざす。

シュババババ!!!

キイイイイン……

一瞬ザルバが輝くと、氷の矢は物体から不可視のエネルギーへと変化し、ザルバの口へと飲み込まれた。

タバサはあり得ない光景に、一瞬固まってしまった。それはハインにとっては永遠に等しい。

ハインはタバサに向かって走りだすと同時に、牙狼剣を鞘を払い、タバサの首筋…頸動脈の辺りへピタリと止めた。

「はい、おしまい You dead さて、どうする?」

「……参った」

「よし、いい子だ」

ハインは牙狼剣を鞘に収め、そこから立ち去る。しかし、数歩歩いて足を止めた。

「……まあ疑問はあるだろうが、別に俺はお前の敵でも味方でもない。……だが、”仇討ち”や”不治の病”の相談があったら、トリスタニアのブルドンネ街に尋ねてきな。仕事なら、色々話すかもね？　じやあなクソガキ」

タバサはその背中に何かを言い掛けたが、ハインはそのまま暗闇に消えた。

「……………イーヴァルディ……………」

タッタッタッタッ……

「なあ嬢ちゃん…ルイズの部屋ってどこっ!？」

何ともしまらないハインだった。

「……こっち」

180セントを越える大男が、小さな少女に手を引かれて歩く。男はどことなく所在なげな表情で、とぼとぼとついて行く。なんともシユールな構図だ。

「……こっち」

「ありがとっな、嬢ちゃん」

「……タバサ」

「シャルロットじゃダメ？」

「……タバサ」

「へいへい……じゃまたな？タバサ」

「クスツ……また」

タバサの背中を見送りながら、溜息をひとつ。

「……妹ポジションならアリだな。うんうん。それなら怒られな
い……はず」

ダメ人間である。

すうーはーすうーはー

よし、行くか。

「アンロック」

ガチャ…

「やぁルイズ！お兄さんだよ！」

「……………」

「……………」

『……………』

どっちらけである。

「あつ…アンタこんな夜中になんなのよ！！！！ サイト！やってお
しまいなさい！！！」

「あらほらさつさ〜！ この怪しい男！出ていけ！！俺のご主人
様には一歩も触れさせないッ！！！」

「《俺のご主人様には一歩も触れさせないッ！ 裏声》 か〜っ！
やべえカッコいいじゃんお前！中々言えないわそれ。 《俺のご主
人様には一歩も触れさせないッ！ 裏声》俺には…恥ずかしくて
言えん」

「そつ…そつかなあ？」

「ちよっサイト！アンタバカにされてるのよ！冷静になんなさい？」

「何いつてんだルイズ！めっちゃ誉められてるじゃん？」

「そつだぞルイズ。バカにしないで！最初からバカなんだから、むしろ誉めてんだぞ！」

「……もういいわそれで。で、アンタだれ？」

ハインのサイトいじりに疲れたのか、ルイズは話題を変えた。

「なんだチミはってか？」

「え？」

「え？」

「そつです、私に変な「言わせネーヨ！…！」

「いい突っ込みだ少年」

「いやあ…それほどでもお……」

サイトは実はテンパっているのか、はたまた鋭い突っ込みが決まっ
てご満悦なのか、ハインの日本ネタに気付いていなかった。

「ま、冗談はさておき、俺の名前はハインリヒ。トリスタニアで万
屋を営むナイスガイだ。そして、君からカトレアを奪った憎い相手
かもしれない」

「あー！ー！ーっ！アンタがちい姉様をたぶらかした人でなしわっ
！？」

ルイズはベッドからガバツと立ち上がり、腕をブンブンふりながら
叫ぶ。

可愛らしいネグリジエがキュートではあるが、ハインには幼女趣味
は無いのだ。そう、幼女趣味は無いのだ。大事だから二回言いまし
た。

「誤解があるようだが、カトレアは自分から転がり込んできた。エ
レオノールも同様だ。俺は二人が大事だし、カトレアの二つのチョコ
モランマは最高だ」

「マジっすか？揺れますか！？」

「ああ、たゆんたゆんだ……」

ハインとサイトはいい笑顔でサムズアップし、握手を交わした。

「チヨ……チヨモランマ？」

「気にするな。しかし少年「サイトです」……サイト。ここにはいるんじゃないかね？カトレアほどでは無いにせよ、チヨモランマが……」

「へっ？」

「バカめ、シエスタだ」

「なるほど！彼女はチヨモランマでした。でもなぜシエスタを？」

「なあに、シエスタの従姉妹のジェシカって言うのが俺のハニーなんだ。彼女もたゆんたゆんだぞ？」

「……三人もですか？」

「バカ野郎！四人だ！」

「……ハインリヒさん、師匠って読んでいいですか？」

「ふっ…いつでも俺の事務所まで遊びにくるがいい。たゆんたゆん祭り開催中だ…」

「師匠……」

「サイト……」

ガシツ…男たちは涙を流して抱擁を交わした。おいてけぼりのルイズは放置の悔しさに涙目だった。

「いや、遊んじゃってごめん、ルイズ。お姉さん達は元気にしてるよ。別に君から奪ったつもりも無いんだ。トリスタニアに来たときは遠慮なくうちにおいで。お姉さん達も喜ぶからさ。今日はそれを言いに来ただけだ。んじゃおやすみ？サイトと仲良くな。お似合いだぜ？」

そついうとハインは立ち上がり、背中を向けたまま手を振り出ていく。

「待って!!……ちい姉様を助けてくれて…あつ…ありがとう。今度遊びに行くから…でもアンタに会いに行くわけじゃないんだから!お姉さま達に会いたいだけなんだから」

「なっ?サイト。こいつは優しいやつなんだよ。浮気しないでちゃんと守ってやれよ?」

「あっ……ああ！」

「ななななっ何いってんのよ！ああアタシがなんでバカ犬と！！」

「はいはい。じゃあな」

そして部屋には静寂が訪れた。二人はそれぞれベッドと床に横になって、静かになった。

「……………サイト……………」

「……………ん？」

「アタシ、絶対ゼロ以上になってみせるから。……………だから、ちゃんと守ってよね……………」

「ああ……………」

「……………アンタの家族から勝手に引き離してごめんなさい」

「うん……………もう、寝るよ。ちゃんと守るからな」

「ありがとう…おやすみサイト…」

「おやすみルイズ」

「…もう、いいのかい？」

「ああ。早かったな？もう大丈夫なのか？」

「学院長はいつ寝てるか謎なのよあの爺さん。ああ、荷物もまとめ
たよ」

「なら行くか。俺らのうちに」

「ああ、世話になるよ。ダーリン？」

「ははっ…帰る。みんなが待っている。近いうちにテファもな」

そして二人は消えた。

また一人、ハイン一味に新しい仲間が増えた。

そして彼女、マチルダはこの後のハイン一味の活動の中核をなす存在になるのだ。

次回予告

『ハイン一味が新天地に引越したあ！荒地の領地にてんてこ舞い。カリンが出てきてこんにちわ。ハインちゃん一緒に遊びましょ？さあ次回の-ZERO-の無責任男は「ハイン一味の勢いは世界一イイイイイツ！！」だ。絶対見てくれよな！』

?? 虎は何故強いと思っ?元々強いからよ!...ハルケギニアだとドラゴン?い

タバサどうしよう。

?? **ポテトチップスは食事ではありません。本文に関係ありません。悪しから**

今週は最後の投稿になります。

誤字修正なども週明けになります。

次回投稿は月曜日を予定してます。

?? ポテトチップスは食事ではありません。本文に関係ありません。悪しからず
「なーんもないね」

ジェシカが嘆くほど、広大な大地いや、荒野がそこにあった。

「実際どこも最初はこんなものですよ？しかし、これほどは無いかしら」

カトリアはさすが貴族然とした発言だが、やはり引いているようだ。

《広いのじゃ！広いのじゃ！わらわ達も元に戻るのじゃ！ハインの家は狭いからのう》

《ここならいっぱい火を吐けますの〜〜》

《シカ マルカジリ》

どうやら竜っ子達は気に入ったようである。

「ほんつと何も無いねえ〜どれどれ…主要な事業は麦と芋…のみ…
ト田舎だね！はあ…」

マチルダは流石であろうか、一応は資料を見ながら、分析しているらしい。

「まあそういうな。テファ達を引き取るには充分だろうさ。産業はちょっと考えがあるからまあごろろっじろってやつだね」

「ありがとよ、ハイン。あたしは一生あなたに付いていくよ」

マチルダがハインに寄り添い、感慨深げな表情だ。少し涙が出たらしい。

「あゝゝ！マチルダが抜け駆け！」

「乙女同盟の盟約違反ですわ マチルダは今夜、お仕置きですわ」

「ひい！あつあつあたしやまだ…その…身体が慣れてないって言うか…女同士は…その…はうう」

マチルダにジェシカとカトレアが両側から抱き付いている。マチルダの服がもそもそ動いているが謎である。因みにマチルダは微妙に悶えているが、やはり謎である。

「ん？なんだい？乙女同盟とやらは」

「乙女には、殿方に言えない秘密があるのですよ？いくら旦那様と知ってはならない秘密の花園なんですの。ふふふふ」

「そ…そうか……うん、ごめん…知らないほうがいいみたい…」

ハインはカトレアの妖しい笑顔に恐怖した。そしてハインは思いを新たにした。彼女がいくらふわふわしていても、本質はラ・ヴァリエールの女だと。ピンクの髪が物語っているじゃないかと。そう…彼女は間違いなく烈風カリンの娘なのだ。そう言えば、ジェシカは勿論、鼻っ柱の強いエレオノールやマチルダすらもコントロールしている節がある。カトレアッ恐ろしい子ッ！！！！

そして、読者にだけ説明しよう！！！！

『乙女同盟』

それはハインを愛する娘達が、ハインを盛りたて、そして娘達がお互いを嫉妬しないように立てられた誓いなのである。

ベッドをとにもするにしても、全員で抱かれたら、一人一人が希薄になる。いやん、もつと濃く愛されたい！娘達の独占欲もある。そこで考えられた方法が、ローテーションが生まれ、休日以外は1対1の日替りシフト。そして、ハイン一味の休日であるダエグ、虚

無の曜日は祭だワツシヨイワツシヨイとなるのである。

だが、それでも平日は抱かれない娘達は女盛りではあるし、当然、性欲をもてあます。

そこで、ハインを悦ばせる房中術の向上、または手練手管の修練の大義名分のもと、夜毎、百合百合しいトレーニングを行うのだ。

これでハイン独り占めの嫉妬は緩和され、さらに娘達がお互いを百合百合しく愛し合う事で妻・s同士の絆も深まるのだ！！！！

つまり、女の紳士協定のようなモノである。因みに、発案者であり、盟主はカトレア嬢である。

因みに、協定を破った不届き者は、百合百合空間に引きずり込まれ、絶頂に達する寸前に止められるという、拷問のような寸止めプレイを数時間に渡り繰り返されるのだ。因みに、このお仕置きの事を彼女達は”可愛がり”という隠語で呼ぶのである。

そして、マチルダが怯えるのも無理はない。彼女が初めてハイン一味に紹介された日、既にハインのお手つきなのを白状させられ、その馴れ初めすら言わされてしまった。その時の娘達の反応は次の通りだ。

「甘い…甘いわ…」

「砂糖吐きそうです」

「ヤッチマイナ」

上からジェシカ、カトレア、エレオノールであり、エレオノールの発言により可愛がりが増した。後は押して知るべしである。

閑話休題

現在一味が何をしているかと言うと、兼てからのマザリー二との計画である、「ラ・ドルニエール改造計画 成功したらそのまま領主になっちゃいな」を実行しるとマザリー二からお墨付きを貰ったのだ。

その際、アンリエッタに拝謁したのだが、「ハインリヒさん、宜しくお願いしますね?」と言われた際、「流石トリスティン王国の白百合、アンリエッタ様ですな。その美貌、そのたゆんたゆん、最高デス」とサムズアップしてみた。

結果、同席したエレオノールにはピンヒールで爪先を刺され、マザリー二には「お前の心臓に生えた剛毛を分けてほしいわ…ちよっ…ちがっ…褒めてないし、皮肉ですから!」と言われてしまった。

さすがハイン。一国の姫相手にこの所行である。ただし筆者は痺れもしないし、憧れもしない。

閑話休題

と言う事で、ハイン一味は新天地ド・オルニエールへとやってきたのだ。因みにエレオノールはアカデミーに詰めているのでここにはいない。

竜っ子達はいつの間にか遠くに見える森に消えた。多分、迷い込んだ領民にジェットストリームアタ……ゲフンゲフン……超暴風攻撃を仕掛けるかもしれない。いや、必ず仕掛けるだろう。ハインは後で「人 食べちゃダメ」と言っておこうと心に誓うのだった。

さて、ハイン一味一行は領主の館にやってきた。

館と言うには大き過ぎ、城というには小さい位の大きさだろうか？ 部屋数は充分あるし、広大な地下室が好感が持てる。ただ、全く手入れがされていない。

「さあ、お嬢様方、ここが新しい我々の館だ。どうだ？ 嬉しいか？ そうか嬉しいかあ。じゃあ早速掃除を開始する！ 俺が風魔法で埃を飛ばし、カトレアが水魔法で洗い流していく。マチルダは土魔法で破損ヶ所の補修を頼む。全て終わったら、二人で改めて固定化を施そう。ジェシカは台所と風呂、水回りを使える用にしてくれ。じゃあいいな？ 開始だ！！！」

ハインの号令の元に一味はきびきびと動き出す。大貴族の娘であるカトレアも、当たり前のように作業に参加している。

カトレアはハインにより、その身体に巢食う病床を消し去った。そのおかげで、今までは出来なかった激しい運動が苦にはならなくなった。そして、身体を動かす喜びに目覚めた。

するとカトレアは、ジェシカが一手に引き受けていた家事を進んで手伝い始めたのだ。今ではジェシカの焼きそば屋の新メニュー発案にも力を貸している。

さて、午前中から始めた大掃除だが、深夜近くになりやっと終わった。

ここに来た当初からは信じられないほど、見違えるように館は綺麗になっていた。まるで新築の様だ。

「みんなお疲れ様。食事の用意が出来ましたよ！」

真新しいクロスが敷かれた食卓に、所狭しと並べられた料理は色とりどりだ。

トマトとはしばみ草のサラダ、オニオングラタンスープ、蒸しチキンのケツカーソース掛け、ハンバーグ、スパゲッティナポリタン、たっぷり焼かれたバケット、ドルチェはティラミスである。ワインはタルブ産のヴィンテージ物を揃えてある。

「我ながら美味しそうだ〜」自画自賛なジェシカ。

「ジェシカ、流石です」「ご満悦のカトレア。

「あなた…万能だねえ」家事不能者土くれマチルダ。

「こつ今度私にも教えて欲しい…ハツハインに…ちがっ…ゲル化の実験よ!？」ツンデレ乙…いつの間に戻った？エレオノール。

「みんな、お疲れ様。エレオノール、仕事で疲れたのに長い移動お疲れ様。じゃ、新しい居場所と、俺たちの幸せな未来を祈って乾杯しよう。みんな、愛してます！乾杯!!!」

「『『『乾杯!!!』』』」

こうして、新天地ド・オルニエールの夜は幸せに包まれてふけていった。

「あ、今夜はマチルダかな？エレオノールも大変だったから一緒においで。三人で寝よう。二人の感じてる可愛い顔いっぱい見せて？」

「あんたっ！…うう…あんまりはつきり言わないでおくれよ…でも、いっぱい見て欲しいよ…」

「あっ…ありがとうハイン…私も…見てほしい…デス…はう」

まだ眠らないらしい。

もげるハイン。

翌朝、リビングに一味が全員集合していた。

因みに、エレオノールは今月をもってアカデミーを止めることになった。理由は後述する。

皆々紅茶を飲みながら、ハインの話を待っている。

「んつと、俺が考えたド・オルニエールの今後を皆に聞いてもらう。質問は最後に聞くからまずは聞いてほしい。いいかい？」

一同は頷き、同意する。

「まず、エレオノールには既に話したのだが、上下水道の設置をし、それと同時に、水の浄水設備の敷設をする。それと下水処理の施設を敷設する。詳しい話は後でな。これが第一」

皆が頷き、ハインは紅茶で喉を湿らせる。

「次は、この地方の特産、麦を有効利用する。様々なタイプの乾燥パスタを加工して売る。と、同時に各種スパイスや新種のハーブの生産。そして、酪農業に力を入れ、牛乳の直接利用、牛乳の加工品のチーズの販売、そして食肉としての牛肉のブランド化だ。コレが第二な」

「で、最後に上下水道が完成した後になるが、五階建てで50戸がひとくくりの平民用集合住宅を敷設。さらに温泉を掘り、豪華な宿泊施設を建て、一大リゾート化をする。取り敢えずこの三つが大筋になるな」

その後、様々な質問が投げ掛けられ、それすべてにハインは丁寧

答えていく。ハルケギニアには今で無かった概念もあるからだ。

まず一つ目

ハルケギニアは衛生管理が発達しているとは言いがたい。屎尿、動物の死骸、ゴミ…挙げればキリがないが、それらを放置すれば、ウイルスやバクテリアのいい温床となる。

それらは直接人間に永久を及ぼすし、土壌を汚染すれば、井戸水や河川の水を口にする人間に、間接的に影響を及ぼす。水を使い作物を育てれば同様の危険性がある。

そこで、一括して浄水し、水道を通す。

そして、污水处理施設の敷設を平行して開発し、家庭や様々な施設からでる汚水を流す下水道を通す。

これだけでも随分と衛生状態は解決されるが、当然ながらゴミの焼却施設を敷設すべきだろう。

二つ目は

まず、ド・オルニエールの立地自体がゲルマニアのような製鉄業には不向きなのだ。そこで、農業が主体だったド・オルニエールにおいて、特に生産量が多いのが麦だ。

その麦を粉にしてそのまま販売するのもいいが、粉を領内で加工して保存が利く乾燥パスタを作る。

新しい作物として、各種スパイスやハーブを率先して作るのだが、先ほど述べたパスタを使い、この地方の新しい食文化を作るのだ。

畜産、酪農も同時に推進し、チーズ、牛肉等をブランド化していく。

主食としてのパスタ、この地方の様々な野菜を使い、ブランド化した良質な食肉：バランスが良く、栄養価が高い食事が、安く保存も効くものが多く、何より美味しい。

確実に新しい文化として発展するだろう。

ロマリア地方の料理をハインは食べたが、地球なら位置的にロマリアはイタリアなのだが、宗教国家の弊害か、ろくなもんじゃなかった。

つまり、国力が他国より圧倒的に低いトリスティン王国であるが、農業分野でのリードを狙う事は容易であると言える。

食の文化を発信する最先端な地域としてのド・オルニエール地方と言うモデルケースを作る。そして、その中核を担うのが、ジェシカが会長として新しく立ち上げる商会になる。

そして、三つ目が

平民の為の巨大な集合住宅である。一つ目に関係あるが、集合住宅の各部屋には、風呂と水道が完備されるのだ。

ようは、衛生状況を良くし、食文化を向上させれば、必然的に寿命が長くなるし、今までかかっていた病気にならなくなるだろう。

この世界は水のメイジがヒーリングをするが、地球でいう西洋医学が壊滅的に発展していない。

ならば、人々の抵抗力、免疫力を上げれば、全体的な寿命が底上げされ、その結果、労働力も上がるし、人口も増えるだろう。死亡率が下がるのだから。

そして、温泉を中心とした一大リゾートは、ハルケギニアに旅行と言う娯楽を植え付け、その先駆者であるド・オルニエールが沢山のパイを独占してしまい、海外から沢山金を落としてもらったのである。因みに、マザリーニには、リゾートが成功と判断できるレベルに育ったら、王宮からのお墨付きのカジノ特化地区にする密約を交わしている。

公営ギャンブルに指定させ、王宮とハインが6：4の取り分となる。下手な税収じゃ話にならないほどの巨大な利権だ。

これは、王家の中央集権強化の狙いが一番なのだ。

それだけの財源があれば、強大な国軍を編成することが可能であるし、内政においても財源が自前である関係で、諸侯に対し真の意味

でイニシアチブが取れるのである。

ハインの計画は、自分も肥え、そして王宮も肥え、トリステイン王国の富国強兵が長期に渡って見込める策なのである。

その過程で、荷物にしかならない貴族には消えてもらい、王宮にメリットのある貴族だけが残る事になる。

まだまだあるが、今は取り敢えず、最初の三つを実現させる事を優先させるのだ。

「とまあこんな感じでやってくさね」

「はあ。あんた…トンでもないね…凄いつていうか…呆れたわ」マチルダはため息を吐きながらソファーに身体を投げ出した。

皆も絶句している。ようは、今までのハルケギニアの常識を、古くさいとバツサリ斬ったのだから。

「まあ先にエレオノールに相談していたが、エレオノールには浄水・汚水処理・衛生関係の研究所を新しく立ち上げる。そしてその所

長として活躍してもらおう事になる。 エレオノール？一番大変な仕事だ。俺もサポートはするが、優秀な君だから俺は安心して任せろ。このハルケギニアを救う大事業の肝だ。必ず遣り遂げてくれ」

「はい、必ず。そして、こんな素晴らしい仕事を与えてくれてありがとう。愛しているわ、ハイン」

「俺もだよ。 さ、次はジェシカとカトレアだな。 君らは商會を作って貰う。そして、農業と食文化発展の中心になるんだ。ただ、目処がつくまでは、情報管理にかなり気を遣う。俺もやはりサポートはするが、何分体は一つだ。君らが頑張らないと成立しない。まあ心配は無いけどね。 ジェシカ、カトレア、これもまたハルケギニアを内側から救う大事業だ。期待しているよ」

「まっかせて！食べ物事は誰にも負けない！期待してね？ハイン。そして、平民な私をこんなにワクワクさせてくれてありがとう！愛してるよ、ハイン」

「ジェシカと一緒に心配ないわ。私は貴方から新しく生命を貰いました。だから、たくさん輝いた人生を送るわ。あなた、ありがとう。死んでも愛しているわ」

「俺も死ぬほど愛してるよ、カトレア、ジェシカ。最後はマチルダだ。 マチルダはある特殊な任務を任せろ。 ハルケギニアの貴族の家督を継げないガキ共や、平民メイジを山ほどスカウトしてほし

い。クラス事の初任給とか細かい設定はあとで言う。ああ、特に土系統は優遇だ。後はまあ……あとで話す。よし、マチルダ、俺はお前の凄さを知っている。何せ土くれフーケだからな。今は俺の愛しいマチルダだな。マチルダ、多くは言わない。任せた」

「あんだ……そんな事言われたら頑張らないと女が廢るじゃないか！見てな、あんだが惚れなおす成果を見せるから。あと……その……好きだよ？ああもう！勘弁してくれ」

「マチルダ……有罪！」ジェシカが吠える。

「マチルダ……死刑」エレオノールの眼鏡が妖しく光る。

「マチルダ……判決は可愛がりね」「カトレア、盟主として死神の鎌を振り落とす。

「イヤアアアアアアアアアアア！！可愛がりは嫌可愛がりは嫌可愛りがりは嫌可愛がりは嫌イヤアアアアアアアア………」「マチルダ、終了のお知らせです

こうして、”最初の会議”と後に言われる、今後のハルケギニアに

次回・ZERO・の無責任男は、「おいハイッ！！私の名前を言
つてみるッ！！！！！」だ！必ず読んでくれよな！』

?? ポテトチップスは食事ではありません。本文に関係ありません。悪しからず
たくさん感想ありがとうございます！

タバサの取り込みが確定しました。

感想がかなりのモチベーションになっています。

本当にありがとうございます！、、、！

?? 俺の人生のフローチャートは、全部が全部バッドエンドへの分岐しか無い

今回短いつす

?? 俺の人生のフローチャートは、全部が全部バッドエンドへの分岐しか無い

本日ハイン一味は、それぞれの役割があるため、あちらこちらへと散っていた。

ジェシカとカトレアは、トリスタニアへと帰り、荷馬車をチャーターし、ハイン宅から本格的に荷物を運び出すのだ。

そして、商会の立ち上げ準備として、ある場所へ赴き、ヘッドハント等を企んでいる。

マチルダは、アルビオンへ行っている。かつてのモード大公や、その傘下として使っていて、政変以降、野良メイジ化した人材の掘り返しに向かっているのである。

無論、ハインに言われて別件の任務……危険では無い範囲でのアルビオン貴族派の視察も兼ていたが。

因みに、ティファニア達は、実際にレコンキスタがアルビオンで暴れだした時のどさくさに紛れて、ド・オルニエールに連れ出す計画である。

そして、エレオノールはハインと一緒に、一味の本拠地となった、ド・オルニエールにいた。

ハインは、屋敷の裏の森の中を伐採して、ちょっとした広場を作り、そこにプラントも敷設可能なカマボコ型の建物を建てたのだ。

場所は、目立ち辛く、屋敷からしかアクセス出来ないと言うセキユリテイの観点から位置を決めた。

間取りは玄関から広がる、採光ガラスをふんだんに取り入れたエンランスルーム、後はいずれ色々な実験器材が置かれるであろうプラントルームが三室、後は事務所となる部屋と、倉庫や予備の部屋が数室という構成だ。

「ねえ、ハイン？こんな立派な研究所を預かっていいのかしら？」

今二人は、研究所全景を見渡せる芝生の上にいた。

エレオノールに膝枕されながら、昼食のサンドイッチを食べている。

「ん？エレンには手狭になるよきつと。上手く言えないけど、お前はこの時代には勿体ない位優秀なんだぜ？」

「そ…そんなこと…ないもん。おちびの魔法の本質も分からなかったし…」

「あれはね、エレン。ちょっとばかり特殊なんだ。今は言えないけど、ある意味わからなくて当然なんだ。だから、君の優秀さとは関係ないんだよ」

「特殊：！？まさか！？…そんなつおちびが…虚「言わぬが花…
だよ？ まあ、それは今はいい。君の優秀さは、今みたいな早い頭
の回転なのさ。ただ、ハルケギニアは魔法分野以外は東方から比
べても知らない事が多すぎるだけなんだ。だから、俺がエレンに
きっかけを与えるよ。ただそれだけで、間違いなく君は化ける。
絶対だ」

「ありがとう、ハイン。私、自分に自信が無かったんだ。婚約して
もすぐ破談になるし…性格がきついんだって…」

「まあ、俺的にはラッキーだったけどな。だから君がいま横に居る
わけだし。エレン？今の君はすげえ可愛いよ？ ホントのエレンに
辿り着けなかった哀れな婚約者達に同情するわ」

「もう！…ハインのばか…あなたに会えて良かったわ…女た
らしだけどね！」

「あははは……すみません…」
「ねえハイン…キスして？」

二人の距離が、やがてゼロになった。

「あらあら、まあまあ…若い二人は激しいですね」

「ああ、我が愛しい娘を二人もてこめにした鬼畜がワシには見えるぞカリーヌ」

「げえっ！公爵！！…さま」

「あらお父様、お母様…ぽっ」

災害夫婦襲来である。

「いやあ、お久しぶり…です公爵…さま？ははは…ははは…」

ビシッ…公爵の杖がハインの頬に食い込む。

「あっ…杖を突き付けちゃって…やだなあ公爵…あ・ぶ・な・い」

「はっはっは！久しいな、ハインよ！良かったらお前の横にエレオノールがいる理由を教えてくださいな？ ああ、そうそう…零距离からのウインディ・アイシクルは撃つたことが無いから、死んだらすまんな？」

「ちょ…完全に殺す気だよね！？ いたっ…杖刺さってるから！！」

……痛い痛い……ちょ……助けてカリえも……ん！！」

「ドゥフフフフ……仕方ないなあハイン君。カッタートルネードオ！
！……ああっ！！誰が猫型ガーゴイルですか！！ つい釣られたじ
やないですか。 ああっアナタあ……！！」

「カツ……カリえもん……ワシ……もうダメ……ゲフツ」

NEW 公爵は、自虐ギャグスキルがLevel3に上がりました。

NEW 烈風カリンはノリ突っ込みを習得した。

「さて、ハイン。説明してもらいましょうか？ 我がラ・ヴァリエ
ール家を蔑ろにしていた計画とやらを」

「うむ、たまたま鳥の骨についていた我がシンパが小耳に挟んだか
らこそ発覚したのだ。キリキリ話せよキリキリ」

「……ぷいっ」

ハインは両頬をふくらませ、顔を最大限にそらした。まるで「私、
とつても怒ってるんだからね！あんたなんか知らない！！」と言っ
ているかのようだ。ハイン、断固拒否の姿勢である。

「やだ……ハイン……か・わ・い・い」

「だまらっしゃいエレオノール。貴方にも聞きたいことは山ほどあります。…が、今はいいのです。今は我がラ・ヴァリエール家に不利になるような悪巧みをマザリーニ枢機卿としている事が問題なのです！ 我がラ・ヴァリエールを滅ぼす計画…許しませんよ！」

「あるえ〜？何言っちゃってるんです？カリーヌ様？ 俺は確かに悪巧みはしてますが、ラ・ヴァリエールを滅ぼすなんてとんでもない。なあ？エレン？」

「はい、お母様。ハインはカトレアをラ・ヴァリエール家に迷惑掛けずに奪い取れと言ったそうですね？」

訝しげに言うエレオノール。カリーヌも訝しげだ。

「確かにそうハインに言いましたよ？」

「ハインは、マザリーニ枢機卿の難題を解決して、その結果、シユバリエを叙勲致しましたわ……」

「エレン、後は俺の口から言うよ。 ああもう、全部白状しますよ！ シユバリエの後のマザリーニとの盟約は、いや計画は、「YOUNG? ド・オルニエールを経営しちやいなよ！成功したらそのまま子爵あたり叙勲しちやいなよ！」…具体的にはカクカクシカジカ…マルマルムシムシ…つまり、俺が大貴族になってカトレアエレオノール

ルその他大勢貰っちゃえ。だって僕、貴族だもん……………てなわけです。カリン様ちよっとお耳を拝借ボソボソ…「あん」…で、カジノ…「あっ耳は…」…で、公爵…「はうっ」…です！如何か？カリンさま！！」

「はあはあ…見事です、ハイン…いや、婿殿！カトレアとエレオノールはのしつけて渡します。この烈風、感服しましたわ」

「フッフッフ…そちも悪よのう？ハイン屋」

「いえいえ、烈風様には叶いません。ひとつよしなに……………」

「えっ？ワシいらない子？あれっハインをブチのめすとかは？あるえ〜？」

「何いつてらっしやるのアナタ？カトレアとエレオノールを祝福に来たんじゃありませんか？嫌だわアナタ…持病の痔のせいかな忘れっぽいのよね…ではハイン、二人を宜しく願います。母として二人の幸せを切に願いますわ…ヨヨヨ……………さ、帰るわよアナタ。じゃね〜ハイン　ちゅっ」

「えっ？あれっ？ワシ…ワシ…フゴオグハアツ……………きゅっ」

カリーヌ・デジレは公爵を小脇に抱え、グリフォンに飛び乗り、高

笑いをしながら帰っていった。

「何ていうか……セーフ……」

「お母様がパワーアップしましたわ……」

「気を付けるよエレン……カトレアも必ずああなる……」

「強く生きていこうね……ハイン」

「ああ、頑張ろう……エレン……取り敢えず、みんながかえる前に――
発やろう、そうしよう」

「……あの……えっと……はひ……いひゃい」

エレオノールがあれだけ婚約破棄されようと、ハイン一味の中では常識人だったというお話。

その後、色々あったが、身なりを直し、仕事に戻った。

まずエレオノールが取り掛かる研究は污水处理である。

この方法自体は単純な仕組みで、まず沈殿層を作り、汚水の中にあるものを沈殿させる。

緩やかに流し、最終的に上澄みな水、汚水、沈殿汚物に分け、それぞれ微生物で有機分解し、消毒し、河川へ戻すのだ。

施設自体は難しくなく、土メイジがいれば事足りる。ポンプに関しては、エンジンポンプはハインは導入するつもりはなく、サイフォンの原理を応用するつもりである。

問題は、微生物と消毒の部分で、化学、生物学の知識が無いエレオノールに、まずそこから植え付けなければならない。

その知識的問題が解決されれば、エレオノールならばあつという間にブレイクスルーとなるだろう。

と言う事で、現在ハインは寝る間を惜しんで、地球から持ち込んだ専門書をハルケギニア語に翻訳している。

大まかな概要を掴んだエレオノールは、必要なデスクや本棚、仮眠用ベットなど、必要な備品をハインに頼んだ。

ハイン達が研究所でこそこそしている間に、刻は夕刻となり、日は陰っていた。

「ハイン、戻ったよ。取り敢えず納得して来てもらったよ。どうぞ、お入り下さい、コルベール先生」

マチルダが連れてきたのは、彼女の元同僚であるコルベールである。ハインは数々のヘッドハントを計画する中で、一番に名を挙げたのは彼の名前であった。

彼がかつて関わった「ダングルテールの虐殺」が自身のトラウマとなり、常に贖罪と言う亡霊に取り付かれており、ヘッドハントに容易には応じないと言う事はわかっていた。

だが、ハインはコルベールを口説く際、「ダングルテールの虐殺」の事を敢えてマチルダに言わせ、トリステイン王国の人々が幸せになる事業を行う、それに関わる事が贖罪の一端になるのではないかと。死人は生き帰りはしないのだから、と。

それに、話の節々に「研究にはオーバーテクノロジーが沢山あるかもね？」を交じりこませた。

これにて「ほいほいついてきて構わないのか？俺はオーバーテクノロジーなんか臆せず喰っちまう男だぜ」作戦、ミッションコンプリートである。

NEW ハイン一味に炎蛇のコルベールが加わった。

コルベールが恐る恐る研究所に入ってきた。

「初めまして。俺が主のハインリヒだ。ハインって呼んでくれて構わない。そこにいるマチルダと、エレオノールは俺の婚約者ではあるが、優秀な仕事のパートナーでもある。あと二人いるが、それは後日ゆっくり紹介するよ。まずはジャン・コルベール、ようこそハイン一味に」

「はいっ……私の過去もご存じだとか…ハイン様、私の贖罪の場所を与え「もっと肩の力抜こうや、コルベール先生」…えっ？」

「あのさ、あなたの苦悩はわかるよ。だけど、死んだ人間は生き帰りはないんだ。事件自体は不幸だよ？でも、贖罪つてのは生きてこそ出来るのさ。そのやり方は俺にはわからんさ。でも、あなたには出来のいい頭があるんだ。それを使ってトリステイン王国に、そこに住まう人々に奉仕しろよ！卑屈になるなよ！もっと熱くなれよっ！！」

「分かりました。…この炎蛇のコルベール、その首貴方に預けるよ。頼むよ、ハイン」

「ああ、それでいいのさ。コルベール……面倒だしジャンでいいな？ エレオノール、ジャンは優秀だから、いいパートナーになるぜ

？」

「ジャン、宜しくね。ハインが言う方なら最初から遠慮はしませんよ？ 私はエレオノール…ラ・ヴァリエールの間人なれど、今はただのハインの恋人エレオノールです。呼びにくければエレンで結構です。では、改めて宜しくね、ジャン？」

「まさかミス・ルイズのお姉様だとは…いえ、今はただのエレオノールでしたね。一緒に立派な研究を致しましょう。宜しくお願ひしますエレン」

辺りは漸く和やかな雰囲気になったが、マチルダがその空気を切り裂いた。

「ハイン、マザリーニ枢機卿からコンタクトが来たよ。どうやらアンリエッタ姫が来週、ゲルマニアにてアルブレヒト陛下と会談に赴くんだとさ」

一同押し黙る。ジャンだけはおろおろしている。

「とうとう来たか…さあ火種が燻るぞ。戦争の匂いがぶんぶんするな。やっと暴れられるな…みんな、屋敷に戻るぞ。カトリア達も交えて話し合いだ。ジャン、悪巧み倶楽部へようこそ？ あんたも一緒に来い」

ハイン一味は屋敷へ向かい、夜は更けていった。

とうとう史実通り、時代が動き出す。

二つの月が妖しくド・オルニエールを照らしていた。

次回予告

『ウオオオオオ！！み な ぎっ て き た！！！！！！
！！こほん…すまん取り乱した。改めてザルバだ。とうとう俺が暴
れるときが来た！！次回の-ZERO-の無責任男は「このヒゲ野
郎！！炉は俺じゃねえ、真性の炉はお前だ」だ、必ず読めよな！！』

?? 俺の人生のフローチャートは、全部が全部バッドエンドへの分岐しか無い

次回はお待ちかね。みんな大好きヒゲ子爵の登場でっせ。

今回はまあ閑話的なお話でした

?? 安心しな、俺の凶器は身体ひとつだ。…いえ、山ほど持っています。

ルイズ・フランソワーズは渴望していた。人から求められる事を。必要とされる事を。そして昨夜、アンリエッタが忍んできて、直々に”お願い”をされた。ならば私は受けねばならない。だって、私は”貴族”なのだから。

ルイズ・フランソワーズを指すゼロと言う言葉の意味、曰く魔法発動率がゼロである。曰く魔法の才能がゼロである。曰く……全てが彼女に否定的だった。

「私はゼロじゃない！」

ルイズ・フランソワーズは平賀サイトを喚びだした。ガンダールヴ…神の盾と呼ばれる始祖の使い魔と同じルーンを持つ人間を。

「私はゼロじゃない！」

普通、魔法が失敗したなら、何も起こらず、ただ魔力が霧散するのみ。だが、ルイズ・フランソワーズは爆発が起こる。”どんなスペル”を唱えようとかだ。

「私はゼロじゃない！」

「私はゼロじゃない！」

「私はゼロじゃない！」

「私はゼロじゃない！」

「私はゼロじゃないって誰か言っつてよぉ！……！」

「ルイズ！！ルイズ！！起きろ！！……！」

「私はゼロじゃ……あれっ？ あっサイト……！」

悪夢にうなされていたのか、うなり声を上げて寝ていたルイズを、平賀サイトが揺り起こした。

「大丈夫か？死んじまうかってくらいうなされてたんだぜ？」

ルイズの肩に手を置いたままのサイトが、心配そうに彼女を気遣う。

ぼてん……と平賀サイトの胸に頭を預け、ルイズは目を閉じた。窓の外はまだ暗い。

「恐かった……凄く恐かったんだ。サイト？今夜は側にいてくれな
い？」

「えっ……えっと……おう！また怖い夢見ないように側にいるぜ！」

「ありがとう……サイト」

ルイズのベットには、盛り上がったシーツに山が二つ。

「んっ……サイト？ちゃんと側にいてね？」

ルイズが甘えたような声で、平賀サイトの胸に擦りついた。

「……いや、こんだけがんばりがために縛ったら、何処にも行けね
えし……」

「だってえ…嫁入り前の美少女だもの、当然でしょ？有り難く思いなさい？さっ寝ましよ……ムニャ」

「頑張れ相棒…俺は見なかった事にするわ」

「俺はお前の優しさが痛いよ……ってか食い込んでるから！サイトのサイトが血の気を失ってるから！！リアルが全然充実してないのにモゲルからあ！！！」

翌朝、トリステインは晴れ渡っていた。

トリステイン魔法学院の前には、馬が二頭準備されており、その前に三人の少年少女が旅支度で立っていた。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ラ・ヴァリエール、名門ラ・ヴァリエール家の三女である。ツンデレヒロインNo.1である。

ギーシュ・ド・グラモン、軍属の名門グラモン家の四男である。ちよっとオツムの弱いナルシストである。

平賀サイト、地球は東京からルイズに召喚された使い魔の少年である。ハインを心の師匠と崇めるさくらんぼBOYである。

ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド、羽帽子に口髭、長身

の美男子であり、トリステイン王国グリフォン隊の隊長である。年齢は26歳、最近の悩みは、目立たないが下腹がぶよんとしてきた事。

「誰このオッサンはあ!?!」

突然のワルドの登場に、思わずユニゾンで突っ込むサイトとギーシユ。

「ワッ…ワルド様あ?」

ワルドはルイズをひょいと抱き上げた。

「はっはっは!相変わらず羽根のように軽いな!」

その時平賀サイトは見たッ!!

あ…ありのまま今、起こったことを話すぜ!

『ワルドと言うオッサンが、ルイズを抱き上げながら、ワルドのワルドを膨らませていた』

何を言ってるかわからなーと思うが、俺も何が起きているかわか

らなかった…頭がどうにかなりそうだった……

ロリだとか、ペドだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ…

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

そんな、史実とは若干ずれた時間を経て、ルイズはワルドのグリフオンに乗り、他の二人は馬に跨り、アルビオン王国への玄関口であるラ・ロシエールへと出発したのだった。

ワルドは焦っていた。もう脇汗びゅびゅびゅびゅ出る程に焦っていた。

ワルドはルイズの一件に潜り込み、ルイズの婚約者であることを口実に、ある計画を遂行しようとしていた。

その第一段として、仮面を被った自らの偏在に、荒くれた傭兵を雇い、休憩しているルイズ一行を襲わせるというモノだ。

因みに、ラ・ロシエールの宿屋、アルビオンに上陸してから各所に傭兵と、偏在を配してある。

ルイズのピンチを何度も救い、邪魔臭い使い魔やナルシストを消してしまう。

つり橋効果でルイズはワルドにズッキュユンツ！！となること山の如し！である。

ワルドはレコンキスタの一員であり、今回の任務はルイズの奪取、件の手紙の入手、そしてウエールズ暗殺である。

手紙はトリスティン王国の婚姻外交をぶち壊し、火種を残し、ウエールズ暗殺はアルビオン王国王党派の精神的支柱を無くし、亡骸をクロムウエルの指輪で傀儡に出来る。

だがッ！ワルドにとってはそんな事はおまけに過ぎない。

何はなくともルイズ奪取！これは絶対だ。

あの幼児体型…あの舌足らずな声…何よりあの素直じゃないツンデレ…ああ、私の為にデレておくれ…ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズ！うああああああああああああああああん！！！！！！

クンカクンカ！！クンカクンカ！！スーハー！スーハー！！いい匂いだなあ…くんくん

ルイズ・フランソワズさんの桃色ブロンドをクンカクンカしたいお！！！（以下略

そんな色々駄目なワルドだったが、今現在ラ・ロシエールまで半ばきた場所で休憩を取っていた。

彼はここで休憩するために、わざわざ使い魔達を馬にし、グリフォンでぶっちぎったのだ。

なのに………

「ほーらルイズ！焼けたぜ〜！」

「わーサイトありがとう このお肉おいし〜」

「はっはっは！このギーシュのワルキューレでウサギを追い詰めて、

サイトが仕留めたのだ！まさに友情の勝利ッ！！」

「え〜なんかギーシュってゲイっぽい発言 きも〜い！！」

「ギーシュきも〜い！！」

「ぼっ僕はストレートだあ！たつたしかにサイトの黒髪は綺麗だが
…僕はモンモン一筋だッ！！」

ワルドは思う。何この無駄に和むキャツキャウフフ空間は…傭兵は
どうした！

来なかった…

ラ・ロシエールでも来なかった…

飛行船に乗るまで一切来なかった……

自分の遍在と肩を叩きあった。

もう一度言う、ワールドは焦っていた。

時はさかのぼり、ここはド・オルニエールのハインの屋敷である。

まだあたりは若干くらいが、ハイン一味は皆、食卓を囲んでいた。

「んでジェシカ？商会のほうはどうなってる？」

「んとね、カトレアが頑張ってるから…もっきゅもっきゅ…カトレアから聞いて…もっきゅもっきゅ…あたしは料理と研修に専念してるの…もっきゅもっきゅ…」

「わっわかった…頼むジェシカ…口の中にモノ入れて喋るなよ…じゃカトレアよろしく」

「はいあなた　かねての計画通り、新種の作物の作付けと、このド・オルニエールで従来から生産されている小麦、芋、玉葱、人参などは全て私達の紹介で一括買い上げ致します」

所謂、農協のようなシステムである。一括に買い上げる事で、価格は安定し、農家は一定の収入を見込めるため、概ね好評だった。

「それで、商会は既に立ち上げています。名前は「ゴールデン商会」です。本拠地はド・オルニエールですが、飲食店の店舗管理の関係で、実質的に本部はトリスタニアのブルドンネ街のままになります。そして、焼きそば屋は従来通りフランチャイズ展開のままですが、これからカレー屋「ココが一番やねん」を直轄経営で展開していきます。それに合わせ、米の早期商品化、スパイスのマニユアル化、付け合わせの確立など、課題は山積みですが、一号店オープンまで約一年とみています。今はこれだけですな」

「ありがとうカトレア、ジェシカ。お前らなら大丈夫さ。とにかく、身体壊さないようにな？」

「はい」

「後はエレンとジャンだが……うわっヤバイ笑顔浮かべて密談してやがる…あれはマッドや…真性マッドサイエンストや…つか二人とも常に白衣着用って……ダメだ…ほっとこつ」

ハインは見て見ぬ振りを決め込んだ。エレンはきつとそのうち、「ありえないわ!？」だの「…ロジックじゃないのよね」とか言い出すのだから。

「みんな、少し聞いてくれ」

一味はハインに注目する。ハインは立ち上がり、紅茶で喉を湿らせた。

「二・三日で終わると思うが、アルビオン王国に出張してくる。同行者はマチルダと竜っ子を一人だ……」

「またマチルダ……ずるい……」ジエシカは包丁をキラリと光らせた。

「あなた……少しO・H A・N A・S H Iが必要ね」「カトレアの目がキュピーンと妖しく光る。

「ずるい……ずるい……わたしも……いきたい……」最近幼児退行の回数が多いエレオノール。

「ああもう……」二泊三日、初夏の風が薫るアルビオン王国グルメ旅に行くわけじゃないッ！戦争だ。実際は起こる前に潰すがな。んでまあ、足に竜っ子と、作戦補助にマチルダが久しぶりにフーケに戻って貰うのさ」

「そういう事さ！ハイン、枢機卿から例のアイテムは貰ったからね。西の森の件はバッチリさ」

「うむ、で、今回のミッションは、レコンキスタの頭で偽虚無使いのオリバークロムウエルの暗殺とアントバリの指輪の奪取。同時に皇太子ウエールズの暗殺阻止、保護。最後は電撃的にマザリーニのアルビオン入りってとこだな。因みにエレン達の妹のルイズが、アンリエッタのパシリでアルビオン入りするが、裏で援助はするが、基本は放置だな。まあ以上」

「可哀想にレコンキスタ……」

「クロムウエルに同情しますわ」

「おちびまで手を出したら許さないんだからね！」

「ハインくん……なんか君が悪い奴みたいになってるね……」

「わかってくれるのは先生だけですよ……後で異国の育毛剤わたします……」

NEW ハインはコルベールに同情された。

「みつ……みんな……わたしは旅の間、ハインと抜け駆けしっしません

「!!」

「いい心がけです。まあ戻ったら身体検査ですからね 抜け駆けしたら……可愛がり……ですよ?」

「はっ…はひ…いひゃい」

どつちやら妻も納得したようだ。

そしてここはド・オルニエールの屋敷側にある鬱蒼とした森林、通称、「竜の森」である。

「お〜い!! 竜っ子でてこーい」

ハインが叫ぶと森の奥からガサガサと音がした。

暫くすると、深紅の巨大な竜が三匹現れる。普通の火竜は小さな羽しかないのだが、この三匹は大きく立派な羽根を持つ。そう、火韻竜である。

《なんじゃハイン? わらわ達は忙しいのじゃ。いま美味そうなおークを追い掛けているのじゃ》

《お兄ちゃん最近遊んでくれないんだもん…ユンは寂しいのですー》

《オーク マルカジリ》

初めて見た巨大な韻竜に、マチルダは怯えた。まさか、あの三人の幼女の本当の姿がこんなにも凶悪だったとは。

「はっ…ハイン？本当にこんな大きな竜を一人で倒したのかい！？」

「うーん、まあな。だけど殺す気は無かったから、本気は出してないぞ？」

「ええっ！？」

《本当なのじゃマチルダ。あるじ様は化け物なのじゃ。ばんちときつくでわらわ達をけちよんけちよんにしたのじゃ。ヒトの言葉でいうと「その所業、まさに外道の極みツ！！」なのじゃ》

《痛い…でも嫌いじゃないかも？なのですー》

《あるじ様 ユラ マルカジリ》

「あんだ…ホント規格外だね…」

「ちよっ…良い事してなんなのこの言われよう…いいもん！マチルダなんかもう知らないんだからね！ツーン！」

出た！ハインの断固拒否の構えであるッ！

「はいはい…で、何しに来たの？」

おーっと、マチルダには通じなかったッ！！ハイン涙目だッ！！！

「グスツ…アルビオン行くのに…グスツ…誰か一人…グスツ…付いてきてきて…欲しい…ヒゲッ………」

《わらわは無理じゃ。カトレア達の送り迎えがあるからの》

《私も無理です〜エレンお姉様の実験で火を吐くのです。〜ご褒美くれるのです〜》

《アルビオン マルカジリ》

「じゃ…じゃあユラに頼むかな？ シカいっぱい食べさせてやるぞ

「！」

《シカマルカジリ！シカマルカジリ！》

ユラは身体を揺らして喜んでいる。これでアルビオン王国行きのメ
ンツは決定である。

「よし、マチルダ、これを着ろ」

ハインがずっと取り出したのは、黄色いツナギに黒いサイドライ
ン、白いadidasのスニーカーだ。

これはブース・リーを敬愛する映画監督、Q・タランティーノが、
自身の作品「キ・ビル」において、主演のユマ・ターマン演じる
復讐の剣士に着させたという逸品であるッ！

「こそこそ……」

「どっ……どうかな？にっ……似合う……かな？ちょっとピチピチするけ
ど」

ぷるぷる……ハインの身体は小刻みに震えていた。

「やつ…ヤック デカルチャー…ッ!!」

「ひいつ!!」

「マチルダのたわわなバストと人外的にくびれたウエスト!!そしてこの突き上がるかのような見事なヒップ!!それを殺人的な迄に強調したボディラインを実現したこのスーツ!!完璧…完璧だよマチルダ…いや、マチルダさあ…ん!!今俺は…猛烈に感動しているッ…!!」

ハインの目に炎が浮かんでいた。

「あつ…ありがとうハイン。あれ…ねえ?…なんで手をワキワキしてるの?…ほらハイン?アルビオン行かなきゃ…ね?ね?」

「フオオオオ!!マチルダさあ…ん!!…俺の大リーグボールを一号から三号まで全て食らいやがれ…!!」

久しぶりのハインの必殺技、ルパンダイブがマチルダに炸裂したッ!!

「あつ…あん…ハイン…出張中はダメだったば…カトレアからお

仕置……… あん……… 大リーグボール投げちゃ……… らめ………
~~~~ツ!!」

現場から少し離れた太い木の木陰、顔を少しだけ覗かせる娘がいた。

「飛雄……… げふんげふん……… マチルダ、見ましたわよ？可愛がり、決定ね」

マチルダ終了のお知らせでした。

こうして、ハインのアルビオン行きのスナリオが始まりを告げた。

いま動き出した史実とは離れたイレギュラー、ハインリヒが胎動を始めた。

殻を突き破り、生まれ出るは天使か悪魔か………



## 次回予告

「ザルバだ……俺は大変ご立腹だ。何故ならハインのバカが全然動かないからだ。本来は今回、髭野郎をブチのめす予定だったのにだ！なにが五千字だし……次回に持ち越しじゃね？だ……ふざけんなハイン！ふざけんな駄目作者！メタ発言？知るかボケ！メタ発言しちやダメって法律あるんですかあ？あつたら言ってください！ケツ……次回の-ZERO-の無責任男は「こらっ髭親父！！この恨みはてめえで晴らす！てめえのケツの穴に牙狼剣ブチこんでやる！Byザルバ」だ。必ず見てくれよな！」

?? 安心しな、俺の凶器は身体ひとつだ。…いえ、山ほど持っています。(後

ワルドが…ワルドが…

ポルナレフのテンプレは一度やりたかった。後悔はしていない。

??  
ワルド、君がッ 泣くまで殴るのをやめないッ!...と、使い魔の少年は  
なかなか話が進まない。文字数はあるけれど。

?? ワルド、君がッ 泣くまで殴るのをやめないッ!!...と、使い魔の少年は

ハインはド・オルニエールを出発し、ラ・ロシエールを目指していた。

ユラの背に乗り、上空二千メートルを進んでいる。

遙か下、トリステイン魔法学院より、ルイズ一行が出立したのを確認し、ハインはワルドの手配した傭兵達が臥せているであろうポイントへ飛んでいく。

「うう…ハイン…寒いよ？この服のチョイス、失敗したんじゃない？」

ガタガタ震えながらマチルダがぼやく。

「そそそそんなこと…カチカチ…ああある訳がが…カチカチ…なかるうが…カチカチ…」

鼻水が凍り、歯をカチカチ言わせながらハインが叫ぶ。どう考えても凍死寸前にしか見えない。

『ハイン…つく前に死なないでくれよ？』

ザルバの表情は変わりはないが、呆れているように見える。

《あるじ様 のらいぬ くさいくさい》

突然ユラがハインを振り返った。

「おっナイスだユラ！傭兵を発見したらしいな。ユラ！静かに降下して、奴らが隠れてる場所の300メートル後方の林に降りてくれ」

《あるじ様 シカ シカ》

「おっおっ！ラ・ロシエールついたらたらふく食べさせてやるよ！」

《わかった がんばる》

ユラはハインの言い付け通り、ちゃんと林に降りた。尻尾をブンブンと振っているのを見ると、どうやら嬉しいらしい。

「はあくやっとな降りれるか？助かったよホント……」

マチルダが恨めしそうな不満を叫ぶ中、林に無事降りた。

林の中から、前方にある小高い岩山の、街道から見れば丁度裏側の  
中腹に、20人程の人影が見える。

見た目は農民を装っているが、それぞれの手には槍や剣などを持つ  
ている。間違いない、伏兵である。

「ハイン、どうするんだい？あたしのゴーレム出すかい？」

「いや、マチルダのゴーレムはアルビオンで暴れて貰うわ。ここは  
監視がいるかも知れないから、フーケの存在はバラしたくない。マ  
チルダは裏の世界じゃ有名人だしな」

そういつてハインはマチルダにキスをした。

「あんまりあたしを甘やかさないでくれよ？ 顔がにやけたまま  
戦場なんてしまらないだろ？」

「ははっ…… 違いない。だけどマチルダは虐め甲斐あってなあ？」

「もっ…… いじわる」

そんな拗ねるマチルダが可愛くて言ってるんだけどなあ………という言葉を飲み込み、ハインはユラを呼ぶ。

「ユラ？道の反対側にも同じくらい悪い人がいるから、やっつけてくれるか？」

ハインはユラの頭を撫でながら優しくお願いする。

《わかった あるじ様 悪い人 やっつける》

「ユラ？暴れてもいいが、食べちゃダメだ。ばつちいからな？後でシカいっばい、いいいな？」

《悪い人 ばつちい ユラ 食べない ユラ いい子？》

「ああ、いい子だ。よし、ユラ、行け！」

こくりと頷き、ユラは瞬く間に上空に消えた。

「あんだ、いい父親になるんじゃないかい？」

「ははっかもな？早速子づくりするかい？」

「ばっ！バカいってんじゃないよ！…あっ後でなら…いいけど…」

「可愛いのが可愛いのが…よし、マチルダ成分吸収したし、張り切  
っていつてくるわ！じゃな」

赤面したマチルダを残し、ハインは人影伏せる岩山に走りだした。

その頃、街道挟んだ反対側の岩山。

「しかし、ぬるい仕事だなあ…たった数人待ち伏せて挟み撃ちだ  
る？」

「まあな？だけどまあ、こんな楽な仕事で20エキューだろ？ター  
ゲットのガキ共じゃ悪いが、たまにゃいいだろうよ」

「違うない。今夜はいい女抱けそうだな」



ら引き裂かれ、血の色のような鱗に包まれた巨大な火竜が現れる様を、ただ黙って見ているしかなかった。

最も、それが彼らの最後の光景になった。

何故なら、ユラより吐かれたドラゴンブレスにより、身体が内側から一瞬で蒸発したのだから。

後に残ったのは、つまらなそうに欠伸をする真紅のドラゴンだけだった。

《悪い人 やっぱり くさい ハイーン シカ…》

ユラはまたもや上空に消えた

ユラの咆哮が空気を震わせる。手前の岩山にいた傭兵達が、ありえない状況に慌てだす。ドラゴンはこのハルケギニアでは恐怖の存在なのである。

そのドラゴンの怒りの咆哮が、こんな平地で聞こえるわけが無い。だがあの咆哮は？

「なっなんだあの声は！！」

「ドラゴンの声に聞こえたが……」

「バカ野郎！慌てるなッ！！隊を乱すな！」

リーダーらしき男が必死に諫めようとするが、ざわざわした騒ぎは収まらない。

「ドラゴンより、今の自分の身を案じなよ？」

少し高い男の声が響いた。ドラゴンに恐怖していたのだが、男には何か目を逸らすことが出来ない何かがあった。

そこには、180センチを優に越えた綺麗な短めの赤髪を後ろに流した端整な顔の若者が立っていた。

その男は、黒いレザーの上下に、純白のロングコートを身にまとっている。コートには特徴的なオブジェクトが裝飾されており、朱色の鞘に納められた反りの無い長剣を持っている。

若者は挑戦的な笑みを浮かべながら、傭兵たちを静かに見ていた。その若者がゆっくりと口を開いた。

「…………レコンキスタ…その前座にしては、何というか…その…弱すぎじゃねえか？弱いもの虐めはなんかなあ。趣味じゃあない」

赤髪の方はめんどくさそうにぼやいた。

『なら、とつととやっちまえよ。マチルダ嬢が待ってるぜ？』

「ゆっ指輪が喋ったあ！？だっ誰だ貴様！」

「あゝあゝ怯えちゃって…………まあ、怨むなよ？怨むなら、仮面の男を怨んでくれよな？」

赤髪の男はいつの間にか、悪魔のような獰猛な笑みを浮かべていた。

「なっ何を言ってやがるんだああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

赤髪の男…………ハイインリヒが前傾姿勢になり、傭兵の集団に飛び込ん

だ。

白い閃光が男たちの間を駆け抜けた。

パチン……………

「こんな雑魚に牙狼剣を使ったら、鎧もさぞがっかりしたことだろうなあ」

牙狼剣を鞘に戻したハインは、牙狼剣を見やり、気の毒そうに呟いた。

『あゝあ。つたく、傭兵に同情するぜ……………』

「だなあ……………」

『お前が言つなよ、悪党が。はっはっは』

「ひでえ言われようだあ。マチルダに慰めて貰おうと。特に下半身を重点的に……………」

『発言が悪党だよな。レコンキスタも憐れだな』

全く緊張感の無い主従が、マチルダが待つ林に歩き始めた。

残された男たちの、首から上が横にずれ、そして落ちた。

《あるじ様　悪い人　燃やした》

ユラが褒めて！褒めて！と言わんばかりに尻尾を振って空から降りてきた。

「お疲れユラ、偉かったぞ？　後悪いけど、あそこに転がっている臭いのも焼いておいてな？　ばっちいからな？　そしたらシカ買いに行こうな？」

《うん！うん！　ユラ　臭いの　焼く　シカいっぱい　ハイン好き》

ユラは無邪気に死体を焼きにいった。ドラゴンにとって、人間の命の重さなど、羽毛より軽いのだ。

ただ、自分より強者に惚れ、そして尽くすだけだ。

マチルダに合流したハイン一味は、さっさとその場を後にした。

血の匂いすら残さずに……

場面は変わり、こちらはルイズ一行である。

現在一行は、休憩を終え、ラ・ロシエールに向けて馬を進めていた。

二頭の馬が早駆けしながら走っている。一頭はギーシュが、もう一頭はサイトとルイズが二人乗りしている。

その10マイル上空を、ワルドのグリフォンが、馬に並走するように飛んでいた。

ワルドはまたルイズを乗せて、いや、ルイズたんを自分の前に乗せ、ワルドのワルドと、ルイズたんの小さくて可愛らしいお尻の密着感を楽しんだり、グリフォンを駆る以上、全く自然な流れでルイズたんの後ろ抱きにし、ルイズたんのピンクブロンドや、可愛いうなじをクンカクンカしたりしたかったのだが、何故かあの使い魔の少年

や、薔薇少年が強硬に、「ルイズが寒そうだし、目的地が近いから馬に乗せる」と立ちほだかったのだ。

サイトとギーシュは、出発の際にアイコンタクトを交わしていたのだ。

（サイト、あの髭はまずいよ。この僕がどん引きするくらいの性癖をおもちだ）

（わかってるギーシュ…あいつは最悪のペド野郎だ…ルイズの婚約者かなんか知らねえが、俺たちが何とかしないと！）

ワルドは破ってしまったのだ。全宇宙で不文律の…YESロリコンNOタツチの法則を…。触れずに愛でるなら変態という名の紳士と言い、むしろ尊敬すら集める。だがッ！！触れてしまえばただの変態である。

「さぁルイズ！ラ・ロシエールに向けて出発しようじゃないか！」

ワルドがそう言いながら、ルイズをエスコートしようと手を伸ばしたその時…

「あいたたたた…うう…これは困った。ああ困った。どうしよう？」 棒読み

「おお、いったいどうしたんだい？我が友サイトよ？」 棒読み

「馴れない馬で走ったから、僕のお尻は限界だあ。これじゃあ馬をあやつれない！さあどうしよう？」 棒読み

ちらっ…ちらちらっ…

何かを訴える子犬のような瞳で、サイトとギーシュはルイズを見やる。

「ああもう！仕方ないわねえ！この宇宙で一番優しいご主人様が、不甲斐ない使い魔を乗せてあげるわ！感謝しなさいよね！」

「お〜〜！よっ！」 サイト

「お〜〜！よっ！」 ギーシュ

「トリスティンいち！！！！！！」

「なにようもう…あつ当たり前のこと言わないでよね！っふぶ…」

全くツンデレほど載せやすい人種はいないのだ。ちよるいもんである。

さあさあとルイズを馬へ導きながら、サイトとギーシュはこっそり後ろを振り返り、地団駄踏んで悔しがるワルドに向かってニヤリと笑った。

「計画通りだ」

上空のワルドは、何もかもうまくいかない不幸に、頭の中で思い付く限りの悪態を突きながら、結局、何も得られない虚しい時間を過ごし、ラ・ロシェールについてしまった。

ラ・ロシェールについた一行が、ワルドが手配した宿屋に向かう。

アルビオンへ向かう船が出航するのは、明後日の昼だからだ。

一日中馬で走り続けた一行は、ぐったりと体力を失い、サイトやギーシュ等は、今すぐ眠りにつきたいくらい消耗していた。

宿屋にやっとたどり着き、扉を開けたその先には……トリスティン

魔法学院が誇る、トライアングルメイジの凸凹コンビ、キュルケとタバサが待っていた。

「なっとなっとなんでアンタ達がいるのよっ!」

「だってえ〜ダーリンがどこかへ旅支度で出かけるのが見えたんですもの。この微熱が黙っていられるわけないじゃない?」

「……………心配」

全く対称的なコンビであるが、この二人の絆は深いのである。

「だからって!これは姫様の密命だからお忍びなの!秘密なの!わかったかしら?ツエルプストーリー!わかったら帰りなさいよね!」

「いやいや、全部話してるじゃん……………」

「自爆ってやつだね?」

「あらあら、ヴァリエールらしいわ」

「……………単純」

「キイイイイイ!!」

何だかんだで有耶無耶に、凸凹コンビが強制加入となってしまうた  
ルイズ一行だった。

またもや蚊帳の外なワルドは、影でハンカチを噛んで男泣きに泣い  
た。またイレギュラーがはいり、自分の思うままにならない。

だが、そんなワルドに追い打ちをかける出来事が起こった。

さあチエックインだと部屋割りの話になったときだ。

「ねーヴァリエール…いやルイズ？旅は道連れ世は情けと言っじゃ  
ない？ここはいつそ、わだかまりを捨てて、仲良くガールズスト  
クをしたらいいと思うの？如何かしら？」 棒読み

「……………賛成」 元々棒読み

「なんでツエルプストーリーと一緒に…嫌よ」

「……だって貴女、こんな素敵な婚約者がいるなんて…モテモテな美少女であるルイズに、微熱としてはその極意を是非ともご教授して欲しいの…ダメ？」 超棒読み・こめかみに青筋

「……ルイズの美貌…興味津々」 既に読書中

「もっ…もう！そんなに言うなら、仕方なく、仕方なく一緒に泊まってあげてもよくなってよ！おほほ〜！」

「やった〜ありがとう、ルイズ！」 怒りの余り裏声

「……わーい」 食堂に目が釘付け

そんなやり取りの後、女性陣はさっさと部屋に消えていった。

どうしてこうなった……ワルドは苦悩する。

本来ならば、婚約者であるという事柄を大義名分に、当たり前のようにルイズさんと一緒に泊まる。

そして、ネグリジェ姿のルイズにハアハアしたり、ワルド必殺の殺し文句でメロメロにし、その勢いでプロポーズする。頬を赤らめた

ルイズを抱きしめ、「ルイズ、君がほしい」「ああワールド様、いい  
ませんわ。だけど…優しくしてね?」と、めくるめく世界へとルイ  
ズたんを誘う筈だったのに……

その時ワールドは見たッ!!あの憎たらしい使い魔の少年と薔薇少年  
がこちらをニヤニヤしながら見ているのをッ!!

「上手くいったな、サイト」

「ああ…問題ない」

どこかの秘密組織の総司令と副司令のようなやり取りをしながら、  
少年達は消えていった。

サイト達は、キュルケ達がやってきた際に、またもや機転を利かし  
て、キュルケにワールドの性癖を洗い浚いぶちまけたのだ。

そして、キュルケからの交換条件の「学院に戻ったら、サイトと一  
日デート・御触りもアリ」を鼻の下を伸ばしながら承諾したのだ。

後は先ほどのやり取りを行い、ワールドに口を開かせる前に決着を付  
けたと言っわけである。

因みに、深夜にワールド以外がキュルケの部屋に集まり、ルイズが見えなかったワルドの真実を、サイトとギーシュが洗い浚いルイズに密告した。

初めは信じなかったルイズだが、冷静に思い返すと、グリフォンで自分のお尻に、何か堅い棒のようなモノが当たっていたり、耳元でハアハアと荒い鼻息が当たったり、思い当たる事がたくさんあり、ルイズは恐怖した。

因みに、タバサも同じ条件に当たると、サイトが指摘した途端、あの無表情なタバサが、ガタガタ震えだし、一同を驚愕させた。

一方、隣の部屋から、何とかルイズ達の会話を聞こうと、ワルドが壁に耳を当てて必死に聞き耳を立てていたが、タバサとキュルケが何度もサイレントを重ねがけたために、全く聞くことが出来なかった。

レコンキスタのワールド、実はアルビオンに上陸する前に色々詰んでいたと言ってお話。

因みに、ラ・ロシエールでルイズ一行が襲われる筈だったのだが、やはりハイン一味がとっくの前に始末しており、いつまでたっても

襲っては来ないのだった。

ただ、某所でスタンバイし続けるワルドの遍在が虚しいだけだった。

ハイン一味が今何をしているか？

それは次のお話である。

## 次回予告

『毎度お馴染みのザルバだ。今回は俺の出番があった。少ないけどな？だが、次は無双の予感がするぜ！しかしまあ、ワルドの奴は…ゲロの臭いがプンプンするぜツ！次回、- Z E R O -の無責任男は、「お兄ちゃんどいて！ワルドを殺せないツ！！」だ。絶対見逃すな  
』！  
』

?? ワルド、君がッ 泣くまで殴るのをやめないッ!...と、使い魔の少年は

ワルドもマダオ化してきたのか!?

うゝワルドでシリアスが書けない。

あと、やっと皆が大好きなタバサがログインしました。

?? **ゼロ レクイエム〜虚無の鎮魂歌〜（前書き）**

すいません。ブリミルの設定にかなりの捏造が入ります。小説との整合性を気にしちゃいません。

物語の設定上やむを得ないと理解下さい。

無理！ってかたはお帰りください。

??  
ゼロ レクイエム〜虚無の鎮魂歌〜

清らかな清流が流れる箱庭の様な空間がある。

円形に、等間隔に建てられた12本の柱、それらは12の星座を表すのか、はたまた12に区切られた普遍の象徴：刻を表すのか、それは誰にもわからない。

それはただ、そこに存在しているだけである。

柱の中心には、ただぼつりと石造りのベンチがあり、見渡す限り芝生が生えている以外は、これといって何も無い。

その無機質なベンチに、一人の男が座っていた。ただ、虚空を見つめ、時間だけが過ぎていった。

彼の名前はブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ、かつてハルケギニアと言う世界を生き、そして死んだ。

まさか死んだ先があるとは、夢にも思わなかったブリミルだったが、気が付くと自分が自分の様で、そして自分以外も自分の様で、いつそ自らが森羅万象そのものであると言えるかも知れない存在。

そんな馬鹿げた存在に成っていると自覚した。

だが、自覚したことを、すぐに彼は後悔する事になった。

何故ならば、全てを感覚的に理解出来てしまうブリミルが、その感覚では目を背けたい事実が、深層心理で一瞬でも”知りたい”と願った場合、拒絶しよう”情報”として認知してしまうからだ。

それが神化したと言う現実であり、その存在そのものが普遍なのだ。それは生と死と言う概念から切り離され、ただそこに”在る”と言う事実のみ。自らの意志で消える事すら出来ない。

そのブリミルが、愛すべきサーシャに殺された後のハルケギニアを見てしまった。いや、識ってしまった。

それは、自らが行った行動の結末である。

ある事を渴望し、ひたすら研究を重ねた。

その過程で、それまでとは違う魔法原理を確立し、知性ある弱き生き物として、あらたな進化の方向性を記す事が出来た。humanとして。

ブリミルはただhumanの本能：即ち、生存するために生命をかけたのだ。

かつてブリミルはただの研究者だった。ただ己の知的好奇心を充たすために、humanの文化的進化の為の研究：と言う大義名分を掲げて。

結果、多くの人を幸せにもしたし、多くの人を不幸にもした。

研究者とは、種を植え、そして実を稔らせるまでが仕事なのだ。実を誰がどう料理して、満足するか腹を壊すか迄は責任は持たない。

そうやって、ブリミルは研究し続け、ある実験の結果、空間に穴を開けてしまい、そしてハルケギニアに放り出された。

humanであるブリミルがまず願った事、それは元の空間に戻る事であった。

エルフと言う種族に怯えながら、ひたすらブリミルは歪んだ空間を観察し続けた。

計測機等が無い中、ただひたすら観察し続けたのだ。

たまに歪みから吐き出される文明の利器、それらをこつこつ拾い集め、たくさんの装置を組み上げた。

そして、繰り返し実験をして導き出した結論は「向こうから来るものに次元は一定性を欠いており、所謂ブラックホールの様な物であり、その方向は常に一方通行」と言う事である。

つまりは、帰れない。

ブリミルは有りつたけの声で叫んだ。もはや言語ですらなく、絶望と言う負のエネルギーを、ただ吐き出すと言う行為でしかない。

humanの声がこんなにも大音量で出るのだろうか？いや、現実に出ているのだ。魂の咆哮と言える叫びは、彼の肺から空気を押し出し、声帯を震わせ、そして大気をも震わせた。

あるのはそう、虚無感

声という空気の振動は、喉を切り裂き、血を混じらせ、舌を根元から揺らす。それは嘔吐感を併発し、たまらず彼は黄色い胃液ごと噴き出した。

だが、それでも叫びは途切れはしない。腹のそこから、後から後から沸きいずる、黒いコールドールのような濁流。怒り、悲しみ、嫉妬、妄想、疎外、拒絶、虚無、虚無、虚無、虚無………

ブリミルは、ただの一滴の感情も、全て残らず吐き出してしまった。もはや、感情とやらは消え失せ、空っぽの身体は、不思議なもので充たされた。

自分は孤独である。

絶対的な孤独。

圧倒的な孤独。

この、ハルケギニアと言う世界に、自分と言う存在は、髪の毛先程の縁は無く、多次元の空間の中で、漕ぎだす船の終着する港は無いという孤独。

だから、ブリミルは渴望したのだ。

この孤独なせかいに、自分が歩いてきた足跡は一步もない。ならば、前に歩いて、自分と言う名の孤独を、自らが血族を増やす事でそれは孤独では無くなるのだと言う希望。

渴望せよ、希望を

渴望せよ、己の遺伝子がこの地を染める事を

それ以降、ブリミルはひたすら研究し、探究した。

自分と言うhumanが、エルフでもなく、亜人でもなく、この地に住まうhumanでもなく、太陽系第三惑星が自分たるhumanこそが血族を、この世界にちりばめよう！

ブリミルは火を御し

ブリミルは水を理解し

ブリミルは風を纏い

ブリミルは土を食らった

ブリミルたる虚無は、やがて希望たるペンタグラムを形作り、担い手たる四人の使い魔を従え、そして極めた。

足りない、エネルギーが

足りない、渴望が

足りない、貪欲さが

もっと、もっと、もっと、もっと……

そしてブリミルは理解した。力が足りなければ、食らえばいい。

human以外の「生命」を

歪んだ扉などいらぬ

歪んだ種族などいらぬ

与えてくれぬなら、切り拓くまで！

自分の子孫たる息子達に、秘宝に隠した力の奔流は継承し終えた。

後はこの虚無を払うのみ。

ブリミルは食らう。

humanとして、humanと溶け合った油膜を形成できぬバクテリアを分解するのだ。

ブリミルは放つ。器たる第四を芯に、第三に運ばせて、第一は盾となり、第二は……

ブリミルは流れ出る赤い何かを見た。ただ引力に従って、落下していく様を。

ああ、まだ己には流れ出る何かがあったのか。虚無と言う空虚だけだと思ったのに。

ああ、サーシャ、暖かいよ。心地がいいよ。悲しそうな顔をするなよ。俺は歓喜しているのだから。

俺は虚無じゃないのだ。

humanだ。

そして、さようなら。

その後ブリミルが識ったハルケギニアは、歪みに歪んでいた。

全く見当違いの概念で、humanは、エルフは、亜人は、明後日  
に向かって散り散りになった。

ブリミルは識った。在る場所から、ハルケギニアは切り替える線路  
を間違えた。

そのポイントを切り替えたのはブリミルだった。

何で俺を崇めている？

何で俺を憎んでいる？

ああ、そうか。虚無とは己の事では無かったのだ。

虚無とは、己が歪めたハルケギニアそのものなのだ。

識ったブリミルは目を背けた。

識ったブリミルは耳を塞いだ。

己が森羅万象ならば、間違えたポイントを切り替えるのは容易であったのに。

六千年たって気が付いた。

流れ出る血の熱さを忘れていた事に。

「満足したかい？ブリミル君。君が泣き付いてきて、僕は投げ込んだよ？毒が薬か分からない何かを。それは、退屈な魔界を彩ってはくれているが、君は何かを感じているのかい？」

ブリミルのいる空間に、無機質であり、慈愛である声が響く。

「はい、サタン様、虚無に染まった暗黒たるハルケギニアに、黄金が照らしています。それは温かく、無慈悲で、そして希望です」

「そうかい。ならば見るがいい。識るがいい。生命の輝きを。君が言う虚無なんていうありもしない幻想が、目の前で洗い流される様を！君が本来するべきだった役割をね」

「はい、サタン様。彼はhumanですから」

「そうかい。では僕は会議に天界に行くよ。最近五月蠅いんだ。ゼ

ウスの愚痴がね。彼がファイナーレを迎えたら、その時は君に働いて貰うからね?」

「わかりました。では」

「じゃあね」

またぼつりと、ブリミルはベンチに座っていた。

「あの男が右往左往しているのを見てみると、俺はいつたい何を悩んでいたのか、なんだか馬鹿らしくなるもんだな…」

ブリミルが手をかざすと、淡い光の珠が浮かび上がった。

珠の中には、何をそんなに楽しいのか、腹を抱えて笑う赤髪の青年と、釣られて笑う何人かの人間がいた。

ふっ…

気が付くと自分も微笑んでいた。

「そうだな…世界はこんなに暖かいもので溢れていたんだっ たな。」

「なんだか羨ましいな、ハインリヒ」

ブリミルは小さく呟きながらどこかへ消えていった。

ハイン達はユラに乗り、アルビオン王国はるか上空にいた。ルイズ達より随分と先行したハイン一味は、舞台の仕込みをしていたのだ。

昨夜の事である、夜警をしている衛兵が巡回しているが、貴族派に押され、その衛兵の数も若干少ないと見えるアルビオン王国王城ハヴィランド宮殿。ハインはそこにいた。

「しっかし、人、少なくてね？」

『まあ、台所事情がなあ。仕方ないだろ』

なんとハインは宮殿の廊下を堂々と歩いていた。ザルバとおしゃべりしながら。

「つか、ウェールズどこにいったよ……ヤバい……帰りたくなってきた。というか、早くウエストウッド行って生テファ見たい……嗚呼……」

もうむさいオツサンとかイケメン皇太子とか本格的にどうでもいい……テファ〜！よし、歌おうザルバ！おっばいおっばい おっばい おっばい ……」

『ハイン…お前、恥ずかしい奴だな…ここは魔戒騎士なんだからキリツとした事言えよ……』

「仕方ねえな…やあテファ、素敵なおっばいだね」キリツ

『駄目でしょ完全に。小物臭がぶんぶんすらあ…』

そんなこんなしていたら、やたら豪華な扉を発見したハインだった。

バァン！

ハインは扉を、それはそれは勇ましく開け放った！

「あれ？しなびたジジイしか寝ていないぞ？しまった……ハズレだな。つぎ行くぞザルバ」

『ちっ…だらしねえ。とつとと探すぞ』

また扉を閉めて出ていくハイン。

すっかり目が覚めていたジジイことジェームス一世、ハズレ扱いされたジジイことジェームス一世、なんだか少し、涙が出た。

「んんん！？ザルバ、今度こそアタリじゃね？だって、「ウェールズの部屋」って書いてあるぞ！」

『……………えええつ』

バァン！

扉が勢い良く開けられた。

しかし、腐ってもウェールズは軍人である。扉が開放された音で飛び起き、杖を抜き放っていた。

「貴様、刺客かあ！」

「いやちがつ」

「え？」

「え？」

『え？』

「じゃ何しにきたの？」

「ん？サイトシーイング…じゃなくて誘拐しにきたのだな」

「なっ…刺客じゃないか！嘘吐きめ！」

「違っつて、誘拐するけど殺さない。だから刺客じゃない。わかったら早くその恥ずかしいパジャマ脱いで着替えてほしい」

「誰が賊の言うことなんか聞くか！俺は腐ってもこの国の王子だ！」

パシャッ…ちよっ…パシャパシャ…やめて…カシャカシャカシャ…

「見るウェールズ。このマジックアイテム、デジタルカメラを！この小さな窓を見な？どうだ？そうだお前が写っているだろ？このマジックアイテムの凄い所はな、なんといくらでも複製できる所だ！つまり、この恥ずかしいクマさんパジャマの皇太子が、ハルケギニア中にばらまかれるという訳だ」

「行きます。すぐ行きます！」

「取り敢えずその前に、この人形に血かけて」

ハインは懐から特製スキルニル人形「アルビオン二号」を取り出した。

「これは……？」

「ああ、あんた、数日後に死ぬよ。レコンキスタの刺客…いや、変態に刺されて」

「え？君は……」

「いいからとつと身代わり人形作るから血かけてくれよ」

半信半疑ながら、ハインから少しだけ漏れた殺気にあてられ、ウェールズは小指を噛み切り、スキルニルに血を掛けた。

ムクムク……

完璧に生き写しのウェールズが現れた。クマさんパジャマのままの。

「よし、ウェールズダツシュよ、ゴニヨゴニヨして、ゴニヨゴニヨしたら、ゴニヨゴニヨするんだぞ？よしお前はベッドに寝てよし」

ハインの指示に頷いたウェールズダツシュは、いそいそとベッドに潜り込んだ。

「よし、ウェールズはこれを着る。俺の故郷のスパイが着る正装だ」

ズスイとハインが取り出したのは、黒いスーツ…所謂、全身タイツである。ウェールズはこの得体の知れない男に逆らう事を諦め、黙ってタイツに着替えた。ピッチリしていて少しだけ恥ずかしい。

「（やべえ腹痛い…似合い過ぎだろ……）」

「んじゃいくか」

「どっ…どこにだい？」

「オリバークロムウエルを拉致しに行くに決まってるじゃん」

「それは…レコンキスタの頭じゃないか…無謀過ぎる…」

「俺は出来るからやる。そして、倒すのはお前の役目。俺が欲しいのは、奴が持つてる指輪。因みに指輪取り上げたら、貴族派の兵隊の六割が死体に戻る」

「なんだと！ならば、クロムウエルとは…」

「嘘っぱちの虚無使い。指輪がなけりゃただのオッサンだな。だからお前でも倒せる」

「……じゃあ…「まあこの戦に勝てるよ」

「君は………いつたい」

「あー俺はトリステイン王国で万屋をやってるハインリヒってもんだ。俺はアルビオンを勝たせに来たんだ。無事勝ったら、始祖のオルゴールを報酬に貰う。お前に選択肢はない。まあ質問は後だ。夜

が明けるまでに終わらずぞ」

「……わかった。君に従おう。いまは藁をも継る思いなんだ」

こくりと頷いたハインは、ウェールズを腰抱きにし、天窓に飛び上がった。

ハヴィランド宮殿の屋根に立つと、ハインは指笛を吹いてユラを呼んだ。

暗闇の空から、魂が凍るような咆哮とともに、巨大な火竜が現れる。ウェールズは呆然としている。こんな巨大で圧倒的な威圧感を放つ火竜など、アルビオン空軍の竜騎士隊にすらない。

《ハイン ドコイク》

「ほら、この方向にばっちい奴らがいっぱいいるのがわかるか？」

《ワカル クサイ クサイ ハナガマガリソウ》

「そっか、ごめんな。けどそっちに行ってほしいんだ。上手くやれたらこのウェールズ君がいっぱいお肉くれるよ？」

《ユラ ガンバル オニク マルカジリ》

「これは…君の使い魔かい？」

「いやあ、なんだ、娘みたいなものだな」

ウェールズは呆れていた。使い魔じゃないのに言葉を話す。という事はこの火竜は韻竜だろう。この男は使い魔のルーンも無しに韻竜を従えているのかと。

「まあ、蛇の頭、潰しに行くよ。少々戦闘になるから、お前は身を守ることに専念しろ。あと大事な事だが、ユラで移動してる最中から先の事は他言するな。他言したら、お前を殺す」

ハインの圧力感にウェールズはただ頷くしか出来なかったか。が、既にハインに対する疑いは消えていた。

この大雑把で我が儘な男が、腹芸などはしないだろう。何故なら、この男は強い。それも想像出来ないレベルの強さだ。強者は小細工せず、己の力で真つ直ぐ進む。だから信じた。この突然現れた英雄を。

レコンキスタが布陣している場所の指令部の天幕。その中で、指導者たるオリバー・クロムウェルはほくそ笑んでいた。

シェフィールドとかいう女に貰った指輪を撫でながら、クロムウェルはワインを飲んでいる。

アルビオンの王党派は最早袋のネズミ。もうすぐワルドがウェールズの暗殺の報せを持ち帰るだろう。

「クククツ…クハハハツハツハツハツ！」

クロムウェルは歪んだ権力欲に取り付かれた愚者でしかなかった。かつてはただの田舎の司祭でしかなかった。

魔法の才もなく、人望もない、ただ欲望だけが強い小物でしかなかった。だが、ある日、不思議な女がやってきて、指輪を授かった。

運が向いてきたと勘違いしたクロムウェルは、元来の口の上手さと、指輪の力で、頭の悪い貴族を扇動してきた。

オリバー・クロムウェル

メイジでも司祭でもなく、ただのアジテーターだった。

「グワア！！！」

「ギヒイ！！！」

ビシャ…ビチャビチャ…

「ばっ化け物だああ！！！」

クロムウエルの天幕の傍から、断末魔の悲鳴が上がる。

ビシャシャシャ！！

クロムウエルの白い天幕に、真っ赤な鮮血が飛び散った！

「なっ何事だあ！！！」

クロムウエルは慌てふためきながらも、側近に声をかける。

その時、天幕の入り口から、側近の顔が覗いた。

「おお！ホーキンス！いったい何が……ホーキンス？うあああああ  
あッ……！」

クロムウエルは腰を抜かして座り込んだ。あまりに現実離れたその光景は、身体を硬直させるには充分すぎた。

ホーキンスと呼ばれた男、いやだった男……それは牙狼剣に突き刺されたホーキンスと言う男の生首だった。

「いやあコンバンワ。オリバークロムウエル。ちょっと署まで同行願おうか？なんてな。おい、ウェールズ、捕縛しろ。宮殿に連れかえるぞ。おっと、お客様だ。丁重におもてなしするから、ウェールズはクロムウエルを連れてユラに乗って浮いてろ」

「恩に着る。ではな」

「さあ待たせたかな？シエフィールド嬢」

そこには黒髪の麗人がハインを睨んでいた。

「何故名前を知っている！何故我々の邪魔をする！何故あの御方の邪魔をする！許さない……絶対に許さない！！」

「うわぁ…生ヤンデレだ……正直引くわ。御託はいいからとっと来いビッチ。おまえらの企みは、すべてまるっとお見通しなんだよ。さあこいヤンデレ！」

ハインはシエフィールドをニヤニヤと舐め回すように見ながら言い放った。

ヤンデレはキモいが、あの黒髪とおっぱいは捨てがたい。ああ、神様…なんていう試練をわたくしに課すのか！あなたに慈悲の心は無いのか！

「何か失礼な事を考えていないかい？まあ終わりさ？ガーゴイル！！！！」

シエフィールドの号令に応えるかのように、5メイルはあるガーゴイルが4体現れた。

「悔いながら死になさい！さようなら、少年」

ドカドカドカドカ！

ガーゴイルがハインに殺到し、彼を殴り倒す。…かに見えたが、次の瞬間爆発的な光が溢れ、ハインを殴ったガーゴイルの腕が砕け散った！！！！

G R R R R R R R R R R R R R R R R U ……

「いったい…なんなんだい…あんた…」

《知る必要はない。お前はここで、虫けらのように死ぬのだから。内臓をぶちまけ、眼球を潰し、四肢は引き裂かれ、性器をこの剣で貫かれて死ぬのだから。お前はただの女でしかない。ジョセフもまたただの男でしかない。だが、お前は愛するジョセフの、憐れな犬以下の惨めな死に様を見ることがなくここで死ぬのだ》

キイイイイイイイ

ハインの牙狼剣がザルバの口を滑っていく。

魔界の炎、魔導火が牙狼の全身を燃やす。

### 烈火炎装

牙狼剣が十字に振られ、緑色の衝撃波がガーゴイルに吸い込まれた。

激しい炸裂音の後、4体のガーゴイルは砕け散った。

呆気ない勝敗。闘いですらない。片方がもう片方を、一方的に蹂躪しただけだった。

《終わりだ。実につまらない。額のルーンは所詮飾りか。虚無…実にくだらな。独り善がりの自慰にも劣る。ならば、俺が本当の虚無に叩き落としてやろう。準備はいいか？シエフィールド》

「あ…あ…よらよらよ…寄らないで…死にたくない死にたくない…  
…助けて……シヨセフ様……」

悪魔のような黄金の獅子は、一步、また一步とシエフィールドに近寄る。

剣が振り上げられ、上段でピタリと止まった。

シェフィールドは思う。あの剣はギロチンの刃。もう間もなく自分の首が落ちるのだ。呆気ない、あまりに呆気ない…

ロバ・アル・カリイエの神官の娘として生まれ、跡取りとして無機質に育てられた。ただ抱き締めて欲しくて修行に打ち込んだ。

ただ父親はいつまでたっても自分を見てはくれなかった。ならば、自分はいつたいなんの為に産まれてきたのだろうか。

誰か私を見てください。

私はここに居るのです。

貴方が望むなら、笑顔を見せます。

貴方が望むなら、涙を流します。

だからどうか、私を見てください。

気が付くとわたしは、目の前に不思議な光の扉があるのに気が付いた。

何か暖かいものがその先にあるような気がして、私はその扉に飛び込んだ。

先には青い髪の男がいた。

彼は自分を空虚だと言った。

だから私を必要なんだと。

私を女神と呼ぶあなた

その瞳は私を見てはいなかったけど、あなたは確かに私を必要だと  
言ってくれた。

例えそれが、道具である私を必要だと言ったとしても

それでも私は嬉しかったです。

ああ、ギロチンが降りてくる。

私の時間が止まってしまふ。

ジョセフさま…

ジョセフさま…

「おとじさま………」

「なんちゃってー！びびった？びびった？！こねドッキリ！嘘！嘘よ  
ねーん………あねっ………」

牙狼を解除したハインは、ぶった切るふりをして、牙狼剣の腹で、禅寺の座禅のように「喝ッ！！！」みたいにシェフィールドの肩を打ち据えたのだ。

『うわぁ…ハイン…超鬼畜…どん引きだわ』

「ハイン殿…この人でなし！」

《あるじさま おんな まるかじり》

「だっだって……こいつ悪者じゃん。少しは懲らしめないと……ねえ！なんで目を逸らすの!？」

最後が台無しなのがハインたる由縁なのか。とにかく、クロムウエルとシェフィールドの捕縛を成功したハインは、ウエールズを伴い、一路、ハヴィランドに帰還するのだった。

一方、アンドバリの指輪とクロムウエルの魔力のラインが切られた結果、レコンキスタの野営地に駐屯する人間の多くが死人は死体に帰り、生きてる者は洗脳が溶けた。

ルイズ一行がロンディニウム到着の二日前の出来事だった。

悪巧みはまだ続く。

## 次回予告

『ああ…ザルバだ。最近ハインはストレスが貯まっているのか、暴れっぷりが悪魔のようだ。流石の俺もどん引きだ。さて、次回のZERRO - の無責任男は、「ハヴィランドの中心で叫び声をあげたツンデレ」だ。必ず見てくれよな!』

?? **ゼロ レクイエム** 虚無の鎮魂歌 (後書き)

難産すぎてなんかダムダメでした。

状況描写が少なく会話ばかりになりました。

反省です。

いつか改訂しますから、お許し下さい

？ 0 俺……今……真っ直ぐ立っているか？……なんかもうやんなっちゃったな  
ルイズ一行到着前夜のハヴィランド宮殿では、ウエールズが連れてきたレコンキスタの首魁である、オリバークロムウエルを囲み、アルビオン王ジェームス一世を始め、王党派一同が集まっていた。

縛られ、床に転がされたクロムウエル。恨みが込められた目で、ジェームス一世を睨んでいる。

「私はお前らに負けたのではない。そこにいる男に負けたのだ！だがッ！同志は諦めないぞ。フハハハハッ！！もう、止められないぞ！」

してやったりの表情のクロムウエル。

「あゝちよつといいかな？王様」

「なんだ？英雄殿、遠慮などいらぬぞ」

水を差したハインだが、ジェームス一世は笑顔でハインを見やった。

「んと……勝手なまねして悪いが……レコンキスタの残存した連中に、

降伏と武装解除を勧告してさ。それでも勧告に応じない奴らを、うちの火竜三匹で焼いちまったわ……なんかごめん。降伏した連中……多分一万もいないわ……」

「あの…ハイン殿？それはまことで…？」

ウェールズは信じられないといった表情である。

「あゝ明日さ、詫び入れにここに来て言ってあってあるから、対応してやってくれや。あと…ちょっとだけ…焼け野原にしちゃってごめんね？」

てへっ みたいな表情に、ちょっとイラっとした一同だったが、なんだかわからない間に戦争自体が終わっていたことに呆れてしまった。

「なんでクロムウエルさんや。お疲れさん。あんた一人だわ。あ、ワールドがいたか！まあ、数のうちに入らんからいいか」

クロムウエルは思った。こいつは一体、何を言っている？馬鹿げた虚言に決まっていると。

「ああ、そうだ。ウェールズ、この指輪貰うぜ？ラグドリアン湖の

水の精霊の持ち物なんだが、こいつらがパクったんだわ」

「構わないぞ、英雄殿。しかし、真に信じられぬ状況だが、確かに戦争は終わつたらしいな。私はそなたにどう報いたらいんだろうか？何か希望を言つてほしいものだ。何なら、領地でも構わないぞ？」

ジェームス一世がほくほく顔でハインに言つた。

「領地はほら、一応、俺、トリステインのシュバリエだし、ド・オルニエールの摂政だからなあ。だから王様、あなたが俺に貸しが一個あると覚えておいてくれないか？将来、俺が困つて王様に泣き付いた時に返してほしいんだ。それに俺は押し掛け助っ人だからなあ。あんまり偉そうには言えませんが」

一国の王相手に貸しを作る時点で充分偉そうなのだが、ジェームス一世の懐は深かつた。

「うむ、皆聞け！！！トリステイン王国のシュバリエ・ハインリヒは、この私の名において、今後アルビオン王国の大事な友人であると宣言する！！！皆の者、下じもに至るまで言い聞かせるように！！！」

「！！！！英雄ハインリヒ万歳ッ！！！！アルビオン王国万歳ッ！！！！」

「！！！！」

広間は喜びに包まれた。長かった内乱がいま、終結した。熱狂が人々を酔わせ、それは今暫く、止むことは無いのだ。

ハヴィランド宮殿、客間。ここにはシェフィールドが軟禁されていた。

ミヨズニトニルンの担い手である彼女を警戒し、ハインに命令されたアルビオン兵士は、彼女の持ち物全てを没収していた。

今の彼女は、後ろ手に手錠をかけられた、ただの女だった。

天窓から月明かりが射し込むのみの薄明かりの部屋の、扉が左右に静かに開かれた。

「いようボインちゃん。腹減ってないか？」

緊張感の全く無いハインリヒが、へらへらしながら入ってきた。

「ひっ…ひい…こっ殺すのかい!？」

散々ハインに怖い目にあわされたせい、シエフィールドはガクガク震えている。

「んな怯えんなよ、ドッキリなんだから……殺さないから心配すんな。ただ、話がしたいだけなんだ」

「本当に？」

「ああ、ちよつと待ってる」

バキッ!!

ハインは手錠をへし折って、シエフィールドをベッドに座らせた。そして持ってきた紅茶のカップを握らせ、反対の手にはクックベリ―パイを握らせた。

「取り敢えず一息つきなよシエフィールド。夜は長いんだから」

シェフィールドは手元とハインをチラチラと忙しなく視線を移動させ、やがて恐る恐る口に運んだ。

まるで、野良猫に餌をやる様ようだった。

「甘い…暖かい……」

「落ち着くだろ？ 疲れた時は、甘いものに限るんだ」

ハインはシェフィールドが落ち着くまで、ただ黙って待っていた。やがて、月が陰った頃。

「わたしは…あの方が全てだった。だから、あの方が喜ぶなら、何でもした。けど…あの方がわたしに頬笑む事は無かった。わたしはただ、あの方が幸せになればそれがわたしの幸せだと思っていた。……だけどツ！！！どんだん心が冷えていったツ！あの方の目が、ほの暗い水底を見るような目でわたしを見るのツ！わたしはただ、見てほしかっただけなのにツ！………もう…疲れた」

鼻水を垂らして、涙を滝のように流しながら、シェフィールドは慟泣した。

「まあ、ジョセフもシエフィールドも性格ひんまがつてるからなあ。不器用なカツプルは周りが迷惑なんだなあ。クククツ…なんか可愛いな、オツサンとお前」

「なつなにを！！」

「クハハ…腹がいてえ…愛し方も愛され方も知らないなんて、お前から馬鹿だわ。んなもん、「ジョセフさま、お話が…」裏声「なんだ余の可愛いミュージズ」キリツ「実は…がばあー！」ニヤリ「何をする！そこはジョセフのジョセフだ！！」赤面「ああジョセフ様、わたしのラグドリアン湖が溢れています！」赤面「ようし、ミュージズよ。余の火竜山脈をブチ込んでやる」キリツ

「ああつわたしのラグドリアン湖が…らめくく！」お花畑  
「……な？簡単だろうが」

ハインは異様にリアルな「ジョセフとミュージズの××な話」を身振り腰振りシエフィールドに見せた。

「なつ…なつ…なーッ！」

顔を激しく赤面させ、シエフィールドは口をパクパクさせて硬直している。

「やれやれ、うぶなネンネじゃあるめえし……つてえく！？まだジョセフに食われて無いか！あのオツサン…まさか！？YESロリータNOタツチな紳士だとも…まさか！？オルレアン公をチヨメチヨメしたのは、可愛いシャルロットを愛でる為！？いや、落ち着

「ハイン……だが、否定できない……むう……シャルロットを保護しようぞうしよう……ちきしょうジョセフ！ブン殴ってやるッ！」

「あのあの……ハイン……さん？大丈夫かしら？」

「おおう、すまんすまん。まあジョセフには少し反省さすか……シェフィールド！お前、暫く家返さないからな？」

「ええええええええええ！」

「ばっかシェフィールド！あのオッサンを少しさみしがらせるんだよ。んで、暫くたって、超際どい勝負下着でな？おらっ耳かせ……ゴニョゴニョしてな……ゴニョゴニョしたらイチコロだって！」

「ほっ……本当に？ジョセフさまイチコロ？」

「あたぼうよ！黙って俺について気やがれ！男の萌えさせ方から、ボインの使い方、ベッドでのテクニクまで、俺が手取り足取り教えてやるう！いいかシェフィールド！今日から師匠と呼べ！」

「はい師匠！よろしくお願いします……！」

「師匠の命令にはハイかYESで答えるんだ！」

「はいです！師匠！」

『シェフィールド、完全に騙されてるから…ハインに確実に喰われるから……』

そうしてハインは、この危ない爆弾娘を、レコンキスタ残党殲滅の為に呼び出した竜っ子のユイ、ユンに屋敷に連れ帰らせ、カトレアとジェシカにきっちり”作法”を教えると指令を出したのだった。

憐れシェフィールド、果たして彼女はガリアの地に帰還する日が来るのだろうか？

明け方、二つの月が妖しく照らすバルコニーにハインはいた。

宮殿はやっと静かになり、ハインは一人ワイン片手に葉巻を愉しんでいた。

「まだ眠ってなかったのかい？英雄様」

「よせよ皇太子、ワインが不味くならあ。ハインでいいよ」

「はははっ…ま、友人の頼みだしな。私もウエールズでいいよ」

「ウエールズ、ほら一服しろよ。最高級のシガーだ。充分蒸らしてあるからな。最高な状態だ」

ハインは太巻のコイーバをウエールズに啜えさせ、ガスライターで火を付けてやった。

「ゴホッゴホッ…うっ」

「あはは、それは吸うんじゃないんだ。いいか？まず口の中に煙りを貯めて、吐き出す。鼻に抜ける薫りはどうだ？」

「なんだか、刺激的だけど、なんとも言えないまるやかな感じがするね。うん、これは美味しいよ」

「それはな、エスプレンドイドスって言ってな、最高級品なんだ。友情の証にワンケース渡そう」

「ありがとうハイン。そして感謝を「やめろって。感謝の言葉は沢山貰ったから。友の危機を救った。当たり前前の事だ。それでいいだろ？」

「あはは、全く、ハインにはかなわないな。だけど、やっと気が抜ける。流石に疲れたよ。アンリエッタはゲルマニアに嫁ぐらしいし……」

ウェールズは、肩を落とし、遣り切れない思いを口にした。

「ん…もう嫁ぐ意味ないか？ 同盟する意味ないもん。あれはあくまでも、アルビオン情勢が王党派に不利だったから、アルビオン亡き後は、当然トリステインが優先だったろ？だからゲルマニアと不利な条件でのアンリエッタの婚姻外交なわけで。アルビオンが無事なら、アンリエッタが嫁いだらただの馬鹿だろうが」

「あつ…そうか…でも…私は……」

「アンリエッタ…巨乳だぞ…いらなら喰っちゃまうぞ、このさくらんぼBOYが……」

「だだだだダメだっ！アンはアンは……」

「んじゃ、覚悟決めるんだな、さくらんぼBOY。ああ、いい忘れてた。二日後、うちのマザリーニ枢機卿がこっちくるから。多分、アンリエッタ絡みだろうな。おい、ちゃんとウェールズのウェールズをピカピカにしとけよ！」

「ええええ！そんな……えつと……うん。なあハイン……最初はどうしたらしいのかな？はふう……」

「そいつはな、……自主規制……」

「ちよっ鼻血が止まらない……」

ウェールズにとって、生涯の友が生まれた瞬間であった。

そして、ルイズが到着したハヴィランド宮殿。トリステイン王国の使者として、ルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエールが通された。

供として、ワルド、サイト、ギーシュ、キュルケ、タバサが、ボロボロの姿で付いてきていた。

白い仮面のメイジに何度も襲われたらしい。

「ジエームス一世様、ウエールズ殿下、この大変な折りに申し訳ありません。我がトリステイン王国が姫、アンリエッタより密命を受け、このルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエール、罷り越しました。ウエールズ殿下、この手紙を……」

緊張でガチガチのルイズが、作法に則り使者の礼を尽くした。

「ご苦労だったな、ラ・ヴァリエール殿、だが、大変な折り？ いたいなんの話かな？」

「だから……あのうそのう……内乱的な……」

「ああ、なるほど、それならば先日、レコンキスタの壊滅という結末で終結したのだ。なに、心配をかけて使者殿には申し訳ないが。カッカッカ……」

ジエームス一世は、黄門的な道楽ジジイのような快活な笑いを浮かべた。

「えええええええええええええええええッ！！！」

ワルドが発狂せんばかりに叫んだ。

「ほら、あそこでウエールズとチエスをしているハインリヒが一人で暴れてな？クロムウエルなぞとつくにロマリアに叩き送ってやったわ！愉快愉快」

「え？」 ルイズ

「え？」 サイト

「え？」 ギーシュ

「え？」 キュルケ

「……ぽっ」 タバサ

一同は遣り切れなかった。こんなに苦勞して辿り着いたのに、何この仕打ち。

一人おかしいの混じっているが、概ねそついう思いだった。

「ああ、君がワルド子爵かね？君にハインリヒから伝言がある。ガサガサ……なになに……」人間（変態）には触れちゃならねえ（ロリータ）ものがある。そこに触れたら（主にボディ）後はもう命のやりとりしか残っちゃいねーんだッ！！」だそつだ。理解できたかね？」

ワルドはガクガクと震えている。

その前に、ハインリヒが立った。

「貴様……ルールを破つたな……俺は貴様を修正する。YESロリータ  
NOタッチ……言え！！」

「YESロリータNOタッチ……」

「声が小さい……」

「YESロリータNOタッチ！」

「もつとお……！」

「YESロリータNOタッチ……！！！！！」

「田中邦衛でえ……！！！」

「とつ父さん……ロリータは、ふっ触れないんだあ……！！子供がまだ食べてるでしょうがあ……！！！」

「よし、以後肝に銘じておけっ……！！でだ、烈風カリンことカリ  
ーヌ・デジレ様の名代として貴様に告げるっ……！！！」

「えっ！お母様？」

「今後一切、ルイズ・フランソワーズの半径10メートルに近づく事を禁ずるっ！尚、守らない場合、烈風カリン本人またはハインリヒによりOHANASHIが強制発動する。以上……！！むっ貴様、3  
マイル……違反と認める……！！歯あ食い縛れえ！指導う……！！！」

バキィッ……！！！」

呆然としたワルドに、容赦なくハインの鉄拳制裁が跳んだ。因みに、右手のみ牙狼を召喚してある。

「ちょっとあんた！なんでここにいるのよ！」

硬直から立ち直ったルイズが、ハインリヒに食って掛かる。

「いやあ、マリアンヌ様とマザリーニのオッサンの依頼でな？一応俺はシュバリエだし」

「あつあたしはアンリエッタさまの……うつつ…変態にはあはあされ……仮面には……ぐすつ…ドちくしょう……お前なんか死んじまえ！このインキンタムシー……ッ……！」

ドップラー効果を発現しながら、ルイズはどこかに消えていった。

「師匠！やはり、ゲットしたのですか？」

「無論だよサイト」

「まさか！？ボイン！？」

「ああ、黒髪ロングに超ボインだよ……」

「師匠、あんた最高だよ……だけど、モゲロー………ッ！  
！！」

サイトもドツプラー効果を発現し、泣きながらどこかへ消えた。

「ハインリヒ様、僕も師匠と呼んでいいですか？薔薇を愛でる達人と聞きましたし……」

「ああ、構わないよギーシュ。乙女の薔薇は股間に咲く……覚えておきたまえ」

「さっ流石です師匠……だが、リア充氏ね。いや死ね………ッ！  
………ッ！………ッ！」

ギーシュもドツプラー以下同文。

残るはキュルケ& a m p・タバサだ。

「ハインリヒ様、私の微熱が燃え上がってしまいましたわ？責任と  
つてくださいます？」

「……逢いたかった。依頼をしたい。傍にいて」

（ヤバイ。流石にシエフィールドに続いて凸凹コンビ寄せて両成敗  
は不味い。確実に旗がたつ…こうなったら……）

「あーッ！！あんなところに松岡修造がいるぞッ！！！」

「え？」 キュルケ

「え？」 タバサ

「え？」 ウエールズ

「え？」 ジエームス一世

「ハッハッハ！騙されたな明智君！さらばだッ！！！」

ハインは逃げた。

全速力ではしった。

その先は、希望がきつとまっている！

ありがとうハインリヒ！

ハルケギニアの未来はお前が護るんだ！

ハヴィランド宮殿、深夜

王宮のメイドにより、広間に積み上がった何かの灰が掃除された。  
ワルドだった。

## 次回予告

『おいおい、毎回やると思っなよ！俺はなー俺は…おええ…俺にも  
飲みたい時があんだよバーロー！じひゃい、ジェロによむしえきに  
んおてこは…ういっ…やってられっかバカヤロ〜！まあ見たければ  
見ればあ？……………寝る』

? 0 俺……今……真っ直ぐ立っているか? ……なんかもつやんなっちゃったな  
なんだかザルバが荒れてます。次回理由が明らかになるとかならな  
いとか。

取り敢えず、シェフィールドゴチになります!

そろそろタバサか!?

? ?  
RED  
MOON  
&amp;amp;,  
BLUE  
NOON  
Side  
s

短いデス

例のあの人がそこにいた。

騎士団の任務を終え、学院に戻った私が、広場横の通路を偶然通ったとき、あの人は空に手を翳していた。

何をしているの？

ふと気になったのだが、気が付いたら聞いていた。

あの人は月と言った。

いったい月に何があるというのだろうか？珍しくもない。

ただ、あの人のキュルケより淡い赤い髪が、月明かりに照らされて、思わず見惚れてしまったのは素直に認めなければならぬ。

お父様以外に気になる男は、彼が初めてだった。興味深いという意味ではあるのだけれども。

私は北花壇騎士団の一員として、トリステイン魔法学院にいる。

その騎士団から、彼の情報は知らされていた。潜在的な敵としての意味合いで。

後に排除対象になるだろうから、折りを見てマークしておけという事だった。

彼の情報は、トリスタニアで所謂、便利屋のような事務所を営んでおり、その実貴族が手を余す亜人や幻獣駆除だった。

彼は単独で、オーク鬼だけでも既に百を越える数を駆除している。

王軍ですら手が付けられなかった三匹の火竜すら、単独で撃破している。信じられない戦闘力であると言えない。

私に彼ほどの力があればと、無意味な嫉妬が沸き上がる。嫌な気持ち。

ジョセフを倒すには力がある。だけど、私だけなら絶対に勝てない。彼が無能なんて嘘だ。だから、ハインリヒの強さを見てみたい。

だから、私はさらに聞くことにした。三匹の竜をどうやって倒したのか、ヴァリエールの次女をどうやって治したのか。

彼はそこで私を初めて見た。お父様とはまた違う、けれど空に浮かぶ赤いほうの月みたいに、優しいけど何処か妖しい、とらえ所のない雰囲気のある男だった。

彼は何も答えてはくれなかった。のらりくらりと躲された。

そして、彼は言った。私が北花壇騎士団に属している事、私の復讐の事を。

彼は何者？

気が付いたら私は杖を構えていた。かないはしないだろうが、彼の強さの片鱗を引き出して見せる。

何より、私の復讐を子供の遊びのように言った。

何も知らないくせに！ だけど彼は、私の殺気に何も感じていないようにこつこついった。

「虚勢は見苦しいもんだな。いいよ。かかってきな。お仕置きの間だ」

いい。思い知らせてみせる。お父様が得意だったスペル。そう……

「ウィンディ・アイシクル！」

信じられなかった。躲されるか、何かの魔法と相殺されるとは思った。だけど、彼がした事は、指輪を翳しただけ。

私の魔法が、掻き消えた。

信じられない。衝撃も一切なく、ただ消えたのだ。

次の瞬間、彼は目の前にいて、どこから出したのか、細身の長剣が私の首に据えられていた。

チエツクメイトだ。

素直に参ったと言ったら、人懐こい笑顔を見せてくれた。

頬が熱い。報告書によれば、彼に恋人は複数いて、そして良好な関係らしい。

あと一人増えても大丈夫なのではないか？

いけない。私は何を考えているのか。私には復讐を遂げなければならぬ。絶対に。

私が惚けていたら、彼は私に言った。敵でも味方でもない。彼の事務所にいつでも尋ねてこい、と。そして依頼をしろと。

暗闇に溶けるように去っていく、彼の背中を見ていた。何となく行かないで欲しかった。

私は夢想する。彼が私の勇者様だったらいいなど。

「イーバルデイ……」

私の言葉も闇に溶けた。

しばらくすると彼が、慌てて戻ってきた。先ほどの勇ましかった彼は消え失せ、照れ臭そうに所在なげに聞いてきた。

ラ・ヴァリエールの部屋の場所を。

なんだか不思議な感情が浮かんできた。なに、これは。わからない。

ただ、もやもやして、イライラする。この感情はなに？

目が泳いでいる彼の手を握って、ラ・ヴァリエールの部屋まで連れていった。

大きくて、暖かい手だった。部屋につかなければいいのに。

別れ際、お嬢ちゃんと呼ばれた。何かもやもやしたので、タバサと呼んで頼んだ。

「シャルロットじゃダメ？」

彼がそうだった瞬間、胸が苦しくなった。頬も熱い。これは何？わからないけれど嫌じゃない。なに？

ただ、シャルロットと彼に呼ばれたい。ふと、そう思った。これはなに？

彼がヴァリエールの部屋に消える時、またなと言ってくれた。

またな。再会を約束する言葉。

私はきつと嬉しくて、彼の言葉がおわる前にまたと言ってしまった。はしたなく思われたら困る。

「タバサ、本気なの？」

本気？わからないけれど、ただ逢いたかった。そして、彼の本気の戦いを見てみたかった。

親友のキュルケが、ラ・ヴァリエールがアルビオンへ向かう旅に私が付いていく事を諫めるように言う。

私が北花壇騎士団から得た情報では、あの人、ハインリヒが、内乱が激しくなってきたアルビオンに向かうらしいという事だ。

ヴァリエールの旅を追い掛けたら、逢えるかもしれない。だから行く。

「もう、仕方ないわね。あなた言ったら聞かないもの。だけどあなた一人では行かせない。私も行くわ」

ごめんなさい、キュルケ。

「心配なもの。親友でしょ？」

そう、彼女はたった一人の親友。こんな私の。

後日、キュルケとシルフィードの背中に乗りヴァリエールを尾行する。

上空は寒い。キュルケは私を後から抱き締めてくれた。微熱は温かった。

彼女のことは好きだ。だけど、その胸はなに？私の背中で潰れている。

私は自分のを見てみた。もう何も言つまい。これはこれでステータスのはず。そう信じたい。

微熱の体は温かったが、何故か私の心は寒かった。

ヴァリエール達がラ・ロシエールにつく前に、私達はついていた。おしゃべりシルフィードの速度は馬よりはやい。

アルビオン行きの船は明後日に出港するらしい。

ならば、彼女達は宿をとるだろう。そういう予想のもと、一番豪華な宿屋のロビーで待ち伏せた。

ビンゴ。

トリステイン貴族は気位が高い。だから予想は容易だった。

ヴァリエール一行に、身なりのいい軍人と思われる男がいた。

彼は先程からちらちらとこちらを見ている。なに？気持ち悪い。

すると、ヴァリエールの使い魔とグラモンが私達を呼び出した。

彼らが言うには、あのワールドという男は幼女趣味であり、ヴァリエールをいやらしい意味で狙っているらしい。

だから彼らは、私とキュルケに助けて欲しいと頼んできた。

キュルケは憤慨しながら手伝うと言った。彼女がそういうならば、私には異論はない。

実はキュルケはヴァリエールがほっとけないのだ。頼りなくて危なっかしい。だけど自ら危険に飛び込むからだと彼女はいう。

そして、そういうほっとけない危なっかしいのが他にもいるらしい。

どうして私をみるの？

夜にキュルケと私とルイズ（作戦上こう呼べとのこと）の部屋に、平賀サイトとグラモンがやってきて、ルイズに真実をぶちまけた。

ルイズがわなわなと震えながら怯えていた。少しだけ可哀想だと思っただ。

ふと、平賀サイトが、私もワルドの性癖の対象に当たると指摘した。みながこちらを見た。なにこの惨めな気持ちは。身体がガタガタ震えてきた。

キュルケは可哀想タバサと言いながら抱き締めてきたが、勘違いされたら困る。

私は憤怒に体を震わせていただけだ。あんな幼女と一緒にされたら困る。私の弱点は胸だけだ。

その後、ハヴィランド宮殿につくまで、何度も何度も白い仮面の男に襲われた。

モヤモヤと怒りが消えない私の敵ではなかったが。

ただ、仮面の男のにウインドカッターが私のブラウスを掠め、すこし肌が露になったとき、仮面の男の息が荒かったのは何故だろうか？ わからない。でも、気持ち悪い。

至近距離からウィンディ・アイシクルをたたき込んでやった。いい気味だ。

倒すたびに掻き消える仮面の男。どうやら風の遍在らしいが、興味

はない。ハインリヒはどこ？

とうとうハヴィランド宮殿にたどり着いた。不思議だったのは、ロサイスからロンディニウムまで、一切の困難もなく、戦闘行為も見かけなかった。

内乱が始まっているはずなのに何故？

何の障害もなく、至極あっさり宮殿についた。

ルイズがウエールズ殿下に拝謁となったが、供である私達も通された。どうして？

通された大広間は、内乱中の国の雰囲気では無かった。まるで緊張感が感じられない。

ジエームス一世もウエールズ殿下も一様に笑顔である。

驚愕の事実が判明した。五万からいる反乱軍レコンキスタが、既に制圧済であり、首魁のオリバークロムウェルは捕縛済であるという。

僅か五百の王党派でどうやって？信じられない。

だけど疑問はすぐ溶けた。

ジエームス一世が言った。トリスティン王国のシュバリエが、一人でレコンキスタを退けたと言い、指を差した先には……

あの特徴的な白いロングコートをきた男、ハインリヒがウェールズとへらへらしながらチェスに興じていた。

頼む。待って！もう一回だけ待って！と情けない声を上げていた。

馬鹿げた戦力を持った、一見万能な彼も、チェスは苦手らしい。

やっと会えた。私のイーバルディは、本当に英雄で勇者だったらしい。

ルイズ達が何やら怒っていた。旅が無駄足とか色々言っていたが、私にはどうでもいい。

目的は果たしたもの。

私の視線の先に彼がいる。

帰ったら彼の事務所に会いにいこう。

依頼をしなければならぬ。

まずは相談をしよう。

「貴方に恋をした。この胸の痛みを無くす方法を相談したい」…と。

あなたは赤い月

私は青い月

だめ？

## 次回予告

『ザルバだ。青い髪のお嬢ちゃんの話はどうだった？俺は危うく砂糖を吐きそうだったが、自分が無機物なのを思い出してほっとしたぜ。ああハインリヒ、死んだな。さあ次回の - ZERO - の無責任男は、「まさかのマザリーニ無双だとツ！？その発想は無かったぜツ！！」鳥の骨 鋭くみかけば そく凶器 ハインリヒ心の俳句」だ。必ず見るよな！』

タバサのフラグがいつたったか謎という感想に対してのアンサー話  
です。

?? メロン仕掛けの爆弾でメロンメロン。おいおい、そんなメロウな雰囲気

アルビオンの片隅、ウエストウッドの森の中。

鬱蒼と生い茂る木々の合間、木漏れ日の小道を行けば、見えてきたのは小さな木の家である。

ハイン一味の良心、マチルダはここにいた。

「ねえ、テファ？あんたは可愛い妹のようなもんだよね？」

マチルダは食卓に頬杖をつきながら、向かい側にすわるティファニアに聞く。

「当たり前じゃないマチルダ姉さん。ふふっ…おかしな姉さん。何かあったの？」

ティファニアは紅茶の入ったマグカップに刺さる、スプーンをくるくる弄びながら、マチルダに相鎚をうつた。

「テファにね？お兄さんが出来たら…どうする？」

「えっ！？お兄さま？……お姉さんにいい人が出来たの！？ねっねっ！どんな人？カッコいい？もももしかして…姉さんがおとおとっ…あうっ…大人の御姉様になってしまったの！？」

どうやらティファニアは、かなりの耳年増のようである。彼女の頬は赤く染まっており、息はかなり荒い。

「そそそそんな訳ない「うむ、彼女は俺にしなだれかかり、優しくしてねといったんだ。俺はうんと言い、マチルダのマチルダにそっ」と指を這わせ、そのしとどに濡れそぼる……」わー！わー！わー！  
ってハインリヒい！？」

マチルダは突然現れたハインに驚き、わたわたしながら顔を真っ赤にしていた。

「あっあなたは？」

「ただいま紹介に預かりましたハインリヒです、ティファニア嬢。こんな艶やかで、張りのある瑞々しい肌、ああ素晴らしい。あれっ顔が二つ？まあいい、お近付きのしるしに、ひとつ頬に口付けを許されたい」

「は…はあ…」

「ちょっとハイン！なんでティファの胸に話し掛けてるのか教えてお

くれよ？あまつさえ小刻みに舌を震わせながら、テファアの可愛いイチゴを指摘しているのかもね？」

マチルダは青筋を浮かべながら、巨大なゴーレムの腕だけを出現させている。

「ちょっ…マチルダ！それはマジで洒落にならんから！撲殺確定だから！やめて！いたいっ……たすけてテファアも……」

残念なことに、ティファニアは某烈風のようにネタに詳しくなかった。

だがッ！！

「やっやめてマチルダ姉さん！！ハインリヒさんが可哀想よ！！」

ティファニアは優しく、そして世間知らずだった。

「ああんティファニア…怖かったようっ」

ハインはテファアに抱き付き、胸というには憚られる巨大なメロンに

顔を埋めた。

「よしよし、恐かったね？テファがマチルダ姉さんにメツてするからね？」

ハインは一生に何度出来るかわからないクラスの可愛い表情でティファニアを見上げ、そして畳み掛けた。

「ありがとテファ？ホント恐かったんだ。……テファって可愛いね？」

ズキューーーーン！！！！

ティファニアは、母性本能をくすぐられた。

「かわいくなんかないもん。可愛いなんて言われた事ないもん……  
だってこの耳だし…ハインさん怖くないの？」

「ああテファ、可哀想に…君はこんなに可愛いのに…じゃあ今度から俺がテファに可愛いって言うね？耳だって可愛いさあ。全く、テファを怖がるやつはお馬鹿さんなのさ。テファ？君は可愛いんだよ？」

「キヤーー　ハインさんも…カッコいい…デス」

そう言いながら、ハインは相変わらずティファニアの巨大なラピュタに頬擦りしている。

マチルダはその時見たッ！！ハインがテファのイチゴに舌を伸ばすのをッ！！

「こつこの馬鹿ハイン！テファから離れる！食らえ正義のアースハン「ねーさん！！苛めちゃダメ！！」……………くつ…あたしはアンタを守ろうと…………ん？」

マチルダは見たッ！！テファの腰に抱き付き、その胸の巨大な夢のテーマパークに頬擦りしながらマチルダを見ているハインをッ！！

ニヤリ

ハインはドヤ顔でマチルダを見ていた。どうだ、手は出せまい？奴の顔は確かにそうだったッ！！

むかあ！！

マチルダは最終奥義を出す事にした。出来れば愛するハインに使用したくは無かった…だが、テファを守るにはこれしか…

いまハインは、その顔以外は後ろを向いている。

マチルダはその後方、ハインの死角に、高さ70サントの人型ゴーレムを作った。

このゴーレムの異常なところは、手だけがやたら大きい事だ。そしてその手は組まれ、何故か人差し指だけが長く伸ばされている。

手を組んだゴーレムは、限界いっぱいにしてしゃがみ力をため、つぎの瞬間、それは上方向に力を解放した。

.....ズンッ!!

殺人浣腸ここに完成!

またの名は七年殺しッ!!

ずる.....ずる.....

「ハインリヒさん!？」

ハインの意識は既になく、ずるずると、ティファニアのボディラインに沿って滑り落ちた。

マチルダは会心の勝利に、背中を向けてポーズを決めた。その背中には……

天ッ!!!!!!!!!!!!!!

「しかし、相変わらず馬鹿力だねえ……というより最早馬鹿だね。ほんと呆れるよ、あんたには」

アルビオン内乱を、たった一人で収めた事である。

マチルダはハインを睨み付けながら話す。まだ機嫌が悪いらしい。それは目の前の光景に理由がある。

ティファニアの家の食卓は、大きな一枚板の天板に、七人掛けくらのベンチが天板を挟み、両側にある。

そして現在、マチルダが一人で座り、向かい側にハインがいる。その横にテファがいて、何故かハインに腕を絡めてニコニコしている。

「いやあ、なんか成り行きでなあ。ああそうそう、ウェールズと仲良くなったから、あんま邪険にすんなよ？」

なんとという事だ。ウェールズはある意味仇の息子である。テファの父親を処刑し、我が家を没落させた男の息子である。

マチルダは複雑だ。今さら殺してやりたいほど憎んではない。マチルダは大人である。

ブリミル教には逆らえないし、王家は王家の務めがある。モード大公もシヤジャル様やテファが可愛いならば、他国に隠すなり何か手を打てば良かっただけだ。

だが、理屈で理解しても、感情はまた別の話だ。だからマチルダは複雑なのだ。

というより、なんで初対面でこんなに二人は仲いいんだい？ハインはまずあたしとイチャイチャすべきと主張したい。

テファもなんだい！あたしのハインなのにデレデレしちゃってさ！なにその巨大な二つの東京ドームを突かれて万更じゃない表情なん

だい！

「まあ、冗談はさておき、ガキ共は既にド・オルニエールに送ったぜ？森にユラで降りたら、ガキ共に囲まれてな？乗せてやったらキヤッキヤ言っし、面倒だから送っちゃった」

「「えええええ！！？」」

「だから後はマチルダとテファを連れかえればアルビオンミッシヨンは終了だ」

「えっ！？私、どこかに行くんですか！？」

「ああ、俺と一緒に住むんだよ！まあマチルダもだけど」

「ついでみたいに言うな！」

「冗談じゃん。相変わらずからかいがいのあるマチルダちゃんだな。なあテファ？お前の姉ちゃん可愛いんだぞ？毎朝ベッドでな、俺の俺を寝呆けて握っ「わー！わー！わー！わー！もうやめて〜？」…：な？可愛いだろう？」

「はい、可愛いです！でも私、羨ましいです…マチルダ姉さんみた

いにかまわれたこと無いから……」

「テファア……」

「大丈夫だテファア！これからは兄さんと一緒だ。一緒にお風呂入ろうな？」

「えっ……あの……その……はいつ」

「ダメダメダメ！絶対ダメ！テファア、いいかい？一緒にお風呂なんか入ったら、あんなことやこんなことされるんだよ？だからダメ〜」

マチルダ、必死である。

「えっと……嫌じゃないです……そうだ！マチルダ姉さんも一緒に入れればいいんです！」

「なんと……まさかの姉妹丼……ありがとうございます……ありがとうございます……」

「絶対ダメ……」

ウエストウッドの森は、賑やかな笑いに包まれて夜は更けていった。

同日、ロンディニウム・ハヴィランド宮殿

玉座の間のさらに奥にある、王家しか立ち入れない部屋がある。

壁、床共に豪華な大理石で造られており、天井は高く、天使が空に登っていくような宗教画が描かれていた。

部屋の中には円卓があり、席は12席ある。その円卓には向かい合うように三人の男が座っている。

片やアルビオン王ジームス一世とウェールズ皇太子、片やトリステイン王国が宰相、マザリーニ枢機卿である。

「さて、今回の戦勝、まことにおめでとございます。我が国にとっても大変喜ばしい出来事でございます」

まずはマザリーニが口火を切った。言葉は丁寧だが、彼の目はどこか挑戦的であり、それを受け止めるジエームス一世もまた然りであった。

「ふふふっ…まこと、嬉しくある事だ。だがな、どこかのお節介が余計な事をしてくれた結果でもあるのではないか？」

「ははは、まさかそんな奇特なものがあるのですか？全く、私にな想像もつかない事で」

「ふん、したたかな事だな、マザリーニ」

「はて……」

ウェールズはただ見ていた。二人の政治家を。生の駆け引きとは、このような濃密な空気が漂うものなのかと、ただただ呆気にとられていた。

自分はまだまだ甘い。

こんな妖怪には適わない。

「しかしあのハインリヒという男はとんでもないな。いつそ、あの男にサウスゴータでも任せてみようかの？」

「父上、それは流石に…また国が荒れては…」

「ふふっ…慌てるなウエールズよ。戯れた。許せ」

慌てるウエールズに苦笑を漏らすジェームスだったが、マザリーニは笑わない。

「いつそ、そうなされたら如何か？」

マザリーニの言葉は電撃の様だった。頭から足の先まで衝撃が突き抜ける。「ハインリヒに領地を。それもアルビオンに」この意味は大きい。

「マザリーニ殿！お戯れが過ぎますぞ！」

「ウエールズ！黙れ」

ジェームス一世は目を閉じ、何かを考えているのか、押し黙り話さない。マザリーニも静かに冷えてしまった紅茶を啜る。

カタン…

マザリーニのカップがソーサーに戻された。ジェームス一世の目が開かれた。

「マザリーニ殿、どういう形で落とすかね？ 申し出に関しては、全く申し分はない」

ウェールズにはまだ、わからない。

「自治区…という形が一番かと」

「ふむ、まあ無難であろうな。して、いつが良いと考えておるのだ？ 私はもう若くない。機を逃すことは出来ぬからな」

「そうですね、始祖の降臨祭から二月、テイルの月あたりでしょうか？」

「ふむ、問題は無いな。だが、ガリアあたりの横槍は困るな。ならば、降臨祭の前後で園遊会など開いてお披露目かの。ロマリアの根回しは頼むぞ？」

「御意。園遊会はラグドリアン湖畔、モンモランシ領でいいでしょう。では、それを叩き台に煮詰め、改めて調印という運びで」

「うむ、それでよい。調印はトリスタニアまで出向いっつぞ」

「まことに感謝の念にたえません」

二人の妖怪は、先ほどまでとは打って変わり、どこか安堵の表情を浮かべていた。それほどの緊張をはらむ交渉だったのだ。

未だ理解できずにいるウエールズは、目を白黒させて二人を見やる。

「ウエールズ、まだわからぬか！お前とアンリエッタの結婚の話しぞ。そして、アルビオン王国は、アルビオン自治区と名を変え、トリステイン王国とアルビオン王国は一つの国になるのだ！！」

「へっ…はぁ…えええええ！！？」

「ふっマザリーニよ、こんなので王が勤まるかよ？」

「ははは、ウエールズ殿下、即位まで時間がありませんぞ？このマザリーニ、国の安寧の為なら、王族とて容赦はしません。覚悟

めされよ？殿下」

「はあ…お手やわらかに…」

「「わははははははは」

「まあ心配無いわ。金色の守護神もおるしな？マザリーニ」

「御意」

こうして、始祖の直系たる二つの王国がひとつになった。

この事が新たな戦乱の火種となるか、はたまたハルケギニアの福音となるか、それはブリミルとて判らぬ事だった。

あの男ならば或いは……

## 次回予告

『ZZZ……………ん？ああ、すまんすまん、ザルバだ。しかしハインも節操が無いな。青髪に乳神様にヤンデレ爆弾娘か……俺も次の相棒探すかあ？っておいおい…マジ泣きすんなってハイン。冗談だったの。さあ次回の-ZERO-の無責任男は、「ハイン君が欲しい！後ろの正面カ〜〜リン」だ。必ず見てくれよな？』

??  
メロン仕掛けの爆弾でメロンメロン。おいおい、そんなメロウな雰囲気  
シリアス難しい…

文才の無さに凹みます。

今回でアンリエッタが片付きました。ハインにアンアンは似合わないもんですね。

因みに、自治国のトップはなんとという呼び名なんでしょう？お馬鹿な私にどなたかご教授戴きたい。

?? パワートウザビーポ！ライドン！…シェケナベイベ〜！……はあ…

赤い月、青い月が照らす淡い光、水銀灯もないハルケギニアの夜は、月の光だけが道しるべだ。

雲ひとつ無い夜ならば、月は闇を昼間のように照らす。そして、その月明かりの空を赤い竜のシルエットが映る。

「わあ〜空の散歩は楽しいんですね！」

テファがはしゃいでいる。彼女は、かつての政変の折りに、マチルダに救われ、ウエストウッドの森に匿われた。

以後、テファは孤児の少年少女と一緒に暮らしながら、外界とほぼ関わらずに生きてきた。

今こうしてハインに連れ出され、ユラの背中からハルケギニアを上から見ている。

ウエストウッドが世界の全てだった少女には、この光景は刺激的なものであるし、またこの先、目にするもの耳にするもの全てが、彼女にはカルチャーショックを与えるだろう。

「うわ〜！アルビオンがあんなに小さくなったよ！マチルダ姉さん！ハインお兄さん！ねえ！…あれ？」

テファがキョロキョロとハイン達を探した。

ハイン達はユラの背中の後ろ、だいたい尻尾の付け根あたりにいて、額を突き合わすように座っていた。

ぼそぼそ……ぼそぼそ……はあ……

テファは声を掛けようとしてやめた。何故なら、二人は背中にどんよりとした負のオーラを背負っていたからだ。

ハインとマチルダは、ド・オルニエールに近付くたびに、すっかり忘れていた事があったのを思い出したのだ。

マチルダは昨晚テファが寝たあと、アルビオン関連で色々頑張ったご褒美にと、勝負下着旅verでハインを挑発し、いきり立ったハインはウエストウッド村祭りをわっしょいわっしょいしたのだ。

乙女同盟の盟主、カトレアとその愉快的な仲間達に、戻ったマチルダは身体検査されてしまう。つまり死刑確定という事だ。

ハインに至っては、裁判すらされないだろう。シエフィールドは既

にオルニエールに送付済であるし、今ティファニアを輸送中である。乙女同盟たちがティファニアの二つの賢者の石を目にしたら……

何れにせよ、二人の首は乙女同盟のさじ加減ひとつなのだ。

「「帰りたくね〜」」

魂の叫びであった。

時の流れとは無情である。

ハインとマチルダが、往生際悪く色々考えているうちにユラは屋敷に到着し、《シカ マルカジリ》と一言残し、姉二人が待つ森へ帰ってしまった。

屋敷の前、カトレアを先頭に、ジエシカ、エレオノール、メイド……メイド!? うちに使用人はいなかったはずだ……黒髪!? ちよ……シエフィールドさん何やってんの!? 若干頬を染めてるし……しかしかトレア、いい笑顔でこっちを見てる……

「お帰りなさい、ハイン アルビオン出張お疲れ様でした。ほらほら、ジエシカさんも」

「お帰りハイン。疲れたでしょ？お風呂沸いてるから、ゆっくり汗流してね？さあエレン？」

「あら、ハイン？アルビオンで大変だったわね？でも貴方は私達の誇りだわ。ふふっお疲れ様」

「あのあのっ！ご主人さま、お帰りなさいです！シエフィールドはカトレアさまに…えと…えと…かわっ可愛がつて貰っていい子になりました！あっ…えと…ご主人さまあ…シエフィールドは頑張ります」

「……………」

「……………」

絶句するハインとマチルダだった。マチルダはハインから、シエフィールドとのやり取りを聞いていたが……

（おいおい…………カトレア…………行儀教えてとは言ったが、魔改造しろとは……………いっただい何があったんだ……………）

(いったいぜんたいナンなんだいこの可愛い生物は……はっ！？私より下の立場が出来た！？これで可愛がりの回数減るかも…フヒヒ…)

二人がポカーンとしていたら、立ち話もなんだからと屋敷に入られた。

ハインは、「まあ、特に問題は無かったな？シメシメ」と安堵しながらリビングの扉を開けた。

そして閉めた。

開けた。

ここ

閉めた。

開けた。

婿殿？

閉めた。

逃げた。

捕まった。

縛られた。

転がされた。

「逃がしませんよ？ハイン。少し真剣にOHANASHIがいますのよ？」

烈風カリン久しぶりの登場である。

「モガモガモガ！！」

「あらあらまあまあ…何を言いたいかわからないわ。シェフィールドさん、猿轡を外しておやり」

「はいです奥方様」

「ぷはっ！テファ！逃げろ！遠くに逃げるんだ！はやモガモガモガ……」

またもや猿轡を噛ませられるハイン。

「あなたの鎧やら韻竜やらを見たら、エルフくらいとるに足りませんよ。ただ問題は……またもや貴方はラ・ヴァリエールを蔑ろにしましたね？」

フルフル…フルフル…

必死で顔を横に振るハインだが、黙殺された。

「そのことについて、貴方とはじっくり話をした方がいいと私は判断しました。まあわが娘から逐一連絡は入ってましたから、粗方知つてはおりますがね？」

バツ！！

跳ねるようにハインはカトレア、エレンを見た。

「モガモガモガモガ！！（お前ら俺を売ったな！）」

ハインは「ブルータス、お前もか！？」と叫んだカエサル的心境だった。まさに獅子身中の虫…あいつらの大人しかった理由がわかった。

烈風カリンのお仕置きの前振りだったのだ！

「モガモガモガ……モガモガモガ！！」

「…シエフィールド」

「はい、奥方様」

完全にカリン様の下僕化しているシエフィールドが、ハインの猿轡を外す。

ハインはシエフィールドの目を見た。若干逸らされたが、ハインは全て悟った。こいつの目は完全に真性なマゾヒストのそれだった。

シエフィールドの原作でのジョセフに対して、ある意味狂信的な傾倒っぷりは、DMだったからなのであるだろうか？

「それで？申し開きはありますか？」

カリンの楚々とした顔が勝利を確信した人間の表情であり、ハインはそれが気に入らなかった。

ハインは決意した。烈風カリンよ、その余裕は死亡フラグと言うのだ、と。我が乾坤一擲の一撃、思い知るがいい、と。

「カリンさま？……申し開きはございませんが、我が妻達の前では言えぬ機密もございます。つきましては別室にてお伝えしたい事が……」

ハインはそう言い、その目に「熟女の魔眼level10」を発動させた。

「そっそっですわね……わかりました。シェフィールド！」

「はい、奥方様」

カリンの号令の元、ハインの拘束が解かれた。

パタム……

ハインとカリンは別室に消えた。

カトレアは危機を悟った。あわててハインが消えたドアに耳を寄せた……が、サイレントが仕掛けられたのか、かすかにしか聞こえない。

「……カリ……様……ですよ……んちゆ……」

!?

「……せんわ。……主人が……ああ……イン……ああっ……ああ  
これよ！これがほしか……」

カトレアは皆に無言で首を横に振った。

皆の心は一つ……「烈風カリン……使えねえ……」だった。

パタム……

クララの家のロッテンマイヤーさんのように、髪をひつつめ、アップにしていたカリンが、うなじをほつらせ、頬を紅潮させ、妙に色っぽくなって出てきた。

「じゃあ…またね？ハイン ……私帰るから、今度は……ね？チュッ」

カリンは少女のように照れくさそうにハインにキスすると、両手で顔を隠し、そそくさと外に出て、マンティコアに跨り帰っていった。

一同絶句だった。

「お前らいい度胸じゃねえか？だかな、烈風ごときに萎える？じゃねえ！！！！お前ら覚悟しなッ！！！！！！！！」

壮絶な笑みを浮かべた悪魔がそこにいた。

ハインは全員をレビテーションで浮かせると、寝室に叩きこんだ！

その後何が行われたか、筆者は語れない。大人の事情というやつである。

ただ、岸和田だんじり祭よりも激しい祭りが行われたと言っておこう。

わっしょい！わっしょい！

わっしょい！わっしょい！

わっしょい……

祭りは三日三晩続いたという。

ハイン恐るべしッ！！！！

外道の道を一人往くかハインッ！！！！

そこは厳しく辛い道だと言っのに！

ならば迷わず行けよ！バカヤロー！！！！！！

三日後、つやつやしたハインが意気揚々と外出していき、満足気な

表情をしながらも、血の気を失った妻、sが発見されたという。

そんな騒動が沈下した頃、さあぼちぼち領地経営に専念しようかな？なんてハインがポヤポヤしていた時、エレンがハインの執務室にやってきた。

「ハーイン？何かわからないけど、マザリー二様から城に來いって指令が來てるわよ？」

「ん〜？あのオツサンは俺をパシリだと思ってないかあ？ まあいいや。その辺の対応はマチルダに処理させてたんだが、マチルダどこいった？エレンだって忙しいだろうに……」

ハインはやれやれと溜息を付きながら、エレンを膝の上に座らせ、頭を撫でる。

「うつ……むう……なによ？これは」

「どうだ？エレン。どんな気持ちか正直に言え」

「なっなんか…恥ずかしいというか…子供扱いしないで欲しいとか

……ありがとう……」

「ありがとう？」

「嫌いじゃないって言うか……むしろ嬉しい……かも……しれないデス」

「よしっ！！俺にもナデポスキルが備わっていたらしい！！」

「ナデポ！？」

「気にするな。黄金騎士の奥義だ 嘘 ほれ、なでこなで……」

エレンは目を細め、和みきっている。

「はっ！？じゃなくて、マチルダはどうしたの？」

ハインが手を止めたので不満気なエレンだったが……

「んつとね、テファとハイキング！とかはしゃいで朝からいないわ」

「あいつ…完全にフリーダムだな…仕事増やすか…」

「かわいそ　で、マザリー二様の指令…今日よ？」

ハインがプルプル震えている……

「そういう事は……」

「事は？」

「先に言え~~~~~」  
くっ!!!!!!!!!!!!!!」

「きゃあ!~!」

ハインはエレンを放り出し、脱兎の如くトリスタニアの王城に向かって走っていった。

「はあはあ……たく……ああ、すみません。ハインリヒが来たとき、マザリー二枢機卿にお取り次願いませんか？」

王城についたハインは、衛兵に口上を述べた。だが…

「おお！これはこれは黄金様！先だつての活躍、まことに見事にございました！では、しばしお待ちを！」

「は……はあ……」

ハインは思った。なにその恥ずかしい二つ名……あのオツサンの仕事だな……黄金騎士は秘密なのに……なんか着々と外堀つめられていく気がするぞ……嫌な予感がビツシビシする……帰ろう……いや、帰らねば色々ヤバイ……そうだ旅に出よう！サハラあたりに数年潜伏すれば……いや、むしろロマリアで僧になろう！よしよし完璧だ。

ガシッ！ガシッ！

踵を返したハインの両肩が掴まれた。グリップがやたらと強い。

そこには涼やかな笑顔を浮かべた、髪を短くし、前髪パツツンなブルンドの女と、やはり短髪にアッシュグレーの髪色をした女がハインの肩を掴んで立っていた。

「黄金のハインリヒ様、お初にお目にかかります。私、アニエス・シュバリエ・ドウ・ミラン銃士隊・隊長と、こちらは副長のミシエルです。御高名はかねがね伺っています。お会いできて光栄です！」

「ミ、ミシエルです。宜しく願いします!」

「はあ、いやちよつと用事を思い出し、ミシエル、ハインリヒ様をお連れしろ!失礼の無いようにな!」

「はっ!」

ずるずる……

ミシエルに引き摺られていくハイン。彼は思った。この状況こそが失礼であると。ただ、後ろから抱き抱えられ、引き摺られている現在、背中に胸の感触があり、首筋にはハアハアとミシエル嬢の息がかかるのだ。

ハインは強く思った。

「悪くないッ!」と。

そして、ハインは身をまかせ、目を閉じた。うーんマンドム……

そして通された豪華な前室には、正装したいい笑顔のラ・ヴァリエール公爵夫妻を始め、グラモン伯やらモンモランシ伯などの諸侯達、

その他領地持ちでは無いが、実力者達がわんさかハインを待っていた。

皆ハインを見ると、「おお…黄金の」だの「さすが英雄殿、凛々しきことよ」だの「あれが女の敵か」だの「うちのモンモランシーを嫁に」だの、やたらとざわざわしている。

「……………」

「……………」

沈黙が場を包む。

「じゃあそゆことで」

シユタツと片手をあげたハインは回れ右をし、スタンディングスタートからすぐ様トップスピードへとギアを上げた。

俺は今…風になっている…

ランナーズハイかアスリートのZONEか、ハインは恍惚としながら出口を目指す。

ガシッ！！！！ゴロゴロ……

あと数マイルでハインは自由になれた。

だが、後ろから残像を生むスピードで走りよった烈風が、全盛期のヒクソンを彷彿とさせるタツクルにより、前のめりに倒れテイクダウンを奪われた。

そのままハインはカリンにチョークスリーパーで落とされた……

……

……

……

……

……

目醒めるとそこは玉座の間だった。

玉座に向かって数マイルの位置に椅子が置かれ、ハインはそこに座らされていた……縛られて。

玉座の横にマリアンヌとアンリエッタ、その反対側にジェームス一世とウエルズ皇太子、マリアンヌの後ろに隠れるようにマザリーニがいた。

皆が皆、輝かんばかりなうそ臭い笑顔を浮かべ、よく見たら、部屋の端っこのほうに嫁・s達がやはりいい笑顔で立っていた。

「マザリーニ……謀ったなあ!!!!!!」

「はてさて、嫁を取るためにドウ・オルニエールを継ぐと申してたではないかな？ハインリヒ殿」

「ぐぬぬぬ……ならなんでジェームス一世やウエルズがいるんだ！？」

「ハツハツハ……先のアルピオンの内乱を納めた英雄に、何も褒美が無いなんて王の沽券に関わるとジェームス一世殿下が申されましてな？」

「ふっふっふ……英雄殿、まあそういう訳だ。すまんのう、サウスゴータ侯」

「諦めよ、ドウ・オルニエール侯」

「ハッハッハッハッハッハ……」

ダメだこいつら……何とかしないと……ならば！！

「お歴々のトリステイン貴族の方々！！わたくし如き素性の怪しい平民など貴族にしちゃダメですって！！ね？ね？ほらっ？」

ハインは必死に訴える。だが、現実是非情である。ハインに味方はいなかった。

「黄金さまがいれば国は安泰」だの「英雄殿がご謙遜を」だの「モンモランシーを嫁に」だの……つまり満場一致である。

ハインを取り込めば、軍事的に強烈なカードとなる。その有用性を考えたら、面子など些細な話なのだ。国に軍を派遣するよりも……

スタスタ……

マリアンヌとアンリエッタが満面の笑みを浮かべて、ハインリヒに近寄る。

「ハインリヒ、この度の働き、まことに感謝を致します。私達が不甲斐ないばかりに貴方に苦勞をかけたね。貴方には余計な苦勞を背負わせてしまいますが、どうか願います。このトリステインを助けてくださいまし」

マリアン又が膝をついた。

「ハインリヒ殿、ウエルズ殿下と婚姻の運びとなりました。全てあなたのおかげだと聞きました。本当に感謝します。これからトリステインを守って頂きたいのです」

アンリエッタも膝をついた。

ふう……

ハインは大きな溜息をついて天を仰いだ。

「はぁ…分かりました…お二人に膝まで下げさせて固辞したら俺が悪者じゃないですか……謹んでお受けしますよ……はぁ…」

玉座の間は歡喜に包まれた。

そしてここに、新たに広大な領地を持つ大貴族、「ハインリヒ・シユバリエ・ドウ・ミヤタ・オブ・サウスゴータ・ドウ・オルニエー

ル侯爵」が誕生したのだった。

「やあ、ハインリヒ侯、めんどくさい世界に君も来てくれて嬉しいよ。君だけ自由を満喫なんてズルいからねえ。ふふっしっかり余に仕えてくれ給え？」

「けっ：余なんて柄かよウエルズ。はいはい、しっかり仕えますよ、ウエルズ殿下」

二人の軽口に大きな笑いに包まれた王城だった。

今、トリステイン王国は平和に満ちていると言えよう。願わくばこの平和が恒久であれば、人知れず祈るハインリヒだった。

某国某所

「余はひとり…か。それもまた一興。くっくっく……………」

コトリとキングが倒れた。

## 次回予告

『ハインよお偉くなつちまったもんだな？ああん？俺にもたまに活躍させやがれ！！俺にはなあ、あんな技やこんな技があるんだぜ？……いや、言わないけどな。良いストリッパーは最後の一枚は脱がねーんだよ！ああん？知らねえって？はあさいですか。まあ……次の-ZERO-の無責任男は、「いやっ……髪青いし……ごついし……くっくっくとか言うし……すいませ〜ん、このオジサン変なんです！だ。必ず見てくれよな！』

?? パワートウザビーポーライドン! シェケナベイベ〜! ……はあ… (後書  
ドウだのラだのフォンだのオブだのややこしいんですよ……

間違ってたらごめんね。

取り敢えず今回でアルビオン王国篇は終わりです。

まあそのうち併合イベントが発生しますがね。

一話か二話の女の子絡みの日常話を書いたら、タバサを絡めたガリア篇の予定です。

また引き続き読んでいただけたら幸いです。

ナナツボシ

?? 私の眼鏡はどこですか？ Side story of Eleanor

ちよつとグダグダかもしれない

まったく、有り得ないわ？カトレアが駆け落ちですって？大人しいあの子が信じられないわ。相手の男は非常識ね？公爵家の娘よ？カトレアは。

いくらカトレアの病を治したからって……。だいたい、いちいち怪我を治したメイジに恋してたら、みんな水メイジを目指すわ！そうでしょ？

わたくしだって……

わたくしだって恋をしてみたいっていう憧れは持っているわ？

だけど、男子のいないラ・ヴァリエール家の長女ですもの。わたくしが我が儘言うわけにはいかないもの。

だから、その代わりと言ってはなんだけど、お父様には無理を言つて、王立アカデミーに勤めるのをお許し頂いた。

わたくししが知識に対して貪欲になったのは、二人の妹のため。

おちびは魔法が使えない。

カトレアはどんなメイジでも治せない不治の病。

わたしは、それをなんとかしてあげたかった。

おちびはきつとわたくしが嫌いでしょうけど、あの子はお母様の血を一番濃く引いているわ。

だから誰より負けず嫌いだし、誰より努力家なの。

でも口惜しさと羞恥に、隠れて泣いてるのは知ってたわ。

だからなんとかしてあげたかったの。姉としてよ？特別な意味は無いんだからね？

カトレアには…思いはおちびとは少し違った。

確かに病を治したかった。でも、それ以上に……うん…あの子に嫉妬していた。

カトレアは、わたくしがもっていない全ての物を持っている気がしていたわ。

太陽のような笑顔、人に好かれる物腰、自分の常識に無いものを許容する懐の深さ、豊満な胸……全てわたくしには無いものなの。

だからきつと、カトレアの病をわたくしが治して…うん、それで勝った気になりたかったのかも…うん、姉として心配という愛情が殆どよ？ただ、今思えば、それが全てじゃなくて、そういう意味も混じっていた…そういう事。

ラ・ヴァリエール家の為に、自分を偽っていた。

だからわたくしは、勉強や研究に無心に打ち込んでいたのよ。

知識は裏切らないから。

わたくしの費やした時間だけ、わたくしの財産となっていたわ。

気が付いたら昼も夜も無く、机に向かうようになっていたわ。

知識とは麻薬ね？

わたくしは女としての喜びよりも、学ぶ事そのものに魅力を感じてしまった。

視力を悪くしても、それでも躊躇さないほどの魅力だったの。

いつしかそれは、わたくしという価値を表すもの…そういつても過言ではないほどの財産だわ。

少し角張った眼鏡は、わたくしを守る盾となり、知識に裏打ちされた自信はわたくしの剣になった。

お母様が持つてくる見合い話は、確かにラ・ヴァリエールに見合う家柄の殿方ばかりだったわ。

だけど、昔からお母様から教育された貴族が貴族たるための嗜みや礼儀、そういう貴族然とした殿方が、わたくしに気に入られようとへつらひ…

逆に、自分はいかに凄いか自慢話ばかりの殿方、どちらにしても暫く時間が経てば、必ずメッキは剥がれた。

わたくしが数々の見合いを破談にしてきたのは、結局の所は、わたくしを燃え上がらせる殿方がいなかったってことなの。

学ぶ事で世界が広がったわ？ でも、そのせいで昔は見えなかった  
真実が見えてしまったの。

親が築いた栄光や知識は、親のもので、その息子には引き継がれない。  
引き継がれるものは財産だけ。

殿方としての魅力は、その方の研鑽のたまものなの。だから見合い  
の席でいくら取り繕っても、お付き合いですればするほどボロがでる。  
だからわたしはわざと嫌われる態度をとったの。

ラ・ヴァリエールの家名と伝統を継ぐには、たしかに家の格があれば  
対外的には問題無いのかもしれない。

でもわたしは、今まで自分を押し込めてラ・ヴァリエールの長女  
として振る舞っていた。

だからこそ結婚だけは、えっと…その…ちゃんと恋をしたいの。

わたしを愛してくれて、わたしも愛して…そういう殿方に奪  
われたいの。

カトレアが平民らしい男と駆け落ち。いや、カトレアがその男にベ  
タ惚れして押し掛けた？

どっちでも関係なかった。わたくしの怒りは、カトレアの常識はずれの行動じゃないの。

おちびは貴族の誇りがとか、ラ・ヴァリエールの威厳がとか怒り狂っていたけど、わたしはただ、カトレアに嫉妬しただけ。

カトレア？あなたはわたししが願っても決して手に入らないものを沢山持っているじゃない。

そして身体も健康になっただじゃない。

今度はなに？責任も立場も捨てて、家を飛び出した？

どれほど周りが貴女のために心配して心を痛めていたのか判っているの？

許せない。奔放なあなたが許せない。

せめて一言相談してくれても良かったじゃない…

だからわたしは、おちびの尻馬に乗って、その平民…ハイソリヒ

の家に怒鳴り込む事にしたわ。

お父様もお母様も、むしろその男を歓迎しているようだったけど、わたしは研究者のプライドとして、目で見ただけのしか信じません。

わたくしの目で見定めさせて貰うわ？平民のハインリヒ。

トリスタニアのブルドンネ街にわたしは居る。

目の前にはハインリヒの自宅がある。なんだか物凄く大きいわ。平民の癖に意外だわ。

建物の一階は、なにかの商売をしているみたいね？ん？何この嗅いだことが無い香りは。とても食欲をそそるわね？朝食を抜いたのは失敗ね。お腹が空いてしまったわ。不覚よ……。

えっと、入り口は？あら、階段で二階に行くのね？

「万屋　一見さんお断り」

あらあら、目立たない看板ね？見たところ、どうも偉そうな文言だ

けれども、解る人しか来るなという意味なら、逆に効率的ね。

なるほど、客層は選んでいるのね？理にかなっているわ。

あら、この紐を引けばいいのかしら？

チリンチリン……

聞いたことが無いけど、品がいい音ね？

「はいはい、どちらさん？」

中から淡い赤毛の背の高い男が出てきたわ。ずいぶんと逞しい身体をしているのね？

「……んん？あんた、カトレアのお姉さんかい？」

そうですね、どうして名乗ってないのに解るのかしら？

「いやあ、髪の色は公爵様だけど、顔はみんなカリーヌ様に似て綺麗だからなあ……」

なっ!?!なにを…言ってるの!?!そっそれよりカトレアはいるかしら?話があるので会わせて貰えるかしら?ハインリヒ?

「おおう玄関先ですまんね。カトレアはまだ寝てるから、取り敢えず入りなよ。紅茶でも入れるから」

ふん…気は利くようね?仕方ないから呼ばれるわ?

ハインリヒはわたくしをリビングに案内した。シンプルだけど、品がいい内装ね?

しばらくしてハインリヒが、白磁のティーセットと何かの小箱を持って戻ってきた。なにかしら?

「紅茶の好みは?」

ん?そうね、少し甘めのミルクティーをお願い出来るかしら?

「あいよ」

このハインリヒという男、口の聞き方はなっちゃんないけど、紅茶を入れる姿が優雅ね？動き方全てにそつがないというか、馴染んでいるという表現が正しいかしら？

「はい、お待たせ。お姉さん。蜂蜜が足りなければこれを使ってくれ。あと、これは俺が焼いたビスコッティだ。堅いが紅茶を浸して食べてみてくれ」

ビスコッティ？聞いたことが無いわね？ミルクティーは…あら、素晴らしい香り…どんな葉を使ってるのかしら？あらあら、このビスコッティ？美味しいわ…あーん、朝食抜いてきたのは失敗だったわ…止まらないの…飢えた人みたいで恥ずかしいわ…

「ん？腹へってるのか？んじゃちょっと待ってな」

いや、あの…恥ずかしいわ…あら、行ってしまったわ…気は…利くわね…うん…

うん？何かいい匂いがしてきたわ？…ああんお腹が鳴ってる…止まってえ…もう！ハインリヒが悪いのよ！わたくしがこんな風になるくらい美味しそうな…

「ほいよ！軽めのにしたからさ。遠慮なく食べてな？ちよつと食べづらいけど、そのまま嚙り付いてくれ」

ハインリヒが持ってきたのは、薄く切ったバケットをカリカリに焼いたものに、トマトの角切りに、何かいい香りのハーブとニンニクかしら…味付けはシンプルな塩…あとはオイルで和えたものに乗せてあるわ。

わたしくしがどうやって食べようか悩んでいたら…

「ほらこうやって、皿を持ってだな、空いた手でパンをもつて…シヤリツサクツ…モキュモキュ…な？ちよつとだらしないけど美味いんだ。やってみ？」

そういつてハインリヒはウインクしてみせた。うつ！？…綺麗な顔してるのね…はっ！？違う違う…だいたいが淑女のわたくしに、こんな下品な食べ方を…うゝ美味しそう…ああん我慢出来ないわ…シヤリツサクツ…もきゅ？…もきゅもきゅもきゅもきゅ！…はあ…快感…一気に食べきって…あー！！わたくしのバカバカ！…もう恥ずかしいよ…

「どうだい？うまい？」

美味しいわよ！…！

「紅茶飲む？」

飲むわよ！……！！

「くすくす……なんだ、そんな顔も出来るんだな？ 仏頂面よりずっと可愛い」

なっ！？ ななっ！？ かわかわっ……可愛い！？ なっなにをからかっているの！？ ししし失礼じゃない！！……可愛いなんか言われたこと無いもの……嘘つかないよね？

「はあん？ アホか……どれどれここをこっして……」

ちよつとなに！！いきなり横に座って……失礼じゃな……

「はいはい暴れない。よつと」

あっ！？ わたくしの眼鏡が……あつ髪をなににするの！？……やめてやめて……素顔は見ないでえ……

え？どこ連れてくの？鏡？見るの？えっ……誰この娘は……

そこには、ハイシリヒに髪をポニーテールにされ、眼鏡をつけていない私がいた

「なっ？可愛いだろうが。あんたは元がいいんだ、色々隠さないで、胸はればこんな変わるんだわ。どうだ？悪くないだろ？」

悪くない……みたい。でも、わたくしは……ラ・ヴァリエールの長女だし……えっと……貴族の伝統がその……カトレアは家出たし……んつと……おちびは落ちこぼれだからわたくしがしっかりと……あれ……あれっ……なんでわたくしは泣いているの？……悲しくないのに……わたくしは……わたくしは……

「頑張りすぎなんだよお姉さんは。まあいっばい誰かの為に頑張つて、気が付いたら自分のこと忘れてたんだよ。お姉さん、大変だったね？頑張ったね？偉い偉い」

やめて……わたくしの心を暴かないで……わたくしは……長女だから当たり前……なのに……辛い……辛かったの……ウウウッ

あなたは、どうしてカトレアを受け入れたの？押し掛けたんでしょ？相手は公爵令嬢よ？普通に考えたら上手く行くわけ無いじゃない？

「関係ないんだわ、俺には。まあ、制度や文化は否定しないけどね？ただ、理解はしても受け入れたくないものは絶対に受け入れられない俺は」

でっでも、平民が……公爵に逆らえないでしょ？

「だから、戦い方も色々だろう？因みにカトレアほしけりや貴族になれって言われたぜ？だったらなればいい。金稼いでゲルマニアでもなれるけど、やっぱり保守的なトリスティンでなれば、公爵夫妻も否定出来ないでしょ？だから、そうなれば俺の勝ちさ。挑み甲斐ある勝負だぜ？」

あなた、凄く強いよね？……わたくしにはマネできないわ……羨ましいな……

「ぶっ…ぶぶ…あはははははは…くくっ」

なっなによ！笑うなんて酷いわ！

「はははっ…すまんすまん。あなたは充分強いだろうが」

あんたじゃないっ！エレオノールよ！

「ぶぶっ…エレオノール？あなたは保守的なトリスティン王国で、結婚に”逃げず”に知識を学ぶという道を”女”だてらに突っ張って来たんだらうが？このハルケギニアは六千年も経ってるのに、ほぼ六千年前と同じ文化レベルだと言っのに」

えっ？どういう意味？

「あのな？幻獣だって六千年あつたら進化するって……なのに人間は六千年経って始祖の時代と変わらない生活してる。これがどれだけ異常かわかるか？」

そっ…そうね…たしかに異常かも…しれない。停滞するにしても長過ぎるわ……

「何故かってそらあ魔法に胡坐書いてるからだろうな。魔法は便利だぜ？けど、魔法は精神力と等価だからな。つまりは限界があるだろうが。じゃあ、人を支える道具が進化したらどうなるよ？精神力は関係なくて、単純に扱う人間と、物量の問題だろ？」

そうね……

「魔法が有限の道具だとしたら、それに固執するってのは、考える事と、進化するっていう可能性を八ナから否定するって事とも言える。まっあくまで俺のいち考えだけだな。ただ、エレオノールは学ぶ事に貪欲だと聞いた。あんた、学ぶ前と後じゃ価値観変わったんじゃないかい？」

そうね。でもその価値観の違いがわたくしを苦しめてもいるわ？…認めたくは無いけど、貴族には貴族に相応しくない人間が沢山いる。でもそれって人間性の問題だと思っていたけど、あなたの話を

聞いたら確信できたわ。学ぶ事をしないで過去にすがり続ける醜さなのかも知れない……

「多分、ドラスティックに変わることは痛い事なんだ。皆、自分が痛いのは嫌なんだわ。だから誰かが先に痛がって、それを見ることで安心したいんだ。良いか悪いかじゃなくてさ、怖がりで痛がりだから、臆病になるんだろな？万が一失敗して、全て無くす事を」

あなた…凄いわ。まるで別の世界から来たみたいね。ふふっ……

「よくわかったな？すげえなエレオノール」

ええええっ！？なに言ってるの！？からかわないでくださる？怒るわよ……

「太陽系第三惑星地球、東アジアは日本……それが俺が産まれて死んだ世界だ。父も母もいたし、魔法なんか無い世界だ。だが、ハルケギニアの何倍も死亡率が低く、何倍も出生率がたかい。地球の国の人口は軒並み億単位だ。因みにトリスタリア位の街並みなら、地球じゃダウンタウンだな。またはテーマパークだ。わかるか？魔法が無くてハルケギニアより皆豊かな生活をしている。貴族も平民もなく、みんな働き、家族を持ち、休みは皆でお出掛けだ。五割を超える馬鹿げた税率もないし、老後は助け合って生きる。何より個人の権利を国の法律が守られてるんだ。男も女も関係なく…な？」

えっと…ふざけては……ないのよね……

「ああ、そうだ。ハルケギニアでは異端かもしれない俺の考え方は、俺の世界では標準的な考え方だ。そして、ハルケギニアの貴族的思想は、俺の世界は千年前の出来事だ。なあ、エレオノール？お前はもっと学びたくは無いか？もっと、自分らしく在りたくはないか？」

知りたい…学びたい…何より、わたくし自身変わりたいっ！どうしたらいいの？こんなもやもやした気持ちでいい子を演じるのもう嫌なの！！

「ならやめちまえよ、面倒くさいだろ？んなこと。そして強くなりな。自分の価値観を非難されても心が折れない強さを。他人と自分が違つと当たり前な事をちゃんと理解しろ。お前が覚悟するならば、俺がお前の盾になろう。相手が神なら俺が引き裂いてやろう。…お前は依頼すればいい。自分を守れと。万屋ハインリヒは、依頼達成率10割だ」

わたくし…いや、わたしは…お願いハインリヒ、わたしを守つて…

「その依頼、受けた」

でもわたし、依頼料払えるほどの…えっ！？…んちゅ…はあ…ちゅ…！？…なっなにを…！！

「ん？依頼料の前払い分かな？俺のエネルギーは美女のエキスなんだ」

いやっ…だめっ…カトレアに悪いわ…

「あらあ私はよろしいですよ？お姉さま だって…私とジェシカじゃ体が持たないんですもの お姉さま、頑張ってね？」

カツ…カトレア！？ちょっと待って！倫理的にとか…えっと…あの…

「ふわあ〜ハイン？まだ眠いからベッドに戻るわ？あっお姉さまとは客間でね？じゃお姉さま、ごゆっくり〜」

カトレア！？待って！…あのハインリヒ？…えっと…

「さあて、お許しが出たから問題ないようだ。じゅるり…では改めて…いったきま〜す！」

えっ？えっ？…いやあ〜~~~~~あああ  
…あん

え？その後何があったかって？えへへ……ひ・み・つ

そうね、新しい世界が広がったってことね。

おちびには悪いけど、わたしの愛するハインリヒ様の側にいたい

愛するとか、まだ早い？キヤー

愛してるわ、ハイン？

はあ、なんか悩んでいたのが馬鹿みたい。カトレアとは姉妹の絆が深まったというか……ちがつ！？そういう意味じゃなくて……家族って意味よ！勘違いしたら許さないんだからねっ！

## 次回予告

「あゝ前回の予告は嘘だ。登場予定な青い髪のオッサンがへそ曲げちまっつてなあ？つたくいいトシこいてなあ？え？作者が予告自体忘れてたつて？こほん……ザルバはあメタ発言はいけないと思いまゝす……キモいね俺……あゝ次回の-ZERO-の無責任男は、「えー不肖ジャン・コルベール、わたくしは影が薄くとも、えっ？毛が

「やかましいわい！小生、凄い発明をしたであります！」だ。まあ見てやってくれや…」

?? 私の眼鏡はどこですか？ Side story of Eleonor

ちなみに、ハインがエレンに振る舞った料理は、ブルスケッタというイタリアンです。

パンにケツカーソースを載せたものですが、ケツカーソースは万能なので、パスタソースや肉料理にも合います。

おためしあれ

次回からハイン一味の旅行篇が始まります。お楽しみに。

?? 月に手を伸ばせつてのが俺の信条さ。たとえ届かなくてもね。……「ルベ

ほわぁ……………

ハイン一味はオルニエールの街の中心街にいた。所謂、メインストリート。

「まあ、ジジイとババアしかいない件……」

今ハイン一味は街を視察し、一巡りして一休みしていたところなのだが、まず、この”唯一”の街の町長に、新しい領主であると挨拶したのだ。

町長に確認してわかった事だが、年間一万二千エキュの税収がある……いや、しかないドウ・オルニエールだが、ほぼ農業の輸出入による税収しか無いような状態であった。

麦、芋、葡萄。おもな作物はそんな物だ。

小さなワイナリーが領内にはあるが、領内を潤すほどのキラアイトムとはなりえず、タルブ産ワインに隠れて目立ちほしくない。

現在ジェシカのゴールデン商会が、領内の農業改革と、商会が新たに展開予定のカレー屋「ココが一番屋ねん」の為に、水田と畜産を推進しているが、トライ&amp;エラーの繰り返しで、正直開店休業状態である。

「んまあ、無難ではあるが、逆に言えば特徴のない領地だな。過疎化が進んでいる以上、数年で確実に赤字に転じるな」

ハインは思ったより悪い状況に、疲れたように溜息をつく。

同行しているカトレア、ジェシカ、エレン、マチルダだが、同様に暗い顔だ。

「まあ、前向きに考えればだ。これから好きなように開発できるって点だな。サウスゴータを買ったおかげで資金は潤沢だが、今後一年くらいで下地を作らないと、ずるずる持ち出しって事になる」

因みにいまハイン一味が休んでいるのは、オルニエールの役場であ

る。周りではハインの話を戦々恐々と聞いている町長始め職員たちがいた。

「何か手っ取り早く出来るモノがあればですが、中々そんなうまい話は無いんでしょうね」

カトレアは誰ともなく呟く。

このメインストリート自体、構成が役場、雑貨屋、農鍛冶屋、食料店、テラーくらいな物で、他国が商会なども構えていない。

「まあ、あれだな、手っ取り早く出来るのは、娼館やカジノくらいだが、治安乱れるしやりたくないな」

ハインはこめかみに手を当てながら首を振る。

「ねえ、ハイン。せっかくアルビオンの領地買ったんだし、それを生かせないかな？」と、マチルダが恐る恐る言いだす。

「んん？といつと？」

「いやあ…思いつきだけどき、あんたウェールズ殿下とも懇意だし、

飛行船を利用出来ないかな？つとか……」

「飛行船？ちよつと興味あるね。風石で浮くんだろ？ジャンが食い付くんじやないかい？」エレンが紅茶のおかわりを頼みながら、何気なく言った。

「飛行船があつたら外国の食材が簡単に手にはいるね〜！」ジェシカは目を輝かせた。

「まあでも、風石って高いし、コストが凄そうだよ？」ミルクをくるくるしながらエレンが言う。

「……しょぼん」

「まあ腐るなジェシカ……さてよ……コストなら行き帰りを満載にして、大手の商會に便乗とか……便も増やして……いや、中継基地として倉庫を……ああ働き手が……む……倉庫を領主として運営して期間労働者を受け……いけるか？」

「ちよつちよつとどうしたんだい！？急にぶつぶつ言い出して……」

「おおつ、さすが我妻達だ。アイデアが浮かんだわ。まあまだ練らないとだけどさ？で、カトレア、ジェシカ？焼そば屋はお前らい

ないと運営できない？二週間くらい放置できない？」

「まあ商會を立ち上げてから、ジェシカさんの”つて”で平民の働き者を雇いましたから、前もって準備したら大丈夫：だよな？ジェシカ」

「ええカトレア、問題無いわ。でもハイン、いきなりなんなの？」

「おおお前ら、みんなで婚前旅行に行くぜ！ラグドリアン湖でちよつと静養してからアルビオン行くぞ。行くのはロサイス、サウスゴータ、ロンディニウムだ」

「旅行かい？嬉しいねえ。しかし、行き先と目的はなんなの？あなたの事だし、純粋な観光じゃないんでしょ？」エレンの眼鏡がキラリと光った。

「まあな。すっかり忘れてたが、レコンキスタが悪用してた指輪な？取り上げたんだが、あれは水の精霊のなんだよ。だからモンモラシ伯に頼んで喚んでもらってさ？精霊に返したいんだよ」

「あなた：そんな大事なことを……」

流石のカトレアも呆れている。

「わはは……すまん。でだ、ロサイスは船を生で見たいから。サウスゴータは領主として挨拶。ロンディニウムはウェールズをアンリエッタネタでからかって、弱った所で飛行船を安くうって貰う交渉だな」

「ニヤ……」 ジェシカ

「素敵」 カトレア

「あんまり脅したら可哀想よ。もっとやれ」 エレン

「ウェールズならやってよし」 マチルダ

ハイン一味は黒いのだ。

「なにより、綺麗なお前らをあちこちで自慢したい」

「……ハイン」

という事で、起死回生の領地改造計画を大義名分に、ハイン一味のいい旅夢気分計画が発動した。

「あのう、領主様？なっ何かあたしらに出来る事はございませんか？」

町長が恐る恐る聞いてくる。

「そうだなあ、貴方のほうで人を使ってだな、領内の民の正確な戸籍を作ってほしい。氏名、家族構成、年齢、性別、大まかなのはそんなものだな。それらを村毎に作成してくれ。手間がかかるから、町長の裁量で人を雇え。1日で30ドニエくらいでいいだろ。ただし、雇うのは領内の人間のみだ。取り敢えず期間は1ヶ月つてここで頼む。経費は実費でカトレアに請求してくれ。その際はちゃんと帳簿もつけて提出な？んじや後で予算を渡すから屋敷に來い。俺たちは暫くアルビオンの領地に行くから、留守を頼むよ。じゃ、宜しく頼む」

一気にまくしたてると、ハインは行くぞと出ていこうとする。それを見て溜息をついたエレンは、ハインの袖を掴んで引っ張った。

「ちょっとハイン？それじゃ町長が気の毒よ…目を白黒させてるじゃない」

「えっ、いやあの、すみません…」

ハインも決して悪気はないのだが、一を言ったら十判れという人間である。会話を受け取る側がエレンのように、察する人間相手じゃなければ通用しないのだ。

「ああ、ごめんごめん。俺たちがアルビオンから戻ったら、このオルニールに新しい制度を作る。悪さをしたときの罰、個人の土地所有、商売のルール、税金を納めている領民への福利厚生…つまりは病気になつて働けない時の補助や、安く水メイジを斡旋したりとか……まあ細々としたオルニール領のルールだな。それで皆を暮らやすくして、人を呼び戻す。それには最低限、領民全てを把握しないとダメだから町長、なんとか一月で形にして欲しい。頼む」

「おお…なんと…わかりました！街を挙げて協力しましょう領主様！」

町長が半信半疑だったのも無理はない。基本的にそれまでのハルケギニアの貴族に、福利厚生概念は無かったのだから。

熱心な領主は、飢饉になれば備蓄した穀物を施したり、事故や災害に介入したりもするが、基本的には税を納めている限り、積極的に関わらない。

現代の地球のように、民の生活の向上を前提としていないのだ。

それをハインは、概念から変えようとしている。領民に意識を植え付けるのは困難ではあるけれど。

メインストリートにでたハイン一味、さて屋敷に戻ろうとしていた時だ……

「ハインくくくく！！ハインくくくく！！」

「眩しいよ〜」 ジェシカ

「何も見えませんわ」 カトレア

「これはテロね！？」 エレン

「太陽拳！？」 マチルダ

「いやいや……人の身体的特徴を揶揄するのはいけないと思うぞ？例えそれが、あの年で絶望的なほどハゲ上がったとしてもだ。俺は君達が信じられないよ……ハゲは人一倍心が繊細なんだぜ？汚れよ！ハゲを。空気読めよ！ハゲの心の。俺は悲しいぜ……」

「くくくくいや、アンタが一番酷いから！！！！」「」「」

コルベールが仰向けに倒れていた。目から一筋の涙がこぼれ落ちた。

「くっ……空が青いやコンチクショウ……泣いてないぞ！……ちく

しゅじゅ…」

ややあつて

「で、どうした？ジャン」

ハインがまだダメージから回復していないコルベールに聞く。

「グスツ……ああ、そうでした。タルブから引き上げてきた”せんとうき”の、動力部分の解析が終了しましたよ。これでハインに頼まれた試作品に着手できますよ！ハアハア…ハアハア」

鼻息荒いコルベールに、一同ドン引きだ。

「お〜〜でかした！これはおもしろい事になるぞ……アルビオン行きが楽しみだ！ジャン、来週から旅行行くから準備しとけよ？デカイ軍艦見せてやる」

「ハアハア…軍艦…ハアハア……」

「「「「」」」」」

「帰るか……………」

こうしてハイン一味の、第一回領内視察が終了した。

さて、屋敷に帰ったハイン一味であるが、取り敢えず状況を確認してみよう。

ジェシカ

床にあぐらをかき、両手は後ろに。そしてそのまま天を仰ぎ、「だりい…外だりい…」

エレン

帰るなり、どこかに消えたと思ったら、上下スウェットに着替え再登場。ソファに寝転び、すぐ寝息をたてた。

マチルダ

何やらムダ毛の処理している。

カトレア

暑い暑い、ああ外は暑かった等とオバサン口調で独り言。後、下着姿で風呂に消え、上がったらハイン達の前を全裸で横切り、ああ極楽極楽と、やはりオバサン口調で独り言。

ティファニア

何やら無心で自分の胸のセクシーバイオレットNo.1をしきりに揉んでいる。たまに首をかしげている。

シェフィールド

何やらハインに無理やり御奉仕を命じられた、憐れなメイドが最終的に堕ちていく…というマニアックなシチュエーションの一人芝居を壁に向かって演じている。

「……………こいつらなんかダメだ……………」

ハインは女子高に紛れ込んだ気分になり、げんなりしながら屋敷を後にした。

屋敷をでたハインは、ひとりで屋敷側の研究所に足を向けた。

まずハインが驚いたのは、あんなにスカスカだった研究所が、今は所狭しと置かれた道具や資材だった。

一番広い実験室には、中央に、密かにタルブ村から引き上げてきたゼロ戦が鎮座しており、エンジン部分は外され、防油加工された床にバラされていた。

因みにゼロ戦は、レコンキスタを潰した関係で、タルブの戦闘自体が無くなった。なので、ジェシカーシエスタ経由でタルブ村に打診し、千エキユで買い上げたのだ。

レコンキスタは消えたが、ジョセフやロマリアは今後の展開により、戦争になるかどうかは不明であるから、せめてゼロ戦を量産化出来ないかと、手に入れたという訳だ。

「おや、ハイン君、どうかしたのかい？」

白衣姿のコルベルが現れた。彼は心置き無く研究できる現状を愛し、今では屋敷の部屋にも帰らず、研究所に寝泊まりしている始末なのだ。

まさに、水を得た魚であり、本人は実に幸せそうである。

「それで？何か私によつてもあるのかい？」

「ああ、うん、ちょっと話があつてさ。ちと重たい話だ」

「……そうか。わかったよ。だが長話になりそうだ。紅茶を入れてくるよ」

「うん。頼むよ先生」

コルベールはハインの話が、薄々自分の過去に関わる話だと察した。

彼は湯を湧かし、立ち上る湯気をみながら、その陽炎のようにゆらゆら揺れる湯気に、あの日の炎を重ね合わせていた。自ら命じた焼き討ちの炎を……。

「お待ちせしましたハイン。砂糖とミルクはご自由にお願ひします」

「ありがとう先生。んっ……美味しいな。………なあ先生、あんたが持つてる炎のルビー……あれを俺に取れないかな？」

コルベールは一瞬息を止め、大きく溜息をついた。その表情に苦惱が見える。

「あれは…託されたものなのです…なので渡せません…申し訳ありません」

絞りだすようなコルベールの声にハインが眉をひそめた。

「タングルテールの虐殺」

かつてコルベールは、トリステイン王国の魔法研究所実験小隊の隊長の地位にいた。魔法研究所の名を冠しているが、その実態は王国の暗部といえる荒事を行う部隊であった。

ある時部隊に命令が下った。それはタングルテール一帯を完全に焼き払えという内容だった。

理由は、疫病の蔓延を防ぐために、やむなく焼却処分にするという事だった。

若きコルベールは、生きたまま焼かれる人々の苦しみに心を痛めたが、放置すればさらに沢山の人間が死ななければならぬという現実、心を鬼にして任務を遂行した。

全てを焼き尽くした後、ひとりの幼子を救出した。そして然るべき筋に託したが、その後は知らない。

コルベールが幼子を救出した際、幼子はどう見ても健康だった。不審に思った彼は、この件を調査した。

それで分かった事は、ロマリアの教皇筋からの王国への命令で、当時タングルテール一帯に居たと思われる新教徒への弾圧だった。

その結果、罪の意識に苛まれ、隊を脱走し、そして潜伏した後に魔法学院のオールド・オスマンに拾われ、事情を知りながらも教師として取り立ててもらった。

因みに炎のルビーは、虐殺の際、瀕死の女性から託された物である。これがコルベールの封印し、そして今も胸に深い傷と葛藤を残した過去である。

「先生、あの指輪さ、ただの指輪じゃないんだ。……虚無のトリガーなんだよ……んで、持ち主もわかってるんだ」

「きよっ……虚無ですと！？そんな……持ち主……ハイン君、何か知っているようですね。聞かせてもらえますか？」

「ああ。虚無は原理まではしらんが、同時期に4人存在している。今の世代の虚無は、ティファニア、ガリア王ジョセフ、教皇のヴィ

ツトーリオ、そして、あんたもよく知るルイズだ」

「……………なんと。だからルイズ嬢は爆発ばかり……………それにガンダールヴ！なるほど、納得しました。なぜルイズ嬢が人間の使い魔だったのかを……………」

「問題はさ、いずれ教皇が聖地を奪還するとか言いだすからさ、その時に虚無を4人集めるらしいんだわ。だからさ、虚無の覚醒に関わるアイテムを集めて壊す気なんだわ」

「壊す？始祖の秘宝を？どうしてですか！？」

「あんたの嫌いな戦争が起こるからだよ。たしかにハルケギニアはブリミル教一色さ？けどあんた、まさか世界がハルケギニアしか無いなんて思っついてないよな？」

「……………というと？」

「ハルケギニアの遙か東にはロバ・アリ・カリイレがあつて、サハラの間こうにはエルフの街がある。じゃあその先は？まさかそこで終点なのか？んな馬鹿な話があるわけ無いだろ？世界は大きな球体なんだ。夜空の月や星はなんだ？あれらは丸くて、ハルケギニアだけは四角いのか？つまりだ……………もっと沢山の国や人種がいても不思議じゃないんだ」

「何が言いたいのですか？」

「沢山の国や人種がいるのに、プリミル以外の宗教しか認めないハルケギニアだわ。なら、プリミル教の教典、さらに言えば、プリミル自身が正しいという根拠はどこにある？少なくとも、教会に隠し事は山ほどあるし、教典の解釈が違う連中を新教徒と称して焼き殺したぞ？教会の意志にそぐわなければ異端扱いだ。プリミルを信じようが信じなからうが俺には関係ないが、六千年同じ事の繰り返しだぞ？」

「……すまん…即答が出来ない」

「まあ、いいさ。取り敢えず俺は秘宝を壊す。なければ使えないからな。世を乱すやつは俺は許さない。言っとくけど、俺は敵対したら容赦無くジョセフもヴィットーリオも殺す。その恐れが見えただけでも殺す。やつらが死んで世間が平和になるなら安いもんだ」

「あなたは何を求めているのですか？」

「んなもんはつきりしてるわ。みんなが何となく幸せに生きられるふわつとした世界を作るだな」

「ふふふっ……あなたは実に面白い。わかりました。あなたに指輪の使い方の判断は委ねます」

コルベールは自嘲しつつ、懐から炎のルビーを取り出し、少し眺めてハインにわたした。

「あとな、タングルテールでお前が助けた幼子な…復讐の鬼になって、アンリエッタの護衛になってるぞ。お前が実行犯だとは知らないが、名前のわかる隊員には復讐してる。さあどうする？」

顔を顰めたコルベール。膝の上で握った拳は、小刻みに震えている。

「コルベール、俺の雇われ人として、俺の優秀な家臣として、俺が命令する。三日の時間をやる。城にいき、アニエス・シュバリエ・ドウ・ミランに会ってこい。そして、殺しあい以外でお互いに妥協しあえる方法で解決してこい。必ず生きて戻れ。お前が死んだら、俺がマリアンヌから末端の兵士まで皆殺しにする。嫌なら生きて還れ。話は以上だ」

ハインはコルベールを睨み付け、どなるように言った。

「本当に無茶苦茶いいますな、ハインリヒ侯……わかりました。必ず決着をつけてきます。戻ったら、まだ私が知らない貴方の秘密を教えてくださいますか？」

「うん。話すよ。まあ取り敢えずそついう事だ。じゃあ、三日後にまたくる」

そういつてハインは一度も振り返らずに出ていった。

コルベールはその背中に、ただ黙って頭を下げていた。

研究所の前に立ち、振り替えるハイン。

「さて、メンヌヴィルを探して殺すか…ザルバ？久しぶりに暴れるぞ」

『ああ。好きにやるがいいぞ』

ハインリヒの表情は厳しかった。

## 次回予告

『ハインリヒに何やらスイッチが入ったようだ。多分、血の雨がふるぜ？ヤツに平穩は似合わないからな。魔戒騎士、それは闇に紛れ、闇に忍び、闇を切り裂く存在だ。ハインはそれを再認識したようだ。次回 - ZERO - の無責任男は、「トリスティン王国の夜の街に、極上グルメが現れた！だがヤツが食らうのは人だった！！」だ。必ず見てくれよな！』

?? 月に手を伸ばせつてのが俺の信条さ。たとえ届かなくてもね。……コルベ

ああ、旅行篇まだいけないや。シリアス苦手だあ

?? 小さな恋のメロディ Side story of Kirche (前書)

超短い

「ねえ？タバサ…ねえってばー!!」

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエル  
プストーは困惑していた。

何故ならば、ここトリスティン魔法学院において唯一の”親友”と  
よべる相方、タバサがなんだか素っ気ないのだ。

普段からタバサは無表情であり、それでいてどこでも本を読み、人  
の三倍の食欲を發揮し（某赤い人が「ガリアの姫君は化物かッ！」  
と言ったかは謎）、基本的に会話は一行という唯我独尊な人ではあ  
るが。

それにより誤解を招き、実際の彼女の本質を知ることが出来ない人  
には、「冷たい人間」、「なんか怖い」、「人形」、「はしばみ草  
とかあり得ない」等、ネガティブな印象に繋がる。

ただ、タバサはある事情により、戦闘においては年齢に不相応な程  
に特化しているが、感情とその表現方法は年齢に追いついてはいな  
いのである。

彼女　　タバサの本名、シャルロット・エレーヌ・オルレアン  
の事情

かつて、ガリア王国に二人の王子がいた。

その名前はジョセフとシャルルという。

ジョセフは幼少の頃から、王族にありながら、魔法がまともに使えなかった。その結果頂いた二つ名が「無能」である。但し、その本質は無能に反しており、その事を見抜いていた人間は、二人しかいなかった。

シャルルと、彼らの父王の二人である。

変わってシャルルは、ジョセフとは逆で、杖との契約以降、最年少で風のスクウエアという優れたメイジとなり、人当たりも柔らかく、人心を集めた。

ガリア王の継承の際、王は当然シャルルを使命すると誰しも思っていたし、多くの諸侯もシャルルを支持していた。

ジョセフには一部の支持者しかおらず、無能である彼が王になれるとは誰も信じてはいなかった。……ジョセフ本人も然り。

だが実際に指名されたのはジョセフだった。父王はジョセフにこそ「王たる資質」があると見抜いていたのだ。

そして、ジョセフがガリア王となり、彼はシャルル派を次々と粛清した。

粛清の対象はオルレアン公、つまりシャルル本人にも及び、オルレアン公夫人　タバサの母親は毒により心を壊してしまった。

以降、オルレアン公夫人は近寄るものをジョセフの刺客と怯え、自分の愛する娘すら恐怖した。そして、人形をシャルロットと呼び、シャルロットはタバサと自称した。

タバサは幼い心でジョセフに復讐を誓い、毒物で病んでしまった母を救うという命題を胸に生きている。

これがタバサの事情である。

そのタバサの複雑な事情の一端を知るキュルケであるが、最近のタバサはとにかくおかしいのだ。

特にアルビオン内戦から戻ってからのタバサは変だ。

それまでのタバサは、気が付くとキュルケの側にいて、それを彼女はとても心地よく感じている。ある種、母性に似た感情をタバサに抱いており、だからこそ彼女の異変には敏感なのだ。

朝、起床したキュルケは、自慢の赤毛を丁寧に撫で付け、あらゆる角度から鏡を眺め、抜かりが無いかチェックする。

組み置きの水で身支度をすませ、お洒落は見えない所からを実践する彼女は、たつぷりと時間を費やし、ランジェリーを選ぶ。

キュルケは奔放であり、恋多き女。それはあくまでも彼女のよそ行きの煌びやかな衣裳の一つでしかないのである。

キュルケはそれほど安い女ではない。安い女は安い男しか寄ってはこない。彼女が数多もの恋に身を委ねるのは、駆け引きが心地よいからであり、自分を高める修行みたいな物なのだ。

だからこそ、誰よりも鋭いアンテナを常に張り、恋に身を委ねながらも俯瞰した目で相手を分析している。だから自分という険しい山に挑む冒険者に、敬意を表した接吻は許しても、身体を許されるのは彼女にとって、最後の恋の相手のみなのである。

果たしてキュルケの最後の相手とは、いったいどのような相手なのかは、ハルケギニアの二つの月にもわからない。

## 閑話休題

選びおわったランジェリーを身に付け、姿見を覗く。笑顔…うん、完璧と、儀式を終え、キュルケはその豊かな胸の谷間に、お気に入りのオー・ド・トワレをはたき、学院の制服を身に付ける。これで瑞々しい淑女の出来上がりである。

完璧に仕上がったキュルケは食堂に向かう。いつもの席には既にタバサが食事を開始しており、席に座ったキュルケが、「タバサおはよう」と挨拶する。

タバサは少しだけ視線をキュルケに向けると「……おはよう」と返し、また食事を詰め込む作業に戻る。男子学生の何倍もの量を。

タバサが無愛想に見えるが、視線を返す事が親愛の証なのである。キュルケ以外の人間には返事すら危ういであろう。

キュルケはタバサに懐かれている事を、本当に嬉しく思っている。過保護と言われる程に。

だが、最近のタバサの変わりようたるや、今までのタバサとは別人のようで、キュルケは気が気じゃない。

まず、上の空な事が多いのだ。心ここに在らずの様相である。キュルケが観察していると、ぼーっと前を見ていたと思うと、急に溜息をつく。たとえば何やら赤面し、そわそわと辺りを気にする。本人に問い質してみても、「……………なんでもない」としか言わない。

ある晩タバサはキュルケの部屋を訪ねてきた。それもまた珍しいが、彼女が招き入れると、いつもなら本でも読みだす所であるが、ベッドにちよこんと座り、またもや所在なげに「ほう……………」と溜息をつくばかりである。

「ねえタバサ、あなたいったいどうしたの？何か相談あるんじゃないの？」

「……………」

「だってあなた、どうみてもおかしいじゃない」

相変わらずのだんまりである。だが、上目遣いでちらちらキュルケを見ている。

キュルケは無理強いせずに、タバサが話したのを辛抱強く待つ事にした。そして少し月が傾いた頃……………

「……………あの」

「なあに？」

「……ある男性の事が頭から離れない。突然息が苦しくなる。これは何？わたしは病気？」

キュルケは絶句した。何故なら彼女の症状に心当たりがあるからだ。所謂、恋の病である。

精神が幼く、キュルケを姉のように懐くタバサが恋……キュルケはショックだった。何やらある男性とやたらに憎しみすら浮かぶ。

うちのタバサに何するの！！強烈な保護欲からか、キュルケは不機嫌になった。

確かにキュルケは過保護かもしれない。だが、ある程度タバサの事情を知る彼女は、タバサには必ず幸せになって欲しいのだ。タバサにはこれ以上傷付いて欲しくないのだ。それ故の過保護である。

「……やはり病気？」

「違うわタバサ、それは恋の病よ。あなたはそのある男性に恋をしたの。それはわかる？」

「わかる」

こくりとタバサは頷く。キユルケは首をかしげた。彼女は思った。恋の自覚はあるが、恋の病は知らない…：どついう事かしら？

「わたし、変？」

「へっ…：変じゃないわ！」

「おかしい。慌ててる」

「違うの！そうじゃなくて、ねえタバサ？そのある男性に出会って、恋だと自覚するまでを詳しく教えてくれる？」

タバサはこくりと頷き、ある男性…：ハインリヒ侯に恋をした過程を話した。

キユルケは思う。漠然とした恋心、彼女は恋の裏側にある、苦悩や切なさまでは知らないのだ、と。それは恋に必ず付き纏う副作用みたいなものだ。

キユルケはタバサに話して聞かせた。恋の…：人を愛する事の尊さを。それはあなたの心を傷めもするが、暖かくもする。だからあなたの

反応は異常じゃなく、相手が好きで”遣る瀬ない”という気持ちなんだと。

「おかしく無かった。わたしはあの人が好き。ここが暖かい」

タバサは小さな両手で胸を押さえ、頬を染めた。

キュルケはこの小さな彼女の、小さな恋心を愛おしく思った。願わくばその恋が成就するように祈った。

（というか……ハインリヒってあのアルビオン王族に偉そうに話してた、カッコいい男じゃない。最近は領地を沢山貰って、平民から一足飛びに侯爵になった。たしか二つ名は黄金…なんて有望な男…そそるわ）

「ダメ。キュルケはダメ」

何やらキュルケに不穏な気配を感じたのか、タバサは可愛い顔でキュルケを睨んだ。

「もうタバサったら。取ったりしないわよ！あら、あらあら？もう恋人気取りですか？タバサさん」

「違う…でもダメ。ハインリヒはダメ！」

「そうですかあ？真つ赤なほっぺのタバサさん？あつ杖はやめて！痛い痛い！もう言わないから許して〜！」

ポカポカと杖でキュルケを叩くタバサは、年相応の恋する乙女だった。

「タバサ、今日は遅いわ？もう寝ましょう。一緒に寝ていきなさい」

「……キュルケの話も聞かせて欲しい。興味津々」

「いいわ。ではベッドに入りましょ。あなたが眠るまで話してあげる。あら？……ふふっ、おやすみタバサ」

キュルケは母に甘える幼子のように抱きつき眠る青い髪を撫でながら、妙に幸せを感じるこの状態に安堵感を覚えた。

「はっ！？まだ男性を知らないのに、わたしったら……枯れてるのかしら？」

彼女は苦笑いをもらし、そして灯りを消した。

## 次回予告

『いやあすまん。作者の奴が、タバサを書きたいタバサを書きたい。大事だから二回言いました！と五月蠅い。だから俺はいいよと言ったんだ。だが、蓋を開けてみたらキュルケの話じゃないか：はあ：次回 - ZERO - の無責任男は、「ああすまん、前回と以下同文」だ。呆れず読んでくれよな！』

?? 小さな恋のメロディ Side story of Kirche (後書)

あれ…タバサメインのはずが…

??  
いくらお腹が空いたからって…拾い食いはよしなさい。ペッしなさいペッ  
夜のトリスタニア、チンクトンネ街、昼間でも薄暗い通りが空が曇  
っているせいか、いつもの夜よりさらに暗い。

生暖かい空気が不快さをましている。

貧乏貴族の三男であるピエールは、毎晩のように訪れる場末のB A  
R、極楽鳥の止まり木にいた。

安いエールを浴びるように飲んでいたピエールは、そろそろ馴染み  
のカジノに繰り出し、カードで明日の飲み代を稼ぐかと考えていた。

「あんだ…景気わるそうな顔しているな？」

いつの間にかピエールの横にいた男が声をかけてきた。ピエールは  
その男の、まるで墓石の底から聞こえるような声に、思わずびくり  
と身を震わせた。

「そうかい？まあ、ぼちぼちってとこさ」

一瞬怯えた気恥ずかしさを虚勢で隠し、精一杯張った声でピエール

は作り笑いを浮かべた。

実際、ピエールの懐は寒い。カジノにも”つけ”があり、”つけ”を無くすためにカジノに通い、また増やすという悪循環にはまっていた。

「クククツ…まあ、ならあなたにや関係ないか…いや、急に声かけてすまなかった。気にしないで飲んでくれ」

隣の男はそういうと大人しくなった。

「気になるじゃないか！なんだよ、聞かせてくれよ」

押されて引かれると、人は何故か名残惜しくなる。

「そうかい？ならさわりだけ話してやろう。他言は無用だぞ？」

そこで初めて男はピエールの顔を正面から見てきた。ピエールは絶句し、危うく漏れそうな悲鳴を押し殺した。

男の白く濁った瞳は光を映していなく、ただギョロリと男を見据えていたからだ。見えないはずの目が、ピエールを見透かしているようだった。

「そつ…それで？景気のいい話ってなんだい？」

「お前は懐が寒いのだろう？ 俺は盲目だが、その分聴覚が優れていてな。それでな？どんな小さな音も聞き分けられるんだ」

男はにやりと笑い、男を見据えた。ピエールは震えながらも、金の匂いにあらがえない。

「つ…つまりなんだい？」

「ダイスの目も、ルーレットの目も聞き分けられるとしたら……どうする？」

「まつまさか！？そんなことが…」

「出来るんだ、それが。お前は俺の代わりにベットしてくれればいい。さあどつする？」

にやあ…男の笑顔は、まるで悪魔のようだった。だが、ピエールは魅入られたように男から視線を外せない。

「やります！！お願いします！一緒に荒稼ぎしましょう！！」

そして二人は店から消えた。

カッソ…カッソ…

ピエールと男の足音が響く。まだ営業しているいかがわしい店から漏れる、淡い光が路地を照らす。

「しかし、やっとツキが巡ってきたな。ありがとう」

「……………」

「やっとあいつに贈り物ができるな…あなたのおかげですよ？メンヌヴィルさん？」

「……………フシユルル……………」

全く返事がない事に不安を覚え、ピエールは振り返った。

「あつ……………あつ……………」

ピエールは必死に懐の杖を探した。が、指先は触れども震えが止まらず、杖を握る事が出来ない。

「化け物ッ！！ちちっ近寄るなッ！！わわわっわあああああああああああああ………」

ピエールの断末魔の悲鳴が響き、紅蓮の炎が通りを一瞬明るくする。

浮かび上がったシルエットは人ならざるもの。

暫くの沈黙の後、一人分の足音が遠ざかっていった。

「ふむ、中々の美味であった。ハッハッハ……アーハッハッハッ……」

静寂

ハインリヒは久しぶりに穏やかな昼下がりを過ごしていた。

ジェシカの作ったシフォンケーキに、最近試験的に育てている乳牛の乳から作った生クリームをたっぷり載せたものを食べていた。

向かい側に座るティファニアの顔が完全に崩れている。

「甘いですう〜ふわふわですう〜」

「いやあ、テファアの胸の二つのシフォンをほかあ食べたいなあ〜」

「ふふつ…ハインさんのエッチ！でもでも…夕食のデザートなら…いいですよ？」

「じゃじゃじゃあ、生クリームたっぷりかけちゃうぞ〜」

「キヤー」

「可愛いのう可愛いのう…グハアツ!!!」

後方から飛来した銀のトレイ（ジェシカ）とハイヒール（マチルダ）と科学<sup>エレン</sup>図鑑と真空飛び膝蹴り（カトレア）と乗馬<sup>シェフィールド</sup>用鞭がハインの後頭部に突き刺さった。

「この世に悪が栄えた試しはなくなつてよ」

「カトレア……キャラが変わつて……る……ガクッ……」

ハインは天に召された…彼が最後に見たのは、カトレアの黒いレーズのパンティだった……

- ZERO - の無責任男

完

「まだだ！まだおわらんよ！」

ハインは直ぐ様復活し、優雅に紅茶を飲んでいた。

「ああ、そうそうハイン？」

「なんだいマチルダ？」

「あんたに客が来ているわ。万屋の方よ。トリスタニアの男爵だつて。青い顔してたから早く行ってあげて」

「おう、わかった。まあさくつと終わらせてきますわ。あとあれだ  
…テファ構って殺されかけたから、みんな一遍に構うわ。帰ったら  
みんなで風呂はいろっ」

「……それならばよし」「」「」「」

「…チッ」 テファ

ハイン一味は今日も平和だった。

ハインの万屋であるが、現在開店休業状態である。というのは、ハ  
インが諸侯になを連ねてしまったからである。

平民や下級貴族が領主の立場の侯爵に、気軽に依頼をするには腰が  
引けてしまうのだ。

そこでハインは、トリスタニアはブルドンネ街の旧オフィスに出張  
所とし、平民の連絡員を雇い、普段は詰めさせている。

依頼があると連絡員は、内容を確認し、ハインに言われている基準

により、受けるべきものと断るものがある程度吟味し、マチルダに繋ぎをつけるのだ。彼女からハインに話が行き、そして着手となる。

そういう訳で、依頼件数は格段に減り、逆に質はあがっているという現状である。

ハインは竜の森へ行き、暇そうな竜っ子を一匹身繕い、トリスタニアへと飛んでいく。

《わらわ達は最近暇なのじゃ。あるじ様何か暇潰しは無いかの？》

どうやら今日は長女ユイのようである。ハインは微笑みながら、彼女の首の付け根を撫でながら言う。

「お前ら韻竜のくせに好戦的だもんなあ。ふむ、近いうちにちょっとアルビオン行くけどお前らも行く？俺らを運んだ後は、近場の森で幻獣やつつけてもいいぞ？」

《行くのじゃ！連れてくのじゃ！…と云つかあるじ様、言わなかったら置いてかれてたんじゃ…あるじ様は薄情じゃの》

ユイは前を向いているのだが、ハインは何故かジト目で見られている気がしてならない。

「いやあ……ええと……すまんユイ!!!」

《あるじ様は釣った魚に餌をやらぬタイプじゃの。そうやってメロメロにしといて放置とは極悪人じゃ。放置された娘は眠れぬ夜に火照る身体を持って余すのじゃ……あるじ様はそれを見て、陰からニヤニヤしておるのじゃ。なんと非道い”ぷれい”なんじゃ。その所業、まさに外道の極みじゃの？わかるか？外道…それはHUMANの道を外した落伍者が、開き直って悪事を働く悪いやつの事じゃ。暴れん坊ならせーばいされるのじゃ。そもそもあるじ様は……クドクドクドクド……クドクドクドクドクド……》

「うつ……ぐすつ……超勘弁してください……僕が悪かったです……ひぐつ……」

巨竜の背にのり、説教されながら、土下座しながら号泣するハイン。どうやら竜っ子は放置されストレスがかなり溜まっていたようである。全く自業自得だ。

トリスタニア・万屋

約、300マイル上空の竜の背から飛び降り、ハインはトリスタニア別邸の屋上に着地した。一瞬だけ牙狼を呼び出し衝撃を緩和し、

直ぐ様牙狼を解除するという牙狼の無駄遣いである。

因みに牙狼を呼び出す瞬間は、かなり金色に発光するのだが、近隣住人は、「たまに黄金様の屋根がピカツと光るね。さすが黄金様」くらいの認識である。ファンタジー世界では牙狼程度で驚いていたら、身が持たないようだ。

## 閑話休題

久しぶりのオフィスにハインは、「やはり落ち着くな、一人は」等と、屋敷で言えば即、生命の危機を迎える独り言を呟いた。

ハインは紅茶を入れ、お気に入りの白磁のカップに注ぎ、皮張りの椅子に深く腰掛け、デスクに足を乗せる。そして、湯気がたつ紅茶を美味そうに啜る。

チリンチリン…

来客を告げる呼び鈴がなる。ハインは念力で扉をあけ、「どうぞ」と告げた。

ハインに促され入って来たのは、五十代くらいの身なりのきちんとした夫婦だった。

清潔にはされているが、服の生地は上質とは言えない。あまり裕福ではないのだろう。と、ハインは無言で二人を分析する。

二人はハインに促され、ソファーに座った。テーブルには既に暖かい紅茶が置いてある。

「ハインリヒ侯、お初にお目にかかります。私はダビットと申します。こちらは妻のマリアと申します。今日は「あゝ……はい？」

「そういうのはいいよ。今の俺はハインリヒ侯じゃなく、ただの万屋だ。あんたら何か切羽つまってるんだろ？必死な気配がする。用件を話しなよ。時間が惜しいのだろう？」

ハインの言葉に夫婦は少し肩を震わせ、そして話しはじめた。

「私には三人の息子がいます。私はしがない男爵ですから、家も裕福ではなく、息子達には苦勞させました。上の二人は城に仕官しています。ですが末っ子のピールは、私どもが甘やかしたせいか放蕩者でして……今23になりましたが、仕事も無く、毎晩飲み歩くような道楽者なのです」

父親はそこまで一気に話すと、冷えかかった紅茶を一気に飲み干した。ふわふわとハインの念力でティーポットが運ばれ、カップに紅茶が充たされる。ハインは目で続きを促すと、黙って机に肘をつい

た。

「それで、半月前の話になりますが、その日はピエールに、「いい加減仕官先か見合いでもしないか」と言い、彼と口論になりました。そしてピエールは家を飛び出しましたが、お恥ずかしながら、それは我が家では珍しいことじゃ無いのです。ですが、それきりピエールは帰りません……城に相談をしましたが、果たして進展はあるものか……未だに返答は無い状態です。ですのでハインリヒ侯、どうか息子の行方を捜しては貰えませんか？何卒お願い致します……」

父親は気丈に振る舞うが、目は真っ赤で握られた拳は震えている。母親はただただ泣くばかりだ。

この世界の警察力はあまり高くない。直接武力を行使する軍隊に重きを置いているからだ。以前にも述べたが、この世界に住民への福利厚生概念がない。

治安維持もある意味、住民へのサービスの一環と言える。何故なら治安が悪ければ、その地域の生産性は上がらないからだ。

ハルケギニアでその概念は生まれてない以上、トリスタニアの警備隊は、聞き込みなどの捜査等を行い、それで手掛かりが無ければそれ以上追わない。いや、追えないのだ。

ハインは目を閉じ考えていた。相変わらず机に両肘をついて顔の前で手を組んだまま。



してください」

「ありがとうございますありがとうございます…」

こうして依頼は成った。

翌日の晩、ハインはブルドンネ街にいた。ピエール氏の足取りを追って、彼の行きつけの店で聴き込みを行っていたのだ。

両親から聞き出した店が七件、空振りに終わったのが六件、残りは……

「極楽鳥の止まり木か…」

ハインは最後の店に向かって暗い路地を歩いていく。

『ハイン…どうやらこの件、ホラーが関わっているな。ホラーの残留臭がぶんぶん臭うぜ…多分ピエールはこの辺りで喰われたな』

「ふむ、そういう事か。死体が出ないのがおかしいとは思っていたが…まあ最後の店、行ってみようぜ」

B A R 極楽鳥の止まり木

「……いらっしやい」

ハインはB A Rに入った。中は場末の酒場そのものと言う雰囲気、飾り気はなく、カウンターが七席と、無愛想なバーテンがいるだけだ。

「グラスワインを白で」

「……………どうぞ」

「なああんた、半月前にピエール氏がここに来なかったか？どうやら彼はここをよく利用していたようだ」

「……………さあ、何せ色々な客が出入りするもので…そのピエール氏もうちに入入りしていたかも知れませんが、何分たくさんの客のうちの一としか」

「なるほど、ね」

ハインはワインを一口含み、あまりの不味さに顔をしかめた。

この手の商売は、経営者が裏の人間だったり、脛に傷があったりと、彼らの口は重たい。

「はあくつたく…やつてられねえなあ……なあバーテン、銘柄は何でもいいから強い酒くれや」

ハインはカウンターに突っ伏した。

『（ハイン、ホラーの気配がするぜ）』

「（ああ、わかってる俺に任せろ）」

「あんだ、景気が悪いみたいだな？」

「おっ？わかるかい？最近全くツキに見放されたみたいなんだなあ

…」

いつの間にかハインの隣に男が座っていた。

「それはそれは…なら良い話ある。一枚噛まないか？悪い話ではないぞ」

ハインはくすりと笑った。

「いやあ、それがなあ。急転直下解決しちゃった。ありがとうなメンヌヴィル。お前を捜してたんだ。コルベールの件でお前を捜してたんだが、どうやら人さらいの件もお前だったらしい。てめえ…人を喰ったな？」

「クツクツク…コルベールとは懐かしい名前だ。隊長…今何やってんだ？会ったら俺が燃やしに行くって伝えてくれないか？クツクツ」

「まあ、あの世で会えるのを楽しみに待ってな。お前は今夜、俺が殺す。表へでな」

「出来るか？若造…せいぜい楽しませてくれよ？クツクツクツ…」

暗闇の路地、二人は5メートル離れた位置で向かい合っていた。

「さて、何秒持つかしらんが、せいぜい……楽しませてくれ……オマ  
え……美味そウダ……」

話す側からメンヌヴィルの身体はぼこぼこ盛り上がっていき、身体は人から離れていく。無気味に膨れ上がった身体、背中からは沢山の触手が見えていた。

「ハイン、あいつはパズズという上級ホラーだ。あれは前に鋼牙に倒された筈だが……とにかくあいつの身体は強靱だ。気を付けるハイン！」

「ああ、あいつの陰我、俺が解き放つ」

ハインは牙狼剣を抜き払い構えた。

「人が燃える臭いは最高にそそルんだ……オまエの身体も焼いてやるウウっ……」

パズズは頭上に炎を作り出した。それは直径5メートルはある火の玉だ。ごっごうと嫌な音が鳴る。

「クラエっ！！メギドフレイムボールッ！！」

ハインは牙狼剣で頭上に円を描いたッ！

激しい光の中から魔界の鎧が召喚され、ハインの身体に装着された。

黄金の魔戒騎士ッ！！

魔戒騎士の最高位ッ！！

牙狼ここに見参ッ！！！！

「魔戒騎士ナド恐るルに足らん……燃え尽キロ」

巨大な炎が牙狼を襲う。

《ザルバッ！！》

『まかせろッ！』

バシユユン……………

巨大な炎はザルバに吸い込まれ消滅した。

キイイイイイイン……………

牙狼はザルバに剣を滑らせていく…牙狼は身体に緑色の魔界の炎を身にまとった……………

烈 火 炎 装

《行くぞッ！！！！》

牙狼はフライで上空10メートルに飛び上がり、回転しながら牙狼剣をパズズに投げつけた！！

《烈火炎装牙突剣ッ！！》

回転運動をしながら魔導火を纏った牙狼剣は、神速の破邪の矢となりパズズを貫いたッ！！！！

「ギイヤアアアアア…アツイ!!アツイ!!アツイ!!アツイ!!アツイ!!  
イイイイ!!!!!!」

パズズは断末魔の悲鳴と共に碎け散った。

陰我消滅ッ!!!!

パズズいや、メンヌヴィルの消滅した場所に、血濡れたピエールの杖が転がっていた……

「帰るかザルバ……」

『ああ…そうだな』

翌日、ピエールの実家に彼の杖が届いた。

両親はハインにお礼を言いたいとオフィスに何度も出向いたが、ハインに二度と会えなかったという。

父親はなけなしの金を包み、報酬としてオフィスの連絡員に渡そうとしたが、決して受け取らなかったという。

オルニエールに戻ったハインは、ジャンにメヌヴィルを斬ったと伝えた。

それを聞いたコルベールは、少し淋しそうな笑顔を浮かべ、「すまなかつたな。ありがとう」と言い、研究所に消えた。

次回予告

『今回は牙狼らしい話だったな。俺としては嬉しい限りだ。たまにはこういうのが無いとな。さて、旅行の準備が終わったハイン一味は、水の精霊に会いに一路モンモランシ領へ。…次回の-ZEROの無責任男は、「モンモンの頭は武器じゃね？刺さったらマジやべえし…モンモンさんパネエっす！」だ。絶対に見てくれよな！』

??  
いくらお腹が空いたからって…拾い食いはよしなさい。ペッしなさいペッ  
そういえば、ハインの杖を描写してなかった……

ハインは牙狼剣を杖として契約してます。

今回の話は、日常の裏でハインは魔戒騎士としてホラーをこつちゃっ  
て狩っています的な話でした。

次回から本編へいきまする

?? ドキッ 精霊だらけの水泳大会。ドリルもいるよ ミ(前書き)

プロットにない事を書くところになります。

?? ドキッ 精霊だらけの水泳大会。ドリルもいるよ ミ

でれててーて だーだだだーだだーでれててーて だーだだだーだ  
だーでれててーて 某TOPGUNのごつつええ感じのタイミング  
で流れる曲

「ハインお兄さん、突然どうしたの？テファびっくりしたよ？」

腕を組み、仁王立ちのハインにテファがその足に抱き付く。何かで  
挟むように。

ざわ…ざわ…

カトレア達の鋭い姿勢がテファに集まる。

にやぁ テファ

ざわ…ざわ…

現在ハイン一味が何をしているかと言うと、赤い三連竜に乗り、兼  
ねてから計画していた旅行へと出発したのだ。

三連竜初号機ユイにハイン一味が乗り、貳号機ユン、参号機ユラは背中に荷物を積んでいる。

因みにコルベールは、ハインが先日与えた課題に、何やらマッドの血が騒ぐとかで、一味がアルビオンに上陸したら合流するようだ。

つまり、「俺は精霊に興味はねえ！せいぜいお前らは乳繰り合っがいい！だがッ！！俺にはコイツがあるッ！！だからほっというて貰おうかッ！！」と言う事らしい。コイツが何かはまだ秘密らしい。

そして今、ハイン一味が目指すはド・モンモランシ領だ。モンモランシ家は代々、精霊と契約し、精霊と会話をする巫女のような役割を担っている。

ハインは面倒なのが嫌いなので、「あれだ、竜っ子三匹でラゲドリアン湖の水が枯れるまでブレスを撃ちまくったら出てくるんじゃないか？」などと宣ったが、カトレアのマグネットパワー+とエレンのマグネットパワー-による必殺技、「クロスボンバー」で吹っ飛ばされた。

ハイン一味に染まった二人だが、さすがに水の精霊を力業で引き摺りだすのは気が咎めるらしい。

そんなこんなでモンモランシ領へ向かってはいる一味だが、空の上は暇である。

ハインは甘えてくるテファとシェフィールドを膝の上に乗せ、もにもと二人の巨大な男のロマンを弄んでいた。

ずるいと次々に妻、sがハインにしがみ付き、色々と擦り付けだした為、危うく18禁になりかけたが、我慢しきれずメイド服から全てを解き放とうと、シェフィールドが暴走しかけた辺りでモンモランシ宅に着いた。

因みに、一家総出で待ち受けていたモンモランシ家だが、降り立った火竜の上に半裸のシェフィールド、しかもメイド服という倒錯したシチュエーションに、モンモランシ伯のモンモランシ伯が、長年の沈黙を破り一念発起、シェフィールドを視姦しながら鼻血を吹き出すというハプニングがあったとか無かったとか。

「ハインリヒ侯！我が家への訪問、嬉しく思います！マザリー二様からのお達しでしたが、緊急の用件でもございましたか？」

何やら傷だらけのモンモランシ伯が歓迎の意を表し、そして急な訪問の内容を聞いてきた。

「実は、侯爵を賜わったのを機会に本格的に婚約者達との結婚を考えてまして、まずはお披露目がてらのんびり旅行をという趣旨なんですよ。ただ、アルビオンの内乱で、反乱軍の首魁から水の精霊の持ち物を回収しましてね？ それを直接お返ししたいと思っ  
ましてね」

「おゝそれはそれは…それでマザリー二様からお達しがあつたわけですか。我が家系は水の精霊の窓口ですからね。ふむ、少しその件で込み入った相談がありまして、中で聞いて頂けませんか？不躰で申し訳ないですが……」

「ええ、構いませんよ、伯爵。こちらも不躰ですが、静養も兼ねた旅行なので、二、三日滞在させて貰つても構いませんか？」

ハインはズシリとした革袋を伯爵に渡した。家族に見えないようにモンモランシ家はある理由で経済的に厳しいのだ。それ故の心付けである。因みに500エキユ程だった。

「ありがとうございますハインリヒ侯…色々察して頂いたようで、私も面目が保てた。感謝します。さあ、むさ苦しい所ですが、皆様、旅の疲れをとって頂きたい。さあさあ」

モンモランシ伯に促され、一行は中へと移動する。

ハインは皆を先に行かせて、自分は残った。

ハインは懐から干し肉を取り出すと、竜っ子の口にぽいぽい投げる。竜っ子達は嬉しそうに目を細めた。

そしてユンとユラに乗せていた荷物を下ろす。

《あるじ様、わらわ達はどうしたらいい？HUMANになるかの？》

「どうするかなあ？ん〜なあお嬢さん？」

「ひゃあー!」

ハインリヒの後方に、一人の少女が見守っていた。先ほどからハインに話し掛けたい様子で、おずおずとこちらを窺っていたのだ。

「あつ…あの…ハインリヒ侯？はは初めまして！わたくし、モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシと申します！よろよろしくお願ひします！」

ガチガチに緊張しているモンモランシーに、ハインリヒは気の毒になっってしまった。

「おお緊張してるなあ。あんま緊張しなくていいよ？俺の名前は知ってるよね？なんかながったらしいからハインでいいよ。よろしくな、モンモランシー嬢」

「侯爵さまに愛称で呼ぶなどおそおそれ恐れおおいです…ひゃん!」

ハインは小刻みに震えるモンモランシーが可哀想になり、緊張をほぐそうと彼女の両肩に手を置いた。

「じゃあ、君は俺の友達になってくれ。ああそうだ、君の父上も母上もモンモランシだからややこしい。だから俺は君のミドルネームのマルガリタと呼びたい。許可してくれるかい、マリー？」

「ぼーっ……はっ!?!?…えと…はいつ…マルガリタと呼んでください…えっと、そのほうが嬉しいし…あっ!?!?何でもないです…」

何だか支離滅裂だが、ハインは、「なんだか久しぶりに会った従姉妹の子みたいで可愛いなあ」なんて感じていた。

「ふふっありがとう。じゃあ俺もハインって呼べよな？友達なんだし」

「えっと…はい…ハインさま？」

なんだか新鮮な反応にハインは満足したのだった。

《わらわは見たのじゃ》

《どうしましたの〜？お姉さま》

《ハインの浮気の瞬間じゃ。これは退屈しのぎには良いイベントなのじゃ》

《シュラバ ラ・バンバ》

「」  
「」

「あのうハインさま？」

「……なに？」

「竜が喋ってます」

「……そうだね」

「ハインさま、この竜達は使い魔ですか？」

「違う…カモシレナイ」

「だけど喋ってますね？」

「……ソツソウカナ？」

《そこなドリル頭よ、わらわ達は韻竜だからの。話せて当然じゃな。なああるじ様？》

「迂闊だった……なあマリー？韻竜二匹も従えるとか余所で言っちゃダメ。これ、ちょっと賢い竜ってことで……ね？」

「ド…ドリル頭……ハインさまが仰るから私は何も言いません。そのかわり、空の散歩に連れてって貰えます？」

「おゝ全然OK。んじゃ昼飯食ったら行くこつな。おい、竜っ子達は森で幻獣と遊んできていいぞ？ただし、HUMANは食べちゃダメな？」

《わかったのじゃ！遊びに行くのじゃ！ではな。あるじ様にドリル頭よ》

竜っ子達は時間が惜しいと慌てて飛んでいった。

「ドリル頭はやめて〜〜〜〜!!」

モンモランシーは空に吠えた。

竜っ子達が森に消えていくのを見届けたハインは、旅の荷物を詰め  
たコンテナ二つを、レビテーションで浮かべた。

「さあてマリー？腹へったかあ？」

「えっと、そうですね。はい、お腹が空きました」

「いい返事だ。んじやついてき給え！伝統的なトリスティン貴族  
じゃ食べれない、野趣溢れるハイン一味特製料理をご馳走しようじ  
やないかッ!!」

ハインのただならぬ雰囲気、たじたじのモンモランシー。一瞬ハ  
インの背中に炎のシルエットが見えた気がしたのだった。

「ジエシカッ!!」

「はっ!!」

「シェフィールドッ!」

「はっ!」

いつの間にかハインの前に膝を付いた二人がいた。

「首尾はッ?」

「間もなく頃合いに…」

「会場はッ?」

「完璧かと…」

「ではマリー嬢、我が家の特級厨师、ジェシカが調理し、総合PR  
oduceを俺がつとめた我がハイン一味の特製ランチにご招待し  
ようッ!」

「はいっ!」

ハイン達はそろそろとモンモランシ宅中庭へと移動する。

既にモンモランシ家一同と、ハイーン一味は会場にスタンバイが終わっていた。

会場には、煉瓦が複雑に組み合わされた、片側に10人は座れそうなテーブルが作られていた。

変わっているのは、煉瓦造りのテーブルの、丁度真ん中には、幅20 سانت程の溝があり、その両側にやはり20 سانتの余白があり、そこが物を置くスペースになっているようだ。

煉瓦のテーブルの両脇には、長い木のベンチが据えてあり、かなりの人数が座れるようになっていた。

モンモランシ一家と家臣団は既に席についており、ハイーン一味は主の到着を待っていた。

「あの…ハイーンリヒ侯？この趣向は一体？カトレア様に言われた通り、家臣まるごと集めました、私共で昼食の準備はしないでくれとの事だか……」

モンモランシ伯は困惑しているようだ。

「モンモランシ伯、これから先、我々は何かと関わっていくでしょう。領地絡みの交流で、王宮で、貴方には貴族の先輩として教えを

乞うこともあるでしょう。逆に、俺の領地から発信される、トリスティンでは常識はずれかもしれない事柄に困惑する事もあるでしょう。そこで…親愛の証として、最初から非常識を見せてしまおうという趣向です」

ハインはニヤニヤしながらモンモランシ伯を見た。

「俺の故郷には、貴族はいないのです。だが、経営者と非雇用者という関係で上下関係は存在する。経営者は、会社という営利の為に、コーニーを運営し、会社を富ませる義務がある。そして、非雇用者ひいてはその家族を養う義務がある。モンモランシ伯、何かに似てはいませんか？」

「ふむ、我らの領地経営に似ているな。我らには誇りと名誉を重んじるという要素が加わるが…まあ概ね似ているな」

「さすがです、モンモランシ伯。ただ、貴族と経営者の違いは、名誉より実を追求します。そして優秀な経営者は、会社を富ませ、会社を存続させる為には、最適な手段を講じます。そこで、本日の趣向ですが、簡単に言うと、無礼講な立食パーティーです。我々は「バーベキュー」といいますが……ジェシカ」

ジェシカは既におこしてあった炭を、煉瓦のテーブルの溝にまんべんなくくべていく。そして、上に網をセットしていく。

次に、2×4メートルの台を持ってきて、その上に食材が並んで歩いていく。

「いま用意したのは、現在試験的に飼育している肉牛です。多分、このハルケギニアで一番美味いと自負しています。「ワギユウ」と仮称しています。さて、これらを我々とモンモランシ伯一家それに家臣の方々も交えて、好き勝手に焼きながら、好きに食すのです。俺の故郷では、経営者や役職者は度々このような宴を開き、非雇用者の労をねぎらいます。そして、上の立場の人間は下の人間の会社への不満など情報収集し、経営に生かしたりします。下の人間は、普段食べれない美味しいモノを食べたり飲んだりして、改めて勤労の意欲を新たにしたりするわけです」

「なるほどな、実に合理的であるな。トリステイン貴族ならばプライドが邪魔して嫌悪するものも多いだろうが、私は面白いと思うよ、ハインリヒ侯」

モンモランシ夫妻はニコニコしながら、同意を示す。しきりに用意された食材を見ているのは、待ちきれなくなってるのだろう。

ハインはジェシカに合図した。すると各自にグラスが回された。

「では、モンモランシ一家の皆様、家臣団の皆様、我が一家との交流を祝して乾杯をしたいと思います。では、我々の友好と、今後の発展を祈って…乾杯！」

「乾杯!!!」

全員のグラスがかかげられ、皆の笑顔が弾けた。

「では、食べ方については、うちのジエシカとシエフィールドが実演しますのでご覧下さい。じゃ各々好きに楽しんでくれ」

ハインの言葉に皆が頷き、思い思いにバーベキューに興じていく。モンモランシ夫妻も初めてのバーベキューに興奮してるのか、あれこれ焼いて楽しんでるようである。

「あれっ？」

「どうしました、あなた？」

突然ぼかんとしたハインに、ウインナーを啜えたカトレアが聞く。

「いやあ、マリー…モンモランシーがいないんだ。さっき話したのにな?どこ行ったんだろ？」

「「「「……………」」」」

妻・sがハインをジト目で睨む。

「なっ…なんだよ!」

「はあ…あなた? 貴方の膝の上で、顔を極限まで赤くした可愛い生き物は何なのかしら? しきりに撫でてましたけど?」

「ん? んん? おおおっ! ……マリーいつの間に!」

「はう…門の所から移動する時に、当たり前のように小脇に抱えられてここまで来ました…その…あちこち撫でられて…固まってしまった…はう」

モンモランシーは、「もう、お嫁にいきませんわ」と言う雰囲気です。両手で顔を覆い、イヤイヤと首を振っている。

「いやあ、全く気が付かなかった。すまんすまん。なんかぬいぐるみみたいでなあ。あっはっは」

「あははじゃないし!」

皆の突っ込みが入ろうが、ハインには柳に風である。

「あの…ハインさま？ハインさまの家族はいつもこんな楽しい雰囲気なんですか？……その…はむっ…もきゅもきゅ…ハインさまに乱暴な…はぐっ…もきゅもきゅ…口調をしたり…とか…すいません不躰に…お肉美味しいです」

ハインはニヤニヤしながら、喋るモンモランシーの口に肉を入れて遊んでる。

「まあ…なんだろ。俺ら一応主従関係なんだけどさ、実際は…うーん、俺、捨てられたら泣いちゃうからね？みたいな。うーん…なんか上手く言えないや。おし、マチルダ代わりに言ってくれよ」

マチルダは突然指されて驚いたのか、ワインを吹き出し、吹き出されたワインはテファの谷間へと。テファがぶんぶん怒っている。

「コホン…あくなんだい。つまりはハインはやるときややる男のさ。女ぐせ悪くても、ちゃんと全員を見てるし、ボケボケしてても頭の中ではちゃんと考えてるやつなんだ。まあ頼れるおとーさんみたいな感じかなあ？あたしもよくわからないよ。じゃエレン教えてやんなよ。頭いいんだからさ？」

「もつきゅもつきゅ…このハラミ最高ね…んん？ああ、ハインの前じゃ着飾ってもすぐばれるからね、だから自然体でいれて楽なのよ。だけど、ハインには可愛く思われたいから、女の子はサボらな

いけど、貴族だの女だ男だとか一切いらなのよね、ハインの周りは。だから、それぞれ自然と努力はしてるけど、無理やりじゃないのよ。そこに在る為に自分で努力してる。それがハインの魅力だし、私達家族もそれが当たり前と感じてる。まあ、そんな感じ？」

妻「sは一樣に頷く。

「だってさ？よく分からんがそうらしい」

モンモランシーはおるか、いつの間にか全員が聞き入っていた。それはそうだろう。ハインの家族はラ・ヴァリエールの娘が二人にエルフに平民だ。相容れない存在が仲良くしているのだ。

「あの…ハインさま？…私もハインさまの家族に入ったり出来ますか？…えと…すみません急に」

モンモランシーは耳まで真っ赤にして、ハイン一味に入りたいと言った。その時モンモランシ伯の目が光った。キューピート。

「どうですか？娘もこうってますし、モンモランシーと婚約しては！私達は反対しませんぞ！」

モンモランシ伯はハインにキスせんばかりの近さでまくしたてた。

「はっ…はあ…まあ、マリーは可愛いですし俺もやぶさかでは無いのですが、俺はマリーの学生生活が終わる迄はそっとして置きたいですね。俺に毒されるには彼女はまだ純粹だ。彼女が学生生活で、挫折したり苦しんだり、恋をしたり失恋したり…そういうの、奪いたく無いんですよ」

「ハインリヒ侯…」

「ハインさま……」

「だからまあ、モンモランシ伯とは事業絡みで関わっていくでしょうし、マリーとはちよくちよく会えるでしょう。だからマリー？今は焦っちゃダメだよ。わかるね？」

「はい…ハインさま。ありがとうございます」

「ん。聞き分けが良くてえらいえらい」

ハインはモンモランシーの頭を撫で、彼女はも嬉しそうにしている。

妻・sは「和むわ〜」と見守り、モンモランシ夫妻は、「絶対にこの男を落とす」と決意を新たにし、家臣団は微笑ましく二人を見て

いた。

宴は大成功に終わった。

その夜

妻達は旅の疲れか皆眠ったが、ハインは目が冴えてしまい、ラグドリアン湖を見渡す丘の大木にもたれかかり夜空を見ていた。

地球には無い双月を眺めながら、お気に入りのコイーバに火を付ける。煙は風に流されていく。

「「うらっ、夜更かしはいかんど？マリー」

「ばれちゃた…」

ハインの後方にモンモランシーが立っていた。どうやら後を着けて来たらしい。

「まあ、寒いからこっちきな。暖めてやるから」

「はい…」

ハインは膝の間にモンモランシーを入れ、後ろから抱き締めるように座りなおした。

「ハインさま…私を尊重してくれてありがとうございます。嬉しかったです」

「いいえ」

「…でも、子供扱いしないで下さい。私は女です…」

モンモランシー向きを変え、ハインを真正面から見据える。身体が小刻みに揺れているようだ。

「それはすまなかったな。ふむ、確かにマリーは女だな。それでどうしたいんだ、マリーは？」

モンモランシーは黙ってハインに口付けをした。触れ合った唇がやがて離れ、二人の間に銀色の橋をかけた。見つめあった二人は、再度口付けを交わす。ハインは蠢く舌でモンモランシーの口の粘膜を愛撫し、モンモランシーは少し喘いだ。

「マリー…後悔するなよ？もう戻れないし、離さないぞ？覚悟しな」

「はい…側に居させて下さい……」

二人のシルエットはやがて一つになり、闇に溶けていった。

見ているのは赤と青の双月だけだった。

## 次回予告

『あーあ、予想はしたが、喰っちゃったな。節操ないな。もうっハインくん不潔よッ！！俺がお下げの委員長ならこう言うな。さあ、次は漸く水の精霊に会えるな。精霊を放置とかどんだけえ〜……さて、次回の - ZERO - の無責任男は、「水の精霊が現れた！ザザッ水の精霊は逃げ出した！」だ。必ず見てくれよな！』

?? ドキッ 精霊だらけの水泳大会。ドリルもいるよ ミ(後書き)

なんかサーセン

モンモン好きなんです。

??  
なんで今さら」「らき  
すた」「なんて見たんだ。  
だってDVDがセットで  
タイトルと本文に関係性はない。

?? なんて今さら」らき すた」なんて見たんだ。だってDVDがセットで

「うゝゝ喉が痛い…」

「バインさまもですが…ゴホゴホ……」

宴の熱が冷めやらぬ中、新しい朝がやってきた。ハインとモンモランシーは、昨夜の情事の後、朝方の寒さの中、湖畔でイチヤイチャしたため、喉がイガイガしていた。

さて、ハイン一味とモンモランシー家は今、揃って朝食を摂っている所だ。みなが昨日の宴の余韻か、またやりたいと口々に言い合う中、ハインとモンモランシーはどんよりとした影を背負っていた。

何故なら、みな一様にニヤニヤと二人を意味ありげに見ているからだ。ただテファだけが何やら恨めしげにモンモランシーを見ているが些細な事である。

「そついえばモンモランシ伯？」

「なんだね？カトレア嬢」

「昨夜の事ですが、深夜の湖畔で逢引きしているカップルがいたそうですね」

「ほっほ〜！それは何とも微笑ましいですな！」

ギクツ……

「あら、それならばモンモランシ伯？こんな話を知っていますか？」

「何だね？エレオノール嬢」

「どうやらそのカップルは、それはそれは熱い接吻を交わしたそうですねよ？」

「なんと！それは情熱的ですな。羨ましい事ですな！！」

ギクツ…ギクギクツ…

「いやいやお待ちください。モンモランシ伯…これは流石に知らないかしらねえ……」

「それは是非聞きたいな！！マチルダ嬢」

「その二人はだねえ…星空のしたでチヨメチヨメをチヨメチヨメしてチヨメチヨメチヨメチヨメと」「勘弁してくださいーい!!」「」

この辱めに耐えられなくなった二人は、大いに号泣しながらの土下座を披露したのだった。

「うううう…お前ら…見てただろう!？」

一斉に目を逸らす一同。執事からメイドに至る使用人までもだ。

「……………お父様……………だいつきらいっ!?!?!」

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!?!?!?!」

愛する娘のだいつきらいに、灰になるモンモンパパだった。

場所を移してモンモランシ家の書斎、復活したモンモランシ伯とハインが向き合っていた。

「話というのはだ、多分ハイン殿ならば知っただいようが、現在モンモランシ家は水の精霊から契約を切られている。我が家を立てての

今回の訪問であろうが、実に情けない話での…」

「いえ、承知の上での事です。みなまで言わないで下さい」

「すまぬ……」

代々水の精霊との関わりを繋いできたモンモランシ家、だが、些細な事で水の精霊の機嫌を損ねてしまい、現状にいたる。

さらに、ラグドリアン湖の干拓事業を王宮から賜ったが、突如、ラグドリアン湖の水かさが増して、多額の投資をした事業が頓挫してしまった。まさに踏んだり蹴ったりである。

モンモランシ家の経済的貧窮はここに由来する。ギリギリで領地を維持してはいるが、モンモランシの学費もギリギリである。

モンモランシーの二つ名は「香水」であるが、水メイジである彼女の作る香水は評判が良いのだ。彼女はそれを売り、細々と自分の小遣いを捻出している苦勞人である。実家をおもんばかった涙ぐましいエピソードだ。

閑話休題

「取り敢えず、今回俺が水の精霊に、盗まれた秘宝を返します。その際の交渉で、モンモランシ家はまた契約を結べるでしょう」

「なんと！それは我が家も大いに面目を保てる。本当に感謝しますぞ、ハイン殿！！」

「まあ、それは特に問題ありません。ただ、恩に感じて頂けるならば、一つお願いがあるのですよ、モンモランシ伯？」

「む？恩人の頼みだ。できる事なら強力は惜しまないぞ？」

「ありがとうございます。そういえば、昨日の宴で食べたオニギリという穀物を握ったものは如何でしたか？」

「あれは美味かったな。無味無臭かと思えば、噛むとじわりとした甘味がある。だが、味自体が淡白だから、味付けの濃いヤキニクに素晴らしく合った。あれならばパンにかわる主食になりえるな」

「ありがとうございます。あれはコメまたは、ライスと言います。生産方法が少し特殊でして、水を張った畑に、稲と呼ばれる植物を育てたものなのです。どうです、モンモランシ伯。あれをこの領地で作りませんか？勿論、詳しい生産方法と、最初の投資は我々が持ちます。そして、収穫できたライスは、領内で流通する以外は全て我々が買い取ります。如何ですか？」

モンモランシ伯はハインをじっと見つめ、何かを考えている。

「ハインリヒ侯……何故そこまでしてくれるのだ？」

「まあ、現実的な意味では我々に利害があります。稲を育てる水田は、水源に近い事が望ましい。そして、干拓が失敗した土地は、そのまま水田に転用出来ず。灌漑用水路の整備は必要ですがね。まあ現実的な理由はそこです。後は気持ち的な話ですが、貴方の人柄が好きだからです。干拓事業が頓挫しても諦めず、領民への責任を放棄していない。自らは質素な生活をしている。俺はそんな貴方を尊敬しています。そして、そんな貴方だから信用して事業を任せられます」

モンモランシ伯は黙って聞いていたが、ハインの話の途中で感極まり、涙を流した。自分の心の内を理解してくれる男がここにいる。他の貴族には蔑まれることもあった。だが、この男は本質を見てくれた。

モンモランシ伯は思った。この年若い侯爵様を支えてやろうと。彼が危機の時は盾になろうと。彼は忠誠に必ず報いる男だ。

モンモランシ伯はハインを強い目で見た。

「ハインリヒ侯、以後私は貴方に忠誠を誓う。私には財も名誉も持

ち合わせていないが、この心を君に捧げよう。私に何でも相談し、遠慮なく命令してくれ」

「何かくすぐつたいね、お義父様？ でも、その心は有り難く受け取ります。何故なら俺には目的がある。その目的とは、自分の領地を富ませ、それを周りに影響させ、結果ハルケギニアを幸せにし、下らない戦争するよりも、有意義な人生を皆が送れるようにする事だ。争いは無くならない。ならば、武器で戦うより、頭脳や知識を争う戦いの方がまだ健全だから。……だからモンモランシ伯、俺に力を貸してもらいます」

モンモランシ伯はハインが何か尊いものに見えた。この男の見ている視野のなんと広い事よ。つまらない自尊心で争いあう貴族達の醜さがよくわかる。ああ、この男についていこう。

「よろしく頼みます、ハインリヒ侯」

「よろしく頼む、モンモランシ伯」

二人は立ち上がり、強い握手を交わした。

後のハインリヒ台頭となる流れの、一端を担う男がここに参加した。だが、それが語られるのはまだ先の話である。

## ラグドリアン湖畔

モンモランシ伯、モンモランシー、ハイン、エレオノールは水の精霊に会うべく、祭壇のある湖畔に向かっていた。

他のハイン一味がないのは、ハインが戯れに持ってきた”ばななぼおと”なる黄色く巨大な浮き輪に興味を惹かれたからだ。

ハインはユラを「シカ三頭」で買収し、ばななぼおとを紐で繋ぎ、湖を引き廻すよう命じてあるのだ。

水着に着替えたマチルダ・テファ姉妹、ジエシカ、カトレアは、はしゃいで湖に飛び込んでいった。尚、シェフィールドはメイド服のまま。シェフィールド曰く、豊富な身体に濡れて張りつくメイド服、ああ、透けてしまう……もはや何を目指しているか謎である。

## 閑話休題

「ここだよハイン殿」

そこは岩場に囲まれた場所だった。水のルーンが刻まれた象徴的な岩がある。

「では、モンモランシ伯、お願いします」

ハインの言葉に頷き、伯は自身の使い魔のカエルを湖に解き放った。

とぷん

カエルが湖面から消えると、辺りを静寂が包む。

ぼちゃ…ばちゃ…

モンモランシ伯の使い魔が戻ってきた。

ザザザッ！バシヤン！

『何しにきたの？単なる者？あたし忙しいの。用事ないなら帰るわ』

激しい水音の後、湖面には水面が盛り上がっただけのプリンのような形状の物体がいた。どうやら水の精霊の登場である。

「水の精霊よ！我は代々水の精霊様と交信を任されたモンモランシ一族の末裔なり！我が言葉に耳を傾けてほしい」

モンモランシ伯は厳粛な面持ちで精霊に問い掛ける。

「あーっ！あんたこの前あたしに偉そうな口利いたオジサンじゃない！誰があんたの話なんか聞くもんですか！！」

水の精霊は何やら体をモゾモゾ動かし、全身で怒りを露にしているようだ。

「ですから謝罪を…」

『ぷいっ』

水の精霊は自ら『ぷいっ』と言いながら、体を横に向けた。断固拒否の構えである。そのくせ帰らないのは如何なものか。

「はい集合。作戦を思いついた」

ハインは皆を集めた。

「ハイン殿、何か妙案か？」

「うむ。まずエレン、マリィ、あの精霊のキャラに見覚えはないか？」

「えっ？」

「あっ？」

「ルイズよ！」

二人の声がユニゾンした。

「グーッド。ならば簡単だ。ルイズがああやってワガママ言うとき  
のあいつの内面を想像するんだ」

「そうね、おちびがああなる時は、たいてい私だけを見て見て光線  
を出してるわね」

「そうよエレンさま、ルイズはああなったら、こっちが下手に出るか、無視してへこむのを待つかよ」

「完璧だ。ならば皆、耳かせ……ゴニョゴニョ……」

何やら作戦を立てる一味。というか、居ないのに引き合いに出され、全て見透かされているルイズっていったい……

「ウフフ、もうハインったら……」

「いやいや、モンモランシ伯が…ボソボソ」

「なんだって！ハイン殿！それはボソボソ……」

「」「」あはははは…」「」「」

何やら楽しそうな一味である。

パシャツ…トテトテ……

「（は…ハイン殿きましたぞー！こっち見てる）」

「（まだまだ！充分に引き付ける！）」

「やだあハイン、そんなこといってボソボソ…」

「ハインさまあ？それでどうしたの？」

「うむ、私も気になるな」

「実はな？ボソボソ…」

トテトテ…トテトテ…

「なっ何を話してるのよ！？あたしにもきかせなさいよ！このバカ単なる者ッ！！！！」

さっきよりかなり接近し、こっちを見なさいよ光線を発する水の精霊。その距離3メートル。

「え〜！！ハインそれはボソボソ」

「やだあハインさまあボソボソ…」

「ハイン殿もやるなあ〜ボソボソ…」

『だからっあたしにもきかせなさいって言うてるでしょっ!!仲間外れにしないで〜〜!!!』

水の精霊は完全に一味の円に入った!!!そこからハインの動きは速かった。

「オラア!!もろたでツ!!!」

『キャアアアア』

ハインはヘッドスライディングしながら、水の精霊の腰の辺りを完全にクラッチし、そのまま森に走っていった。

「精霊、捕ったどおおおおっ!!!!!!」

森からハインの勝鬨が聞こえた。一味がハインの所へ駆け付けると、そこにはザルバの魔導火に呪縛された水の精霊が正座していた。

ハインはその前に腕を組み、仁王立ちして精霊を睨んでいる。それをみた一同は啞然としている。仮にも水の精霊に対し、ハインは完全に上から視線なのだから。

「おうコラ水の精霊さんよ、随分手間あかけさせやがって…大人舐めんなよ！」

『……………スイマセン』

「あ”あ”ん？」

『すいませんでした！』

「てめえ…なんでちょっとキレ気味なんだコラ。ちゃんとせえコラ  
！…！」

『うっ…ぐすっ…ごめんなさい…』

「どうしてあんな事した？」

『……………たから』

「聞こえねえ！……！」

『ひいつ……寂しかったからでずう……うわああん』

ハインの剣幕に泣き出す精霊だった。

「ハインそれは可哀想」

「ハインさま酷いです」

「ハイン殿はドSだな」

『ひつく……ヒグウ……』

「あれ……俺……悪者？」

何故か皆に非難されるハイン。というか、ハイン一味に属して間もないモンモランシ親子だが、エレンにすかさず乗ってみせたあたり、一味に入るべくして入ったという証明だろうか。

閑話休題

「おい、精霊。淋しかったなら最初からそう言え。な？言わないとわからないだろ？もう怒らないからな。いい子になるんだぞ？」

『しつ仕方ないから反省してあげるわ！べつ別に構って欲しくて言ってるわけじゃないからね？そこは勘違いしないでよね？でっでも、アンタがどうしてもって言うなら遊んであげるわ！……寂しいのは嫌なの』

「（はいツンデレツンデレ）あんな精霊さまよ、お前が盗まれた指輪、取り返してきたぞ？ほら返すな？良かったな精霊さま」

『あっありがと！…何よ、アタシだってお礼くらい言うわ！』

「はいはいわかったわかった。なら、増えたラグドリアン湖の水さ、元に戻してくれるか？」

『いいわ。戻したげる。感謝しなさいよね！』

「あと、モンモランシ家を許してまた契約してくれるか？」

『えっ嫌よ。むさ苦しいオジサンはやだ。あっそうねえ、ひとつ言

うつことを聞いてくれたら、そっちのドリル頭と契約するわ』

水の精霊は、何やら胸をそらし、偉そうな姿で要求してきた。

「むさ苦しいオジサン……」

「ドリル頭……また……」

ややこしくなるので落ち込む二人をハインは無視して精霊に聞いた。

「要求はなんだ。あまり無茶なのは無理だぞ」

『アタシはアンタを気に入った。だからアタシはアンタについていく。どう？これが聞けなきゃご破算ね？』

「あ〜全然OK。なんだ、俺に惚れたのか？」

『ばっばバツカじゃない！ああ……あたアタシがなんでアンタに惚れないといけないのよ！自惚れないでよね！……ちよつと気に入っただけよ……』

「「「「（なんてチョロい……）」」」」

かくして、無事に指輪の返還がすみ、ラグドリアン湖の水位は戻り、モンモランシ家に契約は戻った。

「あ、でも、その姿でついてくるなよな。ウザいから」

『わかってるわよ！ほんつと贅沢ね！仕方ないから変身したげるわ！』

ぼわわ〜ん……

『な〜う』

そこには全身グレーで目がブルーの小柄な猫がいた。

「お前、精霊？」

『な〜う』

頷く猫

「まっしゃべらないし合格だな。よしこいアクア！」

『なー！！』

アクアという名前が気に入ったのが、アクアはハインの肩に乗り、ゴロゴロと喉を鳴らした。

「とりあえず……」

「『一件落着？』」

なんだかやたら疲れたハイン一味だった。

『なーう』

次回予告

『なんだかどんどん増えていくハイーン味だな。しかし、モンモンがこんなに人気があつたとは驚きだな。因みに作者の知り合いが「ベアトリスと見分けが付かない」と言つて、作者にマジギレされたらしいぞ？さて、次回の「ZERO」の無責任男は、「使い魔呼んでみね？取り敢えずネタ無いし」だ。必ず見てくれよな！』

?? なんて今さら」らきすた「なんて見たんだ。だってDVDがセットで

アルビオン上陸マダー？

？ 0 いやあ……都合主義でもさ……それはいけないでしょ……ダメダメ……絶対  
モンモランシ領篇ラストです。

あとがきにちょっとしたアンケートがあります。

良かったら回答下さいませ。

「？〇 いやあ……ご都合主義でもさ……それはいけないでしょ……ダメダメ……絶対」  
「マリーの使い魔って、パパと同じカエルだったっけ？」

モンモランシ宅のリビングで、夕食後にタルブ産貴腐ワインを楽しんでいるハイン一味だったが、会話が途切れた時、ハインが何となく言い出した。

「はい、ロビンって名前なんです。見た目は地味なんですけど、水の中の貴重な秘薬の材料を取ってきたり、とても優秀なんですよ」

「なるほどなあ……そういや……ウチの連中は使い魔いないよな。うーん。エレンとマチルダは土メイジ、カトレアは風と水のトライアングルだっけ……」

ハインはソファーに寝転び、テファの膝を枕にした。

「どうしたんだい？いきなり使い魔の話なんか始めてさ？」

マチルダが怪訝そうに言う。ハインの頭を奪おうと、テファと争いながら。

「いてっ……まあ、別に特別な意味は無いんだけど、旅行終わつたらさ、本格的に領地の経営に時間割かれるだろう？特に土メイジの

俺、エレン、マチルダはさ。なら使い魔いたら役に立つかな？なんて思ったわけさ」

「そうね、私はアカデミー勤めでトリスタニアの別宅住まいだったから、巨大な使い魔を召喚したら世話が大変だからしてなかったわ。でも、オルニエールの屋敷は広いし、森もあるから大丈夫ね。私、召喚してみたいわ」

エレンはミニスカートから、組んだ形の良い脚を揺らしながら思案げに言う。

「あたしはいつもゴーレムで間に合ってたからねえ。けどハインが言うとおり、領地経営が忙しくなれば、ゴーレム頼りに動くと、毎日精神力が空になって大変な事になるねえ。うーん、あたしも使い魔欲しいかなあ？」

テファからハインを漸く奪い、満足そうなマチルダも、エレンに同調する。

「私は可愛らしい使い魔なら欲しいわ。水の精霊ちゃんみたいにプニプニした丸っこいのがいいわね。ウフフ」

カトリアは水の精霊改めアクアを膝の上で撫でながら言う。

なんかカトレアだけ主旨が違うと感じると冷や汗を流すハインだった。

「あの…あのあの……しえ、シエフィは「しゅじんさまの奴隷ですから…あの…使い魔みたいなものでしゅ…いたひ」

「「「「お前はジョセフの使い魔だろうが！…！！！！」」」」

「…ひゃあん」

一同の総ツツコミに身悶えるシエフィールド。全く欲しがりシエフィちゃんにガツカリなハイン一味だった。

「あつ！テファも使い魔欲しいです！いつそハインさまを使い魔に……ウフフ……そしたら「使い魔さん、テファのここを×××しなさい！」とかいって…はうっ…ハイン マルカジリ……ハアハア……」

黒いオーラを撒き散らしながら、何やら危険な妄想を始めたテファに一味の笑顔がひきつる。

「…有り得そうでマジ怖い……ルーンとかいらねえし……」

恐怖に震えだすハイン。モンモランシーはすかさずハインを膝に乗せ、頭をなでなでした。隙を突かれたマチルダが悔しそうだ。

「ハインさま？どうして有り得そうなのですか？」

「んんん？だって虚無だもんヒト型出るに決まってるわさ。だからルイズだってサイト出て来たし」

「えっ？」

「あれっ？言っでなかったっけ？すまんすまん、今の無し」

「いやいやいや、聞き捨てなりませんよそれは」

「あうあう…私虚無…」

モンモランシーとテファには言っでなかったのをすっかり忘れていたハインだった。

仕方なくハインはカクカクシカジカと説明した。あまりの衝撃的内容に呆然とした二人だったが、平然としているハイン一味に流石だなと変な感想を持つあたり、君らも充分染まっていると思う作者だ

った。

「まあ、んなわけで、テファが使い魔召喚したいなら、うち帰った  
ら始祖の秘宝貸すから、ちゃんと虚無に覚醒したならいいぞ？」

「むー…ハインさま以外の人間出たらめんどくさいからいい…うー」

「んじゃまあ、明日はマリーン家滞在最終日だし、昼間に使い魔召  
喚やってみつか。デカいの出たら竜っ子に領地に運んで貰うといい  
しな？んじゃそうしよう」

「「「「「OK」「」「」」」」」

そうしてモンモランシ領の夜は更けていった。

翌朝朝食を終えた一味は、ラグドリアン湖を望むモンモランシ屋敷  
の庭にいた。

「気持ち～です！」

「天気良いね～！」

ハイン一味若年組は、湖からの涼しげな風を受けてはしゃいでいた。

この何日かで、モンモランシーとテファは年が近いのもあり、意気投合していた。特にテファは、同年代の友人は今まで居なかった事もあり、やたらモンモランシーに懐いていた。

「しかし、意外と上手くいくもんだね？」

エレン、カトレア、マチルダという年長組に寄り添われながら、眩しそうにはしゃぐ少女達を眺めながら呟いた。

「私は昔は偏見に満ちていたわ。ラ・ヴァリエールの長女としての責任にも押しつぶされそうだったし…きっと昔の私ならテファを受け入れなかったわ。でも、ハインがきっかけで、私が守ってきたプライドが、意味の無いものって知ったの。エルフは悪、常識だったはずね、ハルケギニアでは。でも、テファを見たら、ただの少女じゃない？結局、自分で見知って初めて本質が分かるのよ。研究者なら当たり前の理屈なのに、ハインに逢うまでそれが出来なかったわ」

「お姉様……ふふっ、私もハインに病気を治して貰ってから変わったな。あの時ハインは私の病気に怒ったわ。理不尽だって。その時私はどうして彼は他人にそこまで本気になれるのかな？と思った。だって普通はそこまで他人に一生懸命になれないでしょ？だからハインに興味を持ったし、好きにもなった。私の唯一の世界だった私の部屋から、私を救ってくれた王子様の見る世界を、私も一緒に見

てみたい。私はそれだけなの。だから、ハインが好きなものは、それが例え禁忌でも、私は受け入れるわ」

ラ・ヴァリエール姉妹は、木に持たれて座るハインの腕に手を絡め、寄りかかった。ハインは微笑んだだけである。

「あたしは……空っぽだったわ。あったのは世の中への嫉妬と、惨めな自分だけだった。テファ達の生活費を稼ぐために盗賊に身を落としたり……きつとあたしは何れ捕まって処刑されてたろうさ。けど、ハインはこんなあたしに幸せになればいいと教えてくれた。その方法も教えてくれた。あたしは、その幸せを……同じように苦しむ誰かに分けてあげたい。それだけさ……」

マチルダもハインに寄り添い目を閉じた。

「俺もまあ、退屈な人生に潤いをくれたお前らに感謝してるよ。しかし、良し悪しなんだよな。俺のいた世界は、確かに豊かだった。あらゆる制度も張り巡らされた。皆がそれぞれ適度に努力したら、それなりに幸せになれた。だが、世界のほとんどが、今見えてる景色を豊かさとして引き換えに無くしてしまったんだ。ハルケギニアは未熟な世界だけど、だからこそその宝物もある。……俺というイレギュラーが、この綺麗な世界を消してしまわないかたまに怖くなるな……」

そういつてハインはコイーバを啜えた。唇に染みる味は苦かった。

「大丈夫よ。私達もいるんだし。貴方は一人じゃないわ。もっと頼りにしてもいいのよ？」

「うん」

「そつち」

女達はハインを強く抱き締める。

「おう！頼りにしてるぜ奥様達。やっぱりお前らしい女だな。うーん  
…ムラムラしてきた…では、いったきまーす！」

「「「きゃーっ」「」」

「もー！お姉さん達だけずるーい！！行こっマリー」

「はいっ…！」

ハイン一味の絆が、改めて深まった昼下がりの下だった。

「ああ、あれだ…ちょっと調子に乗りすぎた…身体中ベトベトやん……お前らもえらいことなってるな……」

突発的祭だわっしよいいTIMEが終わり、ハインが見渡すと、悩ましい裸体をさらす妻たちが転がっていた。

「はいはい、そのまま立って並べ」

ハインは妻たちを立たせ、水魔法コンデンセーションを唱え、空気中の水蒸気を凝固させ、彼女達の身体を流す。

「つか、俺ら何しにきたんだっけ……」

「「「「「使い魔召喚でしょうが！」「」「」「」

「あ、そっか」

「あの…あのあの…シェフィはいい子に見ていたので、う褒めてください……」

「「「「「あんたはややこしいから黙れ」「」「」

「ひゃうん」

何やら新しい世界へ目覚めたシエフィールドだった。人知れず、ジヨセフに返そうかと悩みだすハインだった。

「さあ、気を取り直してやるか！じゃまずはエレンから行ってみよう！」

くいつと自慢の眼鏡を直し立ち上がるエレン。眼鏡の奥がキラリと光った。

「さあ、才媛たる私にふさわしい使い魔よ、出てらっしゃい！我が名はエレオノール・アルベルティーン・ブル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペンタゴン！我が運命に従いし、使い魔を召喚せよ！」

杖を構えたエレンがルーンを唱えた。辺りが震動し、まばゆい光と共に5マイルはあるゲートが現れた。

ゴゴゴゴゴゴ……

『モツモグーッ!!』

ゲートから現われたのは、巨大なモグラだった。某薔薇少年が召喚したものと比較にならない程の大きさである。

「じゃ…ジャイアント…モールなの…かしら？」

『モグーッ!!』

そうだと言わんばかりに頷くモグラに一同微妙な表情だ。ただ、くりくりした目が可愛い。

「取り敢えず…契約したら？お姉様……」

收拾がつかないので、カトレアが契約を促す。

「そっそうね…穴掘りが楽しそうだし…我が名はエレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエー

ル、この者に祝福を与え、我が使い魔となせ。……ちゅっ」

『モグーーツ!!』

モグラは嬉しそうである。やがて、鼻の頭にルーンが刻まれ、エレンの儀式は終了した。

「お疲れ様、エレン。土メイジにびったりなんじゃね？良かったなエレン」

「凄いですエレンさま。級友のギーシユもジャイアントモールでしたが、こんな大きさなんて信じられません!!」

モンモランシーもびっくりである。

「じゃ次はあたしが行くよ!」

マチルダが名乗りを上げた。同じ土メイジとして対抗心を燃やしたらしい。目が血走っている。

「はっはっは!さあ出ておいで!我が名はマチルダ・オブ・サウスゴータ!五つの力を司るペンタゴン!我が運命に従いし、使い魔を

「召喚せよ！」

不敵な笑みを浮かべたマチルダだった。エレン見てなさい、凄いの出して見せるから！マチルダの目はそう言っていた。

まばゆい光と共にゲートが現れた。50セント位の…

とてとて……

『……………』

「……………」

「何これ……………」

マチルダは呆然とした。そこにいたのは犬より少し大きいネズミ……………

「マチルダ、カピバラだなそれ……………」

「カピバラってなんだい……………？」

ハルケギニアにカピバラはいない。多分、ハインに影響されたのか  
もしれない。

「可愛いネズミだな。しかも超おとなしいな……」

「じゃ何の役に立つんだい？」

「うーん……見てると和む？寒いとお風呂入るぜ？」

「うつつつ……外れ？」

一斉に目を逸らす一味。

「いいよもう……可哀想だし契約するよ、我が名はマチルダ・オブ・  
サウスゴータ、五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、  
我が使い魔となせ……ちゅっ」

『……………チュウ』

相変わらず微動だにしないカピバラ。ルーンが刻まれる際、多少痛  
かったのか、一声だけ鳴いた。

テファの、「姉さん、鳴いて良かったね」との慰めになってない慰めに、マチルダは泣いた。

「じゃじゃあ私がやるわ」

いたたまれない雰囲気にならなくなったカトレアが名乗りを上げた。

「さあ、プニプニしたの出て来てね 我が名はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ、五つの力を司るペンタゴン、我が運命に従いし、使い魔を召喚せよ プニプニ」

カトレアのルーンの完成と同時に、小さなゲートが開かれた。

ぼむっ！ぷるぷる…ぷるぷる…

青いティアドロップ型の半透明の物体がそこにいた。

「ぷるぷる…ぼくは悪いスライムじゃないよ…ぷるぷる…」

「いやん プニプニがでたわ！いやん」

「いや…これはダメだってカトレア…これはイカンイカン…穴に戻せ」

「えええっ！嫌よ！可愛いもの……」

『ぷるぷる…ぼくは悪いスライムじゃないよ…穴にいれないで…ぷるぷる…』

「……………使い魔となせ…ちゅっ」

カトレアはさっさと契約してしまった。

「ああああ……………」

「あなた、どうしてダメなんですか？」

「いやまあ…大人の事情だ…もういいけど……………」

色々と諦めたハインだった。

「さあ全員終わったな？んじゃ昼飯食ってアルビオンに出発すつか  
！」

「あれっ？ハインさまはしないのですか？」

「いや、俺やつたら間違はなく馬か空飛ぶ金魚が出てくるからなあ。  
すんげえ重いし…だから領地帰ったらやるさあ」

牙狼には轟天という馬と、魔界竜という絡繰りの竜が仲間にいるの  
だ。ハインがサモンサーヴァントを行えば、高確立でどちらかが出  
るだろう。

全身金色の使い魔なんか目立って仕方ない。なのでハインは使い魔  
は呼ばないつもりなのだ。

「各自、名前は決めたのか？」

「私はモグーにしたわ。だってこの子モグーしか言わないんだもの。  
ねえ？モグー？」

『モグーッ！！』

モグーは嬉しそうに鼻をひくひくさせている。

「マチルダは？」

「うっん、何も言わないんだよこの子…ポチでいいんじゃないかい？なあポチ」

『……………チュ』

「まっまあ…気に入ってるんじゃないかい？」

ハインは何か言おうとしていたテファを黙らせた。あまりに気の毒過ぎて。

「…ちっ」 テファ

「…………カトレアは決まったのかい？」

「ええ、決まったわ スラリ「それは絶対にダメ。断固拒否する」  
…あうう」

「頼むカトレア、名前だけは違うのにしてくれ…」

ハインの鬼気迫る土下座に、カトレアは渋々聞き入れた。

「仕方ないわねえ…なら、スラぼうにするわ。ねえスラぼう」

『ぷるぷる…ぼくはスラぼう…悪いスライム(r)』

「スラぼうか…ギリギリセーフって事で…」

「お許しが出たわ？良かったわね？スラぼう」

ぷるぷる…ぷるぷる…

スラぼうは身体を震わせて喜んでいる。

「さつて、そろそろ戻って飯喰おうかあ。シエフィ？出発の準備は済んでるのかい？」

「あのあの、昨日のうちに済んでいます！」

「よーしい子だ。ナデナデ……」

「はふう……」

「んじゃ各自、使い魔はユイに頼んでオルニエールに送ってな。ユイ達が戻ってくる間に飯を喰おう。んじゃ戻ろう」

ハインの号令に、ぞろぞろと屋敷に歩いていく一味だったが……

「あっあの…ハインさま」

モンモランシーが足を止めてハインを呼んだ。

「どうしたマリー？抱かれ足りなかったか？」

「はいつもう一回欲しいです……じゃなくて！あの…わたし学院に戻らないとダメですか？えっと…ハインさまと一緒にいたいと思

「っちゃって…学院からオルニエール遠いし、寂しいかなって……」

「マリーおいで？」

伏し目がちなモンモランシーをハインは抱き寄せた。そして優しく頭を撫でながら、ハインは微笑む。

「マリー焦るなって。俺はどこにも行かないし、マリーをないがしろにはしないさ。でもな、俺らが愛し合っても、マリーはまだ学生なんだ。俺はちゃんと卒業して欲しいし、ちゃんと学生生活を満喫してほしいんだ。学生じゃないと見えない物もたくさんあるからな」

「はいっ…わたし、恋とか今までよく分からなくて。好きだと言ってくれる人は居ますけど、夢中にはなれなくて…ハインさまはあつという間にわたしの心の中に滑り込んできて、夢中になりすぎて怖いんです。久しぶりに逢ったら、忘れられてないかなって…エレン様達みんな綺麗だし…」

ハインはさらに強く抱き締め、モンモランシーの額にキスをする。

「マリー、君はもつと自信を持っていいよ。俺の家族は、みんなそれぞれ個性がある連中さ。それに惹かれて俺は欲しかったんだ。マリーだって俺にしか分からない個性がある。だから欲しかったんだ。だから、離さないよ、絶対に」

「わたしの個性……どんな個性ですか？」

ハインは笑った。

「今は教えない。でも、一生かけて教えてあげるよ」

「……はいっ！」

「もう大丈夫だな。だけどまあ休みにはユイに迎えに行かせるよ。あいつらなら二時間かからないからな。だってマリーをもっと抱きたいしな？」

「あうっ……恥ずかしいです……でも、嬉しいです。そして、頑張つて卒業します！」

「ああ、偉いぞマリー。沢山友達作れ。そして卒業したら沢山俺を助けてくれ。頼りにしてるぜ！」

「はいっ！」

こうして、実り多いモンモランシ領の休暇は終わった。次はいよいよアルビオン王国上陸である。

## 白の国アルビオン

ハイン一味の飛躍の序章が今始まる。

## 次回予告

『いやあまずいことになったな。何がって？それはお前、高所恐怖症なんだわ……作者が。って関係ないだろが！そーいや、ワールドはどうなったかなあ？あいつしぶとそうだしな。え？前フリなのかって？そいつは言えないな。さて、次回の-ZERO-の無責任男は、「やっぱ飛空艇といえばハイウイ ド？いやシ トラールでしょ」だ。必ず見てくれよな！』

? 0 いやあ……ご都合主義でもさ……それはいけないでしょ……ダメダメ……絶対  
毎度の駄文、お疲れ様でした。

アンケートですが、プロットは一応エンディングまでくんであるのですが、ハインと娘達の関係性上、書けなかった18禁パートが山ほどあります。

例えば、ジェシカとの出会い〜ハイン逃亡までの話とか、エレオノールがハインに食われて、あそこまでベタ惚れになっている過程の部分とかです。

そついうのをノクターンで、本編の話に対応したSideストーリーはかけるんですが……

? 濃厚シーン満載、18禁話を読みたい

? イメージ壊れる、およしになってティーチャー

良かったら回答下さいませ。お待ちしております。だいたい1週間くらい様子みて結論だします。

いじも誤字すいません

??

**霧にゴホツゴホツむせ返りながら、現れた女が俺に頼んだ依頼は、復讐**

ハイン一味はアルビオン王国はサウスゴータ地方の中心都市、シテイオブサウスコーダに到着していた。

ハインリヒはハインリヒ侯爵として、この地を領地として賜った。トリステインのド・オルニエールもハインの領地ではあるが、街の規模や人口、領地自体の広さは、サウスゴータの方が圧倒的に上である。

今回この地をを領主として訪れるハインだったが、一応前もって関係各所に連絡はしておいた。一応領主な訳だし…というハインの珍しく常識じみた行動の賜物である。

だが、それを聞き付けたこの国の皇太子、いや、新生トリステイン王国の次期王であるウェールズが、英雄をセレモニーを持って出迎えると息巻き、結果、二万人が英雄ハインリヒを見に押し寄せる事となった。

大衆とは英雄譚が大好きなのだ。ましてや、その英雄が自分たちの領主になるとなれば、興奮もひとしおである。

モンモランシ領から直接この地に向かったハイン一味は、まさかこんな大事になっているとは露知らず、領主の屋敷前に竜っ子で降り

た訳だ。

とたんに二万人の観衆が口々に、「黄金侯万歳」だの「さすが黄金侯：雄々しい」だの「リア充爆発しろ」だのと叫び、熱狂的に迎え入れられた。

屋敷前にはアルビオン空軍が隊列を組み、先頭に控えたウェールズの合図で祝砲が撃たれ、いい笑顔でハグしてきたウェールズに、流石のハインも殺意を覚えた。

「……………帰りたい」

テファをペルシア猫のように膝にのせ、シエフィールドをオットマンにしながらソファーに身体を投げ出したハインが呟いた。

「あなた…今ので27回目ですわ」

「だって…こんな聞いてないもんよ……………ってか数えてたのか…カトレアも暇だな……………」

「ふふっ……………」

ハインがボヤクのも無理はない。ウェールズの歓迎のあと、着替える事も許されず、一味は馬車に押し込まれ、日暮れまでパレード。

やっと終わったと思えば地元有力者や、貴族達にお披露目の晩餐会に続き、見たこともないおじ様達と歓談という、ハインにとっては拷問のような仕打ちになった。

ハインはいい加減腹に据えかねたのか、渴いた笑いをあげながら、牙狼剣を抜き、頭上に円を描か　こうとしたが、それを察知したウェールズがタックルで阻止するという微笑ましい一幕でこの日の予定は終了したのである。

危うく「血のサウスゴータ」的な大惨事に発展しそうな程、ハインはげんなりしていた。

「いやあ久しぶりだねえハインリヒ侯！あっはっは」

「あははじゃないよウェールズ…一体この騒ぎはなんなんだよ！今回はお忍びの予定なんだよ！」

「ふふっ…すまんすまん。いや、実はね？最近密偵が多いんだ」

「ふむ？ロマリアか？」

「まあ、それはいつもの話だから心配はしてないがな。…ガリアだよ。しかもジョセフ肝入りの人間が動いてるようだ」

「なるほどな、スポンサーとしてはレコンキスタの働きが不満だったのかね？……トリステインとアルビオンの合併に気付かれたな」

「多分…いや、間違いないだろうな。今回のパレードはさ、君と私の関係をアピールして、向こうに警告のつもりだったのさ。利用して悪いが…私には君しか頼れないから」

「はっ…辛気臭い顔をするなよ親友。まあ、あのオッサンに少し揺さぶり掛けるかな…しかし、ウェールズ、報酬は貰うぜ？」

「すまん、王の即位式典までは派手に動けないんだ。恩に着るよハイン。それで報酬はいくらくらいだい？」

「いや、金はいらぬ。軍艦の設計図が欲しい。全てのサイズの」

涼しい顔をしてハインは言い放った。ウェールズも、その側近も青い顔をしている。軍艦の設計図など、機密中の機密である。いくら懇意にしているも、無理がある報酬である。だが、ハインの言葉はさらに続き、そしてその内容はウェールズの予想の斜め上をいった。

「ああ、現在の船は使えねえからな。設計図を雛型に、全く新しい

船を作るんだ。風石のエネルギーを噴射運動に変換して推進力とする動力源を搭載するんだ。マストも帆もいらぬ船な。飛空艇とも言ふ。だから設計図よこせ。完成したら売ってやるぞ？高いけどな？あっはっは」

ハインが言っているのは、地球のゲームの中に出てくる飛空艇を指している。だが、風石というでたらめな魔石があるならば、幻想の物語の中の産物が実現出来るとハインは確信していた。何故ならば、現状で空を飛んで居るのだから。

現在居残りで研究所にこもっているコルベルが、現在取り組んでいるのが、ゼロ戦のエンジンをばらし、図面におこす作業だ。そして、レシプロエンジンの造詣を深めさせ、次に風石エネルギーの動力への変換であった。

それと同時に、バッテリーやダイナモ、コンデンサー等の解析もしており、電気の発電と蓄電も実用化を目指していた。

つまりは、早い段階でハインは飛空艇所持をたくらんでいたのだ。

#### 閑話休題

「君の話が現実になるならば、ハルケギニアの軍事バランスは変わってしまうな……発想は凄いが、実際に実現可能なのかい？」

「まあ、いつとは期限は言えないが、構想の七割は現時点での知識でいけるな。ただ、残り三割は実験段階でのブレイクスルーが無いと正直厳しい。だが、失敗したとて、現在の主要軍艦が化石になるだろうな。まあ、やってみる価値はある賭けではある」

「君は…それを他国に売るかい？」

「ふふん…王の風格出てきたか？心配しなくても、トリステイン王国にしか売らないよ。まあ、俺が個人では使っし、それを王国が許さないなら、国にも売らない。最悪、荷物まとめて出てくかな？」

「おいおい、恐ろしい事を言うね。いや、他国に流出しなきゃ良いだけさ。うむ…良いだろう。設計図が報酬で構わない。ガリアを牽制して欲しい」

「了解しました殿下？」

「うむ、善きに計らえ」

「「あっはっは…！」」

「とは言ったものの、明日も明後日も貴族様達のパーティーか…はあ…帰りたい…」

「28回目ね、ハイン。もうあきらめなさいよ」

エレンはアクアをじゃらしながら笑った。

翌日も翌々日も特に変化は無かった。精々カトレアの使い魔のスラぼうが微妙な回復魔法を使い皆を驚かせたくらいだ。

ホイミとか言っていたが、ハインは必死に気のせいだと言い張っていたのは些細な事だ。

そして明日にはロンディニウム入りという晩、女たちは連れ立って街のレストランに食事に行った。旅先の食事は楽しいものである。

ハインは連日のお勤めに疲れ、遠慮して屋敷に留まった。

「しかしまあ、でっけえ屋敷だな。ラ・ヴァリエール邸くらいあるんじゃないか？」

ハインはワイン片手に屋敷を散策していた。ふとりビングの暖炉の上にある絵に気が付いた。重厚な造りの立派な額に納められた紳士の肖像画である。

「うーん、偉そうなオッサンだなあ。あはは」

「父上さ。なかなか渋いだろ？」

「ん？行かなかったのか？お前が臍肩にしていた店らしいじゃないか」

出掛けていたはずのマチルダがそこにいた。

「うん…なんだかこの家が懐かしくてね。一応思い出だけは沢山あるんだ。ここにはね」

マチルダはサウスゴータ大守の娘として、この屋敷で過ごしていた。だが、アルビオン王弟のモード大公の側近だった為、彼が肅正された時に一緒に失脚したのだ。

モード大公の妾がエルフであり、その娘がハーフェルフのティファニアである。その存在がジエームス一世に知れ、ロマリアの異端審問を恐れたジエームス一世はモード大公に処分を命じ、モード大公

はこれを拒否、結果肅正の運びとなったのである。

「ここは、辛いかい？」

「そりゃあ少しはね？ だけど、楽しい事も沢山あったからね。だから偶然とはいえハインがサウスゴータを買ってくれて嬉しいよ」

「おいでマチルダ」

ハインはマチルダを手招きして、ソファーに誘う。そして、彼女の肩を抱き寄せ、その薄い緑色の髪を優しく撫でた。

「今までよく頑張つて来たな。マチルダ？ これからはたくさん幸せになっていいんだ」

「うん… 幸せにしておくれよハイン… キスして？」

二人のシルエットは一つになり、やがで貪りあうように求めあい、溶けていった

「あ~~~~っ！！またマチルダ姉さんとイチャイチャしてるう！！」

その時突然、テファの絶叫がこだました。

「あなた、マチルダばかり構ってませんか？これは解剖するしか……ヒヒッ」

キラリと眼鏡を光らせ、エレンが言う。

「ハイン……最近わたしに構ってくれない……鼻屑はいけないと思います」

ジェシカは涙目である。最近の扱いが、料理上手い人くらいの存在感なのを気にしていたのだ。

「マチルダ……可愛がりね」

女帝の判決によら、マチルダの死刑執行がここに決まった。

「あのあの…えと…シエフィはいい子だから放置も悦ぶでしゅ……  
あの…あの…んと…一人で亀甲縛りを」

「「「「「あんたは黙れ！ややこしいから」「」「」「」

「ひゃうっ」

結局いつものハイン一味だったとき。

翌日ハイン一味はロンディニウム入りした。ハインはジエームス一世に謁見するべく、王城ハヴィランド宮殿に赴いた。

そして……

「マチルダ・オブ・サウスゴータ、そして……ティファニア・オブ・モードよ。非公式ではあるが、私はそなた達に謝罪をする。済まなかったな……ティファニア…そしてマチルダよ。王の勤めだったとはいえ、そなた達には苦労を強いてしまった……ティファニアよ…生きていてくれて本当に良かった。弟の面影が残るお前に会えて嬉しい。そしてマチルダよ…よくティファニアを守ってくれたな。王として……一人の男として、本当に感謝する。ありがとう……」

ハインリヒに促され、玉座の間に呼ばれたマチルダとティファニアに待っていたのは、王の謝罪だった。

ハインに事の真相を聞いたジェームス一世は、直接本人に謝罪と懺悔をしたいと願ったのだ。

長い間、彼の心には楔のようにモード大公が生きていて。後悔と罪悪感として。だから、罵倒されても構わないと、ハインにセツトアップを頼んでいたのだ。

「おうさま…わたしは恨んでいません。確かに、悲しくはありますが、今のわたしは幸せですから。だから、もっといっぱい幸せになつて、天国のパパとママを安心させるんです」

「恨んで無いと言えば嘘になるけどさ？王様もいっぱい苦しんだんだろ？ならもうあたしは忘れるよ。今はハイン達という家族もいる

しね。だから、もういいのさ」

マチルダもティファニアも、ぎこちないが笑顔を返し、そして水に流した。マチルダは心の中で思った。父さん、母さん、王様が謝ってくれたよ。やっと父さんと母さんが天国に行ってくれたよ。上から見ててね？幸せになるから、と。

「ありがとう二人とも。私もやっと胸のつかえが取れたよ。……我が姪のティファニアよ、叔父さんの抱擁を受け入れてくれるかい？」

「はい！おうさま。えっと、叔父様？」

ティファニアはジェームス一世の胸に飛び込んだ。こうして、過去から続いたアルビオン政変が、一つの結末を見たのだった。

妻、s達を先に宿に帰したハインは、ジェームス一世とウェールズが待つ部屋に向かった。

「王よ、ご立派でした。王故に思うまま振る舞えぬ齒痒さは私などには推し量れません。さぞ難儀でしょうや？手前には真似出来ませぬ。そして、我妻達の苦しみを取り去って頂き、真に感謝いたします」

「ハインリヒ……こそばゆい言葉を話すな。お前らしくもない。だが、礼には及ばぬ。私とて大きな罪悪感が消えたのだ。感謝するぞ、ハインリヒ」

「はっ……」

ジェームス一世は優しげな表情でハインを見ていた。この男はまことアルビオンの英雄であるな、と。

「いやあハイン……お前の畏まった言葉……気持ち悪いな」

「うるへ〜ウェールズこそとつとアンリエッタをこませよチキン野郎！」

「くっ…それについては反論できん……」

「クククッ…やはりハインはハインであるな。わはははは！…」

部屋は笑いに包まれた。

「ときにハインよ。息子から話は聞いたろうが、どうやら北花壇騎士団が動いているらしいな。どう動くつもりだ？少々やつかいだと思っが…」

ジェームス一世の目が王のそれになった。

「うん、僕も気になるな。もしあれなら人手はだすよ？」

「いや、北花壇騎士団にちょっと心当たりがあつてね？そこから直接内部に乗り込んで、引つ掻き回してやるかなど。クククツ…ジョセフをコケにしてやりませよ」

「お前…正気か！？みすみす死に行くような…いやそれに」

「心配すんな。証拠は残さない。というか、ジョセフの動機はわかつてる。なら、精々満足させてやるだけさ」

ハインは何かを企んでるような、底意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前が言つなら何もいわんが…で、ジヨセフ王の動機とは？」

「んー…知らぬが華さ。あんたらは知らなかったという方が都合が  
いいのさ」

「ふふふっ…ハインリヒよ、何やら私も興奮してくる言い草だな。  
帰ってきたら、聞かせてくれるな？」

「御意……」

『「アルビオン王国篇はまあ閑話みたいなもんだつたな。そして…  
…次回なんだが、やっとなるぜ？みんな大好き青髪文学少女が…ク  
ツクツク…嬉しいだろうが？さて、次回の - ZERO - の無責任男  
は、「ん〜タバサが好きだと公言したら、ロリコン認定されたよ。  
だから周りにはリアンヌが好きだと嘘ついたら、それはそれで痛  
い人言われたよ」だ。必ず読めよな！」

?? 霧にゴホツゴホツむせ返りながら、現れた女が俺に頼んだ依頼は、復讐す

アンケートはまさかのオール？

あんたも好きねえ

サブタイトルのネタ元ワカル人いるかなあ？いねえか

トリステイン魔法学院　ここは王立の学校施設である。三年制で、貴族の子息が魔法と紳士淑女マナーを学ぶ養成機関である。

生徒の多くはトリステイン貴族であるが、ガリア、ゲルマニア、アルビオン等、諸外国の留学生を受け入れたりもする。

タバサ　彼女もガリアからの留学生であり、ある個人的な理由で偽名を名乗っている。

一つは王族であること。もう一つは、人に言えない任務を背負った騎士であることだ。

貴族とは、ある種見栄の生き物であると言える。人物の格、家柄の格、そしてメイジとしての格である。

ハルケギニアにおいて、貴族＝メイジというのが常識であり、ある意味貴族の価値の大部分がメイジとしての力量に重きを置いているかもしれない。

メイジの力量とは、大まかに言えば、ドット、ライン、トライアングル、スクウェア…とクラスがある。

それは星形を思い浮かべれば分かりやすいだろう。星の頂点が五つあり、一ヶ所ならば点、つまりドット。二ヶ所ならば二点が繋がり線となる。つまりライン。三ヶ所で三角。トライアングルとなり。そうして頂点が増えていくことで魔法の威力も使用量も増えるわけだ。

頂点の数だけ足せる魔法の数が増える。単純に風、風風、風風風……というようにだ。同系統を足せば威力が上がり、他系統を足せば特殊な効果の魔法となる。

例えばタバサが得意なウインディ・アイシクルは、鋭利な氷柱を何十本も標的に飛ばすという攻撃魔法であるが、風風水という構成になる。

因みに魔法を行使する為の源は、一般的には精神力と言われているが、ドット、ラインとクラスアップすると、その絶対値が数倍に増える。単純に火のドットスペルのファイアボールを、ドットなら10発撃てるとして、ラインメイジならば、数十発撃てるのだ。元々の絶対値は個人の資質に依るので、あくまでも目安でしかないが。

タバサはトライアングルメイジという15歳としてはかなり優秀なメイジであるが、事情によりその力量を誇りはしない。

名前に家名も領地の名も入らず、ただのタバサという、明らかに貴族の見栄の価値観から離れたパーソナリティが、他生徒からはメイジの力量が嫉妬の対象になり、そこをしばしば揶揄の材料となる。

本人が我関せずという態度を崩さないのが、より拍車をかけるのだが、その怪我の功名でタバサはキュルケという莫逆の友を得ていたりするから不思議なものだ。

日が陰り、夕方となった学院は、その日のカリキュラムを全て終了し、拘束から解放された生徒達は、夕食までの時間を思い思いに過ごしていた。

タバサは趣味の読書を……いや、ある意味趣味の域を越え、活字中毒ともいえるが、誰にも邪魔されず楽しむために、自室にこもり、ご丁寧に部屋にはサイレントをかけ、活字の海に潜っていた。

『イーヴァルデイの勇者』

タバサのお気に入りの本である。よくある勇者の英雄譚であるが、彼女はいつか自分のイーヴァルデイが、自分を不条理な運命の鎖から解き放ってくれると夢想している。

物語を読む……物語の情景に自分が溶けていく。いつしか目の前にはイーヴァルデイがいて、自分というヒロインを命懸けで救ってくれる。

そうして今日もタバサはイーヴァルデイの勇者を読み返すのだった。

日は既に落ちた。先程キュルケがノックしていた気がしたが無視した。ハルケギニアの赤と青の月が窓から幻想的なカクテルライトとなり射し込んでいる。

ふとタバサは本を置き、窓から双月を見上げた。

「青い月はわたし。赤い月はあなた。……わたしのイーヴァルデイ……ハイン……あなたはわたしを救ってくださいますか？」

タバサの鈴の音のような声が問い掛けるが、返事は無い。彼女は深く目を閉じ、そして見開いた。その瞳にはある決意が宿っていた。

翌日、キュルケは朝食を摂りに食堂へ向かった。昨夜に続きタバサは居なかった。

「……変だわ」

キュルケはその綺麗に揃えられた眉を潜めた。タバサが自分に何も言わず二度も食事に現れない。

キュルケはタバサから、彼女の特殊な事情を聞いており、シュバリエとしての活動もある程度把握していた。彼女の身を案じるキュルケに、タバサは任務に赴く際に必ずそのことを告げていくのだ。暗黙の約束とも言える。

なのにタバサは何も告げず、忽然と消えてしまった。

キュルケは食事もそこそこに、タバサの部屋へと急いだ。ノックはしたが、返事はない。焦れたキュルケは、校則違反であるがアンロツクを使い、部屋に入った。

タバサは居なかった。

「何やってるのよツエルプストー？慌てちゃってみつともない」

「ん〜？どうしたんだキュルケ？顔色悪いぞ？」

級友でライバルのルイズとその使い魔のサイトだった。宿敵のツエルプストーの娘を見つけたと、舌なめずりをしている。使い魔の方

はそんな主に辟易しているようだが。

「ルイズ…あんたと喧嘩している暇は無いの！！ねえあなた、タバサを見なかった！？全然捕まらなくて心配なの！しつてたら教えて頂戴！」

ただならぬキュルケの剣幕に、不覚にも圧されてしまうルイズだった。

「なっ何よ…そんな顔しちゃってさ。しっ知らないわよ…」

「あ、そういえば……」

「えっ！サイト知ってるの？お願い！教えて頂戴！」

キュルケがサイトの目前に迫り、サイトは身長差の関係から、キュルケの谷間に目が行くが、彼女の鬼気迫る表情に慌てて答える。

「わかったから離れてくれ！色々しんどいから…谷間とか」

「こんのお…バカ犬う」

「黙っててルイズ！で、どこよ！…！」

「えっと、今朝だけど、シルフィードに乗ってどっか行った。なんか珍しくニコニコしてたぞ？」

「え？……そう…なら良かった。うん…ありがとう二人とも……」

「おっおい！キュルケ？」

「ちょっとアンタ大丈夫なお？ねえ！？」

キュルケは肩を落とし、とぼとぼと自分の部屋へと帰っていった。

「……何なのかしら？」

「ちゅあ……」

全く意味のわからない二人だった。

時間は若干巻き戻る。タバサは太陽が昇ると同時にベッドから飛び起きた。

「……………行かなきゃ」

タバサは顔も洗わず、寝癖もそのままに　彼女の頭の頭頂部には尖った毛の固まりが放射状に伸びている。所謂アホ毛である。

「……………行かなきゃ」

再度つぶやいたタバサは、部屋から弾かれるように飛び出した。ス  
タタタタ……………と。寝間着のまま。

タバサは生徒達の朝食をせっせと調理する料理人達がひしめく厨房  
に飛び込んだ。寝間着のまま。アホ毛のままである。

ただならぬタバサの様子に、厨房で働く使用人達は固まっていた。  
下手な真似をしたら自分達はただじゃ済まない。タバサにはそう思  
わせるオーラがあった。

「ぎゅ……………」

マルトーの唾を飲み込む音が響く。それほど今の厨房は緊迫感に苛  
まれていたのだ。

「あつ…あの…ミス・タバサ?…どうかなさいましたか?…ひいっ  
!…!ごめんなさいごめんなさい……」

勇気を振り絞り、シエスタが状況を打破しようとタバサに声を掛けるが、ギンツ!…!と擬音がしそうな睨みに怯んでしまった。

それほどタバサの睨みは凄かった。鬼気迫るとはこの状態を形容する言葉である。市川 老蔵も真つ青の「にらみ」である。「よつ! オルレアン屋ツ!…」と呼び掛けなくなる程の気合いである。

「……出かけるので簡単なお弁当が欲しい」

「えっ?」

使用人達は一齐に崩れ落ちた。

マルトーは涙を流しながら、手早くパンにローストビーフとはしばみ草を挟んだサンドイッチを拵え、タバサに渡した。

タバサはいい笑顔でマルトーにサムズアップすると、厨房から駆け出していった。

マルトーを始め、使用人一同は思った。青い髪のお嬢ちゃんには逆

らっちゃんなんねえ……命に関わると。

タバサは手早く着替えると、弁当を片手に使い魔達のたむろする小屋に赴き、すやすや眠るシルフィードに自慢の杖の殴打で叩き起しました。

「いたいたいなのね！お姉さま。シルフィはまだ眠いのね！」

「……トリスタニアまで。急いで」

「シルフィはご飯も食べてないのね！」

「……急いで」

「横暴なのねっ！竜権侵害なの……ひぎい……いたい……いたい……！」

「……急いで」

「はいなのね……きゅい……」

滝のような涙を流すシルフィードに跨り、タバサはトリスタニアに向かった。

たどり着いた先はブルドンネ街、万屋ハインリヒの玄関だった。

「……………」

どうやら緊張しているようだ。頬が上気し、眼鏡が若干曇り気味である。

ちりんちりん……

呼び鈴がなる。

「はいはい。どちら様ですか？」

扉が勢いよく開けられ、中から出て来たのは セバスチャンという名のハインリヒの使用人だった。

「……………あなた誰」

「えっ……万屋の受付……ですが……」

「……あなたじゃ無い。ハインリヒ侯に会いたい。わたしはその為に来た」

タバサは無表情に言う。セバスチャンは居心地が悪そうだったが、彼は職務を必ず全うする人間だった。幸か不幸かは別として。

「えっと、とりあえずお入りください。玄関先では失礼なので、中でお話を聞かせてください」

「……分かった」

タバサの相変わらずの無愛想さに、内心辟易するセバスチャンであったが、敬愛するハインリヒ侯の為に気合いを入れ直したのだった。

タバサを応接に案内し、暖かい紅茶を用意する。お茶請けのクッキ―を添えた。

因みにこのセバスチャンという男は、ハインリヒが魔戒騎士としての職務を遂行していた時、ある酒場のマスターがホラーに憑依された。

店内の従業員や客はほぼマスターに喰われた。ハインリヒはそのホ

ラーを処分したのだが、カウンターの下で震えながら、隠れていたのがセバスチャンなのだ。

唯一の生存者であり、ハインリヒの鎧姿を目撃した一般人でもあった。ハインリヒは彼の扱いを手に余したが、セバスチャンは命の恩人であり、同時に今をときめく黄金侯の正体を見て、一気にハインリヒを心酔してしまった。

以降、勝手にハインリヒを主人と崇め、毎日ハインリヒ宅に押し掛けた。追い返しても追い返しても懲りないセバスチャンに、最後はハインリヒが根負けし、トリスタニア別邸の執事として雇ったのだ。

セバスチャンは三十半ばの働き盛りで、バーテンを生業としていた経験なのか、とにかく細かい事に気が回るのだ。割と大雑把なハインリヒであるが、セバスチャンはそんな彼には拾い物だったと言えよう。

## 閑話休題

「私、ハインリヒ侯の執事を任されておりませすセバスチャンと申します。それであなた様のお名前と、依頼内容を聞かせて戴きたいのです。何故なら、ハインリヒ侯は身一つでございますし、現在は領主としての責任があります。ですので、私の方で依頼内容を吟味し、振り分けた物をハインリヒ侯に繋ぐのです。どうか、ご理解戴きたい」

「……私はタバサ。依頼内容は言えない」

タバサは苦悶の表情をし、うつむいた。そんなタバサを見て、セバスチャンはタバサが何やら訳ありであると察した。

「ミス・タバサ、主人とは面識がございました？」

コクツ　タバサが無表情で頷く。

「わかりました。では、暫くお待ち下さい。只今ハインリヒ侯にツナギをつけます故」

セバスチャンは素早く立ち上がり、歩きですが、タバサに袖を引かれた。

「なにか？」

「……………このお菓子がまだあれば欲しい」

セバスチャンは堪え切れず、吹き出してしまった。

セバスチャンはド・オルニエールへと鼻を飛ばす。『ミス・タバサ、事務所にて待つ。連絡されたし』

三時間も経つただろうか、屋敷の上で大きな音がすると、階段からハインリヒが降りてきた。

「ようタバサ。待たせたな。セバスチャン、茶を入れたら呼ぶまで下がれ」

「はっ」

いつもの白いロングコートを身にまとったハインリヒが、タバサの真向かいに腰を下ろした。

「タバサ、どうしたんだ？ いったい」

ハインリヒがタバサを見据える。その表情にいつものおちゃらけた雰囲気はなく、厳しいものだ。

「……あなたに依頼をしたい」

「それは  
」

ハインリヒは立ち上がり、窓へと歩いていき、トリスタニアの景色を眺める。

「母親の事か？それとも……ジョセフの暗殺か？」

ハインリヒは敢えて”暗殺”という表現を使った。復讐という言葉で歪曲されているが、やる事はただの殺人である。

殺害する事自体は、ハインリヒにとって容易い事である。相手が虚無だろうが、エルフだろうが所詮はただの生き物に過ぎない。

ならば、魔法が全てだという幻想を押し折ればすむ話である。加速で速く動こうが、魔戒騎士にはスローモーシヨンに過ぎない。カウンターが驚異でも、ソウルメタルの鎧は貫けない。

だが、復讐はやっかいだ。復讐は復讐の連鎖を産み、たくさんの生命を背負わなければならぬのだ。だからハインリヒは、言葉の裏にその覚悟がお前にあるのかと匂わせたのだ。

いつまでも続く修羅の道に行く覚悟が。

「……わからない。母様は助けたい。だけど、復讐をすべきかはわからない。心には怒りが今もある。だけど……復讐をすれば、イザベラがわたしになる。だから迷っている」

ぼむっ……

ハインリヒの手がタバサの青く猫の毛のような柔らかい髪をくしゃっと撫でた。

「それでいい。悩めば良いんだ。お前の答えはお前だけのものだ。タバサ、来週ガリアに行く。お前はおれの従者としてついてこい」

はっとタバサは顔を上げた。その目は真っ直ぐハインリヒを見つめた。瞳には困惑と期待が揺らいでいた。

「……何をしに行くの？」

「とりあえず、オルレアン公夫人を治す。まあ十分もあれば終わる。後は王宮に乗り込んで、ジョセフにOHANASHIだな」

タバサは弾かれたように立ち上がり、ハインリヒに縋りつく。

「母様は…母様は治るの!？」

「治るな。つか、精神が壊れたのだろうか？毒で。それに比べたらカトレアの方が重病だった。なら治らない道理は無いな」

ハインリヒは事も無げに言う。タバサの頭を撫でながら。

「うつ…うつ…母様を…助けてください…お願いします…何でもしますから…」

タバサはハインリヒの胸に顔を埋めていた。涙を見せるのを嫌ったのだろう。ただ、肩を震わせて嗚咽する。小さな少女が背負うには重た過ぎる荷物をタバサは今、少しだけ降ろしたのだ。まさしく、魂の慟哭だった。

「落ち着いたかい？」

コクリとタバサは頷き肯定する。頬が赤いのは照れているらしい。

「王宮に…どうやって侵入するの？あそこは警戒が厳重。あなたの身が危ない」

「堂々と正門から入るよ。邪魔なやつは死なないまでも苦痛を味わって貰うだけさ。まあ、心配ないさ。お前はただ付いてくるだけでいい」

「わかった。あなたを信じてる。……でも、報酬を払える宛てがわたしには無い……」

にやあ……ハインリヒが邪悪な笑みを浮かべる。

「タバサは何でもするって言ったよなあ？だから、俺の言う事を一つ、聞いてもらうことにする。だが、今は言わない」

「……ずっとずるい。今言うべき。絶対」

「くくくっ……タバサが慌てる。これは貴重なものが見れたなあ  
っはっは」

「……悪趣味」

「何とでも言え！わっはっはっは！」

「……いじわる。……（でも、あなたが好き）」

「ん？なんか言ったか？」

「何も言っていない。気のせい」

「そっか。なあタバサ、飯食いに行くか？」

「！……是非行きたい」

「よしよし。おいセバスチャン、スカロンの店に行くから、馬車の手配頼むよ」

「はっ、ただいま！」

「（……これはデート。嬉しい。セバスチャン邪魔）」

「タバサ何かいったか？」

「……気のせい」

こうしてタバサの依頼は成ったのだった。

トリステイン魔法学院、キュルケの部屋

「タバサったらどこに行ったのかしら？……なんか寂しいわ」

キュルケの溜息が闇に溶けた。今宵の双月はいつもより輝いていたのは気のせいだろうか？

?? FLY me to the moon ) In other words

この後は、二、三話サイドストーリーを挟むかもしれない。

?? Tumbling Dice さあ乗るか反るか、んなもん振ってみな

ド・オルニエール、ハインリヒ邸

会議室にハイン一味とタバサが座っている。上座に座るハインリヒ以外は、皆一様に暗い表情である。

「あなた、少し無謀かと思えますわ。いくらなんでもタバサちゃんと二人で乗り込むなんて……」

カトレアの顔色は蒼白だった。ハインリヒがタバサを屋敷につれ帰り、皆を集めて言った言葉は、「ちよっとガリアの王様に用があるから、タバサと行ってくるわ」だった。

まるで近所の公園に散歩に行くという軽い調子で、しかもヘラヘラと笑いながら言い放ったハインリヒだった。

最初妻たちは、「ふーん、そうなんだ？」等と返事したもののだが、言葉の意味が徐々に浸透し、彼女達は一瞬顔を見合せ、そして叫んだ。悲鳴は完璧なユニゾンだった。

「まあ、普通に考えたらそういう反応になるだろうなあ……はははは」

ハインリヒは苦笑いを漏らすが、妻たちにしたらたまったもんじゃ  
ないだろう。

「ははじゃないわ！ハイン！あなた一人の身体じゃないのよ？心  
配ばかりさせないでよ……」

「ふふっ…エレンは怒った顔も綺麗だなあ？だけど笑った方が可愛  
いぞ？ほーら笑って笑って」

「いひゃい…にゃにひゆるによ…ひゃかさにゃいれ！！（痛い、何  
するのよ。茶化さないで）」

ハインリヒはエレンの頬つぺたを引っ張りながらニヤニヤしている。

「……とても羨ましい」

「あの…あのあの…わたしはもっと痛いのをお願いしましゅ…」

エレン以外の発言が誰かは推して知るべし。

「ハイン、私だって貴方が強いって信じてるよ。だけど、やっぱり

私達は心配してしまうよ。ハインに何かあったらって考えたら、気持ちが悪いわさるんだよ？ 貴方は私に異質な食べ物をお教わって、ただの平民のままじゃ知る事も出来ない世界を見せてくれたよ。でも、貴方が戦いに行ったら、魔法も使えない私はただ待つだけしかできないのよ……それは、辛いんだからね！」

「わたしもハインお兄さんに外の世界を見せてもらったわ。ハーフェルフのわたしに…… 凄く嬉しかったけど、ハインお兄さんが居なくなったら意味なんか無いよ……」

ジェシカもティファニアも目に涙を浮かべながら、その複雑な心情を吐露する。ジェシカは平民で、抗えない立場である貴族にてごめにされかけた。ティファニアはその血筋は王族であるが、ハーフェルフという存在は禁忌だったために森で隠遁生活を強いられていた。

どちらもハインリヒに救われなければ、今どうなっていたかは分からないのだ。少なくとも幸せでは無かったであろう。

「ハイン…… あんたの事は信頼してるよ。でもね、蚊帳の外は寂しいんだよ。例え前線で戦えなくてもね。それは分かっておくれよ……」

マチルダもハインリヒに救われたが、自身が盗賊であったし、自らも戦う瞬間もあった。だからこそハインリヒの気持ちは分かる。だが、相手はガリア王ジョセフ。下手をすれば一國を相手しなければならぬ。そこに自分が同行しても、足手まといになるのは目に見えている。マチルダは役に立てない自分が情けなかった。

「……………」

ハインリヒは何を思っているのか？ただ今は無言を貫き、静かに目を閉じていた。

「少しいいかね？ハイン君。話はわかったが、君は私に約束出来るかね？無事に帰ることを。そして、私の元生徒を無傷で連れ帰ることを」

コルベールは静かに立ち上がり、後ろで手を組んだままハインリヒに問い掛ける。厳しい視線を向けながら。コルベールは自身の過去の経験を未だ後悔している。ただ、その暗黒から抜け出す切っ掛けをくれたのはハインリヒである。

ハインリヒも立ち上がり、コルベールそして、妻たちを見据えた。微笑みを浮かべながら。

「まっ、心配するなどは言わないさ。実はこの件はな、ジエームス一世とマザリーニから打診のあった案件なのさ。まあ、タバサの依頼はあれだ……お母さんの治療の部分だけだな。後はやんごとないオジサマの悪巧みってやつだわ。だがな」

突然、言葉の途中でハインの雰囲気が変わった。それまでのふわふわした雰囲気は消え失せ、ハインリヒの身体から闘気とも言えるプレッシャーを発している。

「あのオッサンは誰かがお灸を据えなければならぬ。虚無だかゴムだか知らないが、それで全て支配出来ると思つてやがる。ふざけるなッ！ハルケギニアはオッサンの箱庭じゃねえんだッ！気に入らなきゃ好きに変えていい代物じゃねえんだッ！！そこにや人が生きてんだ！！沢山の人間の幸せがそこにあるんだよ！気にいらねえ……気に入らねえよ！！俺が王様なら女なんかより取り見取りじゃねえか！！そんな羨ましいポジションにいなから……くうくうあのオッサンぶん殴る……口から手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わすッ！！何が「余は泣けぬ（キリッ）」だよ！！俺がボッコボコにして泣かしてやるわッ！！ワハハハ」

しーん……まさにその表現が正しいだろう。最初はみな一様に、「ハイン……まさに英雄ね。私達が出来ない事をさらつとやってのける……そこに痺れる憧れるウ」という雰囲気だった。だが、ハインリヒが熱っぽく語れば語る程、コルベールや妻たちの温度は冷えていった。今は氷点下まで達しているだろう。

「あなた？その前に私がボッコボコにしてあげますわ」

「ハイン、解剖するから研究所行きましょ？ジャンも手伝つてね？」

「……任せ給えエレオノール。まだ使ったことが無い試薬があるんだ。家畜用だがね？」

「私は焼くわ。鉄板で。焼きそばが可哀想だけど仕方ないわね」

「恨めしい……自分に「忘却」を掛けられない事が恨めしいです。先程のお兄さんを忘れた……い」

「あたし……新しい対人用ゴーレムの実験がしたかったんだ。少し研究したのさ。握力×体重×速度〃破壊力……今なら学院の宝物庫の壁すら容易いわ……」

「あのっ……あのあの……シエフィはいい子だから………どんなご主人さまでも感じるから……大丈夫でしゅ……放置プレイでも下着が 18禁にて自粛」

「調子に乗ってすみませんでしたあぁッ!！」

ハインリヒは素晴らしい土下座を見せた。姿勢、角度、声の張り、どれをとっても極上の逸品と言えた。ただ、一味の怒りを軟らげるには至らなかったが。

ボコツ…

ゴキツ…

メキヨ…

グチュツ…

ドサツ…

「もうだめ……」

ハインリヒは一味のタコ殴りで盛大に崩れ落ちた。まさにボロ雑巾。鎧を召喚して防御しようにも、よく見たらご丁寧に牙狼剣はシエフイールドに奪われていた。

「ごっご主人さま…あの…わたしが治療するでしゅ…舌で」

ハインリヒに味方は居なかったのだ。

「……………和ませようと思ったただけなのに……………」

「……………無様。激しく反省するべき」

そんなこんなで有耶無耶にハインリヒとタバサのガリア行きが決定した。

もつとも、実際の説得には下半身のOHANASHIを要求され、全員動けなくするまで三日を要し、コルベールには地球から植毛の技術書入手を約束させられた。

尚、タバサは事あるごとにハインリヒと妻たちがハツスルしてる寢室に乱入しようとしたが、コルベールの水際作戦により辛うじて阻止され、事なきを得た。

ハインリヒ宅深夜、ハインは寝てしまったが、ジェシカとカトレアはリビングでワインを楽しんでいた。

タルブ産の年代物はなかなか評判がよく、ジェシカはシエスタに頼んで、村から直接仕入れているのだ。

シエスタの両親や、その仲間たちは、金払いのいいハイソな一味を歓迎しており、領主を通さずに売買しているのだ。

#### 閑話休題

カトレアとジェシカは、商会の今後について打ち合わせをしていた。

革張りの長椅子に並んで座り、何やら書類を拡げて議論しているようだ。

「タバサちゃん？立ってないでこっちいらっしやいな？貴女も飲むといいわ？気持ちが悪く着くから」

いつの間にか彼女達の後ろには、タバサが立っていた。学院の制服のまま、スカートの裾を握りしめ、顔を伏せている。

「…………ごめんなさい。彼に危険な依頼をしてごめんなさい」

哀しげな声で、呟くようにタバサは言う。ジェシカとカトリアはにっこりと頷きあった。

「こっちおいでってタバサちゃん」

「はやくいらっしやいな、お話も出来ないでしょ？」

「……あっ…あう…」

おずおずとタバサは彼女達の前にやってきた。顔を伏せたままではあるが。

タバサは後悔しているのだ。彼を愛する妻たちの心配する姿までは想像していなかったからだ。

「あの……ごめ…ひゃあっ！！」

どんよりとしていくタバサを、ジェシカとカトリアをその手を引っ張り、自分たちの間に座らせた。

「タバサちゃん？気に病んでるんでしょう？ふふふ…馬鹿ねえ？気にしなくてもいいのよ」

「そうそう、あいつはいつもああだから。気にしたら負けなのよ。だからたまにはああして小言を言っただけなのよ」

二人はタバサの頭や背中を優しく撫でながら、優しく諭すように言う。

「……でも、私は自分の望みしか考えて」

「いいの。それよりあなた、ハインが好きなんでしょう?」

「うんうん。私もそう思った」

「っ!?!……あの……」

カトレアはタバサを胸に抱きしめ、母親のように語り掛ける。

「好きなら好きでいいのよ 私達はそれぞれの思いでハインを愛しているの。それは自由な事だし、誰にも止められないわ。ねっ? ジェシカ」

ジェシカはカトレアからタバサを強引に奪い、やはり豊かな胸に抱き寄せた。タバサはあうあう言っているが、二人はどうやら小さな

タバサを気に入ったらしい。奪われたカトレアは、恨めしげにジェシカを睨んだ。

「うん。だってさ、ハインの最初の恋人は私なんだよ？ だけどカトレアがきて、エレオノールがきて、マチルダがきて… 後はもうわらわらわらわら… マヒしちゃったわ？ あはは。だから今さら一人増えたってねえ？」

「それに… タバサ可愛いし、抱き枕にしたいわ」

「え… 私もタバサ欲しい…」

「ダメよ！ こんな可愛い生き物は渡さないわ」

「おーぼーよ！ 断固拒否！ 国家権力粉碎！！！」

タバサはきゃいきゃいと戯れる二人の間で、暖かい気持ちに包まれていた。家族ってこういう感じなのかしら？ と思った。

「あら？ タバサが笑ってるわ！ 可愛い」

「やーん！ 今日はタバサと寝る…」

「またもやタバサの奪い合いを繰り広げる二人だった。タバサはされるがままになっていたが、気が付いたら声を出して笑っていた。」

「うふっ…あはは」

「そうやって、毎日笑えるようにしてくれるわ、ハインなら」

「そうね。だからタバサは全部終わったら、お母様と帰っておいで？ここに。そして、ハインの妻の一人になんなさい。貴方なら歓迎よ！」

二人の優しさに、顔は笑顔のまま、タバサは一粒だけ涙をこぼした。

いつの間にか階段に座っていたハインリヒは、黙って様子を見ていたが、やがて寝室に消えた。

「やっぱりあいつらにや叶わねえな……」

優しい妻たちに感謝したハインリヒだった。

そして翌朝、まだ暗いうちにハインとタバサはシルフィードに乗り、

ガリアとトリステインの国境の地、オルレアンへと飛び立ったのだ。  
った。

因みに、昨晚どちらがタバサを抱き枕にするかは決着がつかず、結局二人に同じ寝室に向かい、両側から抱き枕にされて眠ったタバサだった。

「ん？タバサどうした？首がおかしいのか？」

しきりに首を動かすタバサが気になったハインリヒ

「……首がいたい。とても」

「おいおい大丈夫か？」

「大丈夫。気にしないで。……………くすっ」

ジェシカとカトレアに挟まれながら寝たせいで、首を寝違えたようだ。だけど……………何となく幸せなタバサだった。

## 次回予告

『もう完全にモブ扱いのザルバだッ！！だが、あまり気にしていない。無能作者に突っ込んだら負けだからな？ 話は変わるが、この作者、タバサが出る回のタイトルはちゃんと考えているよな？これは完全に贋作だな。やはり作者は炉なのかッ！？ ん？…はいはい…え”？…いやすいません…もう言いませんから……コホン…作者は炉ぢやないよ！ さて…次回の - Z E R O - の無責任男は、「ザッ！！サッ！ヒュワッ！！シユシヤシユ！！やるなオルレアン公夫人ッ！！」だ。なんのこっちゃ…』

?? Tumbling Dice さあ乗るか反るか、んなもん振ってみな  
嵐の前の静けさですわ。

ガリア篇が始まると、ハインリヒがこれでもかッ！！ってほど無双  
します。……キュルケどうすっかなあ… 今さら！？

最近ハイン一味はまったりしてますが、ハインリヒはチート主人公  
なのを思い出させてやります。

あ、ノクターンにてジェシカに続き、カトレアの回を投稿しました。  
カトレアさんパネエっす。

良かったら見てあげてね？18歳未満のよい子のみんなは見ちゃダ  
メよ

?? So what? ガリア引つ掻き回し篇?

「思ったんだけどさ?先にリュティスに行かないか?」

ハインリヒが突然言い出した。タバサは無茶だと言わんばかりに目を大きくし、何か言おうとしたが、遮るようにハインリヒは先を続けた。

現在二人は、ド・オルニエールを出立し、オルレアン領へと向かう道中である。タバサの使い魔であるウインドドラゴンの”シルフィード”の背中の上だ。

太陽は既に登り、東の空はまばゆく輝き、微かにカーブを描く地平線が照らされていた。

オルニエールを出立してから、かれこれ30分もたつが、ハインリヒは一度も口を開いてはいない。

タバサもはじめは、自分の腰に手を回して座るハインリヒの体温を感じながら恍惚としていたが、それにしても全く何も話さない彼に首を傾げていた。

そして、冒頭のセリフに繋がるといふ訳だ。

「ちょっと考えたんだが、タバサのお母さんを治すのは、本当に一瞬の事なんだ。だけど、多分お前の家は監視されてるはずだ。何もしないで母上を治療すれば情報は上に伝わるし、排除してもジョセフは怪しみ、確認に人をよこす。ここまではいいか？」

タバサはこくりと頷く。

「それでだ、現状お母さんは監視に留まっているが、危害を加えられはしないという軟禁状態だ。逆に言えば最後に治療しても構わななんだ。だから、全体の安全性を高めるために……頭から潰す」

タバサは驚愕した。計画も何もありません。理屈を抜かせば確かに頭を潰せばいいのだ。けれどそれを実現するには、ガリアの精鋭とジョセフ自身を相手にするという事になる。

ただ、ハインリヒの表情は、これからの闘いに、わくわくしているような笑顔を浮かべていた。タバサはハインリヒの顔を見ていたら、彼なら出来てしまうのではないかと、思えてしまったのだ。

「……あなたは、怖くないの？」

「怖くはないな。魔法が何なのかを知っているからな。後はまあ、俺は負けない」

「負けない？……根拠は？その自信の裏付けはなに」

タバサは不思議なものを見るような目で、ハインリヒを見た。確かにタバサはかつて、彼との学院での邂逅の時、ハインリヒの戦闘能力の高さを知った。

だが、今回の相手は一国の王であり、さらには彼を護衛する精鋭と裏の人間　つまり本来咲かない場所にある花壇が出てくるのだ。タバサが疑うのも無理はないだろう

「自信の裏付け？ねえよ、んなもん。ただ、負ける要素が無いだけさ。独り善がりの孤独な王様如きにはな？まあ、見てな。取り敢えずはお前の上司に逢いに行こうか。美人なんだろう？」

ハインリヒはニヤリと笑った。タバサは思った。憎むべきジョセフより、ハインリヒのほうがよっぽど悪役が似合うのでは？と。

「ああ、何より」

「……何より？」

「万屋ハインリヒは、依頼達成率10割だからな」

そして二人を乗せたシルフィードは、雲海の中に消えていった。

ガリア王国の首都、リュティス。その郊外に森に囲まれた大きな建物がある。それがヴェルサルテイル宮殿、ガリア王国の王宮である。

その一画にある小宮殿、プチ・トロワに彼女はいた。ガリア王女、イザベラ・ド・ガリアである。

彼女は不機嫌だった。何もかもが忌々しいのである。自分を見る目が全て煩わしいのだ。

彼女は口を開かなければ綺麗なのに……とは、イザベラの使用人達の陰口である。

彼女は従姉妹であるシャルロットより、頭ひとつほど高い身長に、艶のあるブルーの髪をセミロングを無造作に垂らしている。そして、白磁のような白い肌に、サファイアのような青い瞳、すらっとした長い手足　紛れもなく、美人である。

だが、イザベラの心の中はいつも曇っているのだ。

ガリア王ジョセフ一世の娘であり、ハルケギニアアの大国、ガリアの王女である。どこからどうみても最高のサラブレッドであるが、父王の二つ名は「無能」である。

曰く、王族なのに魔法を使えない。

曰く、政務を放り出し、チェスに興じる。

曰く、人形を使い戦争ごっこ

あげればキリが無いほどの理由が挙げられる。

イザベラはその父王の遺伝なのか、魔法の才能が低く、コモンマジックすら危うい。

逆に従姉妹のシャルロットは、天才メイジで最年少スクウェアだったオルレアン公の血を色濃く受け継ぎ、既にトライアングルである。

いつも裏ではシャルロットと比べられ、イザベラは卑屈になっていった。父王ですら自分に無関心であり、まともに会話にすらならない。

コンプレックスの塊となったイザベラは、周りに対して攻撃的になり、ヒステリックな言葉を吐くようになった。

誰も必要としないし、誰も信用できない。心には影を落とし、孤独に苛まれた。

そんな中、父王に頼み込み、何か自分に仕事が欲しいと頼んだ際、命じられたのが北花壇騎士団の団長の仕事である。

本来、ガリア王国を象徴する花壇騎士団は、その冠に東、西、南と方位がつく。彼らはガリア王国の剣であり、盾である。

だが、日が当たらず花壇に花が咲かない場所　北を関する騎士団がある。そこは、表沙汰に出来ない裏の仕事……つまり、暗殺、拉

致、裏工作等、隠密性が問われる仕事をこなす集団なのだ。

イザベラはその団長となり、自分の手下である人形達に囲まれ、今日も自分という人間が存在していると主張するために、不機嫌な顔をして仕事に励んでいた。

今日はいつもに増して不機嫌なイザベラであるが、それは、お気に入りの人形である七号の消息が途絶えたからだ。

人形七号　本名はシャルロット・エレヌ・オルレアン…タバサである。

イザベラのお気に入り、それは逆説的な意味においてである。彼女に無いものを全て持っているシャルロットを、危険な任務につかせ、眺め愛でるのである。

その七号が、このところ連絡が取れない。

「誰かいるかい？」

「はっ…」

「エレ……いや、人形七号は最後、どこで消えたんだい？」

「……特に任務には就いていませんでした。ただ、黄金の身边を気にしているという位です。あと、学院からトリスタニアに出掛けたのは確認されてますが、……まかれました。現在の状況は以上です」

「あんな小娘に撒かれるなんて、弛んでるんじゃないのかい！！まあそれはいい……問題は七号の行動が不審だつて事だね。他国に堕ちたか、単純に裏切ったか謎ね。引き続き調査しな」

「……はっ」

物陰から現れた部下との会話を終え、イザベラはため息をつき、執務机に頬杖をついた。

「……エレ、どこ行つたんだい？」

イザベラの呟きが、大理石の天井に吸い込まれた。

ハルケギニア上空

相変わらず空の旅のハインリヒとタバサ……だったが、特に会話も無くなり、まったりしていた。タバサに至っては、ハインリヒの大きな背中を風避けに、お気に入りの本を熟読していた。

「……………暇だ。ああ、暇だなあ……。誰か話し相手はいないかなあ」

わざとらしい大声で呟き、ちらりとタバサを見るハインリヒ　　完  
全にスルーされたようだ。

「むう……………後どのくらいかかるのかなあ？リュティスまで……………なあシルフィード??」

「……………後……………きゅい」

何やら聞こえたが、気のせいなのか？

ハインリヒはニヤリと笑い、懐をこそごそとまさぐりだした。

「おおっ！？何故かこんなところに干し肉がああ！不思議だなあ！食べたいやつがいたら返事しなあ！」

「はあ〜きゅいきゅい……」

「むむっ？何か聞こえた気が？……まっ気のせいだな！じゃあ干し肉は俺が食べよう！もっきゅもっきゅ……うめえ……もっきゅもっきゅ……」

びしゃびしゃとシルフィードから涎と涙が飛び散っている。シルフィードは物欲しそうな視線でチラチラ振り替えるが、ハインリヒは完全に無視している。

「オラっ……お前喋れるんだろう？ああん！？吐いて楽になっちまえよ！故郷の母親が泣いてるぞお！なっ？お前がゲロっち前ばみんな幸せになれんだ……なあ、シルフィードさんよう？おめえが殺ったんだろう？」

ハインリヒはシルフィードの頭をぺちぺち叩きながら、捜査一課の刑事デカのように言った。

「あうあう……旦那あ……わたしは殺りましたあ……ぐすっ……お姉様がいつも杖で殴るから……ずずっ……カツとなったんです……ああん、おかさああん……って何やらせるのね！！喋ったらお姉様に……ひい！？やめるのね！お姉様、わたしは騙され……ぎゃっ！いたい！いたい！いのね！……」

杖を持って忍び寄ったタバサが、シルフィードを容赦なくシバきまわした。それにしてもこの竜、ノリノリである。

「……………喋ったらダメ」

タバサがシルフィードに説教してる後ろで、腹を抱え爆笑してるハインリヒ……………腐れ外道である。

「つか、うちの三匹の火竜も韻竜だからなあ……………まあ、タバサよ？ あんまいじめんなや、可哀想じゃないか、アツハツハ……………」

シルフィードは思った。この男に逆らってはいけないと。

ハルケギニアの空に、タバサの深い溜息とハインリヒの高笑いが吸い込まれた。

ガリア王国リュティス郊外、プチトロワ上空約1000メートル

「タバサ、取り敢えずイザベラの姫さんを人質にしてジョセフに会いに行くからさ？お前、俺が突っ込んでから10分経ったら入ってこいな？」

シルフィードの上に立ち上がったハインリヒは、突然タバサに言い放った。

「分かった、言うとおりにする。あなたも気をつけて。無茶はしないでほしい。シルフィード、降り」

ハインリヒはスツとタバサの唇に人差し指を添えて制した。

「このままでいい。じゃあ打ち合わせ通りにな？CIAO！CIAO！CIAO！」

「「えっ!?!」」

ハインリヒはニヤリと笑うと、真下にダイブした。

タバサは慌てて下を覗くと、豆粒くらいのハインリヒが黄金色に発光した。

プチトロワ前

入口の前で二人の衛兵が警備している。二人はガリア正規軍のユニフォームをまとっているが、れっきとした北花壇騎士団員である。

「しっかし今日も何事もなく1日が終わりましたっ」と

「バカヤロウ、まだ姐さんに報告があんだろが」

「げっ…そっぴや可愛いタバサちゃんの姿が見えないって機嫌悪いもんなあ…ああ嫌だ嫌だ」

「…ったく毎日月のモンきてんじゃねえか？」

「だよな？ヒステリーにも程があるわ。とつとつ男に喰われちまえば大人しくなるのにな？」

「食つヤツが入ればな？俺はごめんだわ、あんな気性の荒い女は…」

…」

「はははっ！違いねえ！」

勤務交替が近いせいか、軽口を叩きあつ衛兵AとBだった。

キイイイイ……ン

「ん？何か聞こえたか？」

「いんや。何も聞こえねえよ？いったいどうし」

ドゴオオンツ！……！！

彼らの目の前で爆発が起こった。プチトロワ前の石畳が何かの衝撃で舞い上がり、砂煙が煙幕のように視界を遮った。

「なっなんだ！敵襲か！！！？」

「おっ落ち着け！警笛を鳴らすんだ！！」

砂煙が徐々に晴れ、その中から現われたのは……

GRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR……

彼らの前には黄金の獅子の姿をした剣士がいた。

魔戒騎士の最高位、牙狼、ここに見ッ！！参ッ！！

「……なんだ貴様！！ここガッアハッ！！」

「くっ……くせもグヘアッ！！！！」

牙狼はいきなり二人に踊りかかり、金色に輝く拳で鳩尾を精確に打ち抜いた。

残像が残るスピードで繰り出された拳は、その速度にソウルメタルの重さが乗せられ、衛兵Aの鳩尾に着弾。その衝撃は、皮下脂肪に激しい波紋を起こし、それはさざ波から荒波となって肝臓と肋間神経を震わせ、そのまま背中へと突き抜けた。

二人は一瞬固まった。何が自分の身体に起こったのか理解できないからだ。だが、次の瞬間、胃が裏返るような違和感を感じ、そして血の混ざった胃液を逆流させて、意識を失った。

『意外と警備が手薄だな』

鎧の中からハイシリヒのくぐもった声が響く。

《まさか攻めてくるなんて思ってたんだろ。それよりハイン、お客さんだぜ？数は…12人だな》

「ヒュー　大歓迎だな。殺す気は無いから牙狼剣は使えないなあ…」

《まあ、人相手にや過ぎた武器さ。さあ頑張りな》

気が付くと牙狼は囲まれていた。正規軍のユニフォームを着たのが7人に、黒づくめの制服が5人。こちらが騎士団の人形と呼ばれるエージェントなのだろう。

円の形に布陣し、牙狼を取り囲んでいる。最初の衛兵は既に片付けられ、全員杖を牙狼に向けていた。

その中のリーダー格と思われる男が一步前に歩み出た。眼光鋭く、油断のない体捌きで牙狼に正対した。

「ここは王族が住まう宮殿である。そうそうにお引き取り願おうか？まあ、取り敢えず話を聞かねばならので、大人しく捕まって貰うかな？」

『北花壇騎士団の本拠地の間違いだろう？俺はイザベラ姫に会いに来た。邪魔するバカは殺す』

重々しい牙狼の声に圧倒され、あたりは静寂に包まれた　だが

「かかれえ！！生死は問わない！！」

リーダーの号令に、一斉に魔法が牙狼に殺到する。ファイアボール、エアカッター、ジャベリン……次々と弾幕のように。

爆発のような轟音が響き、火花、氷片、土塊、旋風……最後にリーダーのカッタートルネードが炸裂した。

「静まれッ！！」

リーダーの制止に隊員達は杖を引いた。

沈黙と共に煙が晴れていった。

「「なっ！！！！」」

「「バカな！！！！」」

そこには無傷の牙狼が立っている。

無敵ッ！！

天下無双ッ！！

まさに一騎当千ッ！！

敵に回った人間にとって、最凶最悪なモンスター、魔戒騎士の最高位、黄金騎士牙狼がここにいたッ！！！！！！

タバサは約束通り、きっちり10分後にプチトロワに降り立った。

何度も任務でここに通った見慣れた場所だった。幾何学的なレリーフの美しい宮殿だった。

だった。そう、過去形だった。大理石で出来た太い柱は何本も折れている。壁も抉れ、石畳には巨大なクレーターがある。まるで戦艦からの砲撃を受けた様子である。美しかった宮殿は、見るも無惨

な姿へと形を変えていた。

入口前にはかなりの人数の人間が横たわっていた。中には見覚えのある人形も混じっていた。

死体に見えるくらい凄惨な姿で倒れており、タバサは思わず生死を確認したが、一応息があるようで安心した。

タバサは奥へ続く廊下を、小走りに進んでいく。奥に進むたびに倒れた人間が増えていく。誰も杖を持っていないのは、ハインリヒが持ち去ったと判断する。実際は薪のように燃やしたのであるが、タバサには分からない。

タバサは走る。イザベラは大丈夫だろうか？と祈りながら。いくらジヨセフが憎くても、自分に辛く当たる嫌な上司でも、やはり死んでは欲しくない。

「……………無事でいて」

プチトロワ内、イザベラの執務室。

先ほどまで何やら騒がしかったが、今は静かである。いや、静かすぎる。

不審に思ったイザベラは、その綺麗な眉を片方上げ、思案気な顔をした。

「誰かあるか！」

返事はない。

「おい！ふざけてないで誰か来ておくれ」

静寂

何か異変があつらしいと、イザベラはここで漸く気が付いた。静か過ぎる静寂は、人の恐怖を煽る。

「いつ…いつたい何だつて言つんだい……」

イザベラは忙しなく部屋の中を歩き回るが、恐怖の為、ドアを開けて外を確認する事が出来ない。

ガタンッ！！

その時突然扉が開かれ、片手に細身の赤い鞘の長剣を持ち、白いロングコートを身に纏った長身の男が入ってきた。

イザベラは整った顔だが、全く表情を消し去っている男を本能的に警戒した。頭の中で警報が鳴りまくっている。

「…アンタ、誰だい？あつアタシを殺しにきた刺客かいつ！？なっ…なんだい！近寄るんじゃない…ひゃあー！」

その男　ハインリヒは、つかつかとイザベラに歩み寄り、彼女の襟の後ろを掴んで顔の高さまで持ち上げた。所謂、猫持ち状態であった。

「につひつひ…王女様つかまえた」

「ふえっ!？」

無表情で、まるで暗殺者の様だったハインリヒが、突然ニカツと笑った。

ハインリヒはじーっとイザベラを見つめた。

「なっ…なんだい!？」

「むう…タバサに似てなくもないが、評判通りの美人だな。うんう

ん…クンクン……薔薇か…使ってる香水もセンスがいい。お前にピツタリだ！」

「はあっ!?!」

イザベラはポカンとしている。明らかに押し入ってきた賊であるハインリヒだが、王女である彼女をぞんざいに扱い、あまつさえいい女だと宣ったのだ。恐怖は霧散し、なんだか馬鹿らしくなったイザベラだった。

バタンツ!!!

「ヒイイイ!?!」

再度扉が乱暴に開かれ、血相を変えたタバサが飛び込んできた。

「ハイン、殺しちゃダメツ!!!」

「え?」

「え?」

シーン……

「いや、殺してないし殺す気ないし……」

タバサはよく見た。ハインリヒがいる……うんうん……襟の後ろを掴まかれ、プラーンと浮いてるイザベラ……なるほど……なんという間抜けな格好……

「……………プツ」

タバサは顔を逸らして肩を小刻みに揺らした。

「なあっ！アンタっ！？行方をくらましてたんじゃ！ってかアンタ！いつまで持ち上げてんだい！いい加減下ろしなさいよ！ってかエレ……人形7号！笑うならいっそ声出して笑いなさいよッ！！」

未だぶら下げられてるイザベラが、顔を真っ赤にし、足をバタバタしながら暴れ叫んだ。

「え〜ヤダ。なんか可愛いからこのまま持ち帰りたいもん」

「もん じゃないよもん じゃ！！ええい H A N A S E E！！」

「しょうがないなあ……ポイツ」

ぶら下げた状態からハイソリヒは手を離した。イザベラはそのままドスンと尻から床に落ちた。

「ひぎい！？」

「……プツ……クヒツ……バンバン」

床に突っ伏し、何やら地面をバンバン叩きながら震えているタバサ。何げに失礼である。

結構な高さから落とされ、彼女の可愛らしい（であろう）菊の門に激痛が走った。涙を滲ませながらのたうち回るイザベラ王女だった。

「That's enough！！おふぎはココまでだお嬢さん達！！」

一番ふざけてるのはお前じゃないかと思った二人の娘だったが、先

に進まないのでも本意ながらハインリヒの話を書くことにした王族二人だった。

「イザベラ王女、お前には危害を加えないが、ジョセフのおっさんのところに案内してもらおうわ」

今までのふざけた態度は鳴りを潜め、軽く殺気を放ち、冷酷な表情のハインリヒは、命令とも言える口調で言い放った。

「なんでアタシがそんな事しなきゃなんないんだい？」

恐怖に震えながらも、少しだけ残った彼女のプライドが、彼女に強気なセリフを言わせた。虚勢　それはイザベラを今まで守ってきた鎧だからだ。

「お前に拒否権は一切無い。俺はジョセフに説教しにきたんだ。だが、ジョセフに面識は無いし、何より、ガリア軍が登場したら、流石に殺さないは無事に済まないしなあ。俺、あんま殺したくないんだよ。だからお前に盾になつてもらおうわ。ああ、因みにこの宮殿のお前の手下は数日は目え覚まさないからな？」

ハインリヒの一方的な通達に、イザベラは俯き、そしてぺたりと座り込んだ。王女に対して全く動じず、理不尽な命令を突き付けるこの男を虚ろに見上げて。

イザベラは思う、何故自分がこんな目に遭わなきゃならないのか？  
アタシはただ誰かに認められたいだけだったのに……この男はまるで……あの父親みたいじゃないか……

「……………だよ……………」

「んん？」

ひくひくと肩を震わせたイザベラが何かを呟いた。

「嫌だよっ！なんでアタシに命令するのさっ！？アタシがあんたに何かしたのかい！！……………ひぐっ……………いつもいつもいつもみんなしてアタシを無視して！エっ……………エレー又だつてアタシを馬鹿にしてんだろっつ！！父様だつて使用人だつてっ！！……………ぐすっ……………誰もアタシを必要としないッ！！……………ズズッ……………っきらい……………みんなだいつキライ！！もういいっ！アタシなんか生きてても仕方ないんだ！アンタ強いんだろ？だつたら殺しなさいよッ！！……………殺せっ！！……………殺せエエエッ！！……………ゲホッゲホッ……………ワアアアアン……………もう嫌だああ……………」

イザベラは堰を切ったように泣き喚き、大理石の冷たい床に倒れこんだ。タバサは啞然としてイザベラを見ていた。

タバサは信じられない思いでいっぱいだった。あの強気で意地の悪

いイザベラ……厳しい任務で私を追い込むイザベラ……だが、今のイザベラは弱々しい少女の様だった。

だが、タバサにはこういふ彼女に見覚えがあつた。それは遠い昔に思える懐かしい記憶の中に。彼女の父親、シャルルが生きていたあの頃だ。兄弟王子の父王も健在だった。みんな幸せそうにしていた。イザベラは、タバサをエレーヌ、エレーヌと言いながら可愛がっていた。

慟哭しながら伏せるイザベラを見下ろしながら、タバサは昔を懐かしんだ。そして、彼女も彼女で暗黒の中にいるのだと理解した。ただ、長年の確執のせいか、イザベラを抱き締めたい衝動に駆られても、足が前に出なかった。

タバサは齒痒くて、唇を噛んで立ち尽くした。

「……………えっ!？」

突然視界が上に移動したイザベラは、一瞬何が起きたか理解出来なかった。だが、何か暖かいものに包まれたのがわかった。

ハインリヒがイザベラを抱き上げたのだ。お姫様抱っこの体勢で持

ち上げ、そして抱いたまま椅子に座った。自動的にイザベラの顔はハインリヒの胸に収まる形に落ち着いた。

ハインリヒが黙ってイザベラを撫でる。背中を、頭を、優しく、多分父親のように。

イザベラは心地よさに安堵し、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔をハインリヒに擦り付けた。

タバサはそんな二人を綺麗だなと感じた。そこには男女のいやらしさは無く、ただ慈愛でイザベラを包み込む優しい大人がいるだけだからだ。

「誰もお前を無視はしてない。ただ、ジョセフに会いたただけだ。イザベラはイザベラだし、王女かもしれないが、俺にはただの弱々しい娘にしか見えないよ。確かにお前さんにや色々あるんだろうさ。ガリア王家は波瀾万丈らしいからな?……今回はタバサのケリをつけにジョセフに会うが、別に殺しはしないよ、多分。それに、タバサとはマブダチなんだ。だから従姉妹のお前も俺のマブダチでいいじゃない。俺はお前を無視しないよ」

ハインリヒはイザベラに優しく諭すように言う。

「……マブダチってなんだい?」

「マブダチってな、俺の国では親友とか大事な友達とか……まあそんな意味さ。俺はマブダチがなんかあったら駆け付けけるさ。だからお前も辛かったり、助けて欲しかったら俺を呼べばいいんだ。イザベラ？卑屈には絶対になるな。必ずお前を見ている奴がいるからな。ほら、お前の後ろにもな？」

「へっ？」

ハインリヒはイザベラを優しく下ろした。イザベラは少し残念そうな顔をしたが、ハインに背中を押され振り返った。

そこには無表情だが、どこか優しくなタバサ　いや、シャルロットがいた。

「あっエレーヌ……っ!？」

小さなシャルロットが、イザベラに駆け寄り抱き締めた。

「……あなたは、自分を責めない方が良い。私は別に貴方が憎い訳じゃない」

「でも……アタシはアンタに嫉妬して、意地悪ばかりしてしまった

……。何一つアンタに勝てず、周りにちやほやされるアンタを憎んだ……アンタの方が辛いのに……」

「……もういい。過ぎた事。父達の確執で私達が憎みあう必要はない。数少ない肉親なのだから」

「エレーヌ……ああ、エレーヌ……許しておくれ……アタシもアンタが大好きなんだ……」

ひしつと抱き合う美しき従姉妹の二人。ハインリヒは眼福眼福と目を細めていた。我が妻たちのむせ返るような百合プレイも悪くないが、無垢な美少女が抱き合う姿もよいではないか……

「イザベラ!!」

ハインリヒが突然叫んだ。

「なっなんだい？」

先ほど抱き締められた気恥ずかしさから、若干どもるイザベラだった。

「お前がタバサに勝つてるところがあるぞ!!!それも圧倒的にだ!

！それはなあ……おっぱツ！？痛い痛いッ！！タバサッ！！マジでその杖は鈍……ひぎい！！……ちよっ……マジで……死ぬっ……イザベラ笑ってないで助けガハツツ！！」

とても失礼な事を言おうとしたハインリヒに、顔を真っ赤にしたタバサが、渾身の力でハインリヒを殴打する。最後に某暴れん坊のようになり「成敗ッ！！」と叫びそうな勢いで。

ハインリヒの情けない姿と、シャルロットの意外な姿に、腹を抱えて爆笑するイザベラだった。これほど笑った記憶は最近無かったと考えるながら……

「……取り乱してすまなかつたね。しかし、ハインリヒと？アంతとんでもない化け物だねえ……うちの連中使い物ならないじゃないか……まあ、とりあえずハインリヒとエレヌ、グラントロワまで案内するよ。何考えてんだか知らないけど、出来れば殺さないで欲しい」

イザベラは平静に戻り、王女の威厳を取り戻した。そして、ハイン

リヒ達の望みを肯定した。

「とりあえずは殺さない。まあお前も見てれば良い。本当に説教するだけだからさ」

「まあいいさ。エレーヌ、あんたのケジメ、ちゃんとつくといいね」

「ありがとうイザベラ。私も王の話を知りたいだけ。母様はハインリヒが治せるし、王の死迄は望まない。ただ、話を聞いて、父様が何故死ななきゃいけなかったのか知りたい」

イザベラとシャルロットは互に見つめあった。そこに憎しみはもう存在していなかった。

プチトロワが少し優しい雰囲気にも包まれたのだった……

「……この胸はステータス。それは譲れない」

## 次回予告

『いやあ、久しぶりに暴れたな。やはり俺が登場しないと？しまらねえだろうが。さあ今回からしばらくガリアひっかき回し篇突入だ。まあ今までまったりしすぎたからな。さて、次回の - Z E R O - の無責任男は、「こう見えて余って45歳なのよ。わかる？この若々しい俺の素晴らしさ。っていうか、髭そったらマジばねえよ？いや、そらないけどね？シャイだから」だ。必ず読めよな！』

?? ? So What? ガリマ引っ掻き回し篇? (後書き)

イザベラかぁ……むっ……

?? So what? ガリマ引っ掻き回し篇? (前書き)

ああ難産だった……

?? So what? ガリア引つ掻き回し篇?

大宮殿グラントロワでは、人が慌ただしく動いていた。というのは、先程凄まじい轟音が響き、そしてプチトロワが半壊したからだ。

何者かの襲撃であるとか、内乱発生であるとか不確かな情報が錯綜し、内部は混乱していた。

だが、この宮殿の主、ガリア王ジョセフは何もするなと号令を出した。敵の姿も確認出来ないのに、狂気の沙汰であるが、誰しもこの王に逆らえはしない。

ガリア王ジョセフ、御年45歳の紳士然とした美男である。無能を二つ名にし、やることなすこと狂っている。というのが、彼のステレオタイプになっている。

だが、彼は王である。

王は無能ではなれないし、成れたとしても傀儡にされるのがオチである。ならば、何故彼が王なのか?それは、誰よりも彼が王たる資質に恵まれているからなのだ。

宮殿に勤める者の統一したジョセフ王の印象。それは、彼に見つめられると全て見透かされた気持ちになる。である。

心の中の本音とは、通常は人に覗かれたくはない。本音を隠すから

こそ人は他人と関わっていけないのだ。そこが明け透けなら、他人が怖くて仕方ないだろう。

想像してみしてほしい。あなたの目の前に、あなたの意中の人があったとしよう。そしてあなたは、彼または彼女の顔を見て、思わず思い浮かべてしまった。『自分の欲望のままに相手とセックスしたい』と。あなたは相手との行為を事細かに想像してしまう。それが全て相手に垂れ流しになっていたら？

多分あなたは彼または彼女に不快に思われ、下手すると拒絶されるのだ。

だから誰しもジョセフ王を恐れ、萎縮してしまうのだ。

その王が何もするなというのだから、誰しも了承するしかないのである。

ジョセフ王の居室、バルコニーに続く巨大な窓は開け放たれ、月明かりが部屋の中を淡く照らす。

この部屋の主である、ガリア王ジョセフは、巨大なチェス盤の前に座っている。

「クツクツク……客人よ、さつさと入ってきたらどうだ？」

チェス盤に向かい、次の手を考えつつ、ジョセフは虚空を見つめながら呟いた。

「いやあ、なんか悪いね？ 氣い使って貰っちゃって？ まあ手土産つきだ、許してほしいなあ」

ジョセフの居室の開け放たれた扉の陰から、ハインとイザベラ、シャルロットが入ってきた。ハインはニヤニヤと薄い笑みを浮かべ、イザベラは緊張した面持ち、シャルロットは憎悪を顔に滲ませていた。

「ふふふ、そなたが有名な黄金、ハインリヒ侯か。噂はかねがね伺っております。こうして対面できて嬉しい。余はガリア王ジョセフ一世だ。まあ無能の方が有名だがな？ クツクツク……」

ジョセフはハインリヒを見つめる。愉快で仕方がないという表情で。

「ハインリヒ・オルニエール・サウスゴータ侯爵です。ってか、アントが無能なら、ハルケギニアに有能な人間なんかいないえよ、狸オヤジが。まっ取り敢えず土産をやるよ」

ハインリヒは小さな何かをジョセフに放り投げた。ジョセフはけだ

るそうに受け止め、しげしげと眺めた。

「むっ？これはなんだ？」

「ああ、始祖のオルゴールと風のルビーだわ」

アルビオン事変の折り、ハインリヒが反乱を鎮めた功績の報酬として回収したアイテムである。

「何故、余にこれを？」

ジョセフは不審気に片眉を上げて聞く。

「あんた虚無だからな、自分のとこの土の秘宝で覚醒しただろう？。多分アンタは爆発や加速を修得したろうが、心から望めば記憶も修得出来るだろう。なあジョセフのオッサン、望めよ。シャルルがアンタに何を思っていたかを知りたいとな？望んでシャルルの記憶を覗けよ。シャルロットの杖はシャルルのだ。それからきつと辿り着けるわ。話はそれが終わってからゆっくりな？」

ジョセフはちらりとハインリヒを見た。虚無というカードが既にばれているのを意外と思ったのであろうか？しかし、考えても栓がなれと感じたのか、風のルビーと始祖のオルゴールを両手にそれぞれ持ち、そして深く瞑想した。

「ああ……記憶か……どうやら修得出来たようだな。ふふふ、しかし

虚無とは何なんだろうな……意味がわからぬ」

ジヨセフはオルゴールを眺めながら、自嘲するように言った。

「あん？虚無が何かなんて、そいつはブリミルとかいうオッサンに聞かなきゃ分からんだろうな。だけど、虚無に覚醒する人間なんて寂しいやつばかりだ。当代の虚無はアンタ、ルイズ、ティファニア、ヴィットーリオ……どいつもこいつもろくな人生送ってないわな？アンタは無能、ルイズは落ちこぼれ、テファは種族迫害、ヴィットーリオは狂信者……ブリミルってやつはきつと、独り善がりて寂しいやつだったんだろうな？六千年経ってもてめえの子孫にてめえと同じ孤独って言う辛さを味あわせやがるんだからな。虚無がなんだか聞いたな？……俺が思う虚無とは呪いだわ」

ハインリヒは吐き捨てるように言い放つ。たかが魔法の系統ひとつで国単位で右往左往しているハルケギニア。それはもうハインリヒからすると、狂っているとしか考えられないのだ。

「呪い……か。ふむ、的を射てるかも知れぬな。ふふ……余はまさに呪いの渦中にいるわけだ。この晴れぬ心こそが虚無……か」

「それについては言いたい事が山ほどあるが、取り敢えずは……シヤルロット、杖をジヨセフに渡してやれよ。なあに、下手な真似したら即刻首刎ねてやるからさ？貸してやってくれ」

ハインリヒはシャルロットに向き直って言うが、大好きだった父の形見の杖を、仇である叔父に渡すのは躊躇した。なにより、メイジにとって杖とは命と同義。シャルロットの葛藤と躊躇は当たり前前の反応と言えよう。

だが

「……私は貴方を信じて依頼した。だから、ハインの為にジョセフに杖を貸す。でも……悔しい」

「エレーヌ……」

シャルロットはジョセフの前に立ち、そして杖を渡した。無表情に悔しさを滲ませながら。

「父様の杖。貴方が殺した弟の杖。……粗末にはしないで欲しい」

シャルロットはジョセフをしっかりと見据えている。ジョセフは無言で受け取り、そしてやはりシャルロットをしっかりと見据え、深く頷いた。

ハインリヒはシャルロットを抱きよせ、優しく頭を撫でてやった。

「偉いぞシャルロット。もう少ししたらジョセフ叔父さんが真人間になるから、そうしたら、真実を聞かせてもらえ。イザベラ、お前もだ。お前の父親が何に狂い、何故お前を抱き締められなかったか聞くといい。ジョセフのオツサン、記憶を覗いたら、アンタの可愛い娘と姪に説明しろよな？んじゃ、後はアンタら家族の話だ。俺は庭で一服してるから、全部終わったら呼んでくれ」

そういうとハインリヒは、バルコニーから庭に降りていった。ジョセフが手掛けた素晴らしい薔薇の花壇の庭に。

花言葉というものがある。それは、花それぞれに固有の意味があり、誰かに花を贈る歳に、その花言葉をメッセージとして使ったりするのである。

綺麗な花だなあと思っただけの花が、その美しさとは裏腹に、花言葉はネガティブな意味合いを持っており、そして贈った相手が花言葉に造詣が深い人間だったりすると、自分が花を贈ったせいで関係がこじれたりする。という話もあるようだから、花言葉とは複雑である。

薔薇は特に複雑で、ある意味取り扱いが難しい。

薔薇そのものには愛・恋・美・幸福・乙女・秘密。というような花言葉がついている。が、葉には「希望あり」枝には「あなたの不快さが私を悩ませる」トゲには「不幸中の幸い」と、部位にも言葉

があつたりするが、同じ花の部分なのに、意味があまり共通してなかったりとややこしい。

色でも言葉が色々あり、白い薔薇は主に処女性・誠実な心を表すが、黄色い薔薇は別れを示唆する意味になり、赤い薔薇は愛と情熱、ピンクなら上品・気品・しとやかさ となる。

だが、それぞれの部位部分にもそれぞれ花言葉はやはり存在し、さらに色合い、花弁の種類によっても意味が変わってきたりするので、薔薇とは複雑怪奇であると言える。

ハインリヒはこの見事な庭園の、咲き乱れる薔薇達を見ながら、その複雑な薔薇という存在そのものが、ジョセフという人間そのものなのだなと苦笑いしていた。

また、色違いの薔薇たちの花言葉は、己の妻たちのどれかに当てはまるなど、さらに苦笑いを深める結果となった。

なんだか面倒になったハインリヒは、最終的に「仕方ないじゃない。人間だもの」と、みつを的思考に結論付けて考えを放棄した。

「ハインリヒよ、そなたが愛好しているという”こひーば”というものを余にわけてくれんか？」

気が付いたらハインリヒの横にジョセフが立っていた。その表情は生気が溢れていた。ハインリヒはちらりと笑い、懐の金属のケースから自らが錬金で熟成させた”エスプレンドイドス”をジョセフに渡した。

そして、自分も一本を咥え、ジョセフの前に立つ。お互いニヤリと笑みを交わし、ハインリヒが取り出したバーナー型のライターで、同時に火を付けた。

辺りには芳醇な薫りが漂い、ゆらゆらと紫煙が立ち登った。

暫しの静寂

「久しぶりに泣いたよ……余は狂っていたのでは無く、病んでいたのだな」

暗闇の中に燃える葉巻の火種を見つめながら、ジョセフは呟く。ハインリヒに言っている様でもあり、自嘲してる様にも見える。

「かも知れないなあ。だけど、俺が思うにはアンタの思いの方が、ある意味人間としては正常なんだと思うよ。シャルロットは不幸だと思っけど、彼女の父親は狂っていたと思うな」

「で、あるか。ふむ、ハインリヒは面白い男であるな。しかし、お前の考えはハルケギニアでは異端になるが、的を射た考えに思えるな」

「さつき葉巻に火を付けた道具はライターっていうんだけど、詳しい仕組みは置いとくが、ようは金属の入れ物に燃える気体を液体化して詰めて、使用するとき火花を放つ石で燃やす　という、俺の世界じゃガキでも使える道具なんだわな」

「……ふむ？」

「何が言いたかったってーとだ、メイジが偉そうに杖から火を出すよ、人が作った便利な道具を使えば、貴族も平民も関係なく、簡単に火を起こせる訳だ。精神力を一切使わずにだ。だからさあ、魔法なんて所詮HUMANの営みの過程のいち道具でしか無いだろ？　だけど、ハルケギニアでは必死こいて魔法を重視する。アンタが好きなの薔薇の庭園だってさ、美しい薔薇が咲き乱れる庭園があつて、それを愛でる人間がどう感じるかが本質なのに、薔薇を剪定するハサミを一生懸命自慢してるのがハルケギニアだろ？」

シヨセフは無言で自分が造った花壇を眺めている。

「そのさ、虚しさにやられるのが虚無の担い手なんじゃね？同じ時代にたつた4人しか存在しないという孤独……プリミル教の教えはエルフを否定するが、担い手にエルフの血がいる矛盾。四大魔法から理を外れた孤独な虚無使いは、例外無く孤独。アンタもルイズもテファも教皇も、みんな心に地獄を持った不幸な人間じゃないか。卑屈で、拗ねてて、捻くれてやがる。プリミルは自分の孤独を子孫にも背負わせやがったんだよ。その4人がさ、孤独にやられて卑屈になり、世を恨み、黒い感情が最大になったとき、聖地に向かった4人は何をするんだろうな？虚無魔法はどれもこれもクソ長い詠唱でさ、使い魔は盾になり、担い手を守る訳だ。神の盾に頭脳に……幻獣使いに語るのも憚れるだっけ？全部結果は担い手の犠牲になるわけだ。……他の場所はダメで、聖地限定なんだとよ。聖地の周りには場違いな工芸品が山ほど落ちてるといいうが、そのどれもハルケギニアには存在しないもんだという。さあ、聡明なジヨセフ王、ここから導き出される結果は……？」

「始祖ブリミルとは異界の人間だったという事か……ハルケギニアの人間を犠牲にしてまでもな」

「んで、自分の子孫がしつかり残るように息子達に指示し、そういうシステムを作ったんだ。貴族という名前で自分の血筋同士の血統を交配してな。一番割りを喰ったのが、エルフって事だな。まあ、本人に聞いてみなきゃわからんけどさ？概ねそういう事じゃないかなあ。まあ、異世界に独り放り出されたブリミルに多少は同情するけどさ、だからってやる事がえげつないわなあ」

ハインリヒは葉巻を消しながら、吐き捨てた。そして、懐から武骨なウイスキーフラスコを取り出し、グビリと一口シングルモルトを飲む。咽喉を焼く感触が心地よいと感じたハインリヒだった。

ハインリヒは複雑な表情のジョセフにもシングルモルトを回し、芝生に仰向けに寝転んだ。

フラスコを受け取ったジョセフは、立ち登る薫りにその表情を恍惚とさせ、うまそうにグビリと飲んだ。

「まあ、”記憶”でシャルルの本音は分かったんだろう？それで、拗ねたガキみたいなジョセフおじさんはどう思ったのさ？」

「クッククク…惜け。そうだなあ、余はもう、ややこしい俗世のしがらみはどうでもよくなったな。シャルロットには頭を下げたが、今さら取り返しはつかん。だからシャルロットには余を殺したければ殺せと言ったが、「償いに父様が愛したこの国に奉仕して」と返された。小娘に負けたわ。まあ今後はお前がくれた葉巻や酒みたいな、足元を見れば見つかる幸せでも探してみるのも一興だな。クッククク…あんな良いもの独り占めは犯罪だな？」

ジョセフに元々の尊大な雰囲気に戻った。ハインリヒはそれを微笑ましく思っていた。

ハインリヒはジョセフという人柄が好きなのだ。彼こそが王たる王なんだと思っている。非情なまでの決断力、内から滲み出るカリス

マ性……今迄は方向性がおかしかっただけで、国の経営を真剣に彼がやれば、ガリアに勝てる国はこのハルケギニアには存在しないだろう。

「んじゃ、シャルロットの母君を治療するのを許可してもらえるかい？」

「ああ。あれはエルフの秘薬で心が病んでるんだ。余の付き合いのあるエルフに薬を作らせたとして、壊れた精神は治らない。お前が治せるなら、それは余にとっても願ったりだ。ハインリヒ、よろしく頼む」

「うん。なら、シャルロットの依頼の件はこれでおしまいだわ」

「とというと、他の件があるとな？」

「まあね。クライアントは多いからさ。んじゃ、トリステイン王国のマザリーニ殿と、アルビオン王国のジェームス陛下の使いっぱしりとしての件を一つ」

ハインリヒは立ち上がり、居住まいを正してジョセフの前に立った。

「まず、敢えて言います。アルビオン王国はトリステイン王国に吸収され、一つになります。そして、アンリエッタ王女とウェールズ皇太子の婚姻が行われ、新生トリステイン王国の王として、ウェールズ皇太子が即位致します。それは、年明けの降臨祭の後に開かれる園遊会にて公式に発表されます。ガリア王ジョセフ一世におかれましては、両国首脳陣の総意として、合併の媒酌人を要請したいのです」

ハインリヒとジョセフの視線が絡む。先程までの私人同士の雰囲気は既に、ない。

「なるほど、ガリアとして新生トリステイン王国の後見になれと。ふむ、ゲルマニア……そして、ロマリアを見据えての事だな。ならば、ガリアの利益はどこにあるのだ？」

「ありません。始祖ブリミルが正統の血筋を受け継ぐ国同士の友好を深めるという至極当然な」

「表向きはな？多分、そのガリアへの見返りは、お前の裁量に任せられてるのだろうよ。さあ、裏向きで喋れ。やきたいもないやり取りは無駄、無駄」

ジョセフは薄く笑いながら言う。ハインリヒは事が成ったのを確信した。後は下世話な事柄である、ビジネスの話だけである。

いつの世も、国同士の友好なんて綺麗事は存在はしない。国単位の

友好とは、お互いに利益をもたららせるからこそ成立する。

国を一般家庭に置き換えたら分かりやすいだろう。一家四人でギリギリ生活を営む中で、いくら親しい友人が困っていても、普通は他人の家庭までは面倒みれない。心情と実状は別の話なのだから。

国単位ともなれば、自国の中での利害が優先される。他国まで面倒みる義理も道理もないのだ。

「さすが聡明な方だ。では独り言を一つ。ここ二年以内に、わが領地にて新型の飛空艇が開発されるでしょうな。風石を新しい動力に変換し、マストも帆も必要ないものです。今までの船の速度なら、止まって見える速度で航行し、ロバ・アリ・カリイエですら、日が変わる前に辿り着けますな。その船は他国には売りませんが、私の”恩人”には非公式に献上されるでしょうな。私の”恩人”は、非常に好奇心の強い方だ。きっと、自国にその技術をもたらそうとするし、私はそれを見て見ぬ振りをするでしょう。友人は大切ですからね？ま、独り言ですがね」

「クツクツク……友人とな。そうだな、そなたはある意味余の唯一の友人と言えようぞ。ふむ、その独り言の中身ならば……」ほぼ”満足であるな」

ハインリヒの片眉がぴんと上がった。

ジヨセフはそれを無視し、さぞ愉快そうな面持ちでハインリヒに止めを刺した。

「完全に満足させたいならば、定期的にあの葉巻と酒を持って来い。独り占めはさせんわ。ワツハツハツ!!」

「仰せのままに、fuck'nジヨセフ王陛下?」

「クツクツク……意味はわからぬが、失礼な事を言ったであろう?」

「Screw you!! (クタバレ) そんなわけ無いじゃないですか陛下様々?」

「葉巻と酒、ワンケースずつな……」

「God damn it……了解しました…高いんだぞクソツタレ……びびります」

「まあ冗談はさておき、トリステイン王国の申し出は、このガリア王ジヨセフの名において了承した。葉巻と酒は貰うがな。マザリー二殿には書面で打診してもらおうという形式をとってくれと伝えてくれ。そうしたら、何処かで会談を持つ。それで構わないか?」

「ええ、俺の依頼はこれで完了です。んじゃ、シャルロット連れてオルレアン屋敷行くわ。でわでわ」

ハインリヒはもう話は終わったとシユタッと手をあげ、部屋の中に戻っていく。

「ハインリヒ、今回は世話になったな。それでだ、ちょっとしたブレゼントをシャルロットに持たせたから、遠慮なく貰ってくれ」

去りぎわのハインリヒの背中にジヨセフの言葉がかかる。

「……………。ありがとうございます？でわ」

「クッククク……………ではな」

何か釈然としないハインリヒだったが、とりあえずシャルロットが待つ部屋に戻った。

「待たせたな、シャルロット。早いとこオルレアン夫人に薬を飲ませて飯食いに行こうぜ？腹減っちゃまったわ？」

「あの、ハインリヒ様？あんたのおかげで救われたよ。かつ…感謝してあげるわ。その……………お父様にすまなかったって抱き締めてくれたんだ……………ありがとう」

恥ずかしそうにもじもじしながら語るイザベラに、はいはいとぞんざいな返事しながらも頭を撫でてやるハインリヒだった。

「あつっ……子供扱いするんじゃないよ……」

悪態つきながらも、一向に手を払わないイザベラが可愛いなど和んでいたハインリヒだが

「……っ！？ちよっ！シャルロット！……なんで殴る！！痛い痛いッ！  
！杖は鈍器……死ぬっ……」

何故だかむくれたシャルロットに、盛大に殴られたハインリヒだった。

何はともあれ、ガリアは良いほうへ向かっていくと胸を撫で下ろすハインリヒだった。

因みに、後程ガリア王名義でオルニエールに書簡が届く。その内容は、プチトロワの修理代と、兵士の治療代、合わせて7万エキユを払えというありがたい内容だったという。

ガリア上空、シルフィードの背中ofハインリヒとシャルロット。

「……ハイン、今回は本当にありがとう。ジョセフの本音と、美化していない父様を知った。悲しいけれど、やっと私の中の父様が死んでくれた。これからの私は前向きに生きていける」

どこかスッキリした表情のシャルロットが、いつになく饒舌に語った。

「ああ。もうタバサは本来の人形に戻って、お前はシャルロットとして幸せになればいいさ。まあ今さらタバサなんて呼ぶ気無いけどな？」

「……シャルロットでいい。そう呼ばれるのが嬉しい」

「はっはっは、そうかそうか！ よっし頑張ったシャルロットを撫でてやる。カマンー！」

おどけるハインリヒと、顔を真っ赤にしてされるがままのシャルロット。

「そういえば、ジョセフのオッサンがお前に持たせた俺への褒美ってナニヨ？」

「……………し」

「ん？」

「……………たし」

「んんん？」

「……………わたし！」

ポカーンとするハイブリヒ

「褒美がお前？」

こくっ

「私をアゲルの解釈？」

こくこく

「……………絶対に貰わないとダメ……………な感じ？」

こくこくこくこくこくこく……！

「不束者ですが……………よろしく……………」

ご満悦のシャルロットと、自分の女難っぷりに背中が煤けているハイブリヒのコントラストが笑えると感じたシルフィードだった。

「るるるる」

オルレアン領に向かい、闇夜の空に消えていく一行だったとき。

## 次回予告

『……一応言っておくが、ジョセフが記憶を使うシーンを伏せたのは、あくまでも”演出”だからな？決して手抜きじゃ無いんだぜ？なあ作者？……何故黙る……まあいいか。さあ、ガリア篇は残すところオルレアン夫人覚醒のみだな。さて、次回の - ZERO - の無責任男は、「なあ、ホイホイ着いてきて良かったのか？俺は熟女でも構わず喰っちまう男だぜ？」だ。必ず読めよな！』

?? So What? ガリア引っ掻き回し篇? (後書き)

飛空挺マダー?

コルベール無双マダー?

今回誤字多いかもしれない。ごめんなさい。

まあとりあえず、シャルロットGETだぜ!

?? So what? ガリア引ッ掻き回し篇最終話(前書き)

まずは、PV135万、ユニーク13万、そしてお気に入り登録約1500件、本当に感謝しています。相変わらず駄文垂れ流しですが、これまでお付き合い下さり、感謝しています。

今後も完結に向けて、自分なりに精進しますので、よろしくお願ひします。

?? So what?? ガリア引つ掻き回し篇最終話

シャルロットはカタカタと身を震わせていた。

ハインリヒはそんなシャルロットの頭を撫で、「大丈夫だ」と眼で語る。

今二人が居るのは、ガリア王国オルレアン領、領主の館の前である。先日まではいたであろうジョゼフの監視要員はすでに居ない。

自分の実家である家の扉の前で、シャルロットの足は止まってしまったのだ。人形を愛娘と認識してしまう程、シャルロットの母、つまりオルレアン公爵夫人の心は壊れていた。

オルレアン公爵夫人にとって、生身のシャルロットは、自分の生命を狙うジョゼフの刺客という認識なのだ。

本来ならば父を亡くし、唯一の心の拠り所である母親にすぎた幼いシャルロットに対し、夫人のとった行動はシャルロットにトラウマを植え付けるには余りある行為であった。

その後シャルロットは夫人が娘と思い込んだ人形の名前である”タバサ”を名乗り、本来の快活な性格と楽しかった思い出を心にしまいい込み、心を閉ざした。その影響なのか、身体の成長も止まり、年

に追い付かない幼い身体のままだ。

シャルロットが無口なのは、考える事がストレスになるからで、読書に埋没するのは精神世界に逃げるからだ。

そういう訳で、シャルル粛清の後、オルレアンの人々は様々な形で暗黒の中にいるのである。

ガリアの前王、つまりジョゼフとシャルルの父親が、次王をジョゼフに指名した。王は一人であり、どちらかが指名されれば、片方は公爵となり、王を補助していく。そこに何の不幸もない。

ただ、ジョゼフにもシャルルにも不幸だったのは、ガリアはハルケギニア一の大国であり、その利権も巨大なものだった事。そして、始祖ブリミルの正統な子孫であるガリア王家とその周りの貴族が、魔法至上主義だった事の二点に尽きる。

王子であるジョゼフとシャルル。次王としての序列は当然ジョゼフが一位であった。が、ジョゼフは魔法が使えない落ちこぼれだった。実際は虚無という、ブリミルと同じ系統で、存在としては伝説級なのだが、どうやら魔法使えない＝虚無かも知れないという疑いを誰も思い付かなかったという不幸が重なった。

そんなわけで、序列一位が魔法の落ちこぼれなら、序列二位のシャルルを担ごうという派閥が出来る。

シャルルは当時、ハルケギニアで最年少の風のスクウェアメイジであつたのが、シャルルを王にという流れに拍車をかけた。

ジョゼフとシャルルは元々仲がとても良かったのだが、彼らを担ぐ老獪な貴族達に焚き付けられ、政治闘争へと発展していったのだ。

政治闘争が始まれば、兄弟達の気持ちなど邪魔なだけであり、大義名分こそが大事な事柄なのだ。御輿の意志などそこには介入する余地はない。

貴族達の欲望に増幅された兄弟の黒い感情は、やがて二人の骨肉の争いに発展していった。

シャルルは兄のカリスマと、強い意志に嫉妬し、ジョゼフは弟の魔法の才能に嫉妬をした。

だが、ここは魔法至上主義のガリア王国だ。必然的にシャルルを担ぐ貴族が多くなり、ジョゼフ派は少数だった。

ジョゼフ自身は、黒い感情に犯されながらも、自制心と強靱な意志で耐えていた。そして、シャルルが王で良いじゃないかと自分を納

得させ、折り合いを付けたのだ。

だが皮肉にも、父王が次王に指名したのはジョゼフだったのだ。父王はジョゼフに溢れている王たる資質を見抜いていたのだ。

実際、王の仕事は政治力と決断力、そして未来を創造する強い意志が必要なのだ。魔法のクラスなど、パフォーマンスにしか使えないのだ。実務に魔法は必要無いのだから。

ジョゼフに魔法の才は無かったとしても、王の資質は随一だったのだ。逆にシャルルは魔法以外に何もなく、派閥を拡大していくために賄賂を使ったり、自分に自身も無い。

父王は、二人の父親である以前に、ガリアという大国の王なのだ。王は自らの欲を殺し、ガリアの繁栄に尽くす義務があるのだ。そこに住まう人々の為に。

だからこそ、ジョゼフ一択となり、シャルルを切り捨てた。

ジョゼフは王になる覚悟をし、シャルルとシャルル派は、宙釣りになった。

シャルルがそこから、ジョゼフ王に尽くす意志を見せれば話は違っ

たのだが、頑なになっていたシャルルと、担いだ御輿が倒れ、行き場を失ったシャルル派は、暴発寸前になった。

結果、ジョゼフ王はシャルルとシャルル派を肅清し、夫を担いだ夫人も対象となった。生きていれば火種となる事は、容易に想像出来るからだ。

シャルロットは不幸であるが、仕方がなかったとハインリヒが断じたのは、そういう意味だった。

結局、ジョゼフもシャルルも夫人も、そしてシャルロットも、不幸であったとしか言えないのである。

それがハルケギニアの王族であり、貴族社会なのである。

そういつた事の顛末を知った今、シャルロットの中にジョゼフに対する復讐心は無かった。

ジョゼフも、公ではなく私の立場だが、シャルロットに謝罪し、オルレアン領も存続させる事を許してくれたのだ。

何より、我が弟を手に掛けた　いや、掛けなければならなかったジョゼフの辛さにも理解は出来たシャルロットなのだ。

だからこそ、母親が正常に戻ってくれないと、シャルロットは救われない。そして、その思いが、「もし、ハインの薬で治らなかつたら」と、最悪の思いに支配され、扉の前で立ち尽くすという反応になったのだ。

「ハイン……こわい」

目に涙を浮かべたシャルロットは、シュバリエでも、北花壇騎士団の精鋭でもなく、ただの少女だった。

「まっ、楽にして待つてなさいや。お兄さんがちよちよいつて治してくるからな？ だって腹減ってんだもん。さっさと終わらせて飯食おうぜ！ な？」

おどけるハインリヒに感謝しつつ、二人はやっと屋敷に入った。

執事のペルスランは、事の顛末を聞いて、眼を白黒させていた。まさかジョゼフと和解し、オルレアン夫人が治療できるなんて、青天の霹靂どころの話ではないからだ。

ハインリヒは、「んじゃやってみつか」とやたら軽い口調で宣言すると、シャルロットとペルスランを居間に残し、夫人が伏せている

部屋に入っていった。

二人に向かっていい笑顔でサムズアップしながら。

ガタン！！ガタガタ！！

バン！！ガシャン！！

『…』

「シャ…シャルロット様!？」

「だ…大丈夫…ハインなら…多分…」

ハインリヒが部屋に入った後、何やら中で暴れた気配と、物が壊れる音がして、二人は非常に不安になった。

ドカン!! バタンツ!!

『 \* ○ @ ツ …!』

シューーン……

「静かになりましたね？」

「……………ええ」

二人は扉を凝視する。ハインリヒ、母様はどうなったの？はやく教えて……………祈る思いでシャルロットは扉を見つめていた。

五分……………

十分……………

動きは無い……………

三十分……………

一時間……………

痺れを切らした二人が、中に入ろうと決意を固めたその時……………

ぱたむ……………

扉が開いた。

中からハインリヒが出てきた。激しく息が荒い。相当大変な治療を施したと思われる。

服が乱れ、髪も若干わさわさしている。狂った夫人が暴れたのだとペルスランは思った。

「ハイン？母様は？」

「……治った。完璧に。夫人は”凄く元気”だぜ。さあ、行ってやんな」

「うん……ありがとうございます……」

「ありがとうございます、ハインリヒ侯！」

二人は感涙を浮かべ、ペコペコとハインリヒに頭を下げた。

「んっ……うん……早く行ってやんなよ。ボク、なんか疲れたから、湖

「いって沐浴してくるね？でわな」

妙に慌ただしく、ハインリヒは出ていった。

なんだろう？と首を傾げたシャルロットだったが、取り敢えずは気を取り直し、最愛の母親に会いに行くことにした。

どきどき……

シャルロットは部屋の前に立ち、緊張に高鳴る心臓の鼓動に負けそうになっていた。が、ペルスランに背中を押されて部屋に入った。  
いた……

夫人はベッド腰掛け、窓の外を眺めていた。

「お母……様？」

「あら、シャルロット！ああ、わたしの可愛いシャルロット！ごっちにいらっしやい！」

振り向いた母親は、愛娘に向かって両手を広げた。

「母様……かあさまあ……！！！！！！」

弾けるように走りだしたシャルロットは、愛する母親に抱きついて、何年分かの涙を全て解放して号泣した。

「うぐっ……ひぐっ……おかあさまあ……つわああん……」

「あらあら、大きくなったのに赤ちゃんみたいね？わたしのシャルロット？」

こうしてガリアの姫君の悲劇は、ハインリヒによって感動のストーリーに書き換えられ、大団円を迎えたのだった。

「……お母様？なんかこの部屋、変な匂いがしませんか？？」

「え”？…そんなこと……無いわよ？」

「あれ…お母様？髪がほつれてますし、頬が紅潮してます…大丈夫？」

「ただ大丈夫ですっ！ちょっとハインリヒ”様”の治療がはははげはげ激しかっただけよ？」

「あれっ？お母様、首筋が蚊に刺された跡があります。お薬ぬらなきゃ」

「アラホント　クスリヌラナキヤ……」

首をかしげるシャルロットだったが、ハインリヒは後々思った。シャルロットが奥手で命拾いしたと。

部屋で何があったかは、夫人が全快した事に比べたら、些細な事である。

ラグドリアン湖畔

「やっべえ……夫人激しすぎるわ……うわっこんな場所にもマーキングされとる……やべえ……いえ帰ったらなんて言い訳しよう……ああ、死んだな、俺」

憂鬱なハインリヒだったとさ。

ガリア王国ヴェルサルテイル宮殿グラントロワ、ジョゼフの寝室。

天蓋から降りるレースを通し、窓から朧ろな月が見えている。

ベッドの上は、情事の名残りが生々しい。

うつ伏せに横たわる裸の女性の、背中ラインが蠱惑的に美しい。彼女の名前はモリエール。ジョゼフの愛人である。

隣にはこの部屋の主、ジョゼフが上半身を起こして、静かに月を眺めていた。

「殿下……どうかしましたの？」

「どづいつ事だ？」

「なんだか……とても情熱的でしたわ？」

「そうか。……モリエール、花壇騎士団長を解任する」

「でっ殿下!？」

モリエールは混乱していた。ジョゼフから突然、花壇騎士団の団長になれと言われ、半ば無理やり務めていた。

それは、ジョゼフを陰ながら愛していたからだ。だが、相手はガリア王だ。結ばれる訳が無い。だからモリエールは、自分の想いを封印し、ジョゼフに尽くす事で、愛の証を立ててきたのである。

たまにこうして、戯れにベッドを共にしてきたが、ジョゼフは自分を人形のように抱くだけだった。まるで自分の身体を使って自慰をしているかのように。そして、虚しい行為が終わると、自分の部屋に戻された。

だが、愛するが故に、虚しくても抱かれてきた。

それが彼女の愛だった。

なのに今日は違った。ジョゼフは時間をかけてモリエールを愛撫し、彼女は何度も果てた。彼女の中に入ってからは、彼女の中でジョゼフは何度も何度も果てた。まるで愛し合う恋人の睦事のように。

そうして激しすぎる行為の後に、二人で微睡んでいたのだが、ジョゼフは突然モリエールに騎士団長の解任を言い渡した。

モリエールは思った。殿下はとうとう私を捨てるのだと。

「…………今夜から、お前はここで寝るがいい。部屋に戻ることはまかりならん」

ジョゼフの言葉はモリエールをさらなる混乱にたたき落とした。全く真意が見えないからだ。

「でっ…殿下！それはどういう意味なのでしょう？？わたくしをお捨てになるという話では無いのですか？」

「むっ……むっ……上手く伝わらん……くそっハイソリヒに聞いとけば良かった……ぶつぶつ……」

「殿下!？」

「あっ……ああ、すまぬ。混乱させたな。……なあ、モリエールよ。次の王はイザベラにすると決めているんだ」

「はあ……」

「だから、お主に子が出来ても王にはなれぬのだ」

「はあ……そうですね?」

「うっうん……でな?」

ジョゼフは頭をがしがし掻いている。モリエールがかつて見たことが無い、やたらと人間臭い態度である。

「つまりはだ、えーと、余は人と本音で接する事が苦手なのだが、だが、少し考えが変わってな……その……人間らしい幸せが欲しくなったのだ」

「はあ……………」

「だから、ええいくそつ……………子が出来ても王には出来ぬが、余の傍にずっといてくれぬか？その……………人の愛し方を余に教えてくれ……………その、余はそなたに……………うん……………好意を抱いているからな……………ダメだろうか？」

長い沈黙が包む。

暫くすると、ジヨゼフをまっすぐ見つめるモリエールの目に涙が盛り上がり、そしてダムが決壊するように流れ出た。

「はいっ……………わたくしは……………ずっと殿下をお慕いしていました……………愛しています……………殿下……………」

「そつそつか！わはは！良かった！モリエール、二人の時はジヨゼフで構わぬ。そう呼んでくれ！」

「ふふっ…はいジヨゼフ様？ジヨゼフ様は実はこんなに可愛らしかったのですね？」

「むっ……………意地悪をするな。モリエール…抱くぞ」

二人は新たな関係になり、そして、溶け合うように抱き合った。

ジヨゼフの魂は、二度と渴かない。

こうして、ガリア王国から、悲しみは消えていったのだった。ジヨゼフはこの後、リュティスにて大演説を行い、オルレアン公爵家の復興と、次王を娘イザベラに指名したことを告げた。

横に寄り添う貴婦人と共に

## 次回予告

「やあザルバだ。まさかハインリヒがああいう喰い方をするとはい…  
…というか実際は夫人に喰われたが正しいんだけだな。ほら、受刑者がシャバに出ると、まずは性欲を充たしたがるだろ？あれみたい

なもんじゃね？え？例えが悪い？すまん、育ちが悪いんだ……  
作者が。さあ次回の - Z E R O - の無責任男は、「トリスティン魔  
法学院に久しぶりにカメラを向けたらさ、キュルケが号泣してんだ。  
なんでだろうな？」だ。絶対見逃すなよ！」

?? So what? ガリア引つ掻き回し篇最終話(後書き)

さて、今回の話は、シャルロットとかオマケで、実は最後のデレる  
ジョゼフがメインでした(笑) まあ、大好きなキャラクターなので、  
幸せになって貰いました。

モリエールさんガンバレ

今回は久しぶりにメインキャラクター中心に書きます。中心はキュ  
ルケになりますな。まあハイソリヒとどののではなく、ある意味  
まあ楽しみにして下さい。

話は変わりますが、ルイズって声優は釘宮理恵さんですが、僕が大  
好きな銀魂の神楽も釘宮理恵さんですよ?

ああ……ルイズを毒舌キャラに魔改造したい欲求が……ああ……ル  
イズにゲロ吐かせたい……

さーせん

感想・意見・要望お待ちしております。

ナナツボシ

?? タバサ「キュルケーーーーッ!!!!」 キュルケ「さんを付けるよ」

トリステイン魔法学院とある朝。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーは朝食を食べに食堂に向かう。が、その表情は暗い。

何故ならば、妹のように可愛がっていた親友であるタバサが学院に来なくなっただからだ。全く音沙汰が無いのである。

タバサが来なくなっで一週間くらい経つだろうか?とにかくキュルケは心配していた。というのは、タバサの裏の顔。つまりは北花壇騎士団の人形としての彼女を知っていたからだ。

いくら凄腕のトライアングルメイジであっても、彼女の肉体は少女なのだ。ハルケギニアのならず者や傭兵の中には、”メイジ殺し”と異名を持つものがいて、対メイジ戦に特化しているのだ。

つまり、そういう相手と戦えば、いくらタバサとてひとたまりも無いかもしれない。キュルケはそれを心配していたのだ。

万が一、任務の最中に死んだとしても、ガリア王国はその事実を発表はしないだろう。つまり、タバサが死んでもキュルケはそれを知る術は無いという事だ。

だれもが振り返るような美人であるキュルケが、眉を八の字にして

廊下を歩く。

しかし、醸し出す雰囲気はダークなせいも、怖くて誰も声をかけられない。因みに、弱ってるキュルケを慰めれば、なし崩しに彼女をゴチになります的な考えで、取り巻き達が近寄ったが、全て燃やされたという。

そのキュルケが食堂に辿り着くと

いた。

タバサが今までと変わらず、山盛りの皿に埋もれて朝食をやっつけていた。

キュルケは猛ダッシュでタバサの前に座った。

「はあはあ……タバサ……心配したのよ……ぐすっ……」

ざわ…ざわ…

気の強いキュルケの涙に、見ていた生徒達が騒ついている。

「……………」

ちらりとキュルケを見たタバサだが、返事もせずに食事に戻ってしまっただ。完全に無視である。

「たつタバサ！？どうして無視するの！！心配したんだよ！ねえタバサったら！」

「……………」

今度はキュルケを見もしない。まるでこちらを見えていないかのよううに。

「あ、……………？×××だから行きましょ？」

こくり

困惑していたキュルケだったが、突然モンモランシーが現れ、タバサに何やら耳打ちすると、タバサは頷き、あまつさえ微笑みすら浮かべ、二人で連れ立って消えていったのだった。

「なん……………なのよ……………」

あり得ない。タバサが私を疎んじたりなんかあり得ない。キュルケは悔しさを噛み締めながら、唇を強く咬んだ。

そこに、空気の読めないバカップルがやってきた。

キュルケの斜め向かいに陣取ったバカップル　ルイズ&サイトである。

彼らは表舞台から遠ざかった場所で、ひそかにしつかりしたたかにきつちりと愛を育んでいたのだ。

このことについて、彼の親友であった某薔薇少年に意見を求めてみた。

「ん？顔にモザイクちゃんが入ってる？そう、わかったよ。こほん

ああ、あの二人かい？ん〜見てて非常に不快だね？授業中なんかルイズ嬢の positioning は彼の膝だからね？僕の席からだとちょうど後ろに彼らがいるんだけど、五分おきにチュッチュツツて聞こえるんだよ？あまつさえ「も〜サイトのエツチい…だ〜め…後で部屋に帰ったらね？」ってキャツキャウフフどころか場末のスナツクのちいママとエロ親父の会話さ……助けてモンモン……ふっ…モンモンも今じゃ……キイ〜〜〜！失礼するよ！」

ありがとう、ギー…薔薇少年。

とまあ彼の証言通り、迷惑バカップルがキュルケの前に陣取り、こ

れ見よがしにイチヤイチャを始めたわけだが、ある一ヶ所から強烈な冷気が発せられ、食堂全体の気温が約5度は下がった。

バカップル以外の食堂にいた生徒達は、冷気の発生源にすぐ気付く、これは血の雨が降るだろうと予想し、すぐさま非難を始めた。

大災害が起きる際、小動物はすぐさま危険を察知し、集団で逃げ出すと言う。映画等ではネズミなどが大挙して大移動していく演出が使われるが、要は生存本能が逃げると告げるのだ。

ネズミが話すことが出来ればこう言うだろう。

「そうしろと囁くのよ……私のゴーストが……」と。

そのくらい今のキュルケは危険だった。微熱？今の彼女は絶対零度……いや、シヴァの化身と言っても過言ではない。

そんな中、徹底的に空気が読めないラ・ヴァリエールさん家のルイズ嬢は、目の前の夜叉に気付く、止せば良いのに火にジェット燃料を注ぎ込んだ。

「ああこれはこれはツエルプストーリー？一人で何してるのかしら？取り巻きの不細工もないし、お淋しいですこと？私はあなたみたいにモテませんから、サイトしかいませんけどね？ただまあ一山いくらのツエルプストーリーの取り巻きに比べたら、うちのサイトの方が

何千倍もカッコいいですよ？それに、あのチンチクリンにも振られたみたいね？可哀想なツエル…ひいつ！！！！」

ブチン……

キュルケの中で何かがキレる音がした。怒りの炎が身体中を駆け巡り、彼女を数段階上のレベルへ押し上げた。

新しいスクウェアメイジの誕生である。

ルイズが惚気を披露しているうちは良かった。だが、ルイズはタバサをネタにしてしまった。それが失敗だったのだ。

ゆらりとキュルケが立ち上がる。その表情は髪に隠れて見えないが、彼女の背には不可視の炎が燃えていた。陽炎のようにゆら、ゆらと。

覚醒したキュルケは、誰も聞いたことが無い古代語で呪文を詠唱し始めた……

『ブー・レイ・ブー・レイ・ン・デー・ド……地の盟約に従いアバドンの地より来たれゲヘナの火よ、爆炎となり全てを焼き尽くせ……ふふっ……あんた達なんか消えてなくなればいいのよ……炎灼熱<sup>エグ・ソ</sup>……<sup>イダス</sup>地獄……！！！！』



「あーあ……なんか気が抜けちゃったわ……」

キュルケは食堂を飛び出した後、授業に出る気にはなれず、学院の広大な庭に来ていた。午後の休憩時間なら、ここは紅茶を楽しみながら、思い思いに時間を過ごす生徒達で溢れている場所なのだが、今はキュルケ一人だ。

キュルケはベンチの代わりになっている大きな切り株に腰掛け、晴れ渡る秋の空を眺めた。

キュルケはこの季節が大好きだった。肌寒い季節ではあるが、空気に透明感があり、外を散歩していても気持ちがいい。木々は鮮やかに色付き、見ていて華やかだからだ。

「キュルケ……ここにいたのね？」

黄昏るキュルケの肩に手がおかれた。キュルケはいま一番聞きたくて仕方がない声を聞き、弾かれるように振り向いた。

「あ、あ、タバサ……」

先ほどの彼女の拒絶がフラッシュバックし、尻つぼみになってしま  
う。

「……………」

またもや無視されてしまったキュルケだった。

「なっ、なんで無視するのよ！私がどれだけ心配していたと思うの  
よ！うっうっ……タバサのバカぁ……………」

怒鳴る途中で悲しくなり、ぼろぼろと涙を溢して泣いてしまった。

タバサは狼狽したのか目を大きく開いて慌てだした。

「ちょっとシャルロット〜それじゃキュルケが可哀想じゃない〜」

「へっ?」

どこことなく困った顔をしたモンモランシーが、呆れ顔でフォローに  
入った。

「どういう事よ！それにモンモランシーはタバサとそんな仲良かつ

たっけ？というかシャルロットって……ああもうわかんない！」

キュルケは頭をわしゃわしゃと掻き回しながら、地団駄を踏んだ。因みに、彼女の取り巻きが今のキュルケを見たら、普段とのギャップに悶える事だろう。

「あのね、キュルケ？シャルロットはあなたにイタズラしたかっただけなの。彼女はあなたも知ってる通り、問題を抱えていたでしょ？それが休んでいた間な解決して、もう本名を名乗れる事になったのよ。で、久しぶりに会った親友が”タバサ”って呼んだら無視して、”シャルロット”って呼ばないと無視するわ！って種明かしする予定だったのに、種明かしする前にこじれちゃったのよ？ほら、ちゃんといいなさいよシャルロット」

やれやれと言いながら説明するモンモランシー。シャルロットはもじもじしながらキュルケの前に来て

「……ごめんなさい。私はもうシャルロットなの。キュルケを笑わせたくてイタズラを仕掛けたんだけど、種明かしのセリフが恥ずかしくて言えなかったの……」

「タバ……シャルロット……」

「ある人の入れ知恵で、セリフを仕込まれたんだけどねえ……私も言えって言われたら嫌だわ？だから許してあげてね？」

シャルロットとモンモランシーは、顔を見合わせながらすまなそうな顔をしていた。キュルケはイタズラの事は納得したが、二人の妙な仲の良さに、嫉妬に近い苛立ちを感じた。私の方が付き合いが長いのに……というところだろうか。

「もう、わかったわ。だけど二人がいつの間にこんな仲良くなったのかしら？」

「……その説明は難しい」

シャルロットはそっぽを向きながら言った。耳が真っ赤なのが不思議だ。

「えっと……乙女同盟なのよ……えへっ」

モンモランシーも何やら照れ臭そうだ。キュルケは頭の上に？マークを山ほど浮かべていた。

「乙女同盟！？なによそれ！恋する女の子の集まり的なネーミングね？なら私もいれなさいよ！」

「ダメー！」「」

即答である。若干食い気味のユニゾンにキュルケは少しイラッとし

た。

「なっなんでよ！意地悪しないで入れてよ！」

「キュルケ、あなたハインリヒ侯爵知ってるよね？」

「ええ。アルビオンの英雄で、今や大貴族よね？アルビオンで見かけたけど、かなりの男前だったわ。それがどうかした？」

二人は目を泳がせてる。キュルケは一体なんなんだと訝しがる。

「つまりは、ハインリヒ侯の妻候補達の集まりが乙女同盟なの。…  
…その…夜のお勤めの順番とか…待機妻同士でテクニックを学  
び合うとか…えっと…そゆこと…キヤー」

「……恥ずかしい。でも、色々素晴らしい」

キュルケは口を金魚みたいにパクパクして固まっていた。

そもそもキュルケは恋多き女と言われているが、性交渉は一度もない。何故ならたっさんの恋は、たった一人の素晴らしい男性にだけ着く為の過程でしか無いのだ。キュルケは安い女にはなりたくは無なのだ。そして、たった一人が見つかった時、微熱は狂熱となり、

灼熱に昇華する。

そんな恋愛観を持つキュルケだったが、幼い肉体で妹みたいに思っていたシャルロットが、既に山の頂上にいたのである。自分はいいとこ三合目なのに……

「なんだか……置いていかれたみたいで淋しいわ……」

キュルケはがっくりと崩れ落ちた。

そんなキュルケの肩に優しく手がおかれた。キュルケはその暖かさに涙が出そうになった。そして、ゆっくり、見上げた……

「シャルロット……」

「……頑張れ」

ドヤ顔でサムズアップされた。勝者の余裕である。

「なんかすげえムカつくんですけど……」

「……恋の相談なら乗る」

「キイイイイ！ー！貧乳のくせにいいいい！ー！」

「大丈夫。感度は抜群」

「くっそ！経験ないから言い返せない！悔しい……わかったわ……もういい……私もハイソリヒ侯の妻になるわ……止めても無駄よ！灼熱のキュルケここに見参よ！ー！」

「「そうはさせないわ」」

「押し通る！ー！」

その日、学院の庭は焼け野原になったという。

そして翌日、何故だか傷だらけのキュルケ、シャルロット、モンモランシーが、やけに仲良くなっていたという。

「ところでシャルロット？ハインリヒ侯に何を言えと言われたの？」

「えっと……『私はあなたの人形じゃないッ！』か『私は多分、三人目だから……』と言えと言われた。髪が青いからバツチリだつて」

「それは意味がわからないけど、言っっちゃダメな気がするわ……」

今日もハルケギニアは平和だったとさ。

次回予告

『しかし、ネタにしてもかぶりすぎだな……いや、リ スのクロー  
ンも宇宙人的な文学少女もタバサも作者は好きだから問題ない……  
いや、あるな。まあ気にしちやダメだ。さて、次回は「久しぶりに  
あの夫妻が登場だ！しかし、旦那の声は立木VOICEにするべき  
だろjk……」だ。必ず読めよな！』

?? タバサ「キュルケーーーーッ!!!!!!」

キュルケ「さんを付けるよ」

キュルケを魔改造の巻

?? つばみから花へく私はルイズうくいえいいい その? (前書き)

何書いてんだろ……

取り敢えず無駄に長いですが、最後まで読んでください。

?? つばみから花へく私はルイズうくいえいえい その？

それはここの経営者が、人格者の老夫婦で、職員達もその意識が浸透しており、子供達はすすくと幸せに育つことが出来たからだ。

遷はのどかな山の中で、優しい人たちに囲まれて、天真爛漫に育っていく。

世の中には親の無い子供は山ほどいる。世間的には素行が不良になるとか、まともな人生を送れないと言った、三流テレビドラマのよくな先入観で見られる。

たしかに、親がいなければ経済的にも困窮し、まともな衣食住が得られず、学校等ではそういう一般家庭との温度差が、恰好の標的となる。

人間は、自分より弱者を叩き、自分の中の優越感を満たすという残酷さを持っている。それがいわゆるイジメのメカニズムであるが、競争社会の弊害とも言える。

人間が”嫉妬”という感情を持つかぎり、他人より自分が劣っているという事柄が、自分の心を抑圧し、膨れ上がったストレスの捌け口として、自分より弱者を貶めるのだ。

だが、ある種俗世と隔離された場所にある麗羅の施設は、そういう悪循環から切り離された環境にあった。

麗羅は肉親の愛とは別物であるが、優しい愛情に包まれて育ち、真っ直ぐで、純粋な少女に育ったのだ。

施設の方針でもあるが、皆で助け合い、お互いを支え合うような生活の中で、麗羅はいつも率先して、家事から年少組の世話まで献身的に行動した。

自分には親がない。その変え様の無い現実を受け入れ、自分が関わる人間には優しくあろうと、幼いながらにそう決めた。

麗羅が小学校の高学年になったとき、ちょうど冬休みに入る辺りの出来事だ。施設には、麗羅のように完全な天涯孤独な子供は実はいない。

ほとんどが、片親やなんらかの事情により施設入りしたケースがほとんどなのだ。そして、そういう子供は、長期休暇などには親が迎えに来たりする。

その冬休みにも、親がいる子供達は満面の笑みを浮かべ、今か今かと迎えをまっていた。

遠巻きにそれを見ていた麗羅は、突然鼻の奥がツンとした。麗羅は慌てて裏山に走り、そして泣いた。

泣きたい理由が分からないのに、後から後から涙が溢れ止まらない。麗羅は嗚咽しながら考えた。なぜ泣いてるのだろうか。そして、突然気が付いた

「わたし、羨ましいんだ……」

自覚したらさらに泣けた。声を上げ、横隔膜を激しく痙攣させて号泣した。

羨ましいと思う自分が嫌になった。みんな仲間だと思っていたのに、何故か裏切られたと感じた。

麗羅は突然、不安定になった自分が怖かった。何か黒い感情が込み上げ、吐き気がした。だから、麗羅は寂しくなったらこっさり唱える呪文を呟いた。

「どこかにいる私の王子様、はやく私を迎えにきてください……」

その日、麗羅は初潮を迎えた。

その後いくらか時間が経ち、麗羅は小学校もあと数か月で卒業となるというある冬の夜の事だった。

麗羅は園長先生に部屋に呼ばれた。いったいなんだろう？と首を傾げながらも、園長室に向かう麗羅だった

「麗羅、君を是非養子にしたいという夫婦の方が来ていらっしやる。紹介しよう。シンデンマサユキ新田雅之氏と、奥様の摩耶さんだ」

園長の横には、優しそうな夫婦が麗羅を眺めていた。雅之は細身だが高身長で、柔和そうな顔の造りであり、短く刈られた髪が、清潔感を増している。妻の摩耶は、雅之に釣り合う程の身長と、モデルのような身体のライン、やや釣り目だが、切れ長な目、ツンと上を向いた形のいい鼻…所謂、美人といって差し支えないだろう。

「はじめまして麗羅ちゃん。僕は雅之、彼女は妻の摩耶だよ。突然の事でびっくりしただろうけど、僕等は麗羅ちゃんと家族になりたいんだ。さあ摩耶も自己紹介してくれ」

雅之は麗羅の前にしゃがみ、彼女と同じ目線になり、とても優しい目で覗き込んだ。雅之の年の頃は40に届いた位だが、童顔の為か20代後半にしか見えない。それが彼の穏やかな印象を増す結果になっていた。

「麗羅さん、はじめまして。私は摩耶よ。貴女の事は雅之が凄く気に入ってね？貴女なら私達ときっと上手くやっていけるわ？」

摩耶はたっただまま麗羅を見下ろし、薄く笑いながら麗羅を撫でた。撫でられた瞬間、何故か背中がゾクリとした麗羅だったが、幼い心で、「どうやら二人は歓迎してくれているようだ」と感じたのだ。つた。

「麗羅、新田夫妻は君と養子縁組して、親子になりたいんだ。後は麗羅の気持ちだけなんだよ。だからと言って、いきなり養子縁組とは君も難しいだろう？だからお互いの顔合わせと、相性を知るためにも、麗羅が小学校を卒業するまでの数か月を新田夫妻と一緒に住んでみないか？という事なんだ」

と、園長は相変わらず優しい雰囲気を含めたまま、麗羅に説明した。

「麗羅、そういう訳だから、君が承諾してくれると嬉しいな。どうかなあ？」

雅之は麗羅を撫でながら、人懐こい笑みを浮かべて言う。

麗羅は雅之の笑顔が好きだと思った。彼と彼の妻ならば、自分の善き親になれるのではないか？そして、自分が彼等に娘として尽くせるのではないか？麗羅はそう考え、そして

……「くり。

頷いた。雅之は喜びを表し、麗羅を抱き寄せて髪をわしゃわしゃと撫で回した。

「くっ苦しい……です」

「あっはっは……ごめんごめん。さあ荷物を準備して？僕らの我が家に帰ろう？」

こうして麗羅は新田雅之夫妻の養女、新田麗羅となり、新しい人生を送る運びとなった。そして、雅之の笑顔に包まれ、初めて感じた近しい温もりに戸惑いながらも、幸せになれたらいいなと願う麗羅だった。

麗羅を抱き締め頭を撫で回す雅之を、摩耶が怨念の籠もった強い視線で睨み付けているのを気付くものは誰もいなかった……

新田夫妻が養子を欲しがったのか？それは、摩耶が不妊体質であり、5年に渡る不妊治療の結果、夫婦共に精も根も尽き果てたからなのである。

心やさしい雅之は、やつれた摩耶を抱き締め、もう、無理をするのはやめようと言った。

摩耶は子を宿せない不甲斐ない自分を呪った。彼女にとって、雅之は自分の全てと言えるほど愛している。だが、子を宿せないという事は、真の意味で彼との血のつながりが持てないとも言えるのだ。

不妊治療は身体のダメージだけではなく、心も傷む。摩耶はまたダメだったと自分を責める。雅之はそんな妻を優しく包もうとするが、彼女は頑なになってしまふ。雅之の優しさを素直に受け止められず、逆にその優しさが重荷になるのだ。

そんなちぐはぐな夫婦生活から、いつしか摩耶は雅之とベッドを共に出来なくなり、優しすぎた雅之は、摩耶を気遣い無理強いはしなかった。

そうやってお互いの心をすり減らした結果、今回の養子縁組を決意する事となったのである。

新田夫妻が初めてその施設を見学したとき、玄関には施設の子供の親と思われる母親が、子供の外泊の為に迎えに来ていた。

その時たまたま、雅之はガラスの大きな窓の所にいる女の子が目

入った。

腰まである艶やかな黒いストレートヘア、真っ直ぐに揃えられた前髪が幼さを主張しているが、黒目の大きな瞳が、意志の強さを物語っているようだ。ただ、今は物欲しそうな目で、久しぶりの再会を喜ぶ親子を見ていた。

「なあ、摩耶？あそこに女の子がいるだろ？あの子はどこか君に似ているね」

「……そうかしら？雅之さん、あの子が気に入ったのかしら？」

摩耶が怪訝そうに雅之を見るが、雅之の視線の先にはあの女の子がいる。

「ああ。さつきから、何となく見ていたんだけど、気の強そうな顔をしているんだけど、目であそこの親子を見ているときは、すごく寂しそうで羨ましそうな目をしていたんだ。僕にも親が居なかったからね。気持ちはわかるよ。感情の出し方がわからなくなるんだ」

「雅之さん……」

哀しげに笑う雅之を、労るように寄り添う摩耶だった。

雅之は五歳の頃に、両親ともに亡くしている。交通事故に巻き込まれ、即死だった。それ以来雅之は、親戚をたらい回しにされ、寂しい少年時代を過ごした。

ただ、元来ポジティブな性格をしていた雅之は、なんとか自分を鼓舞し、そしてIT関連のベンチャー企業を開業し、いまや東証二部に上場を果たした優良企業のオーナーだ。

だから雅之は、施設にいる子供達の心境に共感できるし、理解も出来るのだ。

「摩耶、僕はあの子を娘にしようと思う。なんか、よくわからないんだけど、そうしたいって思うんだ。賛成してくれないか？」

雅之は、基本的に欲求が希薄な人間で、摩耶と結婚をして以来、我儘らしい我儘も言わず、妻をたててきた。だからこそ、これほど断定的にお願いすることは無かったし、それほどの気持ちを抱かせたあの娘に……嫉妬した。だが

「……ええ、雅之さんが気に入ったのならそうしましょう。ふふっ、利発そうな可愛らしい子みたいね。あの綺麗な髪が私に似てるかな？」

「まあ、君が美しいのに代わりはないよ。でも、ありがとう。早速園長先生に話を聞いてみよう」

雅之はすたすと玄関に向かい、その背中を見ていた摩耶は、こっそり歯軋りをした。

そういう訳で新田家にやってきた麗羅だったが

巨大なマンションを見上げ、そして絶句していた。

ここは約150万人が暮らす、大きな地方都市だが、その中でも一際高いタワー型マンションの前に三人はいた。

「……おっきい」

麗羅はただただ見上げる事しか出来なかった。そして、雅之に促され、高速エレベーターで最上階まで来ると、一番奥にある部屋の前にはやってきた。

雅之はオートロックを解除し、普通の規格よりも大きなドアを開けた。そこには、麗羅が住んでいた四人部屋よりも大きな玄関エント

ランスがあつた。

「お……お邪魔します」

「ふう、違つだろ？麗羅。今日からここが、麗羅の家なんだよ？」

「そつよ麗羅、うちに帰つたらなんて言つのかしら？」

麗羅は心細さを醸し出しながら、上目でちらりと二人を見た。やがて

「……ただいま？」

「おかえりなさい！」

麗羅に初めて笑顔が零れ、そしてそれを夫妻は優しく見つめたのだ。孤独だった麗羅に、家族が出来た瞬間だった。

そして麗羅はある部屋に連れていかれた。

「麗羅、開けてみなさい」

雅之に言われて、おずおずと麗羅は扉を開けてみた。

「……………わぁ」

そこには十畳ほどの洋室に、可愛らしいベッド、勉強机、そして、たくさんのぬいぐるみがあった。クローゼットには色々な洋服もあった。

「あの……………ここは？」

「もちろん麗羅の部屋だよ？でも僕はセンスが無いから、家具も服も選んだのは摩耶なんだ。気に入ってくれたかな？」

雅之は麗羅を撫でながら説明した。

麗羅は弾かれたように顔を上げて、そして二人を見上げた。

「あのっ……………あのあの……………凄く嬉しいです……………その……………えっと」

麗羅は探るような目で二人を見ながら、でも、尻窄みになり俯いた。

雅之と摩耶は互いに頷きあい、そして麗羅の前にしゃがんだ。

「麗羅？どうだろう。僕らをお父さんとお母さんと読んでみないか？」

「ええ、今日からあなたは彼と私の娘なのよ？だから、そう呼んで貰えないかしら？」

バツと麗羅は顔を上げて、そして二人を見た。その目には涙が盛り上がっており、必死で零れないようにしていたようだ。

「ありがとう……お父さん……お母さん……うっ……ぐすっ……うああん」

麗羅には色々な思いがあったのだろう。だが、それは絶対に口にしてはいけない事だと、幼い麗羅は自分を戒めて生きてきた。だが、新田夫妻はそんな麗羅が一番欲しかったものを与えてくれたのだ。

それは家族　お父さんとお母さんである。

小さな手を握り締めて嗚咽する麗羅を、夫妻は優しく抱き止め、麗羅が泣き止むまでそうしていた。

家族はこうして出来上がったのだった。

それから三年間、つまり、麗羅が中学生を卒業するまでは、素晴らしい家族だったといえた。

「お母さん、これどうかな？」

「ん、ちよつと派手じゃないかしら？」

「大丈夫よ。だって、お父さんダークスーツばかりだもん……このくらい派手なネクタイで丁度いいよっ！」

「じゃあ麗羅が言うならそうしましょう」

摩耶は言ったら聞かない麗羅に苦笑しつつも、快活に笑う娘には勝てないと思い、雅之の誕生日プレゼントに選ばれたネクタイを會計に持っていくのだった。

「あっ、お母さん！私ちよつと買い忘れた文具があるから買ってくるねっ。」

「あらあら、ならそろそろお昼だし、上にあるレストランで待ち合わせましょかね」

「はあ〜い」

そしてその夜。

「Happy Birthday 雅之（お父）さん〜」

「ほらお父さん、ふーしてふー！」

雅之は麗羅に促され、勢いよくケーキのろうそくを吹き消した。

「雅之さん、これは麗羅と選んだプレゼントよ。開けてみて？」

「わあ、素敵なネクタイだね？どうだい？似合うかな？」

ネクタイを合わせながら、おどけた表情を見せる雅之。幸せを絵に書いたような家庭であると言える。

「似合うわ雅之さん。私はちょっと派手かな？なんて思ってたんだけど……むう、麗羅のセンスに嫉妬しちゃうわ？」

可愛らしく拗ねる摩耶だったが、麗羅が紙袋を「そ」と探っていた。

「どつしたの？麗羅」

「ふっふっふ……ジャーン！これはお母さんにサプライズのプレゼントです」

そういつて麗羅は化粧箱を取り出し、摩耶に渡すのだった。

「なあにこれは？」

「いいから開けてみてよ〜」

摩耶は怪訝な表情だったが、とにかく箱を開けてみた。そこには、いつも雅之に合わせてモノトーンな服装を好む摩耶に合わせた、少し派手なヴェルサーチのスカーフだった。

「……素敵」

「僕の誕生日に摩耶へのプレゼント……何を企んでいるんだい？麗羅」

ニヤニヤしながら麗羅は、有能な女秘書のようにクイツと眼鏡を上げ（麗羅の視力は裸眼で1.5）、取り出した手帳をパラパラめくった。

麗羅の怪しい雰囲気、思わずごくりと唾を飲み込む雅之と摩耶。

「えー社長の土曜日のスケジュールを確認は済んでいます。社長室長の山崎氏に聞いたところ、社長の土曜日の予定は20:00を持ちまして全て終了します。対しまして、奥様の土曜日の予定は18:00からのエステを持ちまして全て終了……という事で、21:00に前回の結婚記念日に行きましたイタリアンレストランに予約を入れました。メインは社長がお肉、奥様はお魚と致しましたが、変更は前日まで利くそうなので、ご留意下さいませ。尚、当日はこのネクタイとスカーフを着用して行って戴きます。以上になりますが、なにかご質問はございます？」

クイツクイツとやりながら、私はデキル女よ的なドヤ顔の麗羅であった。

「麗羅、それはどっいう趣向なんだい？」

「お父さん最近忙しいから、お母さん淋しがってるんだよ！なので、

強制デートをしてもらいます。これは絶対だからね?」

「麗羅……あなた、もう!ぐすつ……」

「そうだな、最近忙しかったもんな。よし、我らの優しい娘の策略に引っ掛かるうじゃないか、なあ摩耶?」

「……はいっ。ありがとう麗羅」

涙を溢し笑う美しい妻を見ながら、自分は仕事に逃げていたのかも  
しれないと反省する雅之だった。そして摩耶を抱き寄せ、額にキス  
をするのだった。

「だけどその日、麗羅の夕食はどうするんだい?」

「そうよ、いつそ麗羅も一緒に行ったら?」

すると何やらもじもじしながら、二人を上目遣いでチラチラ見る麗  
羅がいた。

二人は思った。こやつは何かを企んでいると。

「エへへ……私は、デリバリーのピザを食べるのです〜Lサイズを1人でもふもふするのです〜」

麗羅は無類のデリバリーピザ好きであった。お目目がハートになっている麗羅に、最早何を言っても無駄ときな臭い顔をする二人だった。

因みにデリバリーピザは、麗羅がここにきて間もない頃、雅之が麗羅に何が食べたいと尋ねた際、「……ピザが食べたいです」とおどおどしながら言った。

その脅える小動物が如く、チラチラ見上げる麗羅に、何やらキュンとした夫婦は、デリバリーピザを頼んだのだ。

しばらくは麗羅のしたいようにさせたいと考えていた夫妻は、毎晩麗羅に夕食を選ばせた。結果、十日連続ピザという恐ろしい荒行と化した。

施設にいた麗羅にとってデリバリーピザとは魅惑の食べ物であり、歯止めが効かなかった。

それ以降、新田家は祭事のみしかデリバリーピザは禁止のルールが生まれたのだった。

## 閑話休題

そうして麗羅が中学生の間は、誰が見ても幸せな家庭を地で行く家族の姿だった。だが、蜜月はいつまでも続かなかった。

麗羅が市内のお嬢様が集まる名門女子高に進学して数ヶ月たった頃の話だった。

長く続いたバブル経済が崩壊し、その煽りを食って雅之の会社は呆気なく倒産したのだった。

結果、多額の負債を抱えた雅之は、マンションも車も、つまり、財産という財産を処分する事となり、自宅は高級マンションから、2LDKの粗末なアパートに引っ越す事になったのだ。

今までの幸せだった家庭はどこかへ霧散し、優しかった雅之は酒浸りになり、妻や娘に暴力を振るうようになり、摩耶はそのストレスを娘にぶつけだした。

だが、元々貧乏に慣れていた麗羅は、なんとかやりくりし、毎日両親に食事を作り、明るい話題をふり、そして学校では禁止されているアルバイトをしながら、家計を支えた。

ある日、摩耶は実家に金の無心に行き、夜は雅之と麗羅の二人になったのだ。

麗羅はアルバイトが終わり、家に帰ってくると、大好きな父親の為にご飯を手早く用意し、自分は疲れた身体を癒すために風呂に入った。

風呂は命の洗濯……誰が言ったかは知らないが、麗羅は毎日のお風呂が唯一の楽しみだった。家計を支える麗羅には、友人と遊びに行ったりなど、自分の楽しみは全て捨て、家族に今までの恩返しをしたいと頑張っていた。だが、精神的にも肉体的にも疲弊し、風呂だけがリラックスできる時間になっていたのだ。

ゆっくりと風呂を楽しんだ麗羅だったが、脱衣場で身体を拭いていたとき、妙な視線を感じた。実は度々そのような視線を感じていたが、気のせいだと特に気にしていなかった麗羅のだが、今日はいつよりも強く、舐めるような視線を感じて、麗羅は思わず振り返った。

なんとそこには

「お父さん……なにやってるの？」

にやりとした下卑た笑いを浮かべた雅之がそこにいた。しかも、隆

々と屹立した赤黒い下半身をさらして。

「お父さん？やめて？ダメだよそんなこキヤア！」

雅之は裸の麗羅を抱きしめ、下半身を麗羅の下半身に擦り付けながら、娘の顔をなめ回した。その顔には優しさの欠片もなかった。

「やつ！やめてっ！」

麗羅は雅之を突き飛ばして拒絶した。だが、次の瞬間雅之は信じられない言葉を口にした。

「ふへへ……良い身体になったじゃないか麗羅。やはりあの時の選択は間違っただけじゃなかった。俺はお前を初めて見たときお前に欲情したんだよ！ここまで育ててやったんだ、黙って股を開けよ孤兒がっ！」

ガラガラと音を立てて、麗羅の中の何かが崩れ去った。

雅之は麗羅をリノリウムの床に押し倒し、強引にバスタオルを取り去った。

「イヤアアア！！お父さん止めて！！イヤアアア！！」

バシッ！バシッ！

雅之の殴打が麗羅を打ち据えた……そして麗羅の貞操は

「もうやめてハインリヒ侯！！」

「ハイン様やめてっ！」

「……実に興味深い」

ハインリヒの熱の入った話に、ルイズとモンモランシーは続きは聞きたくないとストップをかけた。シャルロットだけは興味津々だったが、それはルイズとモンモランシーに華麗にスルーされた。

「んだよ……ここからが良いところだったのに」

現在ハインリヒが何をしているかと言うと、学院に通う未来の妻のモンモランシーとシャルロットに会いに、学院に遊びに来ていたのだった。

ハインリヒはモンモランシーの部屋で、シャルロットを交えてイチヤイチャしていたのだが、そこにルイズが乱入し、ある相談を持ちかけた。

因みに、ルイズは今や、姉二人を陥落させたハインリヒを兄と慕い、ことあるごとにハインリヒに懐くデレデレ妹と化していた。

そして、ルイズがハインリヒに持ちかけた相談とは、アルビオン事変で有耶無耶になっていた学院の伝統行事「使い魔品評会」が、このほど行われる事になったのだ。

シャルロットはシルフィと、モンモランシーはロビンと何やら披露すると決めていたが、ルイズは使い魔がサイトという人間だし、特技と言えは剣くらいのものだ。

だが、ここは貴族が通う学院だ。生徒達は自領に帰ればそれぞれ軍や警備隊があり、剣を扱う平民など珍しくも無いのだ。

そこで頼れる兄に、何かいいアイデアは無いかと相談したわけだ。

そして、ハインリヒが出したアイデアは、ルイズ&サイト+デルフによる芝居であり、その演目にと披露したのが

「なんだかシンデレラなんていうお姫様の話じゃないじゃない……  
……」

「何いつてんだルイズ。シンデレラじゃないぞ。これは現代劇「新  
田麗羅の華麗なる人生・暗黒篇」だぞ？この後の「新田麗羅の華  
麗なる人生・飛躍篇」で楽しくなるのになあ……」

「というかそんなどろどろした話……ダメよ」

ため息をつくルイズとモンモランシーだった。

「……是非その話の続きを聞きたい。取り敢えずベッドに移動する  
べき」

「行かせないから！」

こうして無駄に夜が更けていくのだった。果たしてルイズの依頼は

無事に達成されるのだろうか？

その……に……

?? つばみから花へく私はルイズうくいえいいい その? (後書き)

そういえば、オスマンとか書いてなかったなと今更ながら気が付き、  
せっかくだからと二、三話学院篇でも書いてみようと思いました。

しかしまあ、何書いてんだホント………すみません

?? つばみから花へく私はルイズうくいえいえいえい その? (前書き)

オスマンさんわすれてた

?? つばみから花へく私はルイズうくいえいえい その？

「ハインお兄様、申し訳ないけどどろどろした愛憎劇は却下で……他になんかないかしら？ 割りと簡単な出し物は」

うーん……と頭を悩ませる一同だった。普通に考えても、それなりの人数の前で披露する芸なんか、そんなすぐにパツと閃きはしないものだ。

「はっ！ハインさま、いい考えが！」

「なんだいマリー？」

ハインリヒは、モンモランシーが、「ボク、いい事思いついたよ！」と勢いよく尻尾をふり、頭の上ではぴよこぴよこ動くイヌ耳を動かす獣化した姿に見えた。

「えっと、ミスタ・サイトは剣もそうだけど、身体も頑丈そうだから、ルイズが鞭を振りながら、火の輪くぐりとかいいです！」

ねっ？ねっ？と寝めて感をアピールしながら、モンモランシーはハインリヒに擦り寄ってる。

むかあ シャルロット

「前の私なら喜んでやったけど……今はサイトが可哀想だから……  
ヤダ」

若干頬を染めてイヤイヤするルイズ。

「へえ……」 ハイソ

「へえ……」 モンモン

「……………」 ……！？

何やら微妙な空気になってしまった一同だが、満を持してシャルロットが立ち上がった。

「……………」

「「「何もないんかいッ！！！」」」

てへつと小さく舌を出したシャルロットに、全員の不快指数はMAXだ。シャルロットは一仕事終えた女の顔で、ハインリヒの膝に座り、何事も無かったかのように本を読み出した。

「うーん……うちにギターあるし、サイトに演奏でもさせて、ルイズ歌えば？仲良しアピールも出来るし、いいんじゃないね？」

「うっ歌ですか？なんか恥ずかしいなあ……」

「でもほら、本番まで10日も無いしさ、サイトのルーン使えばギターなんかすぐマスター出来るよ。ギターを武器に戦う悪魔もいたし……多分大丈夫」

「うーん、アイデアも出ないしそれ頑張ってみます。でも、どんな歌うたえばいいでしょうか？まさか 神の左手ガンダールヴ勇猛果敢……とかやるのもどうかと思うし、お兄様何かありませんか？」

「うーん、俺の故郷のアイドル（むしろ俺の嫁）の歌をハルケギニア風にアレンジして歌えばいいと思うよ」

「例えばどんなです？」

「まあ見てるがいい」

ハインリヒは膝の上のシャルロットをモンモンの膝の上に移し、立ち上がった。そして、くねくねしながらアイドル風な歌を歌いだした。

きゅーいきゅーい

きゅーいきゅーい

私の彼はドラグーン

キラリ輝って急降下

翼バサバサ急上昇

長く尾を引くブレス雲で

大きなハートが重ねて二つ

青い大空 ラヴサイン

I LOVE YOU・YOU LOVE ME?

だけど彼ったら

私より自分の風竜にお熱なの

きゅーいきゅーい

きゅーいきゅーい

私の彼はドラグーン

「なんだか……」

「可愛いのが……」

「ムカつく……」

歌は評価されたのに散々なハインリヒであった。だが、いい年こいて俺の嫁とか正直どん引きである。

「うるへー!!」

「ハインさま、いま誰と話してたんですか？」

「気にしちゃダメだよマリー？強いて言うなら、電波ってやつかな？ふっ……」

「」「？」「」

ぽかんとする三人ではあるが、取り敢えずルイズの歌で決定したらしい。

「さて、そろそろルイズは部屋に帰ったほうがいい、とモンモンは若干の嫌味を込めて言うのです」

「モンモンの意見に激しく同意する、とシャルロットは怨念を込めて言うのです」

宴もたけなわという事だろうか？モンモンとシャルロットは、どこかの妹達のような口調でルイズに帰れコールを始めた。

「なっなによう〜」

「「18禁展開が始まるのよ、とモンモン（シャルロット）は空気を読みやがれちんちくりんと怒りを込めて言います」「」

「うわーんッ！……ドリル頭に私より貧乳のバーカバーカ！！死んじゃえバーロー……」

ルイズはバーローバーローバーロー……、とドブプラー効果を残し帰っていった。

「ハインさまあ……」

「ハイン……」

ハインリヒは妻二人から両脇をクラッチされた。彼女達の指先が、ハインリヒの胸の二つのピンクのボタンをこねくり回しているのが二人の成長を物語る。

「五月蠅いルイズも居なくなりましたし……」

「ルイズはひとつ……」

「「ねっ?」「」

至近距離からの二人の上目遣いの「ねっ?」に勝てる男が居るだろ

うか？いや、いまい……ハインリヒのハインリヒが魔界の超金属、ソウルメタルと化した瞬間であった。

その時である

バアンツ……！！

勢いよくモンモランシーの部屋の扉が開かれた！

「（エツチな）団らんはそこまでよ……！！微熱改め灼熱のキュルケ参上よ！ハインリヒ様、そんな粗末な小娘より、時代は褐色、巨乳である私を求めているとは思いませんこと？オーホツホツホツ……」

口に手を当て高笑いをするキュルケだったが……

「シャルロット」

「……なに？」

モンモランシーの親指が首をかつ切り、そして下を向き、下ろされ

た。「おいシャルロット、あの女を地獄に落としてやりな」のゼス  
チャーである。

「……………ウインディ・アイシクル」

哀れキュルケは星になったとき。

ハインリヒは気にしたら負けだと気を取り直し、二人をベッドに引  
きずり込んだ。その後何があったかは何れノクターンで語られるで  
あろう。

こうして学院の騒がしい夜は更けていった。

翌朝、身体中にキスマークを付けられたハインリヒが目を覚ました。  
暫くぼーっとベッドに上半身だけ起こした体勢でいたのだが、やが  
てむくりと起きだし、何やらストレッチなどを始めた。

まだ意識が覚醒していないのか、ドアをノックされている音に気が  
付かないハインリヒだった。だが

トントントントントント

『ミス・モンモランシー、洗濯物を受け取りに参りました』

ようやく気が付いたハインは、半分閉じた目のまま、ゆらりゆらりとゾンビのように扉へ向かった。

パタム……

ドアが開くとそこにはシエスタがいた。

「あの……洗濯……物……取りに……ジーツ」

寝呆けているハインリヒは、シエスタの妖しい視線に気が付かない。因みに今のハインリヒの格好は、ボクサーショーツ一枚のみである。さらに、ハインリヒは健康な男子であり、という事は当然股間がエクスプローションな訳だ。

シエスタの目線は、ハインリヒの盛り上がった肩、張り詰めた胸筋、六つに割れた腹筋を彷徨い、そして最後は怒髪天を衝くが如くそそり立った、ハインリヒの悲しみロケット二号に固定された。

シエスタは頬を赤らめ、息が若干はあはあと荒い。何度も言うがハインリヒは寝呆けている。そして、シエスタはかなりの妄想体質であった。

色々な運命の糸が、本人達の意志を越えて複雑に絡み合ったのだ。  
それを誰が責められよう。

シエスタは頭の中で、ルイズの髪の毛の色の十倍（当社比）ピンク色した妄想を抱き、そのまま行動に移した。

ひしっ……

「あのっ……あのあの……ハインさまぁ……これはもうお情けを戴くしか……はっっ……」

シエスタはハインの厚い胸板に飛び込み、ぐりんぐりんと頬擦りした。

にへらと笑ったハインリヒは、まだ焦点の合わない霞かった目でシエスタを見た。彼にはこう見えた。メイド服で甘えにシエフィールドがやってきたと……

こうみえて妻たちにはサービス精神が旺盛だ。ハインリヒはおもむろくにシエスタを壁に押し付け、メイド服のスカートの中に顔を突っ込んだのだ。

「ひゃあ……はうつ……そこは汚つ……やん……らめえええつ！  
」

何やらスカートの中ではれるっ…だの、ちゅぷっ…だの、ぬぷぬぷっ…だのと擬音が聞こえたが、残念ながらスカートで遮られ伺い知れない。

ただシエスタが、真っ赤な顔を手で隠し、身体をびくんびくんと震わせていた。何故かは謎だが。

恍惚としてヘブン状態のシエスタも、寝呆けてパブロフの犬状態で何かをなめ回すハインリヒも気が付かなかった。

最早鈍器と呼べる杖と、某蜂の郵便配達員の少年の相棒の少女のよう  
うに、鋭利な刃と化したドリルヘアーが二人に迫っていることを……

「いやああああ……」

「ギャー……」

爽やかな朝日に照らされた火の塔には、お世辞にも爽やかとは言い  
難い悲鳴が響き渡ったと言っ。

ぶんぶん、私達、凄く不機嫌なんですからね？的なオーラを振りまきながら、柱の陰からチラチラ見ていたキュルケを拾い、食堂へやってきたモンモンとシャルロットだったが

「おー！遅かったな〜！先に食ってたぞ？ほれ、ここ座れ！」

そこには山盛りの料理に囲まれ、「相変わらずマルトーの料理は最高だぜコンチクショ〜！」などと感涙しながら料理を頼めるハインリヒがいた。

そしてハインリヒの横には、もはや彼の専属メイドと化したシエスタが、せつせとお茶を注いでいた。

「ななななんているんですか？ハインさま……たしかにそのメイ

ドと一緒に意識不明にしたはずなのに……」

ふっ、とアンニユイな表情をしたハインリヒだったが、やがてニヒルな笑みを張り付けるところだった。

「それはね、マリィ。俺が主人公だからさ。主人公は決して死なないんだ。そして何より、ギャグパートの補正を舐めちゃあいけないほら、銀 なんだって、春に喰われても血を流すだけだろう？ つまりはそういう事なのさ。わかったかい？ My Sweet Lady」

ハインリヒはモンモンの肩に手を置き、お互いの額をつけるような距離で話す。ハインリヒの笑顔がキラッ っと光った。

「……………やはりタダ者じゃないわね、ハインリヒ侯……………イケメンと言っても差し支え無く、貴族としても申し分無い地位、さらには各国の王族クラスと友人付き合っているその人脈……………その完璧超人ぶり……………なのに敢えて笑いに走り、「格好よさ」よりも「いかにオイシイか」を善しとするその潔さ……………何よりその堂々たるメタ発言……………流石よハインリヒ侯……………嗚呼、私の股間の灼熱がどーろどろどーろどろ……………」

「……………ウィンディ・アイシクル」

「あひい〜」

そして星になったキュルケであった。

因みに元恋人であるモンモンに未練が隠せないギーシュが、マリコ又ルの陰から出番を窺っていたが、現恋人であるケティに引き摺られて行ったのは些細な事だ。

「こほん……それでハインさま？今回の滞在は長めですが、もちろん私達は嬉しいのですが、何か用事でもあったのですか？」

カオスな時間を強制終了し、席に着いたモンモン達は、優雅に朝食を摂りながらハインに聞いた。

「いやあ、実はさ？学院からマチルダとジャンを引き抜いたじゃないか。あれさ、よく考えたらオールド・オスマン氏にちゃんと挨拶してないんだよ俺。だからさ、無沙汰の謝罪と、今後の顔繋ぎも兼ねて、ちゃんと挨拶しようかなとアポイントとったわけさ」

モンモンとシャルロットが学院に在籍しているため、領地に二人は今住めない。そこでハインリヒは二週間に一度、領主として多忙

な中、こうして学院を訪ねるようにしていたのだ。

竜っ子達のおかげで日帰りが可能な為、ハインリヒは朝早くやってきては一緒に朝食を食べ、夜遅くに帰っていくのだ。仕事が忙しい為に、どうしても日帰りになってしまい、泊まっていくことは皆無だった。それ故のモンモンの質問だったのだ。

「なるほど、だから最近学院長は暗かったのですね……」

「……突っ込み役のいないボケは悲しい」

「学院長の舐めるような視線が、私の褐色の谷間を見ていたのはその為なのね……」

「私のスレンダーで凹凸のないならかなボディラインを見ていたなんて」

「…………それは絶対にならないから!」「…………」

「何よもう!行くわよサイトツ…………ぷいっ」

いつの間にか居たルイズ&サイトが退場していった。

「まあそんな訳で、マチルダにセクハラ出来ない可哀相なオスマン氏にな、俺の故郷から持ってきた、寂しい男性の夜の潤いグッズの詰め合わせを渡しに来たってわけさ」

「え！？潤いグッズ！？気になりますわ」

「……興味津々。すぐに見せるべき」

「いやいや、婦女子には見せられんよ……。ああ、キュルケには理由は秘密だが、女性版夜の潤いグッズ持ってきてやる。あ、シエスタにもやるか……」

ズルイー！！と騒ぐモンモンとシャルロットだったが、キュルケとシエスタは、何かとても失礼な事を言われた気がしたのだった。どこの世界も、女性の勘は侮れないという事らしい。

こうして朝の一時を過ごしていたハインリヒ達だったが、予鈴が鳴り、生徒であるモンモン達は名残惜しそうに授業に向かっていたのだった。

コンコン……

静かな石造りの廊下にノツクの音が響く。ここトリステイン魔法学院は歴史と伝統のある学校施設ではあるが、その佇まいは最早、学校の校舎というには憚られ、一個の城と言えるだろう。

ハインリヒがかつて日本人だった頃、リフレッシュ休暇を使いヨーロッパへ旅をしていたものだが、スペインやドイツでみた由緒ある古城をこの校舎は彷彿とさせた。

トリステイン魔法学院は、五つのペンタゴンを模した塔と、中央にある本塔により構成されている。

因みに、本塔には学院長室、男子寮、図書館等があり、モンモン達がいる女子寮は火の塔、生徒達が学ぶ為の教室は風の塔にあり、それぞれ渡り廊下で行き来するようになっていいるのだ。

コンコン……

再度ノツクの音が響いた。

「どうぞ、入っておいで」

ハインリヒは扉を開けて部屋の中に入った。そこは派手ではないが、無駄なく配置された調度品の数々、ゆったりとした応接、そして重厚な造りをした巨大なデスクがある。

ここはトリステイン魔法学院の学院長室、そして、笑顔で迎えるはこの部屋の主、オールドの異名を頂く、年齢不詳の老紳士、オスマンであった。

「おお、ハインリヒ侯、一瞥以来じゃな」

人の良さそうな笑顔を浮かべるオスマンだが、その目はハインリヒを値踏みするように見ている。こういう老獪さが、彼の本質なのかもしれない。年齢100とも300とも言われているが、真相は本人しか分からないだろう。何故なら彼より長生きした人間は居ないのだから。

「ふふつ、探ったところで何もでないよ、爺さん。というか探査魔法かけるのはクセなのかい？手癖悪いジジイだぜ」

そうして悪態を尽きながら、ソファアに腰を下ろすハインリヒだったが、右手には油断なく牙狼剣が握られている。

「で？手紙に書いてあった用件だが、実際なんなのよ？コルベールもマチルダも元気にやってるぜ？」

「コルベールは教師よりも研究者が向いているでな。いまさら文句はないよ。ミス・ロングビル……いや、マチルダじゃったかな？彼

女の子のお尻を触れんのは残念じゃがのう……じゃが、それは些細な事じゃ。ワシはお前さんに興味があってな？一度ゆっくり話したかったんじゃ」

先ほどまでの人畜無害な翁然とした雰囲気は消え失せ、何世紀も生き抜いた百戦錬磨のメイジがそこにいた。

「お……いい殺気だすじゃない。流石生きて化石！」

「化石言うな！むう、ワシの殺気を易々といなすか。流石よの？黄金侯」

「いやあ、アンタがどれだけ優れたメイジだろうが、所詮、魔法使いだろ。魔法使いじゃ俺には役不足なんだわ。まあ、魔法至上主義なハルケギニアの人間にはわかんないだろうがなあ」

スツとオスマンの目が細くなった。その時、お茶を持ったメイドが入ってきたが、濃密な殺気に当てられ、逃げるように去っていった。

「所詮魔法のう……ならば、黄金侯、魔法についてのお主の見解を教えてくださいんかの？メイジとしては興味深いことじゃてな？」

「そうだな、例えばだ……この国で烈風カリンって凄いメイジがいただろ？その強大なメイジが一人いるよりさ、よく訓練された千人

の兵隊に、高性能の銃と弓を持たせたら、いくら烈風が凄くても、近づく前に殺せるわな。つまりは一人の凄腕メイジは、数の暴力には勝てないんだ」

「しかし、かつて烈風は数々の戦果をあげておるよ？単独による戦果が多いからこそその二つ名であり、彼女の伝説なんじゃろ？」

「それは先入観だ。強いメイジには勝てないってな。例えば戦艦級の大砲で十字砲火されたらアンタどうするよ？」

「まあ、スクウェアスperlで対抗するしかないわな」

「んじゃ、そこに近接兵士をそこに特攻させたら？さらにその後方に大量の銃を配置したら？」

「むむむ……それはちと厳しいわな。あまりイジめんでくれ」

「ははっ、すまんすまん。ようはハルケギニアの魔法ってやつは不便なんだよ。なに杖って……バカでしょ杖ないと魔法使えないって……」

「しかし、実際使えんのじゃ」

「それが先入観なんだって……見てろよ。ここに何の変哲もない葉巻があります……」

カキンツシュボツ……

「な？火ついたらろ」

ハインリヒは懐からライターを取り出し、葉巻に火を点けた。ジヨゼフに見せたのはデュポンのガスライターだったが、今回はジツポだったようだ。

「むむむ……それはマジックアイテムかのか？」

「いんや？ただの道具だ。魔法でもなんでもないよ。要はさ、ウルカーノって火点けても、道具使って火点けても、結果は一緒だろうが。だから言ってるんだ。魔法自体が先入観の塊で、幻想だって」

「お主、何を考えている……」

「べつつに。ただ、貴族の中にもリベラルなのはいるんだろうさ。だが、このハルケギニアはリベラルなことが罪なんだろう？どっかのカルト教団のせいだよ？」

「お主……」

「考えてもみるよ。エルフや亜人をタブー視するのはなんでだよ。先住魔法が系統魔法より優秀だからだろうが。教会が異端扱いする事柄は大概は教会の権威を揺るがす案件ばかりだろうが……」

「おまさかロマリ」

「こらジジイ。黙ってガキの親玉やつとけよ。自分の知識欲満たしたいだけならやめとけ。お前が今後余計な動きをしたら殺すぞ」

「出来るか？小僧」

「まあ、括り殺すのは楽勝だろうな。だが、俺は知らんが、いつの間にかお前が食う飯には無味無臭の毒が盛られるかもな？」

「むう……恐ろしいやつじゃ……」

「とまあ、真面目なこと言っただけどさ、実際は俺と俺の大事な人間が幸せならいいんだ。少なくとも、俺が節目節目で現れて、美味しいところ全部奪ってたら、なんか悪さをしようとするやつは、まず俺を排除しようとするんじゃないかなあ？」

「なっ……本当に恐ろしい奴じゃ。そして難儀な生き方しよる。ふっふっふ……いや、面白いこと聞けたわい」

「ジョゼフもジェームスも狸だが、あんたもだな……人の弱いところについて本音引き出しやがる……」

「わっはっは！それが老人の特権じゃ」

人は基本的に他人に本音は話さない。それは弱味に繋がるからだ。だからと言って嘘を吐いてる訳ではない。ただ、真実を言っているが、その全てが本音ではないというだけなのだ。

誰かの本音を聞きたいならば、正気を失わせるのが一番早い。つまり、怒らせるか泣かせるのだ。

人が感情を爆発させた時、吐き出す言葉の多くは本音なのだ。言葉のコントロールは、心に余裕があってこそ出来るのだ。

「あ、そうだ。土産あったんだ。ほら受け取れ」

そういつてハイソリヒは何やら重そうな紙袋を取り出した。

「むうなんじゃこの本は……それにこの不思議な筒は……マジックアイテムかの？」

「それはな……快……天でな……な娘が……なんだわ。で筒は……を…  
時に……又ル又……ENGAに入れるんだ……だからマジやばいよ」

「フオオオオオツッ！！！！ハインちゃん！！！！これは……これは…  
フオオオオオツッ！！！！」

オールド・オスマンの狂乱ぶりでハインリヒが渡したものを察して  
欲しい。

「じゃあ帰るよ。モンモランシーとシャルロットの事、よろしく頼  
むよ。学院の事なら何でも援助するからさ。やっぱり学生は学生のま  
まで居てほしいからさ」

「……ふむ、その辺にお主の真意がありそうじゃな。トリスティン  
王国に害意があるのか確かめるつもりで呼んだのじゃが。なかなか  
どうして……汚れ役ばかりはしんどかるうて」

「出来る奴がやればいいのさ。まあ俺は可愛い妻たちを守る為には  
何でもやるしな？そんな難しいことは考えてないんだよ実際」

「成る程の、ジジイの邪推だったな　ハインリヒ侯、数々の無礼  
を許して下さい。生徒達を心配するが故の行動でした」

オールド・オスマンは急に居住まいを正し、無礼を謝罪した。伝統あるトリステイン魔法学院の長だとて、立場は侯爵であるハインリヒのが上なのだ。

ハインリヒは思う。こんな素直で見事な謝罪ははじめてみた。人の上に立つ人間は、実力よりプライドの方が高い場合が多い。

だが、オスマンは自分より遙かに年下のハインリヒに頭を下げたのだ。口だけの謝罪ではなく、作法に則り、深々と頭を下げて、だ。

「まっ堅苦しいのはよしにしましょう。ジジイが何か依頼したいときはいつでもいいな。万屋ハインリヒは、依頼達成率は十割なんだ。この先、”何が起こるかわからないからな？”」

ハインリヒは最後の語句を強調した。そして、強い姿勢をオスマンに向けながら立ち上がる。

「火種は既にあるということか……？」

「まあ、後数年以内つてどこか？まあ、トリステイン王国は大丈夫かな。ただ……今はいいや。取り敢えずは生徒達をきっちり鍛えたいらいいと思っぜ。きっちりな」

「ふむ、貴重な意見をありがとうと言うところかの。詮索はもうせん。ただ、何かある時に、このオスマンという人材がおるといふ事を忘れんでくれ。いい加減、引きこもり生活も飽きたわえ」

「ふふっ 食えないジジイめ……でもま、感謝するよ。じゃ帰るわ。また寄らせて貰います。バイバイキーン」

オールド・オスマンの制止も聞かず、ハインリヒはさっさと部屋をでた。だって、ジジイの相手なんかアンタだって嫌だろう？…と某西口公園の果物屋のせがねなら言うだろう。まあ俺は「トリステイン最ツ高オオ！」とか言わないけどね？

#### 閑話休題

その後俺は、学院長との何だかわからん禅問答のようなやり取りを終え（まあオスマンは生徒思いだったって事さ）、モンモンやシャルロットの授業を小窓から覗き、変顔で笑わせ、そしてルイズ&サイトを拉致してオルニエールに軟禁した。

あれだ、使い魔品評会の練習なんだ。というか俺は意外と凝り性なんだ。二人とも素材はいいしな？

ふふふ、当日が楽しみだな。ちなみに、ルイズ&サイトが我が屋敷に滞在中、あいつら寝たしまあいいかと、リビングのソファでエレ

ンとカトレアと三人でイチヤイチャしてたんだ。

まあ、濃厚な姉妹井プレイをしていたが、うちではわりと普通じゃないか？けど翌朝、ルイズは姉達に土下座しながら弟子にしてくれなんて騒いでるし、キャラ変わりすぎだろうが……

サイトに至っては、「やはり師匠は最高っす！出来れば僕も複数プレイを学びたいな〜なんちゃってテヘツ」……バカが、後ろみやがれバカ弟子が……

ルイズ選手、杖を構え、第一球を……投げました！！ ドカンッ！！おっと見事な爆発がサイト選手の芯を……ジャストミートッ！！おーっとこの飛距離は凄い！！何処まで行くのか！！おっと、アンパイアが手を回した……ホームラン！！ホームランです！！！！ サイトは星になっちまった。口は災いのもと、キジも鳴かすば撃たれまい 昔のヒトはよく言いましたと

まあ、そんなこんなで使い魔品評会になるのだが、あれっ？いつの間にか一人称？？

まあ、気にしたら負けさ

んじや、その？に続く

?? つばみから花へ〜私はルイズう〜いえいえいえい その? (後書き)

なんか文が安定しなくてすいません。

暫くはロマリアまでの間の拠点イベントかな？

回収しなきゃいかんのもあるしね。

グダグダさーせん。

因みに、『夏目友人帳』って知ってます？

僕は嫁はんの本棚漁ってたら見つけたコミックを読んだのですが、  
凄く気に入ってしまいました。

妖怪達がラブリー過ぎます。

でね、子狐が出てきて、ズコーンとやられました。萌えの真髄を見  
た気がしました。

僕が子狐可愛いと呟いていたら、嫁がいました。DVDがあるよ  
と。

僕は狂気乱舞しながら、見ましたわ……アカン……鼻血でそう……可愛すぎる……

やばいよやばいよ可愛いよと、ゴロゴロしながら悶えてたら、嫁から一言

『子狐オスだから』

すげえドヤ顔でした。腐った世界へいらっしやいみたいな……

ああ、ショック……でも可愛いは正義ですもんね……

ああ、子狐に懐かれない 末期

？ 0 つばみから花へく私はルイズうくいえいいえい 最終話（前書き）

シリアスのな何か

? 0 つばみから花へく私はルイズうくいえいえい 最終話

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、ある意味日陰の人生を送ってきたといっても過言ではない。

トリステイン王国の公爵家であるヴァリエール家は、トリステイン貴族の中で、名門中の名門と言える。

ルイズはそのヴァリエール家の三女である。普通、名家と言えど三女ともなれば、大概はそれなりの家柄の貴族家に嫁に行き、公爵家の派閥の繋がりの為の政略結婚の駒でしかないのだが、ヴァリエール家は若干特殊である。

というのは、ヴァリエール家には三人の子がいるが、何れも女子であるのだ。そして、長女が性格に問題あり。次女は不治の病。現在は改善されてはいるが、何れも現在家出中である。

となれば、三女に期待がかかるのだが、ハルケギニアの貴族には必須である、メイジとして、系統魔法の能力がルイズには皆無である。

あくまでも”系統魔法”の能力がある。つまり、所謂四系統に属さない虚無の担い手なのであるが、そこにはハインリヒが介入しており、虚無に覚醒するに到ってはいない。

このハルケギニアで、現在虚無に覚醒しているのは、ガリア王ジョゼフ一世ただ一人である。それは、ガリア王家に伝わる秘宝により、ハインリヒが介入する前に覚醒したからである。

ハインリヒはアルビオン王国の秘宝と、コルベールが所持していた火のルビーを押さえており、トリステイン王国に伝わる秘宝は、ハインリヒの口添えにより、マザリーニ枢機卿が管理しており、ルイズには接触不能になっている。

つまり、ジョゼフ以外の担い手、ティファニア、ルイズ、ロマリアの現教皇の三人が虚無に覚醒するには、必ずハインリヒが関わる事になる。要はハインリヒのさじ加減ひとつという事だ。

ハインリヒが何故、虚無に介入するのか？であるが、ハインリヒに言わせると、虚無など公害以外の何者でも無いからである。

当代4人しか存在しない虚無の担い手、その意義は4人揃って聖地に赴く事にあるという。結果、異世界の扉が開くのか、はたまたブリミル本人が降臨するのか？ハインリヒには分からないし、他の誰にも分からないだろう。

ただ、過去の何かをほじくりだした所でろくな事は起こらない。人類は未来に向かって歩いているのだから、がハインリヒの持論である。そして、4人しかいない虚無の担い手を押さえる事は、ハルケギニアのパワーバランスを制する事と同義である。

だからこそハインリヒは、虚無覚醒に必要な秘宝を破壊し、今後虚無に覚醒出来ないようにするのを至上命題としたのだ。有体に言えば、たかだが魔法使いの系統ひとつで、いちいち戦争するんじゃないよ馬鹿野郎という事である。

そんな訳で、現在ルイズは自身の系統に目覚める事無く、落ちこぼれのままである。

つまり、落ちこぼれメイジのまま婿を取り、ヴァリエール家を継ぐと、ハルケギニア貴族の常識から言えば、なんだ公爵家も落ちこぼれたものだ となる。

だが他人に厳しく、身内にはあんに練乳かけてさらに粉砂糖ふりかけ、止めはメイプルシロップをかけるほど甘いハインリヒである。立场上、可愛い義妹になるルイズを放置などしないのだ。

「さつとと、歌の練習にいきましょうサイト」

「おう！お前ならきつとみんな見惚れるぜ！」

「ばっバカ！おだてたって何も出ないんだからね！」

「はいはい、お嬢様」

「もう……見惚れてくれるのはアンタだけでいいの」

「ん？ルイズ、なんか言ったか？」

「なっ何でもないわよ……バカ……」

現在、件のルイズさん達は、一日の授業も終わり、自室にて寛いでいたのだが、間近に迫る「使い魔品評会」の出し物の練習に勤しもうかと腰を上げた所である。

「と、とにかく広場にでもいきましょ」

「おう！」

ガチャ……

「……………」

部屋の扉を開けた目の前には、ハインリヒがいきい笑顔で立っていた。

「な、な、なんですか？お義兄様……？」

「し、師匠……なんか怖い笑顔が……」

「H A H A H A H A……ご機嫌よう！二人とも！」

「「ご機嫌……よう……」」

「じゃあ逝くか！一週間分の着替えを用意しな！」

「「へっ？」「」

「へっ……じゃねえよ。とつとと用意しろクソ虫ども。オルニエールで合宿だ！」

ハインリヒは笑顔で牙狼剣を抜き、ブンブン振り回している。もはやキガイである。身の危険を感じた二人は、あわてて準備をするのだった。

「オラ、逝くぞ！」

ハインリヒは、ポイポイとルイズ&サイトを窓から蹴りだした。

「ぎゃああああ！！」

窓の外には久しぶりに登場の竜っ子初号機ユイが待ち構えていた。最後に未だ高笑いを続けるハインリヒが飛び乗り、あっという間に夕陽に染まる空に消えていくのだった。

## ハルケギニア上空

「あのう、お義兄様？特訓って……学院の授業は……」

「ああ、ジシイに許可はとってあるから心配すんな。だからキリキリ動けよな。キリキリ」

「うっう……サイトお……」

ルイズは縋るように最愛の彼を見た。……目を逸らされた。

「……無理だ。師匠は言ったら聞かない人だ。諦めろ、ルイズ。……」

……骨は拾ってやる」

ルイズに味方は居なかった。憐れ。

オルニエールのハインリヒの屋敷に着いた一行は、巨大な会議室のような場所に移動する。

ハインリヒが重厚な扉の前に止まり、二人を振り返り、真顔で見つめた。ルイズ&サイトは異常な緊張感に包まれた。何故ならハインリヒの表情が無いからだ。

無機質な顔ほど不気味なものは無いからだ。先程までのおちゃらけた雰囲気など消え失せ、ただ、ルイズを見ていた。

「なっ……なによ……」

「ああ、お歌の練習の前に、ちょっとばかりお話があるんだな」

「えっ……」

バンツー！

ハインリヒは扉を開け放った。そこには

ハイン一味、ヴァリエール夫妻、モンモランシ夫妻が控えていた。それぞれ巨大な円卓に座っている。どうやらハインリヒ達の到着を待っていたようだ。

「ルイズ、使い魔君、席に着きなさい」

ヴァリエール公爵が口火をきる。その顔は、ルイズの父親ではなく、公人の顔であった。

「はい……」

二人はおずおずと腰掛け、一同の顔色を窺うが、一様に厳しい顔をしている。

「さっ、じゃあ始めますか。とりあえずルイズとサイト、俺がこの悪巧み集団のボスだ。お前の両親とモンモンパママは俺のご意見番で、パートナーってとこだ。まあ、あとはここにはこれないお偉いさんも何人かいるが、まあ、そのうち合わせる」

ハインリヒが立ち上がり、この集まりの趣旨を説明し始める。

ルイズは不可解だった。何故なら、いくら実力があるとは噂されるハインリヒ侯であるが、貴族の地位から言えば、当然父親の方が上である。だが、実際ハインリヒ侯の物言いを聞くと尊大であり、両親はそれに付き従うように見えるのだ。

そして円卓での配置だ。ハインリヒを中心に、その両側にヴァリエール公夫妻とモンモランシ伯夫妻、そこから順にハイン一味が配置されている。どうみてもハインリヒが盟主に見える。

「続けるぞ？この会の趣旨はだ、国という境界を越えた同じ思想を抱く人間の集まりだ。それは、自らの利益と国、ひいてはハルケギニア全土の利益を同調して追求するという思想に基づいている。そこに身分の上下はさほど問題ではなく、強いて言うなら適材適所だな。例えば俺はビジョンを描き、そして前線に立つ。公爵と伯爵は政治的根回しを担当し、逆に俺を監視し、暴走したら諫めるという役割もある。妻たちは俺をサポートしてくれるし、まあ各国の王様もスポンサーになってくれている」

よく見ると、背後の壁にはトリステイン王国、アルビオン王国、ガリア王国それぞれが交差するように掲げている。

「えっと……お義兄様達が、何か凄いい仕事をなさっているのは分かりました……はい。ただ、私は何故呼ばれたのですか？」

ルイズは不安そうに話す。それはそうだろう、ここにいるメンバーも、顔を見せていないが、他のメンバーも、言うなれば各国のVIPである。いくら公爵家息女だとて場違いだと感じてしまうルイズだった。

「それは私が話しましょう。宜しいですか？ハインリヒ侯？」

カリーヌが立ち上がり、ハインリヒへ許可を請う。ハインリヒは軽く頷き同意を示した。

「お母様……？」

「ルイズ、まず貴女に謝らなくてはなりません。幼少の頃から貴女に魔法の訓練を強いて、貴女を萎縮させてしまった事を……ごめんなさい、ルイズ」

驚く事にあの烈風カリンと怖れられ、規律に忠実な女騎士であるカリーヌ・デジレが頭を下げた。そして

「おちび、私もごめんなさい。貴女を沢山傷付けたわね。不甲斐ない姉を許して頂戴」

母親に続いて、姉であるエレオノールすらも頭を下げた。

「あつ……あの……えつと……はい、ありがとうございます……でも、何故謝らなくてはならないかが……わかりません」

「最もです。理由は今から説明しますよ。まず、あなたは落ちこぼれメイジではありません。今まで貴女は必死に努力してきましたが、魔法は成功しませんでした。ただ、才能が無かったのでは無く、努力する方向性が間違っていたのです」

「えっ……」

「質問は全ての話が終わったら受け付けましょう。貴女は四系統に属さない、もう一つの系統　つまり虚無の系統です。ですから貴女は四系統の修練を繰り返した所で、魔法が使えるようにはならないのです」

「虚無……わたしが虚無……」

毅然とルイズに説明するキャリア女だが、当の本人はあまりの衝撃に呆然としている。

元来努力家なルイズは、なんとか魔法を使えるようになりたいと、来る日も来る日も鍛練に明け暮れた。それと同時に、家の教育の賜物ではあるが、誰よりも貴族たれと自身を戒めて生きてきたのだ。

それはある種病的でもあるほどに、だ。魔法が使えないならば、普段の生き方で責められないようにしなければならぬ。ある意味、自分を守るための彼女なりの処世術だったのだが、それは強烈で強固な固定概念を産み出してしまったのだ。

所謂、魔法至上主義、貴族至上主義、そして　ブリミル至上主義である。物事全てをそのフィルターを通してしか見れなかった。使い魔のサイトを召喚した際の、家畜のような扱いも、「サイトは人間ではあるけれど、使い魔はメイジの下僕」という考えだったからだ。

現在は、サイトを人間扱いし、恋の対象になる事で緩和されたが、それはルイズが孤独な人間であり、サイトがそれを埋める素養があったからそうなっただけで、サイトの性格如何ではどうなっていたかはわからない。

そういう原理主義のようなルイズであるから、現在のルイズの心は激しく揺れていた。始祖ブリミルと同じ選ばれし系統である喜びと虚無という重責による戸惑いである。

「ルイズ！しつかり最後まで聞きなさい！」

「はっ…ひゃい！すいませんお母様」

「とにかく、貴女は虚無の系統であるのは間違いありません。ただ、虚無とは当代四人しか存在せず、逆に言うと四人必ず存在するとも言えます。この意味が貴女にわかりますか？」

「カーリー又は睨むようにルイズに言う。その目はしつかり理解なさい

と言っている。ルイズは伏し目がちに答える。

「はい、あの……責任が重いと感じます」

「はい、責任は重いと言えます。ですが、それ以前に四人という事柄が問題なのです。その四人を自身の政治利用したい人間がいたとしたら、あなたはどうします？ たった四人しかいないなら、拉致するなりして手元に置くでしょう。そこで言うことを聞かなければどうしますか？ 殺せばいいのです。必ず四人存在するのですから。しばらく経てば、誰かが覚醒するでしょう。今はある勢力がそれを考えているようですが、とりあえず置いておきます……」

「……殺される？」

ルイズは自身が虚無であると聞いたとき、それを救われたと感じた。今までの苦勞が報われたと。だが、現実は甘くなかった。希少であるからこそその意味がそこに孕んでいたのだ。

「……サイト、怖い」

「大丈夫だ。大丈夫だよルイズ……」

サイトに縋るルイズ。身体は震えていた。サイトは黙って抱き締め

る。

「続けますよ。そして、虚無に覚醒する為の条件に、王家に伝わる秘宝に触れるという物があります。我がトリスティン王国は水のルビー、始祖の祈祷書がそれにあたります。先程貴女に謝罪した意味はわかったでしょう？まさか身内に虚無がいるなんて夢にも思わないですからね。それ故貴女には辛い目にあわせました……ここまではいいいですね？」

ルイズはこくりと頷いた。カリー又は、ハインリヒに向かい静かに頷き、着席した。

「ありがとう公爵夫人。さて、続きは俺からいこうか。ルイズ、お前にはいくつかの選択肢がある。だが、それを示す前に聞いてもらわなければならない事がある。それは、この集まりの根本的な理念の話だ。長くなるからしっかりと聞いてくれ。俺はお前を一人の貴族として見ている。だから、全ての話が終わったとき、お前はお前の答えを出してもらおう。そして、その答えに責任を持ってもらう。因みにここにいる人間は、それぞれの答えを持ち、その上で俺に賛同している人間なんだ。お前の選択如何では、お前はここにいる人間と敵対するかもしれない。お前の両親も、それを覚悟して座っている。お前が望まなくとも、虚無とはそれほど重い事柄なんだ。ルイズ、ここから先の話聞くか？お前はここで席を立ち、今までと変わらない生活を送る選択肢もある。どうだ？ルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエール」

ハインリヒが静かにルイズに問い掛ける。円卓に座る誰もがルイズを見ている。そこには彼女を無力な少女扱いした視線は無く、対等な人間として見ている視線だった。

ルイズは静かに喉をならし、やけにネバつく唾液を嚥下する。かつて感じたことのない緊張感と、初めて貴族扱いされた事による歓喜。そしてそれと同じくらいの重責。

ルイズは寄り添っていたサイトから身を放し、背筋を正した。そして軽く顎を引き、まっすぐにハインリヒを見つめた。迷いはもう、無かった。

サイトは隣にいる愛しい主人に見惚れてしまった。ああ、貴族とはこういう事なのか、と。凜とした主人は美しく、気高く見えた。そして、この先彼女がどんな選択を選ぼうと、自分はただ、盾になろうと決めたのだった。

「続きを聞かせてください、ハインリヒ侯。私は貴族　ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールなのでから」

会議室に響いた、舌足らずだが芯の通った一言、これがこのハルケギニアを舞台にした一大叙事詩の、本来その中心にいるべき人間が、その役割を自覚する第一歩となった。

ヴアリエール公爵は、人知れず涙を堪えた。誇りばかりが高く、芯の弱かった末娘が成長する瞬間に立ち会えた事に、不覚にも感極まったのだ。辛うじてモノクルを直す事で誤魔化した。ただ、横でちらりと微笑った妻にはばれていたようだ。

「さて、ルイズの覚悟を見たところで本題にはいる。まず、この円卓会議の理念は、大まかに言うと「ハルケギニアの緩やかな変革と旧プリミル主義からの脱却」だ。ルイズ達の為に改めて言うが、まず俺はこの世界の間人では無かった。多分、時間軸は異なるが、ここにいる平賀才人の生まれた世界と同じだと思う」

ハインリヒはいきなり爆弾を落とす。それはルイズとサイト以外は既に周知の話なのだが、ルイズ……特にサイトにとってインパクトは甚大だった。

ハインリヒは絶句する二人に向かい、自身が死ぬまでの話から、ハルケギニアで目覚めるまでの話をした。もっとも、自称神様やら、貰った能力の話まではしなかったが。

そして、ハインリヒが思う俯瞰した目線でのハルケギニア観、六千年経っても変化の無い異常さ、プリミル教に支配されてる事の危なさ、そして、虚無が戦争の火種となりうる怖さ等を説明した。

ルイズは最初、戸惑いを隠せなかったが、徐々に理解を示し、そし

て必死にハインリヒの言うことを咀嚼しようと思つた。

「サイト、お前ならわかるんじゃないか？この世界の不自然さが」

急に話を振られたサイトは狼狽したが、しばらく考えこむと、やがて二、三度頷くと顔を上げて語りはじめた。

「はい。確かに俺が生きていた地球と比べたら異常と感じます。ハルケギニアの文化は、えっと……歴史はあまり詳しく無いんだけど、古代ローマ帝国とか、んつと中世みたいな時季と変わらないんだと思う。それでもそこから文明開花を経て、産業革命とかあって、ずいぶん進化したと思う。……やっぱり六千年は長すぎるよ」

「ありがとうサイト。では何故ハルケギニアは異常たるか……それはそういうシステムを作った人間がいるからだと俺は思っている。つまり、ブリミルその人だ。彼は系統魔法を確立し、自身の子孫を優遇し貴族制度を作り、血を守った。そして、エルフや亜人　つまり先住魔法をあやつる種族を排斥した。結果、表向き便利な魔法に頼った文化は停滞し、魔法を使える貴族は特権階級として君臨している。なんてブリミルに優しいシステムだろうな」

ハインリヒは吐き捨てるように言い放つ。ルイズはブリミルを侮辱されたのが気に入らないのか、険しい表情を見せてるが、口は閉ざしている。

「ルイズの表情を見ると気に入らないようだな？ならひとつ、

ブリミルの矛盾を見せようか。ティファニア、帽子をとって見せてやってくれ」

今まで一言も発しなかったティファニアが、立ち上がると共に帽子を外した。

帽子から、ブロンドに輝くストレートヘアが零れ落ち、ティファニアの姿が顕になった。

「え、エルフ……」

「はい、私はエルフのティファニアと言います。正確にはハーフなんですけどね。宜しくルイズさん」

ティファニアはニコニコしながら答える。ルイズは固まった。エルフとはブリミル教では禁忌であり、憎悪の対象なのだ。ルイズがそれ以上に驚愕したのは、ここにいるメンバーが平然としていたことだ。それはつまり、両親も伯爵をエルフを受け入れているということだ。

「なっなんでみんな平然としているのですか！？エルフなんですよ！！」

ルイズは取り乱し、両親に向かって喚く。そんなルイズにヴァリエ

ール公爵は立ち上がると、静かに娘に語りだした。

「ルイズよ、座りなさい。お前が取り乱すのは理解できるよ。ワシも最近まではそう思っていたからね。だが、ハインリヒにこう言われて愕然としたのだ。「貴方にエルフが何か害をなしたか？そもそもハルケギニアにエルフが攻めてきたのか？」とね。ワシはエレオノールに頼んで、王立アカデミーの資料や、過去の歴史書を調べてみた。それによれば、過去にエルフが侵略してきた事実は無い。そして、過去の争いは全て、人間側からの侵略しか無かったのだ。確かに、ブリミルは英雄だったのだろう。だが、その後幾千年教えられてきた教典を、盲目的に信じる事の危険性は理解したのだ。ハインリヒ曰く、比較する対象があつてこそ健全であり、独占は危険だと言う。けだし至言よな。ルイズよ、エルフにも亜人にも知性や人格があり、感情もある。つまり、多少姿形が違ってても、基本的には人間となんら変わらない相手を、教典にあるというだけで忌み嫌い、憎悪した。浅ましいとは思わないか？ルイズよ。もつとも、こちらに害をなすならば、全力で排除する。だが、今は見極めることが先決なのだ。ルイズ、ゆめゆめ偏見には捉われるな。いいな？」

優しい笑顔を込めて語られた公爵の言葉に、ルイズは深く頷いた。そして

「ティファニアさん、ごめんなさい……わたし、わたし……」

「ありがとうルイズさん。良かったらこの先はお友達になってくれたら嬉しいです……」

微笑ましいやり取りをする二人を見ながら、部屋は柔らかい空気に包まれた。

「ルイズ、ティファニアはお前と同じ虚無の担い手だぜ。ティファニアは、アルビオン王国で肅清された王弟、モード大公の落胤なんだよ」

「なんだか……今日は色々と常識が覆されて疲れますわ……」

「まあ、一度に全てを理解はできんわな。まあ後はおいおい話していくとしてだ、先程言った選択肢の話だ。まずは虚無として覚醒するかしないかな。しなくても、自身の系統を自覚した今、コモンマジックは問題なく使える。まあ、覚醒したら虚無として、王宮に仕えてもらおう。何故なら、虚無と発覚した場合、確実にロマリアがお前を狙う。多分お前の心をくすぐる事を言つて、お前を懐柔するだろう。それはさせられない。戦争にしたくないからな。まあ、そんな感じだ。何れにせよ、お前を俺たちは全力でサポートする事は変わらないけどな」

ハインリヒは片目を瞑り、ルイズにウィンクした。ルイズの堅かった表情が若干和らぐ。

「わたしは、まだ良く分からないと言つのが正直な気持ちです。責任とか、理屈はわかるのですが……今までわたしはゼロだと蔑まれてきたから、そういう人達を見返してやりたい気持ちも正直あるんです。ドットメイジですらわたしは及ばなかったから……だから、

正しくありたい気持ちと、浅ましい気持ちで揺れています。だけど……わたしは心から貴族でありたい！だから……虚無にはまだ、覚醒しません。コモンマジックを習得して、それと共に新しい価値観の立派な貴族になりたい。だから……自分が納得できるまで虚無には覚醒出来ません。それまで、皆さんにはご迷惑かけるけど、どうかよろしくお願いします！」

ルイズはぺこりと一同に頭を下げ、可愛らしく笑った。

パチパチ……

パチパチパチパチ……

一人、また一人と立ち上がり、ルイズに称賛の拍手を贈った。ルイズはまだ未熟であるが、貴族で一番大事なものの名誉を手に入れたのだ。

「おちび、貴女を少し見直したわ」

「お姉様……」

「小さいルイズ、私は貴女を誇りに思うわ」

「ちい姉さま…ありがとうございます……」

「ルイズ、我が愛しい娘よ。お前を誇りに思い、そして学院を卒業と共にワシの知識をお前に譲ろう。それまで変わらず精進せよ」

「はい、お父様……わたし、頑張ります」

「ルイズ、立派よ。やはり貴女は私の娘です。コモンマジックの修練は私直々に指導致しますよう。なに、遠慮はいりません。毎週学院に行きますわ！」

「ひい……あっありがとうございます……」

家族の暖かい祝福に、心が驚くほど軽くなるのを感じたルイズだった。

「ルイズ……」

「サイト？」

「お前、やっぱり格好いいよ。俺、頼りないけど頑張ってお前を守

るから……」

「サイトお……うん！二人で頑張りましょ！好きよ、サイト」

「俺もだよ、ルイズ」

「「「ふう」  
「「「」

熱々な二人に冷やかしの口笛が吹かれる。この二人なら大丈夫である。そう確信したハインリヒであった。

「フオオオオオオ！！！！こんクソガキいい！！可愛いルイズになにしよう！！！！」

「公爵様、殿中でごぞる！殿中でごぞるよ……」

「ええい、H A・N A・S Eモンモン伯！！食らえ正義のワインデ  
イ・アイシク「カッタートルネード！！」ぶべらっ！？………ワ  
シ………いつもこればっか………きゅっ………」

またもやボロ雑巾なヴァリエール公爵であった。こうして、ルイズ

啓発セミナーは無事、幕を閉じるのであった。

因みに、シリアスは疲れたと、ハインリヒは会議後に豪華な宴を用意し、美味しい酒と豪華な食事に舌鼓をうつつのだった。

皆が身分に関わらず笑いあう宴に、ルイズはなにか暖かい気持ちに包まれ、そしてサイトとこっそりキスを交わすのだった。

だが、そんな二人を笑顔の鬼畜ハインリヒがほっとく訳もなく、本来の目的である歌と演奏の特訓が始まるのだった。海兵式訓練で。

締め切られた部屋の中から、「鬼!」「悪魔!」という二人の呪詛の言葉が聞かれたが、すぐさまハインリヒの高笑いで掻き消されたという。

そして、使い魔品評会当日

学院の講堂では既に準備が終わり、生徒達の演目を待つのみだ。

貴賓席も設けられ、アンリエッタ王女とマザリーニ枢機卿が座っている。

やがて演目がはじまり、生徒達は使い魔と、思い思いの出し物を披露していった。

特にキュルケとフレイム、シャルロットとシルフィードの出し物が皆を沸かせた。流石トライアングルの面目躍如という所か。

そして、大トリはルイズの出番だった。

ぼんやりと光るステージの上には、ただ一つ椅子が置かれ、上手から歩いてきたサイトが、ハインリヒから貰ったアコースティックギターを抱いて座った。

その後に、シンプルな黒いワンピースを身に纏ったルイズが現れ、ぺこりと礼をした。

ルイズは既にコモンマジックをある程度使えるようになったが、その中で、ハインリヒが開発したというコモンマジック、「音拡声」を使って会場に語りはじめた。

「私の使い魔は人間の平賀才人と言います。落ちこぼれメイジの私に忠義を尽くしてくれる、素晴らしい人です。今日は彼に演奏をし

てもらい、私の一番尊敬する人に教えて貰った歌を、私の今の気持ちを含めて歌います」

そういつてルイズはサイトに頷いた。サイトのギターが、静かなリフを奏ではじめ、会場は静寂に包まれた。

あなたがここにいた時、あなたの目を見つめるなんて出来なかった

あなたはまるで天使のようで、その肌に触れると涙がでるようだった

あなたは羽のように舞っているのね。この美しい世界で……

私もそんな風に特別な存在になりたいの。あなたは本当に特別な存在だから

だけど私はつまらない人間なの。あなたとは違うおかしな人間

なの。

いったいここで何をしているんだろう？ここは私のいる場所じゃないのに……

傷ついたってかまわない。私は自分を失いたくないから。

完璧な肉体がほしい。完璧な心がほしい。そして私がここにいらって気付いてほしい。

たとえばあなたがそばにいらなくても、あなたは私には特別な存在だから

ルイズの涙声のような歌が会場に響き、中盤にさしかかるとそれは魂の叫びに変わった。搾り出すように歌うルイズは、涙を零しながらの慟哭の歌になっていった。

観衆達は誰しも引き付けられ、一緒に涙を流していた。ゼロのルイズ 彼女の心の奥底にあった感情を、観衆達は同調したのだ。

そして、歌い切ったルイズは力尽きたのか、ステージにべたりと崩れ落ち、荒い息を整える。私の気持ちは届いたかしら……不安気に顔をあげると

『ウオオオオオオオオオ……！！！！！！ルイズう……！！！！！！』

怒号のような熱狂的な歓声と、嵐のような拍手がルイズを揺らしたのだった。

「ありがとうございます……ありがとうございます……ありがとうございます……ありがとうございます……ありがとうございます……うっっ……」

繰り返し繰り返し泣きながら挨拶をするルイズを、誇らしげな顔のサイトが抱えるように、袖へと消えるのだった。

「ぐすっ……良かった……サイト……気持ち……私の気持ち……届いたみたい……」

「ああ！もうお前を馬鹿にする奴はいねえよ！みんなお前を見ていた。キュルケだって泣いてたんだぜ？」

「うっっ……サイトお……嬉しいよう……」

「はいはい、よしよし」

幸せそうにサイトにすがりつくルイズだった。

『……コール……ンコール……アンコール!!アンコール!!』

その時、地鳴りのような振動と、ルイズを求める歓声が響いた。

「よし、いこうぜルイズ!」

「うんっ!……!」

『ワアアアアアア!』

「みんなあゝ抱き締めて!ハルケギニアの果てまで」

こうして、ハルケギニアにアイドルが生まれた……………のか？

## 次回予告

『久しぶりの登場のザルバだ。作者は言う。可愛いは正義だと。ならば書こう、ルイズを可愛く……………だとさ。なんだかシリアスに走った反動か、萌えが足りない萌えが……………はあはあ……………妻達をいじくりまわしたい……………と、危ない兆候すらある。さて、次回の - Z E R O - の無責任男は、「これぞサブキャラの心意気、咲かせて見せよう萌えの華」だ。みんな生暖かい目で見てやれよな！』

? 0 つばみから花へく私はルイズうくいえいえい 最終話（後書き）

ルイズ救済企画でした。

いや、僕は釘宮病患者では無いので、強い思い入れは無いですが、主人公としてはびったりですよ。

よくアンチが沸く序盤のルイズがいて、紆余曲折あって成長していくし。それって素敵やん？

ただ、うちの小説では空気になってましたので、描写は下手くそでしたが、ルイズのハッピーエンド的にしてみました。

お気に召したら嬉しいです。

今日、夏目のDVDと東のエデンのDVDをAmazonさんに頼みました。早くみたいな、深夜にこっそり。ニヤニヤするのは一人がいいですもんね。

なんでしょうね？エロでもないのに嫁に隠れてみるこの背徳感マジ快感

ではまた次回、よかったら読んで下さい。

ナナツボシ

あ、因みにルイズが歌った歌は、Radio HeadのCreep  
をルイズ風に歌詞アレンジしました。気に入らなかつたらごめんな  
さい。ペこり

?? 愛と欲望の日々(前書き)

なんか駄文です。はい。

?? 愛と欲望の日々

ジェシカと

トリスタニアの青空市場。ハインリヒとジェシカは久しぶりに手をつないでデートしていた。元々二人から始まったハイン一味だったが、最初の頃はこうして二人でトリスタニアを歩いたものだ。

「んふふふふ」

「…なんだよ？」

「うが〜〜!!」

ゴスロリ姿のジェシカがハインリヒに腕を絡めてはしゃいでいる。

「噛むな〜!!」

「嬉しいんだよ! こうしてデートするなんて久しぶりだもん! ずっとハイン忙しかったからさ… さーみしーって思ってた!」

たしかにハインリヒは、叙勲したり領地を拝領したり、アルビオンで暴れたり、果てはガリアの王宮に飛び込んだりと、短い間にかなり濃密な出来事がおこり、休みらしい休みもなく働いてきた。

さらには水面下で、ハルケギニア円卓会議（仮）を設立していたりと、身体を休める暇は無かった。ジェシカ自身も、商会の仕事が忙しかったりで、スケジュールも合わなかったりで、結局二人きりになるチャンスは週に一度のベッドタイムくらいだった。

「ねえねえハイン？」

ハインリヒの腕に絡まりながら、ジェシカは甘えるように見上げる。

「なんだあ〜」

「人がいっぱいいるね？」

「そうだな。活気があっていい市場だな〜」

「そうじゃなくて〜。ハインはこの笑顔を守ったんだね。戦争ならなかったし」

「かもしれないなあ。でもま、何も起こらなかったし、実際どうだ

かね。わかんねえや」

ハインリヒは頭をガシガシと掻きながら歩いていく。ハインリヒとしては、歴史では戦下に包まれるはずのトリストインが何も起こらない今、守ったなんて実感は無かった。それに、守ろうなんて思ってもいない。ただ、ジェシカ達が笑ってないと嫌なだけなのだ。

「……あんま構ってやれんでごめんな」

「ふふっそんな顔しないで。ちゃんと分かっているから。あ、ハイン？顔になんか付いてるよ。ちょっと頭下げて」

「ああ、こっか？」

ちゅっ

「!？」

ジェシカは引き寄せたハインリヒの唇を奪った。目を白黒させたハインリヒをにやりと見やる。

「ザマーミロ」

そしてジェシカは照れ隠しに駆け出していった。辺りにある屋台や道行く人々から冷やかしの口笛や囃す声が飛びかう。

ハインリヒは微笑み、まあこついうのも悪くないなと呟き、ジェシカを追いかけ走りだした。

「ちよつ待てよ〜！」

トリステイン王国は今日も平和だった。

## カトレアと

ド・オルニエールのメインストリートをハインリヒとカトレアが歩く。この街がハインリヒの手が入るようになって随分たつが、今や人口が五千人に届く程になった。

警備兵を持たないハインリヒは、代わりにオルニエールの街に、傭兵ギルドを設立し、流浪の平民メイジや腕のたつ武人を集めた。その際、今で言うワーキングビザのような登録をさせ、証明書を発行する。

証明書は領をまたいだ任務の際の身分証明になり、ド・オルニエール領主が責任を全て持つというものになった。

傭兵ギルドの仕事は様々あり、AからEまでの五段階のクラスに分けられ、ギルドの任務を規定数達成することでランクを上げられる。

実際の任務は、屋敷及び領内の警備任務、亜人幻獣駆除（他領主からの依頼もある）、領内の平民からの小間使い等、多岐に渡る。

最初はEランクからスタートだが、Cランクまではほとんどが平民からの小間使い依頼や、警備任務に限定される。ただ、流浪の荒くれもの達のほとんどが、文句ひとつ言わずやるのだ。

何故ならば、Cランクになればオルニエール内で商売をする資格と、永住権を獲られるのだ。商売に関しては、オルニエールにて二十年更新で土地を借りられる。その際の保証金は一切ないのだ。月々の家賃だけでいいし、新築する際は、土メイジをギルドに依頼するか、街の工務店に頼めばいいし、料金は格安だ。

永住権をとれば家を持つのも自由だから、他領の食いつめた一家が移住してくるケースも多い。ギルドは十歳から登録出来るため、お父さんは警備・討伐任務をメインに、女子供は街内の任務に就けば、半年もしないで食いつめ一家が中流家庭に早変わりなのだ。

オルニエール領の税金は、商業・一般共に一律三割である。これは破格と言えるだろう。これが人口増加に拍車を掛け、後一年もあれば人口は一万を優に越すであろう。

この税率を見逃す商人などいなく、大きな商會がこぞって支店を置き、オルニエールは人と物の流れが凄まじい勢いとなっていた。

さらに、コルベールが推進している新しい飛行船、空港事業が近々形になると、マチルダがさり気なく噂を流布した関係で、商會筋は色めき立っていた。実際に、コルベールが立ち上げたチーム（平民メイジの集団）が、空港予定地とされるオルニエール郊外を、焼きうち・整地を始めており、噂に信憑性を高めている。

これらが相まって、過疎地だったオルニエールは今や、一大商業都市へと変貌を遂げている最中なのだ。

これだけの特典をなんの後ろ楯の無い人間に与えるハインリヒは、領民の信頼もあつく、流れ者達にも尊敬（ハインリヒ自体成り上がり者）を集め、オルニエールで犯罪等させてはならぬと、ギルドに属する傭兵達が自ら自警団を勝って出るので、犯罪率は他領に比べ圧倒的に低いのだ。ハインリヒには嬉しい誤算と言えよう。

そして今日、カトレアと二人で都市オルニエールを視察がてら散歩しているという訳だ。

二人が歩いていく先々では、商店のおばさんはリンゴを投げてよし、子供はまとわり付き、傭兵達は笑顔で敬礼する。暖かな幸せがここにはあった。

そんな我が街を眺めていると、ハインリヒもカトレアもついつい笑顔がこぼれ、足取りも軽くなるのだ。

「あなた、なんだか嬉しいわね。みんな幸せそう」

カトレアはころころと笑いながら、ハインリヒの腕に自慢の胸を押し付けながら言う。

「はい……ぼくも幸せですパイ。だから早くお家にかえってベッドに行こうパイ。さあ、帰ろうパイ」

「ふふふ……まだダメよ ちゃんと視察しないとね？みんな楽しみにしてるのよ、あなたが来るの」

「パイ……」

はい……みたいと言わないで欲しいと思った作者だが、それは些細なことだ。

カトレアは病気が全快して、健康である自分を本当に嬉しく思っているのだ。自分の足で、行きたい場所に歩いていく。そんな当たり前な事が当たり前じゃなかった彼女は、ハインリヒが忙しかった時期も、毎日毎日視察を繰り返していたのだ。

そのせいで今や、カトレアが歩けば奥様奥様と呼び止められる程有名だったりする。ある意味ハインリヒ以上に。平民や傭兵から商人まで、時間の許すかぎり脚を止め話す。そんな気さくなカトレアを、領民は皆愛していた。

「さ、行くわよあなた。もう少し先に美味しいワッフルの店があるのよ」

「パイ……」

ド・オルニエールには女神がいる。そんな噂がトリステインのあちこちで聞かれる今日この頃だった。

「あなた？耳貸してくださるかしら？」

「ん？」

「……て……たら……パイで……ポを……あげるからもう少し頑張  
ってね」

「パイ!!」

オルニエール、そのけそこのけ、おバカが通る。

ド・オルニエールは今日も平和だった。

エレオノールと

「うーん……またダメか……このバクテリアというのはすぐ死んじ  
やうわね……」

エレオノールは研究所の自室で一人ぼやいていた。エレオノールは  
いま、領内の上下水道の整備に先立ち、汚水処理の要となる、汚物  
を分解するための沈殿池に放つバクテリアの培養に四苦八苦してい

た。

知識としてはハインリヒが地球より持ち込んだ専門書を翻訳した物があるが、何せ生態系が違うのだ。同質のバクテリアの存在は確認したが、全く同じな訳ではないのだ。

そこでエレオノールは、街のギルドを使い、あらゆる亜人や幻獣の糞……つまりウ コを集め、実験棟にサンプリングした。

だが、なかなかバクテリアが活性化しつつ、生存に最適な温度が特定できずに、実験は未だ失敗続きなのだ。さらに繰り返しウ コを集めていたため、街ではエレオノールをウ コ博士という恥ずかしい二つ名を戴く結果となる。

いろんな意味で心が折れそうなエレオノールだった。

「はふう……」

エレオノールの母親似の美しい顔が陰り、本日もう何度目かも分からなくなったため息をつく。

ペロッ

「ひゃあっ!!」

机に頬杖ついて物憂げなエレオノールの耳を何者かが舐め、そして後ろから抱き付かれた。

「きゃうん……ハインいきなりなあに!!」

「なんかエレンが煮詰まってそうだから息抜きに付き合おうとな？相変わらず可愛い反応するな？エレン」

「やん、恥ずかしい事言わないで!……でも、ありがとうハイン。……ってあれ?なんで机に座らせるの?ちょっとハイン……ダメダメ!やあん……スカートに顔入れちゃダメえ……ひゃん!ダメよ舐めちゃ……汚いよう……あん……ハインくあんっ後ろの穴は汚いから……いやん……あっ、やん……ん?汚ない穴?そういえば人の腸や肛門は一定の温度に……はうっ……まって!?なら腸内の分解は……!?キタキタキタキタキタ!!ちょっとハインどけて!どけなさい!!バキッ」

「ぶべらっ!?!」

なんだか甘い雰囲気だったのだが、行為の最中にエレオノール頭の上に巨大な電球が閃いた。次の瞬間エレオノールはハインを蹴り飛ばし、実験棟にすっとなで言ったのだった。

しょぼんとするハイソリヒを置き去りにして。

「オーツホツホツホツ!! わたくしに解けない謎は無くってよ! 無くってよ!!!! オーツホツホツホツ……」

人は彼女を尊敬を込めてこう呼ぶ。 マッドサイエンスト と。

## マチルダと

マチルダの朝は早い。 というのも彼女の肩書きは「ハイソリヒの秘書」である。

マチルダはその抜群のスタイルを生かした装い（黒のピンストライプのスーツ、勿論ミニスカートに、網タイツにガーターベルト）を身につける。 もちろん100%ハイソリヒの趣味なのだ。

これはある日、ハイソリヒが急に持ち込んできたのだ。同じスーツを着、揃いの煽情的なレースのランジェリーを山ほど、縁なし眼鏡をいくつか、ピンヒールを色違いでいくつか、それらを”必ず”勤務中は着用しろと命じられた。

マチルダは慣れない衣装に羞恥を覚えたが、太ももあたりの魅惑の地　つまり絶対領域にハイソリヒが釘付けなのを知ると、むしろ率先して着ている今日この頃なのである。

マチルダは髪をアップにひつつめ、クイツと眼鏡を整え、デキル女の顔になると、今日も仕事へと飛び込んでいくのだ。

彼女の仕事の領域は、ハイソリヒと同様に、一ヶ所には縛られていない。

ほかの妻たちの業務を裏からサポートしたり、ハイソリヒと各王家との連絡員を務めたり、情報操作のために流言を飛ばしたり……と多岐に渡るのだ。

そして本日の予定は、「ハイソリヒに同行せよ」だ。

前日急にハイソリヒから通達され、急遽予定を調整したのだ。ハイソリヒ自体仕事には厳しい人間である。その彼が前日に予定を言っ

てくるなんて普通はない。だからこそ、何か重大な任務の匂いを嗅ぎとったマチルダは、緊張の面持ちでハインリヒが待つ竜の森へと急いだ。

まだ日が昇り切っていない薄暗い森をマチルダは走る。普段ならばフライで飛んでいくのだが、今日は何があるか分からない為、魔力を温存し走っていた。この辺りは流石、元凄腕の盗賊という所であろう。

森を暫く走った先には、木が生えていない円形の広場があった。そこが竜っ子姉妹の住みかである。

「おはよう、マチルダ」

「はあはあ……おはようございます、ハイン様」

仕事モードのマチルダは言葉遣いもフォーマルな物になる。そんなマチルダを見やり、ハインリヒは微笑む。

「さあ行くぞ。ユイも頼むな？」

《わかったのじゃ。あるじ様のお願いは聞くのじゃ。じゃが……のう……》

《お姉様の顔が真っ赤ですの〜》

《キミニ ムネキュン キュン》

ハインリヒ達には元々真赤な竜っ子の、どの辺りが赤いのか聞きたい所だが、面倒なので気にしない事にした。

「で、なんだ？ユイ。なんでも言っていていいんだぞ？」

《えっと……その……わらわはシカが欲しいのじゃ……ダメか？》

「いいよ、ユイ。帰ってきたら何匹でも好きなだけ用意してやるからな」

《はうっ……わらわは……わらわも……あるじ様が大好きじゃ……あうっ》

何やら猛烈に照れているユイ。尻尾をバタンバタン叩きつけている。周りに人が居たら死人がでそうだ。

《さすがあるじ様ですの！ヒューヒューですの〜！！》

《アルジサマ アンタモ スキネー チョットダケヨ》

ハインリヒとマチルダはぽかんとしていた。報酬にと気やすく約束したのだが、目の前の竜っ子達は何やら盛り上がりを見せているのだから。

しかし、ハインリヒは知らないのだが、実は先程の行為には重大な意味があったのだ。

韻竜がつがいになるときは、雌から愛が告げられるのだ。それは、韻竜の生態系が圧倒的に女系であり、種の約九割が雌なのだ。そして雌達は、次世代に強い遺伝子を残すべく、自分が認めた雄に求愛するのだ。

そのやり方は、雌が強いフェロモンを発しながら、雄に狩りを依頼する。それが成されたら二匹は晴れてつがいになれるのだ。

つまり先程の行為は、日頃から好意を寄せるハインリヒに、ユイがフェロモンを発しながらシカを要求、そしてハインリヒが了承した。

「ハインリヒ様：わらわはそなたを愛しています。わらわの為にシカを取ってきてほしい。無事戻ったらわらわを抱いてほしい」

「ああ、わかったよ。お前の為に命を掛けよう。戻ったら、お前を  
と愛し合おうじゃないか」

要約すると韻竜側とすればそういう意味合いになる。ぼかんとする  
ハインリヒ達をよそに、どんどん盛り上がる竜っ子達であった。

「じゃ、じゃあ、出発して貰えるかな？ユイ……？」

《はいなのじゃあるじ様……はふう……》

何やら意味ありげな流し目のユイを出来るだけ見ないようにしてマ  
チルダと出発したハインリヒだった。

《お姉様頑張れですの〜！！》

《アラアラ マアマア オサカンネ》

手を振る妹達だった。

上空高く舞い上がったユイの背中には、マチルダを後ろから抱き締  
めるハインリヒがいた。風魔法を応用して、不可視の風防を展開し

てはいるが、高度が高いため寒いものは寒いのだ。

「ねえ、ハイン様、何か問題が起きたのですか？突然のお達しだったので、何の準備もしてませんが」

「マチルダは綺麗だから準備などいらぬ。そして、今日は一日プライベートになるから、話し方も普段と一緒にいいよ。ちなみに行き先はサウスゴータだよ」

ハインリヒは風音うるさい上空のため、マチルダの耳に唇を付けて話す。ハインリヒのバリトンが耳をくすぐり、そのたびに体を震わすマチルダが可愛らしい。

「ひゃっ……サウスゴータ？何かようがあるのかい？」

「ああ、飛びつきりの用さ？まあ、行ったらわかる」

そうしてハインリヒはマチルダの冷えきった頬にキスをする。マチルダはくすぐったそうに、だけど嬉しそうにハインリヒに身を預けるのだった。

最近はどうして二人っきりになる機会が無かったマチルダは、難しい事を考えるのはやめて、素直に甘える事にしたのだった。

サウスゴータに到着した二人は、サウスゴータ領主館に降り立ち、ユイと別れると、ハインリヒはマチルダと手をつなぎサウスゴータの街を歩きだした。

「ねっねえ、ハイン？」

「なんだよマチルダ」

「手をつなぐのは……恥ずかしいよ……」

「なんで？」

「周り……見て？」

「うおあっ!?!?」

良く見るとハインリヒの周りには人、人、人！　人々は突然現れた黄金侯を一目見ようと殺到していた。中には何故か拜んでいる者さえいる。

「なんてこった……」

「ねっ？恥ずかしいからやめよ？ね？」

だが、マチルダが見上げたハインリヒの顔はそう　悪魔。ニヤリと邪悪な笑みを浮かべていた。マチルダは思った。今すぐ逃げなければいけないと。だが

「えっ？えっ？きゃああああっ！！」

ハインリヒはマチルダを横抱きに持ちあげた。所謂、お姫様抱っこである。

「どうだお前ら！！いい女だろう？お前ら聞けい！この美しい女の名前はマチルダ！マチルダ　オブ　サウスゴータだ！　かつてモード大公ご存命のおり、このサウスゴータ大守の娘だったマチルダが帰ってきたぞ！！！」

「ちよっ！？ハインやめてって！恥ずかしすぎるうゝひやああ……」

突然のハインリヒの宣言に、慌てて足をバタバタさせるマチルダだった。

「マチルダ？暴れたらパンツ丸見えだぜ？」

「ぎゃっ……」

たまらずしおらしくなるマチルダだった。

『おお確かにマチルダ様だ……』

『お綺麗になられて……』

『赤だったな……うん、赤だった……』

かつての大守の面影深いマチルダに、集まった人々は涙を浮かべた。マチルダの父親は人々から愛されていた証拠だろう。

そんな人々の反応に、マチルダは涙を溢してしまふのだった。

「お父様……お父様は愛されていたようです……マチルダはちゃんと幸せですから心配しないで下さい……グスッ……」

こっそりと天国の父親に呟くマチルダだった。が

「だけどお！マチルダは俺の嫁え！！ワッハッハッハ！！やんねえからな！」

『あつはつは、流石は黄金侯だ！お幸せに！』

色々台無しにしたハインリヒだが、今度の領主を民達は好意的に受け入れているようである。

某レストラン

「……は？」

「お前の思い出のレストランなんだろう？前はお前、遠慮して行かなかったから、時間があつたらお前と二人で来たかったんだ」

「ハイン……リヒ……嬉しいよう……」

このレストランは、マチルダの父親が大守として務めていたとき、両親と三人でよく通った場所なのだ。誕生日、両親の結婚記念日……何か祝い事があると、必ずここに家族で来たのだ。

「マチルダ？俺たちはもう、家族だろうか？だから、たまにこつそ

りさ、ジェシカ達には内緒で来ような？これからは俺達の秘密の場所だ」

「ハイン……うん、うん…ありがとう。大好きハイン……グスツ…」

「泣き虫だなあ、マチルダは。甘えん坊だしな？」

「あんたが……そうしたんだ……バカヤロウ……グスツ……キスしておくれよ……」

二人の距離が近づき、やがて重なった。周りの客も店員も、皆、見ないフリしたが、店は柔らかく幸せな雰囲気にも包まれた。

平民出身の成り上がり侯爵と、没落した大守の娘のラブストーリーは話題になり、このレストランで恋人が食事をして、キスを交わすと、必ず幸せになれるというジンクスは、この日生まれた。

そして、ここを訪れる恋人達はサウスゴータ市民に限らず、国を越えて注目される縁結びスポットとなり、予約が取れないレストランとしても有名になり、複雑な顔になったマチルダだが、自分とハインリヒが原因なので、ついニンマリするのだった。

「ねえ、ハインリヒ。愛してるよ」

「俺も愛してるよ。だけど続きはベッドで聞かせてくれよ?」

「……………もう……………バカ」

サウスゴータの夜は甘く更けていくのだった。

ティファニアと

「ハインお兄様、一緒に野苺をつみに行きませんか?」

「お兄様……………お風呂一緒に入りませんか?」

ティファニアはとにかく俺とのスキンシップを好む。そして、嫉妬深い。理由は色々あるだろうけど、多分、モード家にいた頃から人目に触れない生活を強いられて、ってまあ、本人に強いられたという実感は無いだろうが。

そして、肅清騒ぎ以降、ウエストウッドに隠れ住む訳だけど、一応その時は戦争孤児を集めて孤児院の真似事をしていた。だが、閉鎖環境に変わりではなく、触れ合う大人はせいぜいマチルダ位だ。

それが解放されたとき、自分に手を差し伸べた大人の男である俺を、ティファニアは物語の王子のように感じたのだろう。つまりは刷り込みに近いと思う。

いま目の前で俺に精一杯の色気を出して肢体を晒すティファニア。それを見ている俺は、どこかいたたまれない気持ちになる。

俺のモノを啜えながら上目遣いで俺を見るティファニアの目は、必死に「わたしを捨てないで」と言っているようだ。

可愛らしく、愛しいティファニア。俺は彼女の人生を全て背負うだろう。例えロマリアや頭の堅い保守貴族に睨まれようと、お前の黄金騎士は身を挺してお前を守るだろう。

それが、彼女の人生のレールを一方向に限定してしまった俺の義務だ。

ティファニアは行為の終わった後の気怠さに身を委ね、豊満過ぎるその胸を俺に押し付けるように、裸のまま仰向けに寝ている俺の胸にすがり付く。

ティファニアの整った顔がすぐ目の前にある。目を閉じているが、眠ってはいないだろう。瞼を覆う金色の長い睫毛がピクピク動いている。

俺は妙に愛しくなり、彼女の額に口付けする。ブロンドの滑らかな前髪が鼻をくすぐり、少し痒くなる。うん、綺麗だ。と、俺は栓なき呟きを洩らしてしまった。

聞こえてしまったのか、彼女は音が出るような勢いで赤面した。だが、行為の中で快感に喘ぎながら涎を垂らすだらしない表情や、俺に臀部を掻き分けられ、奥の奥まで覗かれていたという事実と、今俺が洩らしてしまった「綺麗だ」という呟きの、いったいどっちが羞恥心を揺さぶるのか？

その問いの答えは、男と女じゃ相反し、一生平行線なんだろうなと思う。それは太陽と月が、何億光年回り続けようと、その距離は絶対に縮まらないのと同じなんだろうな。

そんな答えがあって無いような事を考えていたら、どうやら俺は暫く上の空だったようだ。その証拠に、目の前のティファニアの頬はぷくりと膨らんでおり、私、とても不機嫌です！と自己主張している。

だが、幼さがまだ残る彼女の顔には、逆にあどけなく見えてしまい、

それが余計に愛しく感じさせてしまうのだ。

「ハインお兄様？私は面倒な女ですか？」

そついう問いをするほうが面倒だ。

「……私はお兄様を縛りすぎますか？」

世間はそう思うかも知れないな。だけど俺は特に迷惑はしていない。

「泣き虫なわたしをどう思いますか？」

涙を流せる事が出来る、その事自体は素晴らしい事だ。だけど、俺は出来るだけ悲しい涙を流させないようにする。

「一生付き纏っていいですか？」

お前がいつか、気が移ろう事があつたとしても、俺はお前を離さない。お前の小さな心を縛り付け、俺のという鎖でがんじがらめにするだろう。

「愛しています、ハインお兄様」

愛しているよ、ティファニア。

これはハインリヒとティファニアの秘密の儀式。

そうしてティファニアは、心に安寧を感じ、今日も生きています。それほど、人間がハーフェルフの少女に強いた仕打ちは重かった。

### シェフィールドと

ハインリヒは屋敷のソファに身体を投げ出し、ぼーっとしていた。珍しく予定が無い、ある日の午前中の事だった。

目の前をメイド服姿のシェフィールドが、何やら一生懸命掃除をしている。シェフィールドは一応、ハインリヒの妻たちの一人にクレジットされている。

つまりは、シェフィールドが本来使用人がすべき仕事をする義務等はないのだが、いつからかハインリヒに奉仕をする事を悦びとして

感じるようになってしまったのだ。

ハインリヒはソファアに座りながら、ある光景を眺めていた。

すたたたた……

じじじじ……

はふう……よしっ！

すたたたた……

おまっおまっ……

じじじじっ じじじじ

ぴかぴか じじじ

すたたたた……

あっ！バシャーンッ

キョロキョロ……

そお……びくっ！

「シエファイ、ご苦労様？バケツひっくり返しちゃったね？転んでケガしなかったかい？」

目の前でいそいそと掃除をしていたシエフィールドだが、あともう少しで終了という所で自分のエプロンドレスの裾を踏み、派手にひっくり返っていた。

「あっ！あのっ！あのあの……ごめんなさいですご主人様……シエファイは……ドジですいません……」

びくびくしながら、目を激しく泳がせながら謝るシエフィールドを、溜め息をひとつついたハインリヒが手招きする。

恐る恐る近寄ってくるシエフィールド。そして、ハインリヒの目の前に立った。

「あのあの……ご主人様ごめんなさいです……シエファイはまた失敗してしまいました……」

無言でシェフィールドを見上げるハインリヒ。片眉を上げ、じっと見ている。やがて、ハインリヒの手がシェフィールドを掴み、引く張る。

「ひゃっ!?!」

引き倒されたシェフィールドは、自然とハインリヒの胸に抱き寄せたような体勢になる。ハインリヒは無言のままぎゅっとシェフィールドを抱き締め、ただ優しく頭を撫でる。

「ご主人様?あのっ……」

「いつもご苦労様、シェフィ。でもな?俺はどんだけドジでもお前を怒らないし、お前を嫌いになつたりしないからな。だから、そんなに卑屈にならなくてもいいんだよ」

優しく話し掛けながら、ハインリヒゆつくりとシェフィールドを撫でる。だが、ハインリヒが彼女の黒い髪を梳くように撫で、そしてその手は腰近くまで伸びた毛先にたどり着くと、またつむじ辺りまでその手は

戻され、また髪に触れ　びくっ!……

触れるたびにびくびくと身体を震わせるシエフィールド。まるで拾ってきた猫のような反応を見せる。それでもハインリヒはひたすらシエフィールドを繰り返し撫でる。

相変わらず甘える事に馴れてはいないのだろう。シエフィールドは元々ジョゼフ使い魔として、ロバ・アリ・カリイエから召喚された。召喚される前、彼女は誰にも必要とされなかったという。ジョゼフに召喚されてからも、道具としては愛されたが、シエフィールド自身としてはそうじゃなかった。

シエフィールドの存在意義は、いつしか”誰かから必要とされる”が至上命題となっていた。普段、皆が当たり前のように形成する人間関係。それが当たり前のように作れない人間も少なからず存在するのだ。

呼吸をするやり方を、横隔膜を上下し、筋肉を動かし、肺を膨張させ、空気を取り込み……なんていちいち考えながら呼吸をする人間などいない。

だが、シエフィールドは考えないと呼吸が出来ない人間なのだ。人の行動ひとつひとつを確認し、その中から欠片ひとつの自分への好意を拾い集め、自分の存在意義とするのだ。

自分は愛されている、それを実感するために、欠片をひとつ拾い上げ、恐る恐る口に含んでみる。甘いのか？苦いのか？舌先で味わい、

微かな味に一喜一憂するのだ。

ハインリヒはそんなシェフィールドが愛しいと思っている。それと同時に切なくなる。

シェフィールドはシェフィールドだけの地獄を抱えているのかも知れない。それは彼女だけの物である。彼女はその地獄の闇の深淵で、膝を抱えて座っている。そこからはい上がるには、彼女自身が光り射す上を見上げなければならぬ。

「シェファイ、無理はするなよ。俺はいつもお前の味方であるから」

ハインリヒに抱き締められながら、シェフィールドは不思議そうに見上げている。

「ご主人様……わたしは……その……あの……私はいつも考えています。私が生きている意味があるのかと」

霞んだ目でハインリヒを見ていたシェフィールドの目に、突然火が灯る。しっかりとした焦点でハインリヒを見つめるその視線は強かった。

「私は物心ついてから、いつも私は父親の言いなりに流されて、や

りたくない事をやり続けました。そうしないとお前はいらなと言われたからです。ジヨゼフ様に呼ばれたあとも、結局彼も父親と変わらなかつたのです。ハイン様？私が生きる意味はあるのでしょうか？私があなたに依存するのは、私が壊れているからでしょうか？私は……私は……！？…ちゅっんちゅ」

ハインリヒは会話の途中で強引に口付けした。

「シェフィ、お前は生き急いでいるんだ。俺は生まれてきた意味なんか無いって思っているよ。人は産まれたら無垢なものさ。そこに意味を持たせるのは自分だけなんだ。その意味ってやつはいつ生まれるかは分からない。ガキの時にわかるやつもいれば、いい年こいても分からない奴もいる。なあ、シェフィ？お前の年で人生分かつた気になつちやダメだよ。俺だつて前世三十年やつて、こつちきて何年か生きて、まだ何もわかんねえよ。ただ、歩くしかないから止まらないだけなんだ。お前の心の中の答えは、一生かけて探せばいいんだ」

「貴方はわたしの味方？」

「そつだよ」

そしてシェフィールドは少し考えた風な仕草をし

「ハイン様、シェフィはホントの名前じゃないです。でも、貴方との絆として預かって欲しいです」

「ああ、心を開いてくれてありがとうございます。大事に預かるよ」

シェフィールドは少し笑った。そして、恥ずかしそうにハインリヒの耳に唇を寄せると、そっと呟いた。

「ハイン様、わたしの名前は　　です。愛してますご主人様」

今日この日、シェフィールドはアイデンティティを獲得したのだ。

それは、”人生の意味を獲得する”という行動を、自己の行動理由とする事だ。

翌朝、シェフィールドは相変わらずドジなメイドに戻ったが、彼女は快活に笑うようになったという。

モンモランシーと

モンモランシーです！私は今、自分の部屋でハインさまが来るのを

待っています。だって、二週間も待ったんですよ！

ハインさまは偉い人だから、毎日毎日忙しいんです。え？なんで知ってるかって？それはあ…えっと、コレでも私はハインさまのお嫁さんの一人なんですよ！

えへへ……お嫁さん……ぼーっ……  
はっ！？危ない危ないです  
！意識が飛び掛けちゃいました。

コンコン…コンコン…

むっ？誰かしら？まったくもう、ハイン様に来るっていうのに……

ガチャ

「やあ、モンモランシー？ちょっと君に話したい事があって」

ガチャッ！

変ね？イタズラかしら？誰も居なかったわ。ああ、それでね？ハイン様ったら毎週毎週激しいの マリー可愛いよって身体中にキスをしてくれるのよ！ってキヤー言っちゃった

コンコン…コンコン…

なによ！もう、しっさいわね……ギッシュのくせじ……

ガチャ

「ご機嫌ようモンモランシー？ハインリヒ侯が来ると聞いてやってきたわ。この灼熱のキュルケがね？オーツホツホ」

「帰って」

バタンツ

まったく、油断も隙も無いわ？あの褐色ポインは……私だって実は隠れポインなんだからね？ハイン様はこの白い肌に

コンコン…コンコン…

ガチャ

「モンモランシー！独り占めはいけないわ！この灼熱のボイ」

「消える」

バタンツ！

イライライラ……赤毛ボインめ……って麗しのハイン様も赤毛だったわ。なら下品な赤毛ボインにしましょ。これなら紛らわしく無いわね。

コンコンコン……

しっこい……しっこすぎる……もう我慢ならないわ！見てなさい、ぎゃふんと言わせるんだから……

ガチャツ

ピーッ！……ピーッ！だからピーッ！の裏側までピーッ！を突っ込んで……ってシャルロットじゃない？どうかしたの？

「……少し話がある。中に入れてほしい。あと貴方の先ほどの言葉はやめたほうがいい」

……ごめんなさい。キュルケがちょっと……。ってシャルロット、話  
ってなんなの？

「……………えつと」

ん？なあに？相変わらず無口ねえ。……………ん？んん！？シャルロット  
の顔はこっちを向いている……………でも、目が白いのは何故？……………ッ！  
？この子、ハイン様が窓から現われるの知ってる……………だから身体を  
こっち向きながら瞳だけ外向けてるから白眼なのね！？何これこわ  
い……………ってシャルロット！！あなたの番は来週でしょ！今日は出て  
いきなさい！げらっえ〜！げらっえ〜！

「……………ちっ」

舌打ちするなっ！

まったく……………ハイン様早くこないかなあ〜……………早く……………こない……………か  
な……………あ……………

……………

……………

……

……

…

「やあ、マリー？ありや寝てるな。ふふっ、可愛い寝顔だなあ」

ん〜なんだかふわふわするでしゅ……むにゃ……なんだか頭が柔らかいものに包まれて……うんっ……ハインしゃま……ハインさ……ッ  
！？

「おーマリーおはよ？あんまり気持ち良さそうだから、起こさないでいたわ」

んふっ……ハイン様やさし〜 ああん、ハイン様の膝枕……なん

て豪華なのかしら？にひつ後は甘い甘いピーツ！な時間ですわ？つてあれ？なんでハイン様立つちゃうの？立つのはハイン様のハイン様で充分ですわ？えっ？なんで窓を開けちゃうの？え！？え！？

「いやぁマリーの可愛い寝顔見れまし、そろそろ深夜だから帰るわ？また二週間後な？愛してるよ、マリー？でわ、あでゅ〜！」

シュタツ……バツサバツサバツサバツサ……

嗚呼、遠ざかっていく赤いドラゴンが恨めしい……

くっ……あの糞虫共のせいで……許さない……許さないわよおお！  
！……！

この日、トリスティン魔法学院に新しいスクウェアメイジが誕生したという。

翌朝、何故かギーシュ、キュルケ、シャルロットという生徒の部屋の扉が、厚さ二メートルを超える巨大な氷に覆われた。尚、火メイジ数人で溶かそうとしたが、一向に溶かす事が出来ず、二日後にやつと溶け、中から餓死寸前の生徒が発見されたという。

## シャルロットと

わたしは今、ガリアのリユティスにいる。何故ならばわたしは騎士だからだ。団長である従姉妹のイザベラに召喚され、プチトロワに赴くのだ。

ジョゼフと和解し、母様が正常に戻った今、騎士である意味は無いといえる。けどわたしは、わたしの人生の喜びの一つとして、騎士であるわたしを選んだのだ。

わたしはジョゼフとハインリヒの対峙をみて、彼らが発する濃密な殺気に愕然とした。もはや戦士としての格が違ったのだ。

わたしは騒動の後、ハインリヒに純潔を捧げた。わたしはハインリヒに忠誠を誓った騎士になった。勿論、わたしの心の中での決意でしか無いのだけれど。

わたしはベッドでハインリヒに身体を捧げ、彼に貫かれながら快感

に翻弄された。その時ハインリヒと目が合った。その目は、どんな時でもお前を守ると言っていた。

女としては震えるくらい嬉しかった。だけどその反面、守られてい  
るだけでは嫌だと感じた。わたしはわたしの意志で、彼の横に立っ  
ていたのだ。

わたしはハインリヒの剣であり、楯である。それがわたしの誇りだ  
から。

わたしに新しい家族が出来た。ハインリヒとその妻たちだ。わたし  
もその末席に名を連ねた。彼女達はなんの抵抗もなくわたしを受け  
入れ、わたしを家族だと頭を撫で、抱き締めてくれたのだ。

わたしは、わたしの意志で、わたしの家族を守りたいのだ。それも  
また、わたしの新しい誇りなのだ。

だからわたしは、未熟な自分を鍛えなおすために花壇騎士はやめな  
い。ハインリヒは修行をつけてもいいと言っていたが、それはダメ。  
彼の顔を見ていたら甘えてしまうから。

さあ、依頼を受けましょう。例えどんな困難があろうとも。たくさ  
んの絆を設けた今のわたしは、きつと誰にも負けないから。

「さて、七号。ある森でキメラドラゴンが暴れている。完璧に処理しておくね。……………絶対に死ぬんじゃないよ、エレエヌ」

ここにもわたしの絆がある。だからわたしは負けない。

今日は流石に危なかった。だけど負けなかった。暫くは動けないけれど。木々の切れ間から赤い月が見える。あなたも見守ってくれている。だからわたしは絶対に死なない。わたしはあなたの騎士だから。

わたしの使い魔のシルフィードに乗り、深夜の学院に舞い戻る。わたしは学生に戻り、今日も強くなれたか？と自問自答する。

なんだか今日は気が昂ぶって眠れそうに無い。朝まで月を見ていよう。わたしが好きだったイーヴアルディの勇者は捨てた。何故ならば、わたしの勇者はもういるからだ。

今宵は赤い月と青い月に思いを馳せ、ハインリヒとわたしの甘い記憶に酔おう。

ガチャ

「よっ！おかえり」

なんで……いるの？

「ん？……まあ、無事かと思ってさ？へへっ……余計な事しちゃったかな」

嬉しい……ハインリヒ……今すぐ抱いてほしい。身体中にあなたの証をつけてほしい。朝まで離さないで。

「来い、シャルロット」

## 次回予告

『オムニバスでお送りした今回の話。まあ相変わらずクオリティ低いけどな？まあ最近一部の妻たちが空気だったしなあ。まあそゆこと。さて、次回の-ZERO-の無責任男は、「おまっとなんてした。コルベールの科学力はあ世界—イイイイイイツ—！！」だ。必ず見てくれよな！』

?? 愛と欲望の日々（後書き）

はあ長かったです。

ちなみにジェシカの話は、故多田かおるさんの作品、イタズラなKISSのオマージュ的な。って古いねネタが。

今回書いてて思ったのは、どうやら僕はマチルダが大好きらしいという事。なんでかな？不思議です。

次回から若干内政話に入ります。そして、ロマリアぶった斬り篇を経て、エンディングへと向かいます。まあ、それで第一部完となる予定です。

後10話くらいかな？取り敢えず完結に向けて頑張ります。

それまでお付き合いしてくれたなら幸いです。感想もお待ちしています。では。

ナナツボシ

?? A Little Dragon Girl・(前書き)

なんかムラムラして書いた。後悔はしていない。

?? A Little Dragon Girl .

竜の森 トリステイン王国ド・オルニエル領の、ハインリヒの屋敷側に位置する、鬱蒼とした森林の事をさす。広さは見渡す限りとも言えようか。

この森は元来名前など無かったのだが、ここ近年のうちに、この森を支配した生物の名を冠して、竜の森という正式名称となったのだ。

そう、所謂ドラゴン。このハルケギニアにおいて、四大精霊を除けば、幻獣の中の頂点に君臨する種族である。

竜種には、四種の属性がそれぞれいるのだが、中には韻竜と呼ばれる種族があり、四属性竜種の中で最上位の種族なのである。

一般の竜の違いは知能の差である。通常の竜は、ある意味圧倒的な攻撃力を持つ”獣”と言えよう。獣であるから、行動のルーチンが本能に依存している。すなわち、基本は人が飼い馴らす事は困難である。だが、順位付けにより御す事は可能な為、調教を施せば騎乗は可能となる。

韻竜は精霊に近い存在と言え、人間には遥かに適わぬ高度な知能と知性を備え、人間が言うところの先住魔法を行使出来る。そして、独自の倫理観に基づいた社会性を持っており、その独自の価値観に

より行動するのだ。

韻竜は基本的に人間使役はされない。何故なら、自分より弱い生き物に使役される利点は皆無だからだ。だが、稀なケースとしては、メイジの使い魔召喚に応じた場合である。

メイジの力量がどれ程高くとも、所詮人間に韻竜を上回る能力は無い。だが、知性がある生物である韻竜の中には、好奇心が強いものがある。それらは自分の前に召喚ゲートが現れると、自らの好奇心に従い、ゲートをくぐるのだ。

シャルロットが使役するイルククウ　つまり風韻竜のシルフィードは、好奇心に従った結果なのである。もし、シャルロットが普通にイルククウに遭遇し、戦闘になったとしたら、彼女はこの世に居ないだろう。

さて、話は戻り、竜の森を支配する竜であるが、火韻竜のユイ・ユン・ユラという姉妹である。ただ、この三匹は火韻竜でも亜種と言える。通常は風韻竜に比べたら短めの翼を持ち、溶岩を連想させるような赤々とした鮮やかな色をしているのだ。たが三匹は、漆黒に近い赤色をしており、通常火韻竜より大きな体躯をしているのだ。

そして何より異質なのは、自ら望んで人間に使役している事である。生物として長命種である韻竜が、短命な人間に対し、使い魔のルーンを介さずに従うという事柄は、ハルケギニア史上まれである。三匹を従える人間の名前はハインリヒ。三匹の愛しい”あるじ様”で

ある。

さて、この竜の森を人の足で半日も進んだ辺りに、開けた平地がある。そこは綺麗な小川が流れ、芝生に覆われている。そして、丸太で組まれたログハウスが建っており、その横には巨大な大穴が開いている。

ここは三匹の居住区である。大穴は、竜形態での寝床であり、ログハウスはヒト形態での住みかである。小川は水のみ場であり、芝生は昼寝のベッドである。

これらは全て、土のスクウェアメイズである、ハインリヒが作った。木を根こそぎ切り倒し整地し、50メートル級のゴーレムを地下から何体も出現させて大穴を掘った。そして近くにあった川から、錬金で小川をひき、整地された土地に種を蒔き、やはり錬金で芝生を生やした。

「はふう……………」

赤いワンピースを纏った、腰まである黒髪を無造作に垂らす、可愛らしい少女　　というには幼い子が、小川のへりに腰掛け、素足で水面にばしゃばしゃと蹴っていた。

髪は黒いが、顔は地球でいう所の東欧系の美少女である。瞳は燃えるような深紅で、肌は抜けるように白い。だが、所謂色素の欠損アルビノとは違うようだ。

「はふう……………」

ため息を繰り返す少女、ユイは憂うつだった。水面を見つめながらもう半日はこうしていた。彼女の頭の中には、主であるハインリヒがいる。

これを読んでいる方にはもうおわかりだろうが、少女は竜っ子の長女である。彼女達はモンモランシー領の森で暴れていた時、討伐に来た人間であるハインリヒにあっさり倒された。

火韻竜の枠に収まらないほどの力を持つ彼女達、三姉妹だが、ハインリヒはその三匹相手に単身で勝利した。そして、本来ならば殺されても文句は言えない彼女達を、ハインリヒは悪さをしないなら助けると言ったのだ。

ハインリヒに心服した三匹は、彼を自らあるじ様と呼び、その従者となった。もっとも、ハインリヒ自体は使役を拒んだのだが、三匹

は無理やりついできたというのが真相なのだが。

それ以降、領地を賜わったハインリヒは、広大なこの森を彼女達の住みかに与え、領内の人間を森に立ち入り不可にした。ハインリヒとしては、竜舎に繋ぐマネはしたくなく、出来るだけ自然に近い場所ので彼女達を住まわせたかったのだ。

ユイ達はハインリヒの主らしくない主つぶりに、心底敬愛の情を持ち、なんとかこの謙虚な主の役に立ちたいと、いつでも背に乗ることを許している。

だが、いつからかユイの中のハインリヒに対する感情が、当初の物とは異質なものに变化しており、そしてその感情の正体が一体なんなのかが分からず、モヤモヤとしていたのだ。

基本的に竜形態でいることが当たり前な彼女達であるが、最近のモヤモヤ感に苛まれてからはヒト形態を取ることが多くなったユイである。理由はわからない。ただ、ハインリヒと同じ人間の形をしていると落ち着くからである。

不思議なモヤモヤ感は、胸が苦しくなったり、突然唸り、その辺をごろごろ転がりたくなったりする。気が付いたらハインリヒの事を考え、ため息が取り留めなく洩れ、食欲が無い。

「わらわは……病気になってしまったんじゃろうか……ふう」

ユイは真つ青なそらを見上げて、芝生にぱたりと寝転んだ。

「わらわを助けてください……あるじ様あ……」

夕方、日も陰ってきた頃である。

《お姉様〜！お姉様〜！シカを捕まえて来たんですの〜！》

《シカ イチモウダジン》

バツサバツサ……ドスン

狩りに出かけていたユンとユラが、丸々太ったガゼルを捕まえて帰ってきた。

《お姉様〜！早く食べるのですの〜！最近お姉様は全然食べないから心配ですの……》

《シカ ペロリ ナウ》

竜形態の妹達が、食が細くなった姉を心配し、遠くの山まで狩りにいったのだ。普段は竜の森に住まう幻獣の類を主食としているのだが、妹達はなんとか元気が無い姉に元気を取り戻して欲しかったのだ。

「ご苦労じゃったな……でも、食べたくないのじゃ。わらわは良いからお前達が食べるがよい」

ユイはちらりと力のない笑顔で妹達を労うが、やがてぼてりと寝返りを打ち、背中を向けてしまった。

《お姉様……》

《オツキイアネ ションボリ》

ユンはユラに頷くと、身体を震わせた。すると身体が発光し、次の瞬間そこにはユイそっくりの少女が裸で立っていた。ユイとの違いは身長位だろう。三匹とも頭ひとつずつ違うようだ。

「お姉様、たぶんお姉様がこうなっているのは病気じゃありませんの」

「わらわは病気じゃ……ないのか？」

「はいですの。いえ、ある意味病気ですが、それはたぶん、恋の病ですわ」

ユイは身を起こし、ぺたりと芝生に座ったまま、ユンを見上げた。

「じ……い？」

「はいですの。大好きな雄に触れたくて触れたくて仕方なくなる、素敵な病ですわ。お姉様はあるじ様に恋をしたのですわ！」

ユンはキラキラした目で、ユイを優しく抱き締めた。普段の強気が鳴りをひそめた我が姉が、可愛くて仕方がないという様子である。

「恋……わらわはあるじ様が……好き？」

「はいですの！お姉様、今度あるじ様を乗せるときに、あるじ様に求愛の儀式を試してみたらいいですよ」

ここに来て急に恋を意識したユイは、色白の肌を真っ赤に染めて、もじもじし始めた。

「わらわがあるじさまに求愛……求愛……交尾……ひゃあっ！だめじゃ！恥ずかしいのじゃ！あう……」

「大丈夫ですの。あるじ様はきつと受け入れてくれますの。わたくしもお姉様を応援しますの！恋は素晴らしいものですの。ねえユイ？あなたも何か言っんですの！」

「ヤツク デカルチャー」

「……………」

「と、とにかく！あたって砕けるですの！」

「わかったのじゃ！わらわはあるじ様に求愛するのじゃ！頑張るのじゃ〜！」

「お〜！」

夕暮れの森に、竜っ子達の笑い声がこだました。恋をしている

それを自覚したユイは、ただの恋する乙女だった。深紅の目がうるうるとうる可愛らしい少女となった。

「おゝ！珍しいな、人の姿でいるなんて。まあ、そっちのが可愛いけどな、あっはっは」

突然森の中からハインリヒが現れた。竜っ子達は……慌てた。

「ひいっ！あるじ様、どうかしましたのです？」

「あわわわ……あるじさささま……わらわに何かようきゃ？いたひ……噛んだ……」

「ヒーローハ オクレテ アラワレル コレ テツソク」

「ん？なんか慌ててないか？まあ、いつか！でな、明日なんだが、マチルダ乗せてアルビオン行きたいんだ。誰か行ってくれるか？朝早くて悪いけど」

ハインリヒは竜っ子達の狼狽が気になったが、片眉を上げるに留めて、アルビオン行きを告げた。

(ほらっ、お姉様が行くというのですの！)

(わっ、わらわは心の準備が出来ておらぬ……)

ハインリヒは何やらわたたしている長女と次女を尻目に、シカをもぐもぐしていたユラを見た。

「なんだかユイとユンは忙しいようだな。よっしゃだったらユラにたの」

「お姉様が行きますの！」

「わらわが行くのじゃ！」

ハインリヒのセリフを食い気味に、ユイとユンのユニゾンが炸裂した。

「お、おう……。ならユイに頼むな？つとそうだ！お前らにお土産があったんだ。気に入るか分からないが、新しい服を作ってきたぞ？」

そういうとハインリヒは紙袋から三着のワンピースを取り出した。

全て白いが、デザインが少し違う。

ワンピースは厚手の綿生地で作られたしつかりとしたもので、ストンとしたデザインに、一着はヒマワリ、もう一着は朝顔の染めが入ったものだ。ヒマワリはユニに着せ、朝顔はユラに着せられた。

ただ、残りの一着は無地のシンプルなものだった。だが、背中側の腰の位置に大きなリボンがあしらってあった。それをハイソリヒはユニに着せた。

「っ！？あるじ様？なんでわらわだけ形がちがうのじゃ？わらわもお花の絵が良いのじゃ……」

「あるじ様！お姉様が悲しんでいますの！」

「アルジ マルカジリ」

「ああ、すまんすまん。変な意味は無いんだ。たださ、俺の生まれた国でユイは『結』と書くんだ。意味は結ぶというもので、人と人の縁を結ぶという縁起がいいものでな？縁とは絆って意味だ。だからユイの名前はいい名前なんだ。だから、リボンを結んでみたんだ。気に入らなかつたならごめんな？」

ハインリヒは実にすまなそうに頭を掻いた。ユイとユンはそんな主を見上げた。ユイは顔が真っ赤だ。

「そ、それならば着てやつても良いのじゃ……あるじ様が泣いたら困るから着てやるのじゃ！そうか……ユイはあるじ様の国の名前なのか……」

「あるじ様もやりますですの〜。くるですの〜！」

「ソコニ シビレル アコガレルー」

ハインリヒ、絶賛の嵐である。

「ま、まあ気に入ったならよかった。ああ、そうだ。ユイちよつと動くなよ」

そついうとハインリヒはユイの前に座り、髪を優しく梳いた。

「はっ、はっ……あ、あるじ様？わらわはまだ心の準……っく……ん？」

ハインリヒは梳いた髪を整え、ユイの頭にワンピースと同じ色の大

きなりボンを結んだ。

「いやあ、仕立て屋のオッサンがさ？余った生地でリボン作ってくれたんだ。うん……似合うぞ、ユイ。可愛くなった」

ユイの頭をぐりぐり撫でながら、ハインリヒは微笑んだ。あまりの衝撃に口をパクパクさせたユイの全身からは湯気が出ていた。

「じゃ、明日頼むな？んじゃ帰るわ。寝坊すんなよ〜」

ハインリヒはフライを唱え、屋敷に向かって飛んでいった。

「……………」

「お姉様!?!」

「……………」

「お姉様!?!?!」

「……………きゅっ」

極限まで顔を赤くしたユイは、そのまま仰向けに倒れてしまった。  
ユイの初恋はこうして確定されたのだ。

翌朝、ハインリヒにユイは求愛の儀式　愛しい雄であるハインリヒにユイが狩りを依頼。ハインリヒはこれを承諾したのだった。

ハインリヒは求愛の儀式の事は知らないのだが、「何匹でもいいよ」と笑顔を向けてくれただけで、ユイはたくさんの幸せに包まれたのだった。

トリステイン王国ド・オルニエール、ハインリヒの屋敷側の森の奥深く。ぽっかりと開けた場所にある小川に、白いシンプルなワンピースを着た少女が、素足で水面をばしゃばしゃと蹴っていた。

「……あるじ様はまだかのう」

少女はシカを抱えた愛しいあの人があるのを待っていた。リボンが風を受けて揺れた。

少女の顔に憂うつは無く、期待の笑顔が浮かんでいる。

?? A Little Dragon Girl・(後書き)

「わらわ」というロリっ子がたまらない今日この頃。

物語の流れを無視して、済まなかったと思う！

だが反省はしない。

?? 我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。

お久しぶりです。連載再開です。

?? 我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。ま

「……………ちょっと、やりすぎちゃった……………」

「は、はあ……………なんだかあり得ない光景だね……………」

ここはド・オルニエル領の、以前はただの荒野だった場所である。その荒野だったはずのエリアを前にしてのハインリヒとマチルダの呟きが、冒頭のそれである。

何故のぼやきか？ならば刮目して見よッ！このあり得ない光景をッ  
……………!!

まあ、読者諸君は見られないのだが、ハインリヒがいま見ている景色とは、5階建てで30軒が入れる集合住宅が、見渡す限り建っているのだ。

ハインリヒはハインリヒで多忙であるから、ほとんどこの場所には来た事が無かった。だが、エレンから「住宅の施工が一段落したから、あなた見てきて」と朝食の時に軽く言われ、まあ見るかと来てみたらこの光景である。

エレンことエレオノールは、半年前によく汚物分解のためのバクテリア研究に目処がつき、その実用化のモデルケースとして、兼ねてから計画していた団地に踏み切ったのだ。

下水道と上水道のインフラを整備しつつ、都市オルニエールにアクセスしやすい荒野に団地を建てた。エレオノールはハルケギニア中から土メイジを大量に集め、半年でこの光景を作り上げたようだ。

本来の団地ならば、広くともせいぜい3LDKサイズの間取りだが、エレオノールが設定した間取りはなんと5LDKである。エレオノール曰く、「ちょっと狭かったかな？まあ仕方ないよね、最初だし」だそうだ。こういう部分は流石に大貴族の息女らしい奔放さと言えるだろうが、それはまあご愛嬌というところだろう。

さて、時間を半年前に戻して説明しよう。

漸くバクテリアの安定培養と、運用の目処がついたエレオノールの研究室だった。彼女は自身が土メイジではあるが、クラスはトライアングルである。

当初予定していた建造物の施工には、1人では到底間に合わない。そこで、マチルダに依頼していた件にGOを出すのだった。

それは、ハルケギニア中の貴族の家督を継げない次男や三男の土メイジ達を、クラスに関わらず召し抱えるという計画だった。

実際、この時点でのオルニエール・サウスゴータ侯、つまりハインリヒは、成り上がり貴族という評価より、敏腕経営能力を持つ優秀な人間という評価のが圧倒的であった。

実際、ハルケギニア各地の有力商會がこぞってオルニエールに支店を作り、果ては独自の飛空艇の開発が進んでいると噂が流れだした。冷静な商會筋も反応し、空港予定地とされる場所の周りの土地に倉庫を競って建てている。

その現状が示す通り、オルニエール・サウスゴータ侯は、優秀な人間という評価が順当なのである。利でしか動かない商會が、国境を越えて動いているのだから。

そして、領地を持たない貴族からしてもかなり高給といえる年棒を保障される。すなわち、オルニエール・サウスゴータ侯に仕官することは、ある種のステータスとなっているのだ。

というのも、年棒の基準は家柄は関係なく、完全に実力主義だからだ。つまり、侯の元で出世するということは、同時に優れたメイジ

であるという証明になるのと同義という事になるのだ。

という訳で、半年前から日に日に増えていく土メイジ隊（仮）は、エレオノールがジャンに描かせた団地の設計図を、来る日も来る日も空き地に建て続けた。とにかく自重という言葉を教えてやりたいものだ。

ハインリヒとマチルダがこの圧倒的な景色を呆然と眺めていると、50人くらいの集団がやってきた。

全員何故か紺色のニツカポツカの作業服に、綿入りのジャンパー、そして安全第一と書かれたヘルメットを被っていた。

「な、な、な、なんつー格好してんだ!？」

「なんだか個性的な服装だね？あんなの見たことないよ」

マチルダの反応が典型的なハルケギニア人のリアクションとして正解なのだろう。ハインリヒは、何故ハルケギニアで土の作業服？というリアクションである。

「お、これはこれは領主様じゃありませんか！わたくし、オルニエール土メイジ隊通称ヨイトマケ団の団長を任されています、アルマ・ド・グラモンと申します！以後お見知りおきを！」

綺麗なブロンドを短くカットした美男子が、白い歯をキラリとさせてハインリヒに握手を求める。ニツカポツカを着こなすイケメン貴族というシユールさに、二人は苦笑いを漏らす。

「あ、ああ、よろしく。ところでギーシュって弟いる？」

「はっ！ギーシュは我が弟であります」

「「やはり……」」

ハインリヒは冷や汗を流しながら、彼らの話を聞いた。彼らが言うには、家督を継げない貴族はかなり肩身が狭いという。そして、気軽にオルニエールに仕官してみると、今までの常識が壊されたという。

仕事を与えられ、そして労働に見合った対価をしつかり貰える。オルニエールには各国から様々な商人が出入りしている関係で、多種多様なマーケットが出来上がっている。

彼らは虚無の曜日には稼いだ金で物を買ひ、恋人とデートする。または家族を持つ。それを糧にまた仕事を頑張る。これはささやかではあるが、ハルケギニアに新しいライフスタイルが生まれたのだ。

貴族の穀潰しは、今や伝統という重責から解放された新しい人種になったのだ。

こうして張り切ったヨイトマケ団ががむしゃらに働いた結果、団地の総個数は15000となった。

「いやあ、少し張り切り過ぎましたわ！ワツハツハツハ……」

『ワツハツハツハ！』

豪快に笑うヨイトマケ団の皆さんに、どん引きのハインリヒだった。

「ところでアルマン」

「はっ！」

「その服装といい、ヨイトマケというネーミングといい、一体どういう事だ？」

「はっ！それはエレオノール様に見せて頂いた専門書に載っていたシーンでしたか？それに出ていた建築戦士の装いを模倣したのです」

「へえ……よかったな……な、なあ？マチルダ」

「あ、ああそうだね……カッコ……いいよ？」

「ありがとうございます！では、私たちはこれで！完成披露発表会を楽しみにしてて下さい！おし、お前ら行くぞお！」

「あ、あの、アルマ『おー！』……話キケヨ」

ヨイトマケ団はハイシリヒをスルーして行ってしまった。

「トーチャンの為なら」

『エーンヤコラー！』

「カーチャンの為なら」

『エーンヤコラー！』

ヨイトマケ団は去っていった。

「……………」

「あれ、さ？俺の故郷じゃ肉体労働者が着るものでな、貴族が着てたら気が狂ったと思われるぞ……………しかもあの掛け声……………美わ……………いや、もういいわ」

なんだか嫌な疲れがハインリヒを包んだ。

「ま、まあ気にしちゃダメだよハイン……………なんか嬉しそうだったしね。……………テファに見せないようにしなきゃ」

「……………マチルダ、帰ってエツチして寝よや……………」

「そつだね……………え!？」

「言質とつたなり〜」

「ま、までー」

「捕まえて〜らん〜つぶぶ〜」

いつも通りのハインリヒとマチルダであった。

ハインリヒのお屋敷

やあハインリヒだ。ん？知ってるって？そうかい。こついつのを様式美というんだ。

今は家族団欒のディナー中なんだが、ジエシカとカトレアがいない。いまはトリスタニアの屋敷に籠もって何やらやっているようだ。

商會が忙しいらしいんだが何やってるのかね？あれですわ、キャリアアウーマンの妻を持った亭主の気分だ。

「あの、あのあの、ご主人様あーんです……」

はいはいあーん、シエフィは可愛いのう。……でな、最近構ってくれないんだ。寂しいのう……。

「ハイン様……その……あーんです……」

あーん！いやあモンモン、今日もドリルがキュートだね！……まあ生き生きしてるからいいんだけどな？俺としちゃ寂しいんだわ。

「ハインお兄ちゃん、あーん！」

あーん！テファ、ナイスおっぱい！……とまあ、あの二人は最近そんな感じだな。

「ハイン、あーん……ちょっとやってみただけだよ！」

あーん！恥じらいマチルダありがとうございます！……でだ！あーんはいいから話を先にだエレン！

「むうむう……なに？」

眼鏡をキラんとさすな！怖いから……でな、完成披露発表会ってなんだ？俺、聞いてないぞ？

「ああ、うん。なんか大事なっちゃって、その……ゴニョゴニョ……」

む？ゴニョゴニョが大事！言いなさい！

「えっと、お母様に団地を自慢したらあ……マザリー二様がノリノリになつてえ……えと、マリアン又様があ……国家行事にしてしまえ的な……そしたらあ……アンリエッタ姫がその……ウエルズ様に自慢してえ……最近チエス仲間になつたガリアのジヨゼフ様があ……来たいつてなつてえ……いつそゲルマニアやロマリアを呼んでしまえ的な？えへっ……ごめんなさい！」

おまつ……なんてことだ……シエフィ！旅支度しろ！

「はっ！あの、ご主人様？」

バカ野郎！逃げるんだよ！あれだ、ロバ・アリ・カリイエ辺りに！

じゃ、そゆことで……

「行かせないわよ？」

ですよー？というかなんでそんな大事にするんよ……

「そりゃあ、マリアン又様あたりが自慢したいんでしょ？あ、もう一個いい忘れが……お母」

バアン……！！

「婿殿はおりますか？」

「久しぶりだな！ハインリヒー！」

来たよ……久しぶりに……エレン……最初に言おうな……はいはい……  
お話でしょ……O・H A・N A・S H I……もういつそ殺せよ〜

「はい、婿殿、ちょっと執務室でO・H A・N A・S H Iしましょ」

「フハハハハ！」

もう公爵のキャラ原型ねえよ……はぁ……死んだな……俺……

オルニエール某所・巨大な倉庫施設内

「ハインリヒ君……やっと来てくれたね……フフフ……」

暗い倉庫内にジャン・ハゲシイネ・コルベールの怪しい笑い声が響

いた。

「ジャン……いったいなんの呼び出しだい？」

訝しげに応えるハインリヒ。今朝、ジャンからハインリヒに怪しい手紙が届いたのだ。”来い コルベール”と。流石に某作戦部長は迎えには来なかったが、指定の倉庫に入ると、ピンスポットで浮かび上がるジャンが待ってたと言っわけだ。

「フフフ…見たまえ！」

ババーン！！

ジャンの合図で照明がついた。目の前にはF 12のシュトールのような複雑怪奇な飛空艇が鎮座していた！

「ジャン……やったな……とうとうやったな！おらっ頭にキスしてやる！ヒヤッハー！！！」

「キスは断固拒否だが、抱擁は受けよう！さあ誉めたまえ！」

ハインリヒとジャンは涙を流して抱擁を交わした。

「な、なあ？近寄って……いい……？」

「勿論だよ！このプロトタイプ”自力で翔べるんです零号機”は君の為の作品なのだからな！」

ジャンは腰に手をあて、高笑いした。ハインリヒは零号機に近寄ると、機体を叩いてみる。

「これは……全て金属か！？」

「ああ！ジョゼフ王……ゲフンゲフン……知り合いに頼んで作った丈夫で軽い合金だよ！ハインリヒ君の特殊金属図鑑が役に立ったよ！」

誇らしげなジャン。しかしこのハゲ、実にノリノリである。

「なあ……今あんた……ジョゼフって言わなかったか？」

「いや、言っていない！上善水如って言ったんだ！」

「いや、それ日本酒の名前だから……しかもジョシしかあってない……」

…おい、白状しろ！ジョゼフと何はなした！！！」

ぐいぐいと首を締めるハインリヒ。

「くるじい……ジョゼフさまが……ボインのガリ……ア娘を紹……介  
」

「きつさま〜！修正してやる！裏切り者！！ハゲ！！超ハゲ！！」

「う、うるさい！！ハーレム野郎が私の気持ちがわかるか！！ハゲ  
だけどイケメン（笑）とか言われてるんだぞ！だいたい君の屋敷に  
なんか居心地悪いんだからな！至るところで18禁ばかりじゃない  
か！くっそう〜ボインの何が悪い！！」

荒いぶるジャンにどん引きなハインリヒであった。相当ストレスが溜まっていたらしい。

「いや、しかし、ジョゼフに情報ながすのは不味いだろ？」

「ん？君が決裁したじゃないか？ジョゼフ様と君で共同出資でリュ  
ティス郊外に製鉄所作るって……忘れたのかい？」

「え？」

「え？」

ぽかんとする二人。

「たしか……君はリビングでモンモランシー君を膝に乗せ、お楽しみの中で……私が書類を見るといって、あ、オツケーオツケー！ センセを信用してるから勝手にハンコ押しして……思い出したかね？」

凄まじい速度で土下座したハインリヒであった。

「こほん、じゃその件は解決という事で話をすすめようじゃないか

ジャンはハインリヒに説明する。

タルブから引き揚げてきたゼロ式戦闘機と、ハインリヒが地球から持ち帰った航空力学の本を叩き台に、レシプロエンジンとジェットエンジンを解析した。

構造は理解したが、現状は化石燃料の入手が困難である事実。サハ

ラ方面には原油が埋まっている可能性があるが、現実的に開発の目処が立たない。

そこで風石をエネルギーとしたエンジンを開発したが、出力が足りなく、重量がある船体を浮かせても、縦横無尽に飛びかうまでは出来なかった。

そこで目につけたのが超伝導モーターである。ハイブリッドが何となく仕入れた書籍の中にあつたのだ。実用化寸前の超伝導モーターが、それを雛型にして出来たのだモーターが。全くでたらめな話だが、スクウェアアークラスのメイジが風と水の合成スペルで、絶対零度に近い温度を実現出来るのだ。

それにやはりスクウェアアークラスの土メイジに、モーターの層ごとに固定化をかけさせると、限りなくゼロ抵抗な状態を維持出来る事が判明。

これにより、一足飛びに電気という問題を解決出来てしまった。そこからは一気にブレイクスルーとなり、船体に関わる制御、ようは室内の空調気圧維持、可変翼の制御、など色々と幅が広がった。

推進力はガリアと共同出資で作った例の製鉄所で、ジャンの入れ知恵により開発した、所謂、超々ジェラルミンと、さらに軽量で硬度を実現した、マグネシウム合金が解決した。

通常航行時は、風石が燃料のジェットエンジンを使って推進する。つまり、浮いてしまえば問題ないのだ。

だが、戦闘を前提としている為、ドッグファイトが出来ねば意味が無い。

更に、短距離で離陸や、そのまま垂直に離陸　つまり、STOLやVTOLというタイプが必要だ。

それを実現したのが、先ほどの超々ジェラルミンで作り、やはり層単位で固定化をかけた大容量のコンプレッサーだ。その圧縮能力は地球の比ではない。固定化のかかったタンクの強度により、超圧縮が可能。それを一気に解放することで、あり得ない瞬発力と速度を実現したのだ。排出する場所を全方向に設置する事で、急加速、強力な逆噴射によるブレーキングが可能だ。

さらにマグネシウム合金で作られた機体は、外装にもゼロ抵抗+固定化の反則仕様だ。

結果、偽シュトラールには風石型ジェットエンジン8基、超圧縮コンプレッサー4基、超伝動モーター4基を積んだ化け物の完成だ。

単純にマツハ4〜5を実現出来るという。現段階では肉体的にマツハ2が限界で、以後、スタビライザーやダンパーの充実が課題になる。マツハ2にしても、身体を鍛えた人間に限るのであるが……。マイナスG状態で水平飛行も可能らしい。

という訳なんだ。どうだ？凄いだろう？」

ハインリヒは固まった。ジャンの仕事は次元を越えたのだから。スクウェアエニツ スを越えたのだから。

「ジャン凄いよ……何でも褒美だすよ……」

すると、ジャンは笑いながらハインリヒにねだる。

「なら、正式に建造ドックが欲しい。巨大戦艦クラスを作りたいんだ。どうか？」

「条件がある。ひとつ、この零号機をあなたの二つ名にかけて、スネーク級と命名する。ふたつ、スネーク級をデチューンして、マッハ1を最高速度に設定し、それを汎用量産型とし、炎蛇の炎からブレイズと名付け、出来るだけ早く五台作れ。みつつ、巨大戦艦クラスは、現状の船を飛空挺化する事。レキシントンをモデルにしよう。ウェールズに頼んで一台作らせるわ。それまではブレイズの量産をメインに頼む。よつつ、工程を超細分化し、機密保持を徹底しろ。その上なら人員を雇用しろ。そうだな、コルベール航空研究所と名付けよう。これらが飲めるなら、予算も最優先でつける。造船ドックは明日からすぐにヨイトマケ団にやらせればいい。どうだ？」

「ありがとう！感謝するよ。ウフフ……たまたまなあ……」

ハインリヒはジャンがマッドだといまさら思い出した。

ハインリヒはその日、最高の気分で眠るのだった。妻たち全員を昇天させてから……。

その2へ続く。

?? 我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。

ようやく方向が定まりました。またよろしく願います。2、3  
話内政&amp;mp・説明多いかも

?? 我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。

タイトルは某公安の 巻氏のセリフを借りました。ハイーン味の現状とあつてゐるかなと。

?? 我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。ま

ゴールドン商会は今やハルケギニア規模で展開する、一大商社と言えるかもしれない。

会頭のジエシカと、フィクサー的立場のミスフォンテーヌつまりカトレアである。このゴールドン商会の扱う商品は、主に食料と食材が多い。

と言うのは、ゴールドン商会が経営する飲食店チェーンの仕入れを円滑にするために作られたのが始まりだからだ。

ゴールドン商会は、資金を出資者を募り集めている。現在、ハイシリヒが七割、ジョゼフ氏が二割、残りがマザリーニ氏の出資率つまり、この三人がオーナーという形になっていた。

最初はハイシリヒのみの資本だったのだが、後述するがゴールドン商会が運営する飲食店のシェアが、全体の五割を占めるのがガリア王国なのだ。

ハルケギニア全体の人口比率で見ても、ガリア王国の人口が圧倒的に多い。ゴールドン商会の外食部門の *Jessica's Kitchen* が、メインターゲットとしているのが平民層である関係で、人口密集地、総人口においてもトップなのである。

必然的にシェアがガリア王国がメインとなる現状となった。そこでネットクになったのが貴族制度である。領地を持つ貴族は、王に一定の税を納める。領主は領民に税を課し、領地で商売を営む者にも税を課す。

つまり、王国という一つの集合体ではあるが、下世話な言い方をすれば、地主にシヨバ代払って屋台を開くテキ屋のような関係であり、その屋台で売る商品の価格はテキ屋次第な訳だ。

周りの屋台との関係で価格はある程度平均化はする。異様に高かったら、客は買わないのだから。逆に、出来るだけ利益は搾り取りたいから、平均的に下がりはしない。昔から暗黙の了解で、ある程度の水準を保っている。その税率はほぼ五割以上という暴利であるのが普通だ。

さらに、領地間の関税、国家間の関税と、多重に税が加算される。このような現状がある中で、平民をターゲットにした商売かつ、高品質を謳う *Jessica's Kitchen* では、必然的に利益が薄くなる。

そこで、お忍びで夫人と共に通う位のファンであるガリア王国現王、ジヨゼフ一世が、共同オーナーになることで、ガリア王国現地法人を発足させた。

ジョゼフ氏はある意味職権乱用とも言えるが、平民をターゲットとした商売に限り、税率の上限を五割と定めた優遇政策を敷いた。ジョゼフ氏も世に言われる無能ではない。商業的な減税を制度とした結果、ガリア王国での流通が活性化し、経済が潤うという結果を生んだ。

これがモデルケースとなり、ガリア王国では税制自体が見直され、“税率を高くせずとも、民に金を落とさせれば結果、利益率は高い”という現代地球に近い思想にシフトしていくが、成熟したのはジョゼフ氏が晩年の頃である。この功績により、ジョゼフ氏が“税の父”という二つ名を冠したのはまた別の話だ。

#### 閑話休題

税の問題を解決するというジョゼフ氏の好意から、ジョゼフ氏の経営参加が始まり、トリステイン王国のマザリーニ氏もそれに賛同した。

マザリーニ氏はトリステイン王国の宰相という立場もあり、出資額は全体の一割に過ぎない。これは“鳥の骨”と揶揄される彼が、新興貴族であるハインリヒに必要以上に肩入れしていると取られないための措置である。

しかし、世間で言われるような腐敗政治家ではなく、純粹にトリス

テイン王国に奉仕している彼に同情したハインリヒが、彼の政治活動が円滑に出来るようにと考慮した出資なのだ。

資本の一割と言えど、その規模は大きいゴールデン商会である。マザリーニ氏に配分される配当金は、年間五千エキユは下らない。個人で動かせる金としては充分だろう。

そういう訳で、現在ゴールデン商会には複数の資本で運営されているのである。

では、具体的にゴールデン商会を見てみよう。

本拠地はオルニエールにあり、支店はトリスタニア、リュティイス、サウスゴータにある。さらに複数の出張所が多数あるが割愛。

メインとなるのは各地の食材、名産品の輸出入と、卸売業である。ワインや野菜、穀物に塩や香辛料に調味料。大まかにはその辺りである。食糧というカテゴリーでは、全体の三割を占めるシェアをゴールデン商会が現在握っている。特に塩と香辛料はハルケギニア内で飛び抜けている。これは岩塩が主流のハルケギニアに、ハインリヒが持ち込んだ海水塩の精製方法で作成された安価で良質の塩が安定供給されるからだ。さらに胡椒以外のスパイスの生産方法を持ち込んだ結果、塩・香辛料に限ってはシェアは七割にを独占している。

次に、外食部門である。当初始めた焼きそば屋台をフランチャイズ

化したものは未だ安定した平民の成り上がりの登竜門として健在である。これでまとまった財をなし、成り上がる人間が多数生まれたのだ。ただし、屋台を得るための技術的な認可が中々降りないのであるが……。これは審査をある程度厳しくしないと、互いに食い潰すという懸念から生まれたのだ。

次に、当初カレー専門店として展開するはずだった計画が、米の安定した生産が可能になった関係で、方向転換した。それが Jessica's Kitchen である。

ここの売りは、店員が全て若く綺麗な女性しかおらず、制服が人気である。どうみてもアンナ ラーズであるが、それは真のオーナーの肝入りなせいだ。

Jessica's Kitchen のラインナップは、地球のファミレスではスタンダードなメニューで、そこにカレーも人気メニューとしてある。スイーツも充実しており、それが制服目当ての男性客だけではなく、女性客の心を掴んで止まないのだ。

貴族をターゲットにした、ワンランク上のラインナップを誇る姉妹店 Jessica's Palace も好調だ。

因みに店舗数はトリステイン王国、ガリア王国、アルビオン王国併せて Jessica's Kitchen が百店舗あり、Jessica's Palace は主要都市のみしかなく十二店舗である。

これらの業務を支える人材は、社員という意味では、今や五百人に達するが、全て平民である。これは経営責任者であるジエシカとカトレアの理念によるものである。出来るだけ、地域の平民にお金を落とし、平民層が潤えばいずれ自分たちに帰るという考えだ。

貴族が一ヶ所で多額に落としても、それはあくまで一過性の物ではない。実際は地域経済を支えるのは平民なのである。ならば、平民層を重視するのは必然であり、ゴールドデン商会としては、まだ成熟していないハルケギニアの経済思想を、企業レベルで啓蒙したいと二人は考えているのだ。

ジエシカとカトレアの最近は、多忙故にトリスタニアのオフィスに詰める事が多く、中々ハインリヒと触れ合えずに遣る瀬ない思いを抱いている。

だが、それと同時に甘美な疲労感と、多大な充実感を感じていた。

ジエシカは平民という生まれである以上、その人生での選択肢は決して多くなかった。

カトレアは貴族である。それもヴァリエール公爵家という名門中の名門だ。だが、その身に巢食った病巣に蝕まれ、青春時代は闘病生活だった。父親から名ばかりの領地を貰ったが、所詮は籠の鳥だった。

その二人がハインリヒに新しい人生を提示され、今ここにいる。自分たちの好きなように、自分たちの為に仕事を作り、取り組む。苦労は結果となり、自分たちに帰ってくる。

ジェシカは本来選択出来なかった。カトレアは本来ここに居れなかった。その二人がこの仕事に感じる想いは、今やライフワークであった。

多少の疲れは心地好さしか感じない。今日もハインリヒに感謝しつつ、また仕事に飛び込んでいく二人であった。

「さあジェシカ、今日も頑張りましょう」

「うん、カトレア。今週こそはハインに逢いたいもんね！」

「そうですね」

都市オルニエール

もはや荒野の地方都市だったオルニエールは、今やハルケギニア中の人種が集まる商業都市となっていた。

その商店街をメイド服姿のシェフィールドが歩いていた。なにやら工芸部品などを扱う専門店を覗いているようだ。

色々な部品を眺めては、その端正な顔を曇らせて思案している。シェフィールドは虚無の使い魔ミヨズニトニルンである。その効果はあらゆるマジックアイテムを支配し、扱う事が出来るのだ。という事は何かマジックアイテムでも造るのだろうか？

シェフィールドはまた何かを買い入れ、通りを歩いていく。

この街でシェフィールドはある意味有名人であった。というのは、傭兵ギルドなどのせいで、若者が多数入植しているオルニエール領だ。血気盛んで好色な若者も多い。

そこに買い出しによく現れる、美人で愛らしい使用人姿のシェフィールドが狙われない訳がない。ナンパ的な意味で。

だが、シェフィールドはハイソリヒ一筋の娘である。近づく男は彼女が胸元から取り出す何かに、たちどころにビリビリビリ!とやられるのである。

そして、邪気のない笑顔で、「あの、あのあの、シェフィはあるじさまのものなのです。」「ごめんなさいです!」とあどけない表情で言うのだ。

因みに、ビリビリするのはジャンお手製のマジックアイテム「ビリビリへび君一号」である。有体にいえばスタンガンなのであるが。

そんなシェフィールドが、何故か密かなアイドル的存在となっていた。主に荒くれ者に。もっとも商店街のおじさんおばさんには、気立てがよく頑張り屋なシェフィちゃんと人気である。

そんなシェフィールドが、両手に荷物を抱えて帰っていった。行き先は屋敷ではなく、ジャンの研究所だった。

「う、こるべーる先生いますですか？」

「いらっしやい、シェフィールド。今日はどうしたんだい？あ、あれの続きかな？」

にこやかに出迎えたジャンは、彼女を迎え入れた。

「はいです！ハナハナへび君を今日は完成させます！」

胸の前で拳を握り、気合いを込めるシェフィールドだった。

シェフィールドは不思議な発明をするジャンを先生と崇めていた。

逆にジャンはシェフィールドのミヨズニトニルンの能力を自身の研究に役立てている。お互いに尊敬しあう不思議な関係であった。

自身のアイデンティティを親にもジョゼフにも否定され、壊れかけたシェフィールドをハインリヒは救った。だが、その切な過ぎた出来事は、彼女を幼児性に退化させた。ハインリヒはそれを受け入れ、彼女の新しいアイデンティティ構築の過程であると、長い目で静観する事にした。それに 生涯の伴侶の一人としても。

その結果、シェフィールドの歪んだ攻撃性は消え、ただハインリヒの役に立ちたいという思いで今を生きている。それは依存ではないか？という指摘中にはあるかもしれないが、それらの矛盾を含めて一生彼女を背負う覚悟のハインリヒは、まあいいじゃないかと楽天的に感じている。

尚、ハインリヒはジョゼフに一連の経緯を話したが、「余は何もできぬが、ハインリヒが幸せにしてやって欲しい。ミューズの希望ならば、何でもきく」と言われた。

ある晩、閨を共にしていたハインリヒとシェフィールドだが、ハインリヒはシェフィールドに訊ねた。

「ジョゼフはお前への仕打ちを悔やみ、そして今後のお前の幸せを願っている。償いを何でも叶えたいと言っている」と。

だが、シエフィールドはハインリヒの胸に縋りついた。涙を見せるのを嫌ったのだろう。そして、はっきりとした言葉でこういったのだ。

「ジョゼフ様を恨んではいません。あの方はわたし以上に空虚だったから。今はあの方も生き甲斐を見つけ、わたしもハインリヒという光を見つけました。だから、それでいいのです。わたしの願いは貴方の愛だけなんです」と。

それを聞いたハインリヒは何も言わなかった。そのかわりに、シエフィールドの溢す涙を一粒一粒舐めとり、熱い接吻で返事をした。

これ以降、シエフィールドの中からささくれ立った刺は消え、ただ一心にハインリヒに真心を尽くすのであった。

### 閑話休題

シエフィールドは研究所でハナハナへび君とやらを作っていた。それは、丸い台座にドーム状のガラスがはまっていた。

一心不乱に工具を動かし、ジャンに魔力を注がせる。そんな作業が夜半まで続いた。

「うっ……」

「できたっ！！」

工具をおいたシェフィールドは、額の汗を拭くと満面の笑みを浮かべたのだった。

### ハインリヒ執務室

今日もハインリヒは領主としての仕事に追われていた。住民からの陳情や苦情、商売絡みの決済……片付けど片付けど増える勢いなのだ。

さらには新しい事業が次々立ち上がり、いくら秘書のマチルダが有能でも限界があった。息抜きに魔戒騎士としてのホラー狩りもするが、何せ心身ともに疲弊していたのだ。

「はあ……公爵に人借りつかない……つか、マザリーニのオッサン引き抜きたいわ……マジで……」

シングルモルトで食道を焼きながら、ハインリヒは執務机に両足を

投げ出した。

ことり……

ハインリヒの目の前、机の上に何かが置かれた。ん？とハインリヒは目を凝らす。

” 灯りを消してください。そして魔力を注いでください”

机の陰からカードが覗いた。

ハインリヒは首をかしげながらも指を鳴らし、部屋は闇に包まれた。そして、置かれた物に魔力を注いだ。

ふわぁ

ばぁぁ………

ドーム状のガラスの中が淡く光り、中では光の粒子が集まった。それはやがてハイソリヒが見馴れたある木を形作った。

桜である。

次の瞬間、木は蕾を膨らませ、デフォルメされた桜の花弁が次々開いていく。

ひとつ…ふたつ……

いつしかそれは満開の艶やかな姿となった。それと同時にハイソリヒには懐かしい曲をオルゴールが奏ではじめた。豪華な桜吹雪を伴って。

さくら さくら

やよいの空は

みわたす限り

かすみか雲か

匂いぞいずる

いざや いざや

見にゆかん……

いつの間にかハインリヒはそれを口ずさみ、涙を流して望郷の念に駆られた。たまに戻れても、もう帰ることは出来ない故郷を思って。

「シエファイ、おいで」

ハインリヒは優しく彼女を呼んだ。

「あの、えと、突然ごめんなさいあるじさま……なかないであるじさま……ごめんなさいごめんなさい……」

ハインリヒの涙を見て、何か悪い事をしたのだと怯えるシエファイルド。

「違うよ。嬉しくて泣いてたんだ。ありがとうシエファイ。前に口ずさんだ曲、覚えていてくれたんだね？ありがとう」

ハインリヒは涙を拭かないまま、立ちすくむシェフィールドに手を  
拡げた。彼女はた、た、たと駆け寄ると、ハインリヒに抱き付き、  
涙をぺろりと舐めた。

「あるじさま、なんで泣く、ですか？」

ハインリヒを見上げ、シェフィールドは訊ねる。

「昔の思い出は、切ないからだよ。でも、その切なさが俺を癒して  
くれるんだよ？だから、泣いたんだ。でも、悲しいからじゃない。  
懐かしさとシェフィの優しさが嬉しくて泣いたんだ」

「しえ、シェフィはあるじさまの味方なのです」

無言でハインリヒはシェフィールドを抱き締める。

「……………痛いですが……………あるじさま……………でも、暖かくて嬉しいです」

ハインリヒはまた泣いた。

「シェフィ？俺、今夜は弱いみたいだ。朝まで抱いていてくれない  
か？」

「はいです！シエフィはあるじさまを暖めるです！」

この日、ハインリヒはシエフィールドに母の如く縋って眠った。

シエフィールドはハインリヒが眠りについてもずっと頭を撫でていた。

「私が守るよ、ハインリヒ。ずっと傍で」

シエフィールドの呟きを聞いてたのは、窓から覗く双月だけだった。

トリスティン魔法学院

タバサ改めシャルロットは不機嫌だった。今朝もうるさいシルフィードをたんこぶだらけにしたほどだ。

もっしやもっしや……

不機嫌さを表すように、はしばみサラダの皿を次々と積んでいくシャルロットだった。ってかいつもと変わらなくない？と地雷を踏ん

だ某風つぴきはたんこぶだらけにされた。

へらへらしながら現れた馬鹿ツプル、つまりルイズ& amp;サイトモイチャイチャしてたらたんこぶだらけにされた。理不尽だが怖くて黙った二人だった。

親友であるキュルケが、懲りずにハインリヒに求婚するとへらへらしながら言ったら、やはりたんこぶだらけにされた。

天然メイドシエスタが、シャルロット様と声をかけた際、シャルロットはちらりとシエスタの胸の魔乳を一瞥し、やはりたんこぶだらけにされた。

コルベールの後釜に入った新任の教師。彼は黒髪が特徴の火のスクウェアメイジの優秀な人間であった。ただし、彼は尊大な態度を好み、「あゝ我輩は」が口癖で名前はスネープという。だが、やはりたんこぶだらけにされた。

もう一度言う。シャルロットは不機嫌だ。

理由はハインリヒに逢えないからだ。何故なら仲良くなったイザベラ女王との関係で、花壇騎士の仕事が多くなり、母の元にも通い  
そんな生活をしていたら……

ある日ひげ学院長に呼ばれこう言われた。

「あゝお主、単位が足りないから、このままじゃ3年になれんぞ？  
まあ虚無の日は補習じゃな？」と。

ぶるぶると肩を震わせ、怒った所で相手はひげ学院長だ。さすがに  
たんこぶはまずい。

最近忙しいハインリヒは中々学院には来れない。

だが、モンモンは毎週末に嬉々としてオルニエールに帰っていく。  
ニヤニヤとシャルロットを見ながら。

シャルロットは血の涙を流しながら、今日も健気に補習の日々だ。

更に言う。シャルロットは不機嫌だ。

今日も誰かを血祭りにあげる。

学院にはこんな言葉が流れている。

青い髪 見たら逃げる 殺られるぞ

シャルロットの二つ名は、雪風から暴君に変更されたという。

ハルケギニア各所

ある日、あちこちに点在するハイン一味に、ハインリヒから手紙が届く。

次の虚無の日の夜に家族会議を行うという内容だ。それ以上の詳しい話は無い。

とにかくジェシカ、カトレア、エレオノール、マチルダ、シエフィ  
ールド、ティファニア、モンモランシー、シャルロット、竜っ娘3  
姉妹 全員の召集であった。

どんな理由があろうと必ず来るように、と彼女達を常に尊重するハインリヒには珍しい強調である。

一味は何か釈然とはしないが、とにかくスケジュールを調整するの

だった。

一体、何が始まるのであろうか？それはハインリヒのみぞ知る。

## 次回予告

『久しぶりだな？ザルバだ。忘れてないよな？まあいい。ここにはあまり出て来ないが、一応ハインと俺は活躍してるんだぜ？まあ近い将来にお前らも見ることになるがな！ んじゃ次回予告張り切って行くぜ？ 「いろんな事がありました。これからも色々あると思います。でも私、卒業しますっ！」だ。取り敢えず必ず見るよな？』

??

我々の間には、チームプレイ等という都合のよい言い訳など存在せん。

長らく休載して申し訳ありませんでした。これからは週一ペースで更新するつもりです。

さて、前話とセットで、章と章の間の閑話的エピソードでした。

内政の”さわり”と飛空挺のフラグ建て。まあ技術的な話はでっちあげた訳ですが、元々が空想の産物ですから細かい突っ込みはお許しください。

まあ、飛空挺話はまだまだ煮詰めるので、こんな設定ありじゃね？みたいな話ならば全然歓迎ですヨ。

948

さて、戯れにシェフィールドを書きましたが、自分でキャラ付けし  
としてアレですが、シェフィールド大好きなんです。

彼女は作中では二面性を発揮してます。たどたどしい発音の健気な  
ドジっ子 それと、時折見せる真剣な彼女。果たして計算か無意  
識か、正直書いててわからないのですが、なんだか随分と僕の愛すべ  
きキャラになってました。

ま、いいや(、、)

次回から急展開で新章ロマリア編へと繋がるプロローグとなります。  
お楽しみに

ナナツボシ

?? ハイソリとは、決める時は決める男ですヨ? (前書き)

甘いんです。

?? ハイシリヒは、決める時は決める男ですヨ?

ハイシリヒは珍しく1人で森に入っていた。例の竜の森である。

切り株に座って瞑想しているのか、目を閉じ動かない。ただ、自然体で座っているだけだった。

「ファイアボール」

すっと目を開けスペルを唱え、杖がわりの牙狼剣を振るう。すると、剣先から火の玉が飛び出し、数メートル先の岩に当たって弾けた。

「ウインドカッター」

さらにスペルを唱えると、しゅっと風音が鳴り、やはり数メートル先の木の枝を切り裂いた。

『いったいどうしたんだ? ハイン。そんな思い詰めた表情はらしくないぜ?』

ハイシリヒの相棒であるザルバが呆れたように言う。

「うん、まあな。何となく最近思っわけ。この世界って何なんだろうなってさ？魔法とかくだらねえだろ？」

『そいつは身も蓋もねえな。だが、まあ無駄な事が多いのは確かだな』

その時突風のような風が吹き、ハインリヒの赤毛を乱す。

「魔法ってなんなんだ……見てろよザルバ」

ハインリヒは牙狼剣を地面に突き刺すと、眉間に皺を寄せて集中した。すると次の瞬間

ドガアアアアン！！！！

ハインリヒから約10メートル先の地面が直径3メートル程の球体を描き爆発した。当然球体に地面は抉れ、クレーター状になっており、そこは高熱によりガラスの如く光っていた。

『お、おいハインお前……まさか虚無……』

いつも飄々としているザルバが慌てている。

「違うぞ。虚無じゃない。ただ、爆発という現象を起こしたただけだよ。なあザルバ、この魔法とか言うもんはおかしいんだよ。成り立ち自体が」

ハインリヒはシニカルな表情で笑う。

『どういう事だ？』

「そもそもさ、杖が無いと魔法が使えないとかが変なんだわ。逆にエルフは精霊だかなんだかしたらんが杖無しで似たような現象を起こす。全く共通点の無い現象もあるけどな？　でもだ、何も無い場所に突然火が出るとかなんなのよ？　火は燃烧という現象だろうが？　魔導火だつて魔界の炎を召喚しているだけで、中身は魔界の物質が燃烧しているぞ？　じゃファイアボールつて何が燃烧してるんだ？」

ハインリヒは相変わらず冷めた調子で言う。

『何だか難しい話だな』

「俺な、この前モンモンの親父に用あってさ、モンモランシー領行

ったんだ。そんな時に暇だからラグドリアン湖で実験したんだわ。水中でファイアボールしたり、ウインドカッターをしたりな。結果は何らかの変化は起きたけど、火も風も起きなかつたんだな」

『そりやお前、水中だからだろ?』

ハインリヒはザルバの答えに”我が意を得たり”という顔をした。

「そ、結果は当たり前前に失敗したんだ。つまりさ、ちゃんと自然の理に則った現象が起きてるだけなんだわ。つまりさ……ま、見てるよ?」

ハインリヒは強烈なプレッシャーを発した。ビリビリとまるで空気を振動させたような。すると恐るべき現象が起きた。

ヒョオオオオ……

目の前に吹雪が起きた。

「おら、次だ」

ハインリヒからさらにプレッシャーが発せられる。すると傍の小川の水が大量に吸い出され、巨大な水の竜巻となり、周囲の大木を

巻き込んで更地にした。

『お前……ヘクサゴンスペルかよ……』

ザルバは呆れたように言う。ザルバが言うヘクサゴンスペルとは、トライアングルメイジ二人が呼吸を併せて使う事が出来る合体魔法だ。さらに4王家の血筋を引いていないと行使できない　と、さ  
れている。

「あんな、さっきの吹雪も今の水の竜巻もさ、空気中の水分を急速に冷却して、それを風で吹き飛ばしただけだし、水の竜巻なんかただ竜巻起こしてその川の水を巻き込んだだけだぞ？所謂系統魔法の属性を重ねる？そんなもんしてねえわ。結果は一緒でも過程が全然違うんだ」

『……………』

ザルバは絶句するのみだ。

「用はさ、自然に干渉して俺は現象を起こした訳。元々さ、魔法はイメージが大事とか言われてるだろ？そこから胡散臭い思ってたんだわ。それって先人の例があつてこそそのイメージだろうが？杖を翳してスペルを唱え火の玉飛び出す。これがファイアボールですよ！  
つていうな。だから決まりきった現象しか起こせない。逆に俺は、物理の知識がある。生活の身近な所あらゆる現象の例もあった。

だからイメージの幅も広いんだ。だから再現できる現象が系統魔法に収まらないんだ。ったく、ハルケギニア人って六千年何やってたんだろうな？」

『うわぁー……マジで身も蓋もねえな』

「さっきの爆発だってさ、辺りの空気を圧縮してさ、水素爆発を再現しただけだわ。水場があれば水蒸気を圧縮して、辺りの分子を高速振動させれば気化爆発を再現できるだろ。つまりイメージより明確な理屈があつて、それを再現できる材料があれば、極端な話、何でもできるってこつた。因みに今まで使った精神力さ？それぞれコモンマジック程度だわ」

あつさり言い放つハインリヒに、最大限に呆れたザルバだった。

『ふう、まあ理屈はわかった。で、お前は何がしたいんだ？』

「うん、ハルケギニアをぶっ壊そうかなと」

『はぁー！！！？』

「いや、その価値観を、な？くだらねえだろ魔法とか。だから、魔法も及ばない便利さで、価値観をぶっ壊すわ。そして、家族で鍋でも囲みながら、愉快愉快と笑いたいなと思ってる訳なのだよ、ハイ

ンリヒ様は。アーツハツハツハ！」

高笑いするハインリヒにげんなりするザルバだった。

『まるで悪党だな……』

「まあ、ハルケギニアの保守層のオジサマ達には悪だろつな」

そう言いながらからからと笑うハインリヒだった。

『そついや、なんでさっきは深刻そつな顔してたんだ？』

「ああ、今夜の事を考えたら胃が痛くてなあ」

『それだけ？』

「それだけ」

『しつわぁ………』

「さて帰るべ。腹減ったわ。だりいだりい……」

ぼやきながら歩きだすハインリヒに、相変わらずこいつは大物だなと溜め息をついたザルバだった。

『魔法の考察はなんでやったんだ？』

「ん〜暇潰し？」

『はあ……………』

ザルバの溜め息が虚しく森に溶けていった。

ハインリヒの屋敷

月も昇り、すっかりよるになった。現在ハインリヒの屋敷のリビングは人がごった返していた。それはハインリヒが一味に召集をかけたからなのだが、肝心のハインリヒはまだいない。

『ジエシカお姉様、カトレアお姉様、お久しぶりです！』

ハイン一味の年少組であるティファニア、モンモン、シャルロットが久しぶりに会った二人に挨拶する。

「久しぶりね 小さい妹達」

「ん〜元気だねみんな。私はへ口へ口だよ」

仕事が多忙な二人は若干の疲れを滲ませていた。

「あ、あの、お茶とお菓子をどうぞです！」

「ふふっありがとうございます？シェフィ？貴女も座りなさい？」

エレオノールがシェフィールドを気遣う。

「あるじ様はまだかの？妾は待ちくたびれたのじゃ……………」

「お姉様、もう少し待つのです」

「…………アネ ハイン マルカジリ」

竜っ娘達は相変わらずのようだ。

「ねえマチルダ、貴女何か聞いてないの？」

「何も聞かされてないんだよエレン。あたしも最近忙しくてさ。全然話も出来てないんだよ」

マチルダは肩を叩きながら言う。

「ふふっ……ま、彼には何か考えがあるようだ。まあ気長に待ち給え」

ジャンが何か含みのある笑顔を浮かべて言った。ただ、それ以上聞き出せる雰囲気では無いので女達は黙った。

『むっ………』

その時であった。

ドガンツ！！！

何かが落下したような凄まじい音と共に屋敷全体が振動した。

ガチャ

「おーみんな集まってるな？」

『ハイン！（さま）』

「あゝ待たせて悪かった。ちと準備があつてな？取り敢えず全員いるよな？そしたら悪いけど着いてきてくれ。聞きたい事たくさん出るだろうが、最後に説明するからさ。それまでは俺に合わせて欲しい。ジャン、コクピット頼むな？」

「ああ、任せて暮れ給えハイン君」

女達が様々な表情を見せる中、ハインリヒはジャンとアイコンタクトを交わし、ジャンはどこかへ消えた。

女達は釈然としない思いだった。何か変な音がしたし、ハインリヒは妙に明るい。そして何よりハインリヒの格好が変だ。タキシード

に身を包み、髪もオールバックに纏めてある。なにせ普段は基本的に魔戒騎士の正装しかしないハインリヒなのだから。

「では私の麗しき姫達よ、暫し空の散歩にエスコートいたします」

ハインリヒは芝居掛かった所作で女達を屋敷の外に連れ出すのだった。

『……………なに…これ…』

外に出た女達は固まっていた。と言うのは屋敷の前の広場に、何やら巨大な船らしきものが鎮座していたからだ。

それはまばゆい光を放ち、見たこともない存在感を主張している。

そう、あのスネーク級と定められた飛空艇であった。

「さあ、言いたい事が山ほどあるだろうが、取り敢えず中へどうぞ相変わらず芝居掛かった所作で皆を促すハインリヒに、女達は黙ってついていった。

飛空艇内部

飛空艇の三階部分に当たる場所に女達はいた。周りを透明な素材で囲まれたそこは、その景色が綺麗に見えた。天井部分も透明である。

「ジャン、頼む。ゆっくりやってくれ」

「ラジャー」

ハインリヒの言葉に、ここには居ないはずのジャンの声が響いた。女達はざわざわとしながら忙しなく辺りを見回している。そして、微かな振動の後、飛空艇は静かに上昇を始めた。

「な、な、な、何なの！？ハイン！？」

「空を飛んでいますわ」

「……不可解」

「ハイン様怖いです…」

「お兄ちゃん……」

女達はそれぞれ反応を見せるが、概ね不安を滲ませているようだ。ハインリヒはしてやったりの表情だ。

「慌てるな。これが新しく開発した飛空艇という乗り物だ。因みに、ここからアルビオンまで10分もしないで行けるぞ？」

ハインリヒの話は驚愕的であった。彼が言う話が本当なら、既存の船など過去の遺物に過ぎないのだから。一同は絶句した。ただ、エレオノールだけは目をキラリと輝かせた。

気が付くと飛空艇は、上空にたどり着き、緩やかに航行を始めた。地上でみるより遙かに大きく月が見えた。女達は漸く安心したのか、景色を楽しむ余裕を見せはじめた。

「ジャン！」

「ラジャー！」

ハインリヒの再度の呼び掛けにジャンが答えると、静かでムーデー  
ーなJAZZが船内に流れた。

「みんな注目して欲しい。んっ……ごほん」

ハインリヒの真剣な眼差しに何かを感じたのか、女達は黙った。そ  
して、ハインリヒを見つめるのだった。

「あゝ、今まで俺を支えてくれて、本当にありがとう。付き合いの  
長さは皆違うが、全員同じように感謝している。思えば俺はこのハ  
ルケギニアという世界に生まれ変わって、多分最初はここが好きじ  
やなかった。なんか、自分の故郷という実感が無くてな？だが、今  
はお前達がいる。俺を必要としてくれて、俺もお前達が必要だ。だ  
から、今はここが故郷だと強く思える。全ては、お前達がいてこそ  
なんだ。みんな、ありがとう。そして愛しているよ」

『ハイン……………』

皆は一様に黙っている。それは感動しているからだっただけ。

「そこで、遅くなったけど、皆に正式に結婚を申し込む！」

『~~~~っ！！』

ハインリヒの突然のプロポーズに、女達は息を飲む。

「皆、ちょっと一列に並んでくれないか？」

ハインリヒの言葉に女達は無言のまま整列した。ハインリヒはそのまま、ジェシカの前に立った。

ジェシカは商会の経営者らしい黒いタイトミニのスーツで立っている。少しだけ香る汗の匂いが、先ほどまで働いていた名残を感じさせた。

「ジェシカ、始まりはお前だった。それからはいつも俺を立てて、周りを気遣ってくれたな。ジェシカ、これからの人生俺に全てくないか？必ず幸せにするよ。……結婚して下さい」

ハインリヒはジェシカの前に膝まづき、指輪を捧げた。ジェシカの中に今迄の記憶が蘇る。

「……もう、幸せだもん。でも、もっと幸せにして下さい。愛しているよハイン！」

ジェシカは指輪を左手の薬指にはめた。ハインリヒはジェシカを抱きしめ、そして優しくキスをした。

ハインリヒはカトレアの前に立つ。彼女もまた仕立てのいい赤いス  
ーツを身に纏い、ハインリヒを見つめている。

「カトレア、君との出会いは不思議だった。君は病気で、俺はそれ  
を治したが、健康になった君は輝く程に綺麗だ。君の一生を俺にく  
ださい。……カトレア、俺と結婚して下さい」

「はい……私に生命をくれた貴方に、私の全てを捧げます。愛して  
ますわ」

二人は抱擁をし、唇を触れ合った。カトレアの目から涙が零れた。  
彼女は今、人生最大の幸福に包まれていた。本来決してあり得な  
かった幸福に。

ハインリヒは次にエレオノールの前に立った。彼女のスレンダーな  
体のラインが浮く、タイトなドレスが涼やかな色気を演出している。  
ハインリヒは今度は膝はつかず、彼女の眼鏡をそつと外し、両手で  
彼女の顔を挟んだ。

そして、視力の悪いエレオノールがハインリヒの顔をはつきり見え  
る距離まで寄せて静かに言う。

「エレオノール、君が縁談を幾度と失敗してくれて本当に良かった。じゃないとこうして出会えなかったからね？君は本当に綺麗だ。君がお婆ちゃんになっても、横にいさせて欲しい。……エレオノール、俺と結婚して下さい」

エレオノールは恥ずかしそうに視線を外した。

「い、いいに決まってるじゃない！死んでも付き纏ってやるんだから……」

「ああ、そうしてくれ」

そして二人は接吻した。

ハインリヒはマチルダの前に立った。だが、ハインリヒが何かを言う前にマチルダは彼に抱きつき、その唇に自分の舌をねじ込んだ。そしてぴちゃぴちゃと艶めかしい音を響かせた。

二人は息が途切れるほどの接吻を交わし、やがて銀色の橋をかけながら名残惜しそうに離れた。

「あたしはね、学院であんたに奪われた瞬間から、あんたに一生を

捧げたんだよ。だから……大事にしてね、ハインリヒ」

「ははっ、まいったな。ああ、大事にするよマチルダ。愛しているよ」

ハインリヒはマチルダに指輪をはめると、額にキスをして離れた。

「ティファニア……」

「ハインお兄ちゃん……」

ティファニアはチャイナドレスをアレンジしたようなドレスを着て、その立派すぎる頂の前で手を組み、じっとハインリヒを見ている。

「お兄ちゃん……私、その、半分だけだけど、んと、エルフだよ……？」

ティファニアは今まで植え付けられた人間に対しての卑屈さと恐怖を滲ませて、笑った。ハインリヒは痛ましいなと思った。

「ティファニア、俺はハルケギニアをぶっ壊す。今迄の狂った価値観を形が残らなくなるまでな。そして、それはもう、始まってんだ。」

わかるか？オルニエールの街を、この飛空艇を。ジェシカやカトレアのように平民と貴族が女だてらに手を取り合って仕事してる。俺はこれをハルケギニア中で当たり前にする。そして、必ずエルフが普通に歩く世の中にしてみせる。      ティファニア、お前も殻を破ってみせてくれ。俺はエルフも人間も関係なく、ただティファニアって女が欲しい。お前も俺が欲しいと思うならこの手を取れ」

涙を零すティファニア。だが視線は揺らぐ事なくハインリヒを見ている。

「私は…貴男が欲しいです。独り占め出来ないのはちょっと切ないですけどエへへ。でも、そこはエルフの特典を生かして皆さんの倍お兄ちゃんといいます。愛しているよお兄ちゃん」

ティファニアはハインリヒの手を取った。ハインリヒは恭しくその手にキスをすると、左手の薬指に指輪をはめた。大きな決意と共に。

ハインリヒはゆっくりとシェフィールドの前に立ち、彼女を優しい目を見て見つめた。その目には様々な気持が籠もっていた。相変わらずメイドの衣装に身を包んだシェフィールドは、自信なさげに目を忙しなく動かした。

「あの、あのあの、えっと、あるじさま……シェフィは、シェフィは……」

「シェフィ、面倒な事は考えなくていい。お前の全てを俺は欲しい。だから、俺の妻にしてお前を一生縛る。この指輪っていう首輪をつけてな」

シェフィールドはぼろぼろと涙を流した。そして、身体中で歓喜を表した。

「はいっ！縛って下さい。痛くてあるじさまを意識しつづけられるくらいに。シェフィはあなたの一部です。」

ハインリヒはすつとシェフィールドの耳元に唇を寄せて呟く。

「愛しているよ、×××……俺はお前を離さない」

それはシェフィールドがハインリヒにしか明かしていない真名だった。ロバ・アリ・カリイエでジョゼフの召喚扉をくぐるときに置いてきた名前であった。

「あう……あるじさまあ……大好きです……」

ハインリヒは骨が軋むほどシェフィールドを抱き締め、指輪をはめたのだった。

ハインリヒはモンモランシーの前に立って跪いた。

「マリー、君とシャルロットが卒業するまで待てなくなった。俺はまだ若い君を縛ってしまうけど、必ず君を幸せにするよ。何より、こんなに可愛い君を誰にも渡したくないんだ。だからマリー、俺と結婚して下さい」

学院の制服のままのモンモランシーは、その頬を真っ赤に染めながら静かに呟いた。

「ハイン様、私はあなたが私の実家に来たときからあなたを好きになりました。ねえハイン様？女の子はあなたが思うよりずっと成長は早いんですよ？私は今日までちゃんと気持ちを暖めていました。だから、私はハイン様のお嫁さんになります」

「ありがとうマリー。そうだな、この綺麗なブロンドで、もっと沢山の髪型を俺に見せて欲しい。愛しているよ、マリー」

ハインリヒはそう呟き、モンモランシーの額にキスをして指輪をはめた。

「シャルロット」

シャルロットはハインリヒが何かを話そうとするその唇に、そっと自分の人差し指を添えて制した。

「……私は、あなたに憧れている。その強靱な心に、その強靱な力に。わたしはその横に並んで立ちたかった。でもあなたははずるい。追い掛けても同じ距離を保ったまま先に行く。だからわたしは考えた。あなたに捕まっつて一緒に走ればいいと。だから、わたしはあなたと伴に行く。胸は……諦めて欲しい」

シャルロットはハインリヒをしつかりと見据えて気持ちを話す。もつとも、最後のくだりは顔を伏せ、悔しそうに制服のスカートの裾を握り締めていたのだが。

「これからは……俺たちが作る未来は、皆が剣や杖を置き、ただ幸せを求める世界になる。だから、シャルロットはシャルロットが出る分野で支えてくれ。愛しているよシャルロット。胸は……まあ、イイジャンイカ」

「……悔しいです」

シャルロットは頬を膨らませたまま指輪をはめた。

ハインリヒはユイの前に来ると、その小さな身体を抱き上げた。

「ふわあ……あるじ様、妾は恥ずかしいぞ……」

ハインリヒはニカッと笑うと、ユイの顔中にキスの雨を降らせる。

「あわわっ……これはせつぷんじゃな……はじめてあるじ様にしてもらったぞ……」

ハインリヒは幻想的な容姿を持つユイの、そのしなやかで艶のある髪を指で梳きながら、静かに言う。

「ユイ、俺と番いになってくれないか？」

「あうっ……番い……恥ずかしいぞあるじ様……でも、妾は嬉しいのじゃ……あるじ様なら、たくさん交尾しても……よいぞ？」

「お姉様大胆ですのー！」

「アネサマ　ハインノハイン　マルカジリ」

大興奮の妹達だ。ただ幼女はぴよんぴよん跳ねているようにしか見えないが、姉の幸せに感動しているようだ。

ハインリヒはユイの首に銀色のネックレスをかけた。ペンダントトップは皆と同じ指輪だ。ユイの細すぎる指には大き過ぎるのだ。

こうして、ハインリヒのプロポーズ大作戦は終わった。誰しも幸せに包まれている。ここには身分も人種も関係なく、ただ幸せを願う求めあう男女が居るだけだった。

飛空艇を自動操縦に切り替えたジャンもやってきて、祝いのシャンパンが抜かれた。降り注ぐ金色のシャワーが皆を濡らし、幸せの笑顔に包まれた。何度も繰り返される乾杯の声は、朝方まで続くのだ。

ハルケギニアの双月に照らされた飛空艇は、紫色に淡く光ながら、静かに飛んでいくのだった。笑い声と共に。

??  
ハインリヒは、決める時は決める男ですヨ？（後書き）

ハインリヒがけじめをつけました。

これから物語は新しいストーリーへとスイッチしていきます。

完結までお付き合い戴けたら幸いです。

戦闘も書かなきゃなあ……

?? 官僚はつまんないんだよ。わかる??わっかんねえだろつな。(前書き)

閑話っすな

?? 官僚はつまないんだよ。わかる？わっかんねえだろつな。

ここにある世界がある。そこは天界と呼ばれているが、宗教画で描かれるような神秘的な世界ではない。

ただ、”神”という存在は住んでいる。だが、バイブルに記されるような神聖な存在ではない。何故なら神とは、存在する世界の数だけいるからだ。

ブリミルという男も、かつてはハルケギニアに生きるただの人間だった。

神化した理由は、その魂の容量が大きかっただけだ。つまり、生まれつきその資格があったからであり、なんら特別な理由はない。

たまたまハルケギニアで聖人と呼ばれているがだけで、それはあくまでも結果論に過ぎないのだ。

だから天界には夥しい数の神があり、自分が担当する世界の管理に忙しい。天界はさながら色々な省庁がはいる合同庁舎みたいなものか。

天界には時間の概念からは外れており、外界からの影響を一切受けないという独立した空間である。

ただ、例外も存在する。数多の世界を管理する神達は、一様に元その世界で生を受けた生物だ。

だが、この天界を維持する側の存在は、幾多の世界のどの存在とも関わりの無い、独立した存在である。

それは魔界の王サタンや、その部下のサマエルやバール等、名のあ  
る悪魔。

神聖界を束ねるゼウスや、その部下の名のある天使達である。

因みに天使や悪魔、神聖界や魔界という言葉で連想するようなイメージは間違いである。

神聖界は天界の右側のエリア。魔界とは左側のエリアをさす地名に過ぎず、天使や悪魔は肩書きである。

因みにサタンは、かつては神聖界で中間管理職をしていた際の呼び名はルシフェルだった。

魔界に配置換えになり、その後出世し、魔界の王サタンの位を引き継いだのである。

つまり、確かに独立した存在ではあるが、その本質はやたら官僚的なのである。

天使や悪魔のイメージは、たまに観光しに色々な世界に降臨した際、

たまたま見かけた生き物が都合よく解釈した結果であるのだ。

その証拠に、地球のキリスト教に伝わるバイブルは、本来書かれた状態から、その後何度も何度も加筆修正されてきた。主に時の権利者や偽政者達によって。

つまりは民衆の扇動やコントロールの道具に近いと言え、決して神の意志に依るものではないのだ。

そして、魔界はサタンの執務室。

重厚な一枚板の執務机に腰掛け、足をぶらぶらさせながら、サタンは面倒そうに床に座る男を見下ろしていた。

床に座る男の名前はブリミルという名前だ。

彼はハルケギニアを担当する神であるが、人間だった時の意識が残っており、それが理由で数千年の間その職を放棄し、幾多の平行世界を逃亡した。

魔界の担当する仕事に、天界の内務監査がある。この部門は独自の警察権が与えられており、逮捕そして、世界に影響を及ぼす行為を確認した際は、その場で処罰できる。処罰とは魂の永遠なる否定。有体に言えば死刑だ。

その捜査網に引っ掛かったブリミルは、先ごろサタンの前に連行されたという訳である。

ブリミルが逃げた理由は、生前に自分がハルケギニアに及ぼした影響を、神化した後に見たとき、罪の意識に苛まれたからだ。

ブリミルが人間だった時に行った行為は、あくまでも人間にとっ  
てしか考慮されていない行為だった。

それを天界から神として見下ろした時、人間以外の種族や、ハルケギニア以外の地域の異なった文化を見た。そしてそれは自分がした行為がエゴを世界に押しつけただけに過ぎないと気付いたのだ。

だが、世界は転がる石のように、ブリミルがいくら懺悔しようとも動き続けたのだ。

そして、没後二千年過ぎた時だ。たまたま違う世界の神たちと会話した時、自分が担当する世界が、いかに停滞しているかに気付いてしまった。

神には不文律がある。それはある程度の間接的な管理は出来るが、直接介入は御法度というものだ。

ブリミルは他の世界との悪い意味での違いを正そうと、何度も間接的介入を試みた。だが、少し動き出した所で必ず頓挫した。自分の子孫たる貴族によって。

これが決定的なきっかけになり、ブリミルは逃亡した訳である。

「なあ、ブリミルよ。お前いい加減にしなよ。お前は神なんだ。いちいち人間に肩入れしてどうするのさ？」

「で、ですが……私は過ちを犯した……許されていい事じゃ……」

部屋にサタンの舌打ちが響く。

「ふざけるなよブリミル。お前は神だ。いつまで人間のつもりだ！  
まして、お前自惚れすぎじゃないかい？世界という時間の中で、お前程度の存在など、バクテリア以下だよ？お前以前にもハルケギニアはあったし、お前以後もハルケギニアは続くんだ！確かにお前が与えた影響は甚大だ。そういう意味ではお前はウィルスかもしれない。だけどね？人間1人でどうにかなるほど世界は温くないんだよッ！！」

言葉丁寧だが、多大に怒りを含ませたサタンは、忌々しそうにブリミルを蹴り飛ばした。

ブリミルは大理石の壁に当たり、床に叩きつけられた。涙と鼻水と血を垂らし、ブリミルは床に這いつくばった。

サタンには神の魂を傷つける能力があるのだ。

「なあブリミル、僕が暇潰しに君の世界に介入してみたんだ。ねえ、いまどうなってると思う？クッククック……僕は愉快で堪らないよ。サマエル、サマエルはいるかい？」

サタンはサマエルを呼び付けた。音もなく現れたサマエルは、サタ

ンの脇に平伏した。

「サタン様、お呼びですか？いま忙しいんですがねえ……」

「ご、ごめんねえ……そんなに凄まじいでおくれよ」

「いえ、どこかの空気が読めない馬鹿が、仕事を放置して天使と合コンしたせいで、フォローで残業ナンデスヨ……」

「……すみませんでした。こほん……じゃなくて、ブリミルにあの男の映像を見せてやってくれないかい？」

「……チツ。こっちこいブリミル。忙しいんだからね！」

サマエルは這いつくばるブリミルの髪の毛を掴んで引き摺っていった。

静かになった執務室。サタンは愉快そうに呟いた。

「まあブリミルがどうなるかが構わないけどね……。ただ、あの男は愉快だ。クツクツクツ……。あのイレギュラーとの対決……。実に  
愉しみだ……」

暇を持て余した悪魔の哄笑は、しばらくつづくのだった……。

?? 官僚はつまないんだよ。わかる??わっかんねえだろつな。(後書き)

次回からロマリア篇スタート予定

ハルケギニアは青かった(前書き)

数少ないストックを放出

## ハルケギニアは青かった

アルビオン王国皇太子ウエールズ・テューダーはガリア国王、ジョゼフ一世と向かい合っていた。ハインリヒの二ヶ国への介入以降、彼を介して知り合った二人だったが、孤独な王族同士気が合うのか、時折こうして酒を酌み交わしている。

もつとも、構図としてはウエールズが一方的に慕い懐き、息子がいないジョゼフとしては、彼が可愛くて仕方ないという物だ。

チェス盤を挟み向かい合う二人であるが、盤面はジョゼフの圧勝のようだ。

それでもウエールズはにこにここと笑顔で、ジョゼフのグラスに酒を注ぐのだ。

そんな年若い青年を見ながらジョゼフは思案する。この青年をアンなんとかという王女ではなく、イザベラに嫁がせないか？と。だが、今やジョゼフは心に余裕がある。だからこそ自嘲しながら咳くのだ。余の悪いくせだ、と。

クスクス笑うジョゼフを見ながら、怪訝な表情のウエールズ。

「如何しました？陛下」

「いや、なに。そなたを見ていたら息子が欲しくなってな。モリエールと頑張るかと思案していたのよ」

「~~~~っ!!」

未だ純情なウエールズは、ジョゼフの傍で編み物をしながら静かに笑っている夫人とジョゼフを交互に見ては赤面したのだった。

「陛下、ウエールズ様が困っておりますわ？」

「で、あるな。すまぬな、ウエールズよ。だが、そなたも近いうちに、なあ？」

にやりと人の悪い笑顔でウエールズをからかう。

「勘弁してください陛下あ……うう」

「ハハハハ！」

「ほほほ……」

そんな緩やかな雰囲気のグラン・トロワだった。

だが、突然その空気は切り裂かれた。

バタン！

「何事かつー！」

優雅さを愛する王は、静寂を好む。故にグラン・トロワの衛兵達は、常に気を配る事を徹底されていた。

その上で衛兵がこれほど慌ててるのは異常である。

「陛下、恐れながら申し上げます！敵襲であります！現在グラン・トロワ上空に、異質な光源が停滞しております。陛下におかれましては速やかに避難を」

だがジョゼフは、さして取り乱す事もなく冷静だ。

「それはいつ現れたのだ？」

「はっ、約10分前であります！」

ジョゼフは立ち上がり、腕組みしたままうろろしている。何やら思案しているらしい。

「ふむ、余の名において命ずる。兵を引くがよい。ウェールズ、我らの友の余興らしいな。我らも行くぞ」

「なるほど、あの人らしい余興ですね。あの方は人を驚かすのがお好きですから」

ジョゼフとウェールズは、互いに顔を見合わせると、含み笑いをして部屋を出ていった。

モリエール夫人が衛兵をフォローする姿が妙に慣れている事を考えると、相変わらずジョゼフの奔放な行動は変わらぬらしい。

ジョゼフ達が外に出ると、確かに闇夜の空に、まばゆく光る巨大な何かが浮いていた。

《おーウェールズもいたのか。こりゃあ都合がいい。おーい、ジョゼフのおっさん！自慢しにきたぞー。ちょっと降ろすから場所開けてくれ〜》

やはりハインリヒだったと愉快そうに笑うジョゼフだった。

対してウェールズは驚愕の余り、その場から動けなくなっていた。ハインリヒに船の設計図を渡してからどれ程経ったのか、その結果がこれらしい。なんだかウェールズは腰が抜けてしまったようだ。

飛空艇は静かに着陸した。凄まじい空気を逆噴射しながら、滑らかに、音もなくだ。

「陛下、ご機嫌うるわしゅうー！」

音もなく開いたハッチから、ハインリヒがいつもの軽口を叩いて現れた。

「ふん、気色悪い話し方はよせ。しかし相変わらず非常識なものを作り出すな。クツクツクツ…」

楽しくて仕方ないというように、肩を震わせるジョゼフだった。彼は過去を清算して以来、割りと真剣に国家経営をしているわけだが、やはり元来からの好奇心の強さは抑えられないようだ。

「よう、さくらんぼ、口ばくばくさせてどうした？気持ち悪いんですけど」

「ちよつ！？敬語すらなし？次期国王なのに？」

なんだか扱いの悪いウェールズ殿下だった。

「ま、ウェールズだし……不敬罪！とか言われたらガリア逃げるし……」

ニヤニヤしながらからかうハインリヒ。

「おお、それは願ってもない。オルレアンが今は直轄地だからな。うむうむ」

さらに追い討ちをかけるジョゼフだった。

「か、勘弁してください！！アンリエッタに殺される……」

ガクガクと震えだしたウェールズ。これには訳がある。トリステイン王国とアルビオン王国の合併に伴い、ウェールズにはアルビオンのプロジェクトチームが帝王学の仕込みをしているが、アンリエッタにはヴァリエールを筆頭とした「ハルケギニア悪巧み団（仮）」のメンバーが、急ピッチで英才教育を施していた。

元々皇太子として教育をなされていたウェールズは、礼儀作法から人あしらい、その他対人関係を重点的に勉強していた。

だが、アンリエッタは今まで帝王学らしい事は殆ど習ってはいない。だが、これが結果的に幸運を招いた。それは、彼女は無知であったが、学習能力には素養があったのだ。

つまり、乾いた布がみるみる水を吸うが如く、アンリエッタは目覚ましい成長を遂げた。結果、今までのお嬢様然としていた彼女に、自信と、自信を裏付ける知識が手に入ったのだ。

すると彼女は、今までのウエールズを恋する乙女から、ウエールズという王をコントロールする女に成長したのだ。ウエールズは、結婚前に尻に敷かれるという、かなり切ない状況なのだ。

たまにカチンとしたウエールズが、アンリエッタに強く出ようとすると、うるうるした瞳で彼を見上げ、「ウエールズ様……アンは……アンはウエールズが心配で……」これでウエールズはいちころだ。余談であるが、アンリエッタは水メイジである。涙を精製するくらい いや、よそう。

因みに、アンリエッタの筆頭教師があゝの烈風であったことは付け加えねばならない。

#### 閑話休題

「どうやら完成したようだな？ハインリヒ。勿体ぶらずに早く乗せろ」

ジョゼフは待ちきれないのかそわそわと船を見ている。

ハインリヒはにやりと笑うと、ジョゼフを船内に誘う。因みに、ハインリヒは未だ目を白黒させているウエールズを、猫のように襟首掴んで船内に連れ込んだ。

コクピットは意外と広く、メインパイロットとサブパイロットの席

が先頭に、後列には六席がある。

ハインリヒはジョゼフをサブパイロット席に座らせると、ベルトを締めた。ウェールズは後列に座らせ、やはりベルトを締める。

そしてハインリヒがメインパイロット席につきベルトを締めると、何やらスイッチをパチパチ押しした。

するといくつかのモニターが稼動し、周囲の映像を映した。

ジョゼフ達は嘆息している。ハルケギニアの一般的な生活では、夜はそう明るい物ではない。いくらライトの魔法や、マジックアイテムがあるうと、現代の照明には遠く及ばない。

だが、この船内はまるで昼間のようなのであるし、モニターに映る衛兵の表情は、その驚愕した表情がはっきりと見える。これだけでも現行のテクノロジーを遥かに越える物ではあるが、この後二人はさらに驚愕することになる。

「さて、未知の世界へとお連れしよう。とりあえず舌を噛むと困るから、暫く大人しくしててくれ」

そういうとハインリヒは茶目つ気たつぷりに片目をつむり、いくつかの操作を行った。

ブシュッ………

船体のあちこちから圧縮された空気の排出音が聞こえる。

ブブブブブブ……

何か満ちるような音が聞こえる。ハインリヒが操縦桿を操作する。  
ブーンブーンブーン

ジョゼフ達の目がいっぱい開かれた。このどう見ても金属で造られた巨大な船が、音もなく地上20マイル程、上昇したからだ。

「さあいくぞ！ ションベンもらすなよ？ イヤッハッ！！」

ハインリヒが叫ぶと、おもいつきり操縦桿を引いた。次の瞬間船が数秒でトップスピードで空に登っていった。

「ぬ、ぬ、ぬおおおおおおおお！！！」

「ぎゃアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

「ヒヤッハッ！！！」

約45度の急角度で滑るように上昇するスネーク級。あまりの衝撃に、レアなジョゼフの悲鳴が響く。ウェールズは予想通りであるが。

ジョゼフ達の受けた衝撃は、原始時代の人間の始祖たる原人が、初めて火を見たとき位の衝撃だったであろう。それほどの常識はずれな速度なのである。それ故ジョゼフ達の反応は正しかったと言える。

ジョゼフは不安に駆られた。離陸以降、好奇心に従って外の景色を見ていた。とはいえ、前方のガラスからは空しか見えないのだが、最初は素晴らしい星空だった。数瞬後、それは一層鮮やかになり、

空の色も黒から淡い紫に変化した。だが、その後はどんどん色が希薄になっていく。人間は、未知なる物に反射的に恐怖を抱く。何故ならばある種危険から身を守るヒトの防衛本能だからだ。そして、それは偉大な王として例外ではなかった。

ハルケギニアに成層圏という概念は無い。もうすぐ星を覆う大気の境界なのだ。そして、二人のハルケギニア人を乗せたスネーク級は、未知の世界へ飛び出したのだ

色のある世界から、真の闇しか存在しない世界。生物が存在できない死の世界。そう、宇宙<sup>そら</sup>であった。純粹なハルケギニア人という意味では、初めての偉業である。そしてそれはあのブリミルでさえも、見ることは叶わなかった景色なのである。

ハインリヒは周回軌道に固定すると、ベルトを外し立ち上がる。後は勝手に船が星を回るのだ。ハインリヒは放心、或いは腰を抜かした二人のベルトを外した。

すると二人は皆無に近い重力により浮かび上がった。

「は、ハインリヒ！？どこだここは！？余はどこにいる！？」

「あわわわわ……こわいこわい……」

パニック状態のジョゼフと、恐怖に震えるウェールズだったが

パチッ

ハインリヒが何かのスイッチを押すと、船内の重力が戻り、皆は着地した。ハインリヒは未だパニック状態の二人を、妻たちにプロポーズしたあの展望スペースに誘った。

そこから見えたのは、漆黒の闇に浮かぶ、巨大な青い星だった。少し落ち着いたのかジョゼフ達はガラスに顔を付けるようにして、食い入るように星を見つめていた。

「ジョゼフのオッサン、ウェールズ、綺麗だろ？あそこから登ってきたんだぜ？」

ハインリヒはどこか誇らしそうに言う。

「俄かには信じられぬ。だが、これは現実なのだ……」

「なんと、幻想的な光景だろう……どんな宝石もこれには勝てません」

ハインリヒはある場所を指差しながら言う。

「これが、俺たちが住んでいる”星”だ。青が海、茶色が陸地、そして白が雲だ。ジョゼフ、あそこの一角を見る。あの陸地がハルケギニアだ。あの太い半島がガリア、その右にある細いのがロマリアだ」

ハインリヒはニヤニヤしながら言った。

「……なんと小さい」

「あれがハルケギニア……ですか」

ジョゼフは何やら思案気のようにだ。

「よく見ろ、ハルケギニアなんて全体から見れば、たったあれほどの土地に過ぎないんだ。ということは、ハルケギニア以外の文化圏も存在するんだ」

ハインリヒは地球では当たり前な事を言う。だが、ハルケギニアではその意味は大きいのだ。まして、王族二人には。

「ハインリヒ、愉快だな。まるで後頭部を殴られた思いだよ。余は愉快でたまらぬ。世界はこんなにも広いのだからな」

目を輝かせたジョゼフは、景色を一瞬でも見逃さんとしたまま言う。

「アルビオン王国はあんなに小さいのか……。世界はこんなにも広いのに。僕らは小さかった。もっと、僕は色々知りたいよハインリヒ！」

二人の王族は、いつまでもこの景色を目に焼き付けていた。ハインリヒは葉巻をやりながら、静かにそんな二人を眺めていた。

落ち着いた二人を席に戻し、ハルケギニアに降りる。今度は二人に混乱は無かった。

ハインリヒは地上5千マイルで自動操縦にし、ワイングラスを皆に回した。

そしてシャンパンを開け、金色の液体を注ぐ。

「ハルケギニアはさ、変わるんだ。いや、変えるんだ。トリステイン、ガリア、ゲルマニア、ロマリア……どこも侵略しあわず、お互いに強調してな。だってみんな違うんだからな。そんな当たり前な事を忘れて唾み合ってる。でもさ、宇宙そふから見たら小さかったら？ そんな普通な事を皆が理解出来る日が来たら　きつと変われると思うんだ。ま、それがわからん奴には退場願うけどさ？ 取り敢えず今日はアンタたちに見てほしかったんだ。悪巧みの同士にさ？」

ハインリヒが不敵に笑う。

「ああ、こんなもの見たら、何でも小さく感じるな。ハインリヒよ、好きに暴れるがよい。余は裏方としてそなたを支えよう。そして、さっさと片付けてハルケギニアの先を見せてくれ」

ジョゼフは強く頷いた。

「ハインリヒ、僕も君が切り開く道の先を見てみたい。だから、僕も王として支えよう。存分にやってくれよ」

ウェールズも爽やかに笑った。

「俺はアンタらと同士だ。一緒に新しい景色を見よう！ハルケギニアの未来に、乾杯！」

『乾杯！』

船内にグラスが掲げられ、ハルケギニアの運命がかわる狼煙が上が

った。

かつて狂王だった人間と、本来死んでいた人間と、異世界から迷い込んだ男によって。

「時にハインリヒ、余もこれ欲しい」

「ぼそぼそ……億エキユで売るよ？」

「たっか……」

「うそん……」

## 次回予告

『ザルバだ。宇宙とか何やってんの？ま、ご都合主義の極みだな。

ハルケギニアには夜な夜な不穏な影が現れるらしい。各国の王家や重鎮には謎の組織が暗躍しているようだ。さて、次回のZERの無責任男は、「新生トリスティン王国お披露目。だが、そこに響く悲しい悲鳴！」だ。物語は最終章だぜ？見逃すなよ』

ハルケギニアは青かった（後書き）

宇宙……でも後悔はしていない

違ったかった違った違った違った君に

この日、王都トリスタニアにあるヴァリエール家の別邸には、密かに様々な人間が集まっていた。

「それでは皆さん、忌憚無き意見を賜りたい。あの旗の下に集う同志として」

そう口火を切ったのは、最近正式にトリステイン王国の宰相の座についたマザリーニである。この男はトリステイン貴族に”鳥の骨”と揶揄され、この国を乗っ取るのでは無いか？と邪推される程に嫌われていた、ロマリア皇国の枢機卿である。以前は時期教皇か？と噂される程の政治的手腕を持ち、現在はヴァリエール公爵やハインリヒ侯爵がかれのブレーンとなり、今や彼を表向きではあるが、叩くものは居ない。

「ふむ、取り敢えずは園遊会、そしてアンリエッタ様とウェールズ殿下のご婚約発表、併せてトリステイン王国とアルビオン王国の統一、この流れに横槍を入れる訳にはいかないな」

そう補足したのはラ・ヴァリエール公爵である。細身ではあるが、がっちりとした体躯。そして紳士然としたスマートな物腰。このトリステイン王国にて間違いなく最大の影響力を持った大貴族である。キラリと光るモノクル（片眼鏡）の奥にある瞳は、常に油断無く状況を分析している。

「少なくともジョゼフ陛下は、園遊会の席でトリステイン王国と

ガリア王国の経済的同盟関係を強調した祝辞を述べると言う事ですな。流石ジョゼフ陛下と申しますか、相変わらずの豪胆さでありますな」

その言葉を重ねたのはド・モンモランシ伯爵だ。以前は貧乏伯爵と陰口を叩かれていた苦勞人であった。彼は水の精霊との契約に失敗し、王宮より賜った国家事業のラグドリアン湖の干拓にも失敗した。その為に莫大な負債を抱え、クルデンホルフ大公国からも借金を重ねていた。だが、彼は誠実に対応した。領民の安寧を最優先とし、自らは清貧を貫いた。それを新興貴族ではあるが、今や飛ぶ鳥を落とす勢いであるハインリヒ侯爵に認められ、共同事業のパートナーとして干拓地であった場所で稲作を始めた。その結果、とうに負債は完済し、今やトリステイン王国の米処として、王国内外にその名を轟かせている。

「とにかくさ、ロマリアの介入のタイミングは与えないと言う事が第一だろうさ。第二が……と言うか全く未知数なのがゲルマニアなんだが、まあ取り敢えずはアルブレヒト閣下周辺の情報が入ってこない。それが俺は一番気持ち悪い」

そしてこの男、トリステイン王国の新興貴族ながら、実力で侯爵の地位をもぎ取った希有な人間、黄金侯の二つ名で呼ばれる若者、ハインリヒである。

トリステイン貴族は伝統と格式に重きを置く。だがその実、閉鎖的であり排他的だと言う裏返しでもあるのだ。そして然したる資源も産業も無い農業国、それがトリステイン王国である。その環境の中で貴族達は、必死に自分達の保身に走るしか無かったと言う事情があった。

狭い国土、他国に比べても不利な立地。マーケットとしてもパイ自体の大きさが小さいのだ。それに加えて長きにわたる王位の空席に寄る指導者不在の弊害。それらが悪循環を引き起こし、貴族の腐敗や民の疲弊に繋がったのは自然な事である。

そこに現われたのがハインリヒである。与えられた瘦せた土地に、次々と新しい産業を産み出し、今やド・オルニエールはトリステイン王国の華と呼ばれるほどだ。

ハインリヒの妻たちはそれぞれ優秀であり、各分野でハインリヒを支え、その中心で彼は更に新しい何かを産み出している。今やド・オルニエール・ラ・ヴァリエール・ド・モンモランシと言うパイプは、トリステイン王国の動脈と言え、王国の財政の大半を占める税収を叩きだしている。そして現在トリステイン王国は好景氣を迎えている。

その3勢力がマザリーニを支え、このグループが事実上トリステイン王国の政治を動かしていると言っても過言ではない。

ハインリヒの妻たちの中には、アルビオン王国の国王、ジェームス一世が王弟、故モード大公が忘れ形見、ティファニア・オブ・モードがいる。

更にはガリア王国の国王、ジョゼフ一世が王弟、故シャルル・オルレアン公爵が娘、シャルロット・エレヌ・オルレアンがいる。因みに彼女はガリア王国のプリンセスとして、第二位の王位継承権を持っていた。もつとも公爵位は現在空白であり、ハインリヒに治癒されジョゼフと和解したオルレアン夫人が、ガリア王国の直轄地となったオルレアン領の代官として務めている。これは彼女なりのジョゼフへの誠意の表れだ。そしてシャルロットは王位継承権を放

棄した。但し、ハインリヒの側室と言う立場から、二人の子が男子ならば、ガリア王国の王位継承権が与えられると言う密約がジョゼフとの間で交わされている。これは王位継承権第一位であるジョゼフの娘、イザベラ王女に子が出来なかつた場合の保険である。

これらの事から、ハインリヒと言う男の立場が、ガリア トリスティン アルビオンと言うラインを形成しており、ある意味では口マリアとゲルマニアを牽制すると言う嬉しい誤算を産み出していた。

「ふむ、我々は肅々と祭典の準備を進めるのみですな。現在ウエールズ殿下の教育も最終段階に入り、アンリエッタ姫殿下に到っては、最早王妃となる覚悟とそれに見合う品格は身に付けられた。ラヴリエール公爵には奥方共々、最後の詰めはお任せする形にはなりますが、後は ハインリヒ侯を現場に引き摺りだす事になりましょうな」

そう言つてマザリーニは、意味ありげにハインリヒを見つめた。

「へえへえ、せいぜい馬車馬の如く働きますよ？つたく、アンタと付き合つてから休みなんかねえよ……」

ハインリヒはお手上げのポーズをしながら葉巻を啜えた。

「鳥の骨の気ぐるみを脱いだら古狸だった、ですかな？」

「そんなに褒められたら照れますな？モンモランシ伯？」

『わはははははっ』

そんな年長者達の軽口に辟易した苦笑いを漏らしながら、ハイ  
ンリヒは葉巻に火を点けた。

「アンタらろくな死に方しないぞ？まあいいさ、さてそろそろか  
な？」

ハインリヒの呟きに呼応したように、部屋の扉が開いた。

「おお、グラモン將軍、遠路はるばるお疲れであったな」

ラ・ヴァリエール公爵は立ち上がり、グラモン伯爵を迎え入れた。  
公爵と伯爵とは若かりし頃からの戦友の仲であった。公爵は既に軍  
人としては引退した立場だが、戦友の絆とは立場が違えど決して途  
切れない物だ。

「やあ、遅れて申し訳ない。ド・オルニエールに行くと、中々帰  
る気が起きなくて適わん。怨むぞハインリヒ殿？うちの隊員達もオ  
ルニエール領に住みたい等と言いだす始末だ。わははははは！」

髪を短髪に切り揃え、全身是れ筋肉と言うまさに軍人と言う姿の  
この男、今や新設されたトリステイン王国空軍の將軍となったグラ  
モン伯爵である。

ハインリヒが配下のジャン・コルベールと共に開発した飛空艇、  
正式名称フレアスネーク級を実用化まで漕ぎつけ、それを10機配  
備して作られたトリステイン王国初の空軍組織である。因みにコル  
ベールは開発者としての功績が認められ、準男爵の爵位を賜ったの  
は余談である。

トリステイン王国空軍のキャンプは空港の関係から、ハインリヒ

の領地であるド・オルニエール領にある。娯楽溢れるオルニエール領は、兵士達には最高な居心地であり、それをからかったのが先ほどの將軍のセリフなのであった。

「將軍、首尾は如何でした？」

ハインリヒがニヤニヤしながら問い掛けた。それに対して將軍は、やはりニヤニヤしながらハインリヒを見やった。

「ふふつ、50も半ばに差し掛かって、あんなオモチヤを渡しおつてからに。お陰で今や格納庫に寝るのが習慣になったわ！わはは。あれならゲルマニアとて3日はもたんぞ？侯は恐ろしいのう？そうは思いませんか？公爵」

「まさにな？ああ、ワシもいつ公爵位が奪われないかと戦々恐々よ？？」

「勘弁してくれよ爺様達　まあ、そうは言ってもだ。あの旗に誓ったんだ。せいぜい悪巧みしようじゃないか、オジサン達」

ハインリヒは立ち上がり、にやけた表情を消すと、ある旗を指差した。

青、赤、白のトリコロール、その真ん中に獅子の意匠。これはこの集まり「ハルケギニア解放機構」通称”ハルケギニア悪巧み団”の理念を表した旗である。

青は自由、白は平等、赤は博愛を表しているが、さらには青は海、白は空、赤は大地を象徴している。そして白にはトリスティン王国のシンボル、百合の花を連想させ、その真ん中にある獅子は、気高

さ、人の尊厳、そして何者にも負けない強き心を表している。

これはハインリヒが創案の旗であるが、この旗の下に円卓会議が定期的に召集されるようになり、それはいつしか新しいハルケギニアを提案すると言う、古い時代を見限った者達の象徴となった。

その中心に座るのがハインリヒ侯爵、その人であった。

ハインリヒの視線が固定された旗を、いつの間にか無言で同調して見ている権力者達。その共通したビジョンは、恐ろしく純粹で、暖かな未来であった。

これから先、ハルケギニアの激動の時代が間もなく訪れる。その中心たる主人公達が今、狼煙をあげたのだ。

その中心で妖しく笑うハインリヒであった。

「では、取り敢えずは細かい話は各自つめる事にして、次の定例会議では多分、何らかの報告は出来ると思います。と言う事で今日は解散しよう」

ハインリヒの締め言葉に、今までの厳かな雰囲気は霧散し、各々和やかに談笑を始めた。

ヴァリエール公爵の合図に、メイド達が酒などを運んで来た。この定例会議の締めはいつもこうなのだ。グループの性格上、会合の場所は各自持ち回りで、一回毎に場所が変更される。他国の間蝶への配慮もあるが、トリステイン王国内の他貴族達への配慮もあるの

だ。

”権力は蜜の味”という言い回しがあるが、当人達にその気は無くとも、ヴァリエール公爵やハインリヒ侯爵と言う大物があからさまに一緒にいる姿とは、他人からすると色々想像出来るのだ。まして二人は義理の親子関係だ。

トリステイン王国は好景氣を迎え、進行形で国内の浄化作業が行われている。それはトリステイン王国とアルビオン王国の併合に向けての事だ。無駄な役人は減らされ、マザリー二の主導で法整備が推進されている。二ヶ国が併合され、新生トリステイン王国が発表されると同時に施行される国法だ。

王制の撤廃はしない以上、貴族を始めとした封建社会は無くならない。だが、新しい形の封建社会は作れるだろうと言うのがハインリヒ達の考えなのだ。

諸侯が経営する領地とは、言わばそれぞれが小さな国と言える。法や税率も領地単位で違うのはその為だ。

ハインリヒが創案した新しいトリステイン王国のビジョンとは、王を頂点としたグループ企業のような国家像である。

各領地はそれぞれの裁量で経営をするが、税率は国内で一元化し、領を跨ぐ場合に税をかけない。代わりに間接税が導入され、人々が消費する過程で税が徴収されるのだ。それが諸侯達に予算と言う形で還元される。但し、実績と信用が伴わなければ申請が全て通らない為、諸侯は必然的に経営努力をせざるを得ないのだ。

それに合わせて商売や日常生活、揉め事など様々な事に対して、

領に関係なく共通したルールで判断出来るように考えられたのが、新生トリステイン王国法なのだ。所謂憲法、刑法、商法等の細かい内訳は様々あるが、従来のようなどんぶり勘定や個人の思惑が入る隙を可能な限り排除された物だ。

これはかつて、マザリーニがハインリヒを試した際の間答から発展したのだが、ほぼその原型のまま新生トリステイン王国に適用される。法整備にあたっては、現在マザリーニ自身が涙を流しながら対応に当たっている。因みに彼は、現在睡眠時間はほぼ、皆無である。マザリーニの電池が切れそうになると、彼の秘書がすかさず白い錠剤を口に放り込む。そう、ハインリヒが持つチート薬だ。カトレアの不治の病を一瞬で治す出鱈目さだ、マザリーニの体力回復など一瞬である。

#### 閑話休題

とにかくそうして、旧体制にしがみ付いていた人間には都合が悪い事柄が、王宮を先頭に次々と整備されていく。

そんな中にヴァリエール公爵やハインリヒ侯爵がマザリーニ宰相とべったり等、権力にモノを言わせた国の私物化と取られかねないだろう。

故にこのグループは、どうしても秘密結社のように成らざるを得ないし、会合は人目に付かない場所を選んでいおうという訳だ。

それでもやはり、影で暗躍とはストレスが溜まる物らしく、こうして会合が終われば、ささやかな酒宴を設け憂さ晴らしをする訳なのだ。

「ご苦労だったなハイン。しかしまあお前に会うのは結婚式以来だが、エレオノールやカトレアは元気かね？」

タルブ産ワインのヴィンテージを片手に、ヴァリエール公爵がハインリヒに語り掛ける。

「……………厭味？絶対に厭味だよね？何あの烈風を複製したような中身は……………もういい……………はああ」

ハインリヒの新婚とは思えない程の憔悴ぶりに、公爵はニヤニヤと含み笑いを漏らす。

「プクク……………お前も尻に敷かれる辛さを共有する同志だ。クハハツ……………いい気味だ！しかし、だ。頑張ろうじゃないかハインリヒよ。からかっているのに何故か自分も悲しくなってきたよ……………」

「そんなお義父さんに耳寄りな話が……………」

「なんだ？」

「この前故郷に帰りまして、例の新作を、ね？」

「なん……………だと……………ならば例の腋巫女とまた戯れる事ができるのか……………」

「しっ……………壁に烈風あり絨毯にカリンですよッ」

「すまんっつい、な？」

「公爵、パイオツカイデー、鬼、体操着……どうですか？」

ニヤリと笑ったハインリヒはポムポムと公爵の肩を叩いた。

「酒宴が終わったら例の部屋に行こう！すぐに行こう！」

例の部屋とは、オルニエールのハインリヒ屋敷の近くにある、通称竜の森の中に韻竜三姉妹の住みかがある。その地下深くに、ハインリヒが妻たちにも内緒で密かに作ったプライベート空間がある。

コルベールが飛空艇開発の中で、安定した電気を供給できる装置を完成させた為、ハインリヒは月に一度の里帰りの際に、パソコン、ゲーム機、様々な趣味の本等を持ち込んだ。

そこにストレス疲れの公爵を連れ込み、ハインリヒは大人の浪漫溢れるDVDを見せたのだ。しかし公爵は、ハインリヒが何となく遊んでいたパソコンのゲームに食い付いた。

それもハインリヒがドン引きする位に、だ。しかし公爵は三日三晩その部屋に籠もり、四日目の朝ふらふらとハインリヒの前に現れ、ぼつりと言った。

「ルナティックとか余裕だね。EX？馬鹿野郎、ワシにはファンタズマすら面白いわ」

高笑いしながら去っていく公爵を茫然と見送りながら、ハインリヒは自分がどれくらい間違いを犯したのではないか！？と悩んだ。

その予想は見事に当たった。約半月後の話だ。カリニューがハインリヒの執務室にすつとんで来て、お前のせいで公爵がおかしくなっ

たと涙ながらに訴えたのだ。

曰く、いつものようにOHANASHIしようとしたら、魔法を全てギリギリ躲された。

曰く、躲す際に「この見事なグレイズを見よ」だの「ワシの当たり判定マジパネエ」など奇声を放つ。

曰く、彼の得意業であるウインディアイシクルを放つ際、何故かいちいち「弾幕はパワーだZE ヽ」等と言う。

曰く、ルイズに腋の丸見えなロバ・アリ・カリイエ風民族衣装を着せようとする等々……。

仕方なくハインリヒは、闇夜に黄金騎士姿で公爵を襲い、記憶が無くなるくらいに牙狼剣のさやでひっぱたいた。そして気絶した公爵にチート薬を飲ませ、逃げるように帰った。因みにザルバは『こんな事に鎧を召喚するな』と泣いた。

結果、公爵は今やNORMALをギリギリでクリアする程度の腕前に過ぎない。

## 閑話休題

「とにかくハインよ、今すぐに行こうじゃないか。体操着の鬼とやらを懲らしめにな！フハハハ……」

「あ、公爵、黙った方がいいんじゃないかな？」

「あなた……」

「げえっ！カーリーヌ!？」

お約束のようにEXカリンが現れた。結果はおしてしるべし。

「ワシ……負けんも……ん……ね……」

公爵に食らいボムは無理だったようだ。

「しかし、漸くここまで漕ぎつけられた。感謝するよ、ハインリヒ侯」

会議も終わり参加者達が帰ったあと、ハインリヒとマザリーニは今はゴールデン商会の事務所となっている、トリスタニアの別邸に

場所を移していた。

ハインリヒが昔、万屋を始めた時の事務所は、当時のまま残してあるのだ。その応接で二人は向かい合い、雑談をしている。

「まあ、今やトリステインは故郷だしね。放ってはおけんでしょっ？」

「ふふふ、謙遜もいいがな？でも少しは誇ってくれ。侯がもたらしたものはトリステイン王国の福音と呼べるものなのだから」

そういつてマザリーニはわざとらしく聖印を切った。

「ふっ、まあアンタにだけは誇るけどな！アンタにや随分面倒を押しつけられたからな！」

悪態をかわす二人であるが、ある意味二人は一番親しく信頼のあける間柄なのだ。世代を越えた莫逆の友と言えるだろう。マザリーニは誕生にトリステイン王国を善くしたい。対してハインリヒは自分と妻達が幸せなら満足と言う人間だ。

つまり私欲が圧倒的に薄いのだ。だからこそ信頼しあえる。背中を合わせて戦えるのだ。

「……ハインリヒ侯、貴方がその気なら、トリステイン王国は貴方の思い通りに出来たはずだ。貴方が生まれた世界から比べたら、この国など幼稚だろう？」

「……まあ、ね。でもさ、例えばアンタが五歳のガキだったとし

て、一万エキユ渡されたらどうするさ？」

「ふむ、取り敢えずは菓子でも買っしか思いつかん」

「そういう事さ。どんだけ良い物を用意しても、価値が分からな  
きや意味ないだろうさ。何より、この世界より進んだ場所から来た  
からってさ、偉そうにお前ら幼稚とは言えないさ。そんな権利も資  
格もない。貴族が平民虐げようが俺には関係ないんだわ。そんなの  
いずれ破綻するからな。だからさ、最低限な口出しはするけど、社  
会や制度は自分たちがやらなきゃなあと思うだけさ」

「なるほどな、そしてハインリヒ侯は今日も綺麗な妻達と乳繰り  
あう、と」

「そーいうことー！」

そういつて二人は、暗くなる迄酒を酌み交わした。ハインリヒは  
常々考えていた。近代化した世界に生きていた彼は、中世のような  
封建制度のハルケギニアについて。

たしかに貴族が平民を軽く見ている部分は多々ある。だが、だか  
らと言ってハインリヒが否定出来るのだろうか。ハインリヒが近  
代的な制度を知っていても、この世界に安易に変えることは上手く  
いかないと考えている。

それは問題集を答えを見ながら書き写す行為に似ているとハイ  
ンリヒは思うのだ。答えを写せば確かに満点は取れる。だが、答えが

完璧でも、過程が理解出来なければ、数字を変えたらもう自力で解くことは出来ないだろう。

つまりハルケギニアの人々自身が経験を積み重ねながら、その段階に達しなければ意味は無いのかもしれない。

だからハインリヒは最低限の示唆に留めるべきだと信じているのだ。

だが、ブリミル教が独占状態の現状や、魔法至上主義は危険だ。それは考える事と変化する事をタブーにしてしまうからだ。

故にこれから行われるトリステイン王国とアルビオン王国の合併に関しては、貴族すら経営努力を放棄できず、だが成果があがれば目に見える形で潤うと言う、言わば実力主義のエッセンスが加えられるのだ。

併せて減らされた無駄な役職や貴族の代わりに、平民から大量に公務員が雇用される。

「ま、取り敢えずは今より過ごしやすいトリステイン王国になるだろうな」

「ああ、私も漸く楽隠居と洒落こめるだろうな」

「いやいや、まだまだ楽はさせないから？」

この日、朝方までこの部屋の明かりは消えなかった。楽しげな笑い声と共に。

ここはトリステイン魔法学院、貴族達の子息、息女達が優秀なメ  
イジを目指して勉強をする場所である。

「はあ、なんだか疲れたわ。ねえシャルロット？今日のランチは  
外で食べない？きつと気持ちいいわ？」

午前の授業が終わると同時にキュルケがボヤキ、横のシャルロッ  
トにもたれかかった。

「お、重い。外でランチは私も素敵だと思う。それに私も折り入  
って話がある」

今や本名であるシャルロットを名乗っている彼女は、今までが嘘  
のように快活な笑顔で了承する。

「話ねえ？貴方からなんて珍しいわ。まあ取り敢えずは シエ  
スタ〜シエスタ〜！！」

キュルケは学院の使用人であるシエスタを呼び止める。彼女はハ

インリヒ侯爵の結婚式の際、お互いに来賓だった縁で何やら意気投合したらしく、学院内でも気さくに話す仲になった。

「キュルケ様！あ、シャルロット様もこんにちは」

「……こんにちは」

シャルロットはキュルケとシエスタの胸をちらりと見て、機嫌悪そうにぞんざいな挨拶をした。

「シャルロットは睨まない。シエスタが怯えてるじゃない。貴方はインリヒ様に揉んで貰って頑張りなさいよ。はあ……。ああ、シエスタ？悪いんだけど今日は外でランチをしたいの。適当に頼めるかしら？」

「はい、分かりました。マルトーさんにサンドイッチか何かを頼みますね」

「ええ、ありがとうシエスタ。先に行ってるからお願い。シャルロットはもう睨むの止めなさいよ」

「ガールルル……」

「ひいひい」

そんなこんなで二人は学院の日当たりの良い庭に移動した。

「話つてなあに？人目を気にするような内容なのかしら？」

「……ハインリヒ侯が貴方のお父様に非公式に会談を求めている。ただ、おおっぴらには出来ない内容だから、ツエルプストー辺境伯が在宅してて、かつ日が暮れた後が望ましい。都合を聞いてくれたら、ハインリヒ侯が直接出向くと伝えて欲しい」

キュルケをじっと見ながら、シャルロットは以前のような無表情で話す。

「和やかなお話……って訳じゃなさそうね？そういう事じゃ馴れ合いを嫌う貴方が頼むわけだから、相当に重要な件と考えていいのね？」

「ええ、とても重大な話だと言っていた。私にも聞かせてもらえなかったもの。ただ、ツエルプストー家の利益になる手土産を持参すると言っていた。だからお願い。話を通して欲しい」

シャルロットの真剣な様子にキュルケは唾を飲み込んだ。

「……分かったわ。他ならぬ貴方の頼みだからお父様に話してみる。ただ、政治的な話になればお父様は甘えは通じない。だから確実とは約束出来ないわ。それでもいい？」

「それでもかまわない。感謝する。キュルケありがとう」

「貴方も側室とは言え、今や侯爵夫人だものね。貴方とは卒業してもずっと友人でいたいわ。ね、シャルロット」

「ええ、キュルケ。私もそう願っている」

ある日の昼下がりの話であった。遠くから手を振りながら走ってくるシエスタを見つめ、二人は静かに笑うのだった。

## 次回予告

『ザルバだ。久しぶりの登場に些か興奮してるぜ。さて、この話も漸く佳境へとステージが進むようだ。我らがハイソリヒもおふざけ無しだったしな。さて、次回のZEROの無責任男は「え？結婚式とかいつしたの？取り敢えずその話を聞かせろよ」だ。暇なら見てやってくれ。じゃあな』

違ったかった違ったかった君に〜（後書き）

エタリません。と言うことでロマリアいく前にゲルマニア編突入します。更新はまったりですが、連載はつづけますヨ。

萌え成分はもう少し後になります。

今回は目的をはっきりさせたかったただけなんで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8485t/>

---

ZEROの無責任男

2011年12月8日01時04分発行